三重県埋蔵文化財調査報告282

荒木・西明寺地内遺跡群発掘調査報告

2007(平成19)年３月

三重県埋蔵文化財センター

荒木氏館北地区全景

荒木氏館と中地区の堀

荒木氏館北地区出土の鞴の羽口

寺前遺跡ＳＫ218出土の土器

序

伊賀地方は、三重県内にあって極めて特殊な環境にある地域です。盆地という地理的条件ながら、大和の影響を受けた大型古墳が集中し、伊勢平野とはまったく異なる文化を持った地域であることが、過去の発掘調査からも明らかとなっています。

また、古来より畿内との結びつきが強く、大和と伊勢や東国を結ぶ交通の要所でもありました。中世には近在の有力氏族の城館が多数所在し、近世に至っては、「鍵屋の辻の仇討ち」で名高い荒木又右衛門を輩出したといわれている地域でもあります。

ここに、中瀬川南地区の経営体育成基盤整備事業及び一級河川服部川県単河川局部改良事業に伴い調査を行なった結果を報告することになりました。遺跡内には伊賀街道が走り、近世に栄えた場所であることは知られていますが、今回の調査では、古墳時代から中世に至るまでの遺構が検出され、特に中世の石組み井戸や城館の堀などが確認でき、擂鉢・瓦質土器等多くの遺物が出土するなど、この地域の中世村落の一端を解明することが出来ました。

調査にあたりご理解ご協力をいただいた地元土地改良区の皆様、三重県農水商工部農業基盤室及び県土整備部河川課、伊賀農林商工環境事務所及び伊賀建設事務所には、記して感謝申し上げます。

末筆ながら、今後とも文化財保護の取り組みに対し、一層のご理解・ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成19年３月

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　吉　水　康　夫

例　　言

1．本書は、三重県伊賀市（旧上野市）荒木に所在する宮ノ前遺跡（第１・２次）・寺前遺跡（第１・２次）・荒木氏館跡・服部氏館跡、同市西明寺の有井遺跡・西明寺三反田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査にかかる費用は、平成14・15・16年度経営体育成基盤整備事業（中瀬川南地区）及び一級河川服部川県単河川局部改良事業に伴い、三重県農水商工部と県土整備部が負担した。

3．発掘調査の体制は以下のとおりである。

・調査主体　　三重県教育委員会

・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

・作業委託　　安西工業（株）

4．現地調査の担当は以下の通りである。

平成14年度　宮ノ前遺跡・寺前遺跡　筒井正明・黒田聖也

平成15年度　宮ノ前遺跡（第２次）松田珠美・小倉　整・豊田祥三

寺前遺跡（第２次）松田珠美

荒木氏館跡　豊田祥三

服部氏館跡　松田珠美

平成16年度　有井遺跡　小倉整・穂積裕昌・山口聡嗣

西明寺三反田遺跡　豊田祥三・穂積裕昌

服部氏館跡（第２次）山口聡嗣・豊田祥三

5．当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ｉ課が行なった。各遺跡の報文の執筆は文末に示した。遺物写真・全体の編集は豊田祥三が担当した。

6．発掘調査ならびに報告書の作成にあたっては、以下の各氏から有益なご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。（所属は当時）

笠井賢治氏（上野市史編纂室）小林俊之（津市教育委員会）畑中英二（滋賀県文化財保護協会）福田典明（伊賀市教育委員会）藤澤良祐（愛知学院大学）中浦基之（伊賀市教育委員会）伊賀農政商工部、中瀬川南土地改良区

7．本書で報告した記録および出土遺物は、すべて三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

（地図類）

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、旧上野市都市計画図である。

2　これらの地図類、および本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第Ⅵ系を用いており、平成14年４月から施行されている世界測地系には対応していない。

3　挿図の方位はすべて座標北で示している。なお真北は座標北の西偏０°16′、磁北は座標北の西偏６°40′である。

（遺構類）

1　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社　1967年初版）を用いた。

2　本書での遺構は各遺跡ごとに連番となっている。

3　遺構の性格については、遺構表示略記号を用いて表示した。

SD：溝　SE：井戸　SK：土坑　SZ：落ち込み　Pit：柱穴

（遺物類）

1　当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。それ以外の縮尺については、その都度指示している。

2　遺物実測図は、遺跡・調査次数毎でそれぞれまとめられており、全体としては通番ではない。

3　遺物観察表は以下の要領で記載している。

報告書番号…挿図掲載番号である。

実測番号…実測段階の登録番号である。

器種…遺物の器種を示す。

グリット…調査時に設定したグリット名を記した。

遺構…遺物の出土した遺構や層名を記した。

法量（cm）…遺物の法量を示す。口径は口縁部径、底部は底部径、器高は遺物の高さを示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径である。

調整・技法の特徴…おもな特徴を内面（内：）外面（外：）で示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土…小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調…その遺物の代表となる色調を記載した。表記は、前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度…ある部位を12分割した際の残存度を示し、分子の数値のみ記した。６は約半分、全体が残っているものは完存と記した。

本文目次

Ⅰ　前言 ……（1）
Ⅱ　位置と環境 ……（2）
Ⅲ　宮ノ前遺跡 ……（7）
Ⅳ　宮ノ前遺跡（第２次）……(21)
　１．１地区 ……(21)
　２．２地区 ……(37)
　３．３地区 ……(43)
Ⅴ　寺前遺跡 ……(48)
Ⅵ　寺前遺跡（第２次）……(57)
Ⅶ　荒木氏館跡 ……(63)
　北地区 ……(63)
　中地区 ……(64)
　南地区 ……(70)
Ⅷ　服部氏館跡 ……(88)
　１地区 ……(88)
　２地区 ……(91)
Ⅸ　有井遺跡 ……(99)
　西地区……(102)
　東地区……(112)
Ⅹ　西明寺三反田遺跡 ……(135)
Ⅺ　まとめ ……(154)

附編

附編１　菩提寺採集の瓦 ……(213)
附編２　伊賀市依那具　小泉氏館跡 ……(215)

挿図目次

第１図　遺跡分布図
第２図　荒木地区調査区位置図・範囲確認坑配置図
第３図　宮ノ前遺跡調査区位置図
第４図　宮ノ前遺跡調査区土層断面図
第５図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（１）
第６図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（２）
第７図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（３）
第８図　土坑ＳＫ12・16遺構平面図
第９図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（１）
第10図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（２）
第11図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（３）
第12図　土坑ＳＫ350・ＳＫ354遺構平面・立面図
第13図　井戸ＳＥ347・326平面・断面図
第14図　井戸ＳＥ３３５平面・断面図
第15図　掘立柱建物ＳＢ355～357平面・断面図
第16図　ピット・ＳＫ331土器出土状況図
第17図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（１）
第18図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（２）
第19図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（３）
第20図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（４）
第21図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（５）
第22図　宮ノ前遺跡（第２次）
　１地区出土遺物実測図（６）
第23図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺構平面図
第24図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区土層断面
第25図　井戸ＳＥ502平面・断面図
第26図　宮ノ前遺跡（第２次）
　２地区出土遺物実測図（１）
第27図　宮ノ前遺跡（第２次）
　２地区出土遺物実測図（２）
第28図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区土層断面図
第29図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺構平面図
第30図　竪穴住居ＳＨ522平面図
第31図　宮ノ前遺跡（第２次）
　３地区出土遺物実測図（１）
第32図　宮ノ前遺跡（第２次）
　３地区出土遺物実測図（２）
第33図　寺前遺跡調査区位置図
第34図　寺前遺跡調査区土層断面図
第35図　寺前遺跡１地区遺構平面図（１）
第36図　寺前遺跡１地区遺構平面図（２）
第37図　寺前遺跡１・２地区遺構平面図
第38図　寺前遺跡２地区遺構平面図
第39図　寺前遺跡竪穴住居ＳＨ17実測図
第40図　寺前遺跡出土遺物実測図
第41図　寺前遺跡（第２次）調査区土層断面図
第42図　寺前遺跡（第２次）遺構平面図
第43図　寺前遺跡（第２次）出土遺物実測図
第44図　土坑ＳＫ218土器出土状況平面・断面図
第45図　荒木氏館跡調査区位置図
第46図　荒木氏館跡周辺図（ＳＤ１・６）
第47図　荒木氏館跡北地区遺構平面図
第48図　荒木氏館跡中地区遺構平面図
第49図　荒木氏館跡北地区西壁土層断面図
第50図　荒木氏館跡中地区土層断面図（１）

第51図　荒木氏館跡中地区土層断面図（２）
第52図　溝ＳＤ１・ＳＤ６土層断面図
第53図　荒木氏館跡南地区土層断面図
第54図　荒木氏館跡南地区遺構平面図
第55図　掘立柱建物ＳＢ21～23平面・断面図，
土坑ＳＫ19平面図
第56図　荒木氏館跡出土遺物実測図（１）
第57図　荒木氏館跡出土遺物実測図（２）
第58図　荒木氏館跡出土遺物実測図（３）
第59図　荒木氏館跡出土遺物実測図（４）
第60図　荒木氏館跡出土遺物実測図（５）
第61図　荒木氏館跡出土遺物実測図（６）
第62図　荒木氏館跡出土遺物実測図（７）
第63図　荒木氏館跡出土遺物実測図（８）
第64図　荒木氏館跡出土遺物実測図（９）
第65図　荒木氏館跡出土遺物実測図（10）
第66図　服部氏館跡１地区位置図
第67図　服部氏館跡１地区調査区土層断面図
第68図　服部氏館跡（西側）１地区遺構平面図
第69図　服部氏館跡２地区調査区位置図
第70図　服部氏館跡２地区調査区土層断面図
第71図　服部氏館跡２地区調査区遺構平面図（１）
第72図　服部氏館跡２地区調査区遺構平面図（２）
第73図　服部氏館跡（第２次）２地区補足調査区
土層断面図・遺構平面図
第74図　服部氏館跡出土遺物実測図
第75図　西明寺周辺調査区・範囲確認坑位置図
第76図　有井遺跡事業地内調査区位置図（西地区）
第77図　有井遺跡事業地内調査区位置図（東地区）
第78図　有井遺跡土層断面図
第79図　有井遺跡西地区遺構平面図（１）
第80図　有井遺跡西地区遺構平面図（２）
第81図　有井遺跡西地区遺構平面図（３）
第82図　有井遺跡西地区遺構平面図（４）
第83図　有井遺跡ＳＢ30，
土坑２～５平面・断面実測図
第84図　有井遺跡ＳＸ26・28，ＳＫ27，
ＳＤ23・24平面・断面図
第85図　ピット，ＳＢ31～33平面・断面図
第86図　有井遺跡東地区遺構平面図（１）
第87図　有井遺跡東地区遺構平面図（２）
第88図　有井遺跡東地区遺構平面図（３）
第89図　有井遺跡東地区遺構平面図（４）
第90図　東地区調査区と掘立柱建物
ＳＢ34・35・36実測図
第91図　土坑群平面・断面図
第92図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（１）
第93図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（２）
第94図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（３）
第95図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（４）
第96図　有井遺跡東地区出土遺物実測図（１）
第97図　有井遺跡東地区出土遺物実測図（２）
第98図　西明寺三反田遺跡調査区位置図
第99図　西明寺三反田遺跡東西調査区
南壁土層断面図
第100図　西明寺三反田遺跡南北調査区
西壁土層断面図
第101図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（１）
第102図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（２）
第103図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（３）
第104図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（４）
第105図　土坑ＳＫ９・井戸ＳＥ14平面・断面図
第106図　掘立柱建物ＳＢ32～34平面・断面図
調査区北部東西トレンチ北壁土層断面図

第107図　西明寺三反田遺跡の伊賀市調査区との合成図
第108図　土坑墓ＳＸ28平面・断面図
第109図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（１）
第110図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（２）
第111図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（３）
第112図　伊賀の中世城館と観音寺遺跡の溝ＳＤ36と貯水土坑ＳＰ57
第113図　荒木周辺の景観復元図
第114図　菩提寺跡概要図
第115図　菩提寺跡採集瓦実測図
第116図　調査区西端部ＳＤ２付近土層図
第117図　小泉氏館跡周辺地形図
第118図　調査区位置図
第119図　地籍図
第120図　調査区平面図
第121図　ＳＥ16・ＳＺ29・ＳＫ23実測図
第122図　小泉氏館跡出土遺物（１）
第123図　小泉氏館跡出土遺物（２）
第124図　小泉氏館跡出土遺物（３）
第125図　小泉氏館跡出土遺物（４）
第126図　小泉氏館跡出土遺物（５）
第127図　小泉氏館跡出土遺物（６）
第128図　素地粘土と擂目から見た信楽産擂鉢の変遷

表一覧

第１表　範囲確認坑一覧表（１）
第２表　範囲確認坑一覧表（２）
第３表　宮ノ前遺跡遺構一覧表
第４表　宮ノ前遺跡遺物観察表（１）
第５表　宮ノ前遺跡遺物観察表（２）
第６表　宮ノ前遺跡遺物観察表（３）
第７表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺構一覧表（１）
第８表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺構一覧表（２）
第９表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺物観察表
第10表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺物観察表（２）
第11表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺物観察表（３）
第12表　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺構一覧表
第13表　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺物観察表
第14表　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺構一覧表
第15表　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺物観察表
第16表　寺前遺跡遺構一覧表
第17表　寺前遺跡遺物観察表
第18表　寺前遺跡（第２次）遺構一覧表
第19表　寺前遺跡（第２次）遺物観察表
第20表　荒木氏館跡遺構一覧表
第21表　荒木氏館跡遺物観察表（１）
第22表　荒木氏館跡遺物観察表（２）
第23表　荒木氏館跡遺物観察表（３）
第24表　荒木氏館跡遺物観察表（４）
第25表　荒木氏館跡遺物観察表（５）
第26表　服部氏館跡遺構一覧表
第27表　服部氏館跡遺物観察表
第28表　範囲確認坑一覧表
第29表　有井遺跡遺構一覧表

第30表　有井遺跡遺物観察表（1）
第31表　有井遺跡遺物観察表（2）
第32表　有井遺跡遺物観察表（3）
第33表　有井遺跡遺物観察表（4）
第34表　有井遺跡遺物観察表（5）
第35表　有井遺跡遺物観察表（6）
第36表　西明寺三反田遺跡遺構一覧表
第37表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（1）
第38表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（2）
第39表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（3）
第40表　有井遺跡土器組成表
第41表　西明寺三反田遺跡土器組成表
第42表　小泉氏館跡遺構一覧表
第43表　小泉氏館跡遺物一覧表（1）
第44表　小泉氏館跡遺物一覧表（2）
第45表　小泉氏館跡遺物一覧表（3）
第46表　小泉氏館跡遺物一覧表（4）

写真図版

図版１　宮ノ前遺跡調査前風景
図版２　宮ノ前遺跡東側ピット群
図版３　上：宮ノ前遺跡（第１次）ＳＫ12
　　下：宮ノ前遺跡（第１次）ＳＫ16
図版４　上：宮ノ前遺跡（第２次）調査区全景
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）西部全景
図版５　上：宮ノ前遺跡（第２次）１地区西部全景
　　下：宮ノ前遺跡１地区東部全景
図版６　上：宮ノ前遺跡（第２次）
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）
　　１地区井戸・石組土坑
図版７　上：宮ノ前遺跡（第２次）１地区ＳＥ326
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）
　　１地区ＳＥ326断面
図版８　上：宮ノ前遺跡（第２次）ＳＫ350
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）ＳＤ321
図版９　上：宮ノ前遺跡（第２次）ＳＫ331
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）南北トレンチ
図版10　上：宮ノ前遺跡（第２次）２地区全景
　　下：宮ノ前遺跡（第２次）２地区ＳＥ502
図版11　宮ノ前遺跡（第２次）３地区全景
図版12　寺前遺跡調査前風景
図版13　上：寺前遺跡１地区東端部
　　下：寺前遺跡１地区全景
図版14　上：寺前遺跡２地区全景
　　下：寺前遺跡２地区南部分
図版15　上：寺前遺跡１地区ピット群
　　下：寺前遺跡２地区南部分
図版16　上：寺前遺跡１地区足跡検出状況
　　下：寺前遺跡２地区ＳＨ17
図版17　上：寺前遺跡（第２次）調査前風景
　　下：寺前遺跡（第２次）調査区全景
図版18　上：寺前遺跡（第２次）調査区全景
　　下：寺前遺跡（第２次）ＳＫ218土器出土状況
図版19　上：荒木氏館跡調査前風景
　　下：荒木氏館跡北地区全景
図版20　上：荒木氏館跡北地区溝ＳＤ１全景
　　下：荒木氏館跡北地区溝ＳＤ１断面
図版21　上：荒木氏館跡北地区ＳＤ１断面
　　下：荒木氏館跡北地区全景

図版22　上：荒木氏館跡航空写真
下：荒木氏館跡中地区全景
図版23　上：荒木氏館跡と中地区溝ＳＤ６全景
下：荒木氏館跡中地区溝ＳＤ６北端断面
図版24　上：荒木氏館跡ＳＤ６断面
下：荒木氏館跡南地区全景
図版25　上：服部氏館跡１地区調査前風景
下：服部氏館跡１地区西側全景
図版26　上：服部氏館跡２地区西端部と中央部
下：服部氏館跡２地区中間部分
図版27　上：服部氏館跡２地区北端トレンチ
下：服部氏館跡２地区補足調査区全景
図版28　上：有井遺跡西地区調査前風景
下：有井遺跡西地区全景と西地区水路上り
図版29　上：有井遺跡西地区全景
下：有井遺跡ＳＢ30全景
図版30　上：有井遺跡西地区東側南端部と
ＳＸ26・28
下：有井遺跡ＳＸ26・ＳＸ28
図版31　上：有井遺跡東地区調査前風景
下：有井遺跡東地区東西・南北トレンチ
図版32　上：有井遺跡ＳＢ34・東地区南北トレンチ
下：東地区北側トレンチ・
東地区東側トレンチ屈曲部
図版33　上：西明寺三反田遺跡調査前風景
下：西明寺三反田遺跡東西トレンチ
図版34　上：西明寺三反田遺跡
東西トレンチ中央部分
下：西明寺三反田遺跡
東西トレンチ交差付近ピット群
図版35　上：西明寺三反田遺跡
東西トレンチ・南北トレンチ
下：西明寺三反田遺跡ＳＫ９
図版36　上：西明寺三反田遺跡
東西トレンチ・中央部分
下：西明寺三反田遺跡
北端部南北トレンチ・ＳＸ２８
図版37　上：寺前遺跡２地区工事後風景
下：荒木氏館跡中地区工事後風景
図版38　上：有井遺跡東地区工事後風景
下：西明寺三反田遺跡工事後風景
図版39　宮ノ前遺跡出土遺物
図版40　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物
図版41　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物
図版42　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物
図版43　宮ノ前遺跡（第２次）３地区・
寺前遺跡出土遺物
図版44　寺前遺跡・荒木氏館跡出土遺物
図版45　荒木氏館跡出土遺物
図版46　荒木氏館跡出土遺物
図版47　荒木氏館跡出土遺物
図版48　服部氏館跡・有井遺跡出土遺物
図版49　有井・西明寺三反田遺跡出土遺物
図版50　西明寺三反田遺跡・菩提寺跡出土遺物
図版51　上：小泉氏館跡調査前風景
下：小泉氏館跡調査区全景
図版52　上：小泉氏館跡ＳＺ30周辺
下：小泉氏館跡ＳＢ32
図版53　上：小泉氏館跡ＳＤ１
下：小泉氏館跡ＳＤ１断面
図版54　上：小泉氏館跡ＳＺ29・ＳＥ16
下：小泉氏館跡ＳＤ２
図版55　小泉氏館跡出土遺物
図版56　小泉氏館跡出土遺物

Ⅰ　前　言

1　調査にいたる経緯

伊賀市荒木・西明寺周辺は旧来から条里制地割が残存し、旧地形が残存している地域であるが、近年の圃場整備や道路建設に伴う開発のため消滅しつつある。

今回、三重県埋蔵文化財センターでは、服部川の河川改修と中瀬地区の圃場整備事業に伴い、平成14年１月～２月・同年12月・平成15年１月～２月にかけて、事業予定地内に２ｍ×４ｍを基本として範囲確認坑を設定し、調査を実施した。中世を中心とした溝・土坑・ピット・落ち込み等の遺構や土師器・瓦器・陶器等の土器を確認したため中世集落の存在が想定された。

そこで、当センターでは、事業者と埋蔵文化財保護のための協議を行い、現状保存が困難な13,171㎡について発掘調査を行うこととなった。ただし、調査箇所・面積が多岐に及ぶため、３ヵ年に分けての調査となった。

なお、事業名は以下の通りである。

平成14・15年度一級河川服部川県単河川局部改事業

平成14年～16年度経営体育成基盤整備事業（中瀬川南地区）

2　調査の経過

平成14年度に荒木地区内の範囲確認調査が行なわれ、次年度、経営体育成基盤整備で水路及び付け替え道路に当たる範囲内に宮ノ前遺跡他が含まれることがわかった。また、一級河川服部川の河川改良区域も宮ノ前遺跡の範囲であることから、併行して平成15年９月より調査を開始した。

3　調査の記録と方法について

a　調査委託・土工部門委託について

今回の発掘調査にあたっては、調査の迅速化と、調査員が調査に専念できるようにするため、発掘調査、ならびに土工部門を競争入札により委託している。当遺跡の調査では、平成14年度の宮ノ前遺跡の発掘調査を安西工業株式会社が受託し、他の平成14年度～16年に実施した調査についても、土工部門を同社に委託して実施している。

b　掘削の方法について

掘削は、表土・無遺物層については重機によって掘削し、遺構を人力で掘削した。また、調査の最後に行った井戸の断ち割りについても重機掘削による。荒木氏館跡の堀については、埋土に大量の礫が混入しており、人力での掘削が困難であったため、やむなく重機掘削と人力掘削を併行して行った。

c　調査区の設定について

調査区は、北西隅を基本とし、４ｍ四方の桝目で切ることにより、小地区を設定した西から数字、南からアルファベットを付けた。

d　遺構図面について

遺構の平面・土層断面の実測図については、基本的に１／20で手書きによる実測を行っているが、一部の図面は他の縮尺を用いて実測を行っている。

e　全景写真について

調査区の全景写真は調査担当者が、４×５判にて撮影したが、平成15年度の宮ノ前遺跡（１地区）・荒木氏館跡の調査では遺構掘削後、ジオテクノ関西㈱による空中写真を撮影した。

4　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

・法に基づく三重県文化財保護条例第48条第１項(県教育長宛)

平成14年５月24日付け賀農第414号

・法第58条の２第１項（県教育長宛）

平成15年９月26日教埋165号

平成16年９月15日教埋第185号

・遺失物法による文化財発見・届出通知

平成16年２月18日教埋第12－９－13号

平成17年２月24日付教委第12－４－31号

(県教育長通知)

5　整理作業とその方法

a　遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した各年度中に、発掘調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書掲載遺物については実測作業を行い、未掲載遺物については、袋詰にし整理箱に収納したあとに、専用収蔵庫へと収納した。報告書掲載遺物については、それぞれ１枚ずつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。なお、荒木地区の出土遺物は、整理箱で寺前遺跡８箱、宮ノ前遺跡54箱、荒木氏館跡38箱、服部氏館跡８箱である。

b　図版作成と遺物写真撮影

実測図等が完成した遺物類は、報告書掲載順に収蔵し、報告書完成後の利活用に備えた。また、実測図そのものは記録保存の一環で保存しているが、報告書用に作成した版下類やトレース図版については、報告書完成後に廃棄した。

報告書掲載遺物は、報告書用の写真を６×９判（ブローニ）・４×５判で撮影した。遺物写真の撮影は報告書掲載資料すべてではなく、掲載資料のうちの主だったものとした。

実測図の作成は平成15・16年に、遺物写真撮影と図版作成は平成17年度、編集・遺物の収蔵については平成18年度に実施した。

c　記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで所蔵している。（松田・豊田）

Ⅱ　位置と環境

地形的環境

荒木地区は、服部川の左岸に位置し、幾度とない河川の氾濫により形成された河岸低地で、服部川の沖積扇状地の扇頂に位置する。

荒木の地名は、古代の新開地を意味する新開墾地「あらきはり」に由来するとされ[(1)]、周辺には条里制の地割が残る箇所もあり、古代から開発に適した地域であった。

歴史的環境

周辺の弥生遺跡はあまり知られていないが、荒木地区の小字石田では石器片が採集されており、付近に集落が存在した可能性があるが、集落跡は今のところ発見されておらず、不明な点が多い。

古墳時代には、北伊賀に県内最大の規模を誇る前方後円墳の御墓山古墳（８）が築造され、丘陵上にも外山・鷺棚古墳群（９）がある。荒木地区の東の旧山田郡（現伊賀市大山田）には、寺垣内古墳（５）が築造され、山の尾根上には荒木車塚古墳（４）がある。前方部の形状がやや不明瞭であるが、全長90ｍの前方後円墳である。立地や採集された埴輪などから前期後半～末頃の築造と考えられている。後期にも平野部には盾形周溝をもつ、寺音寺古墳が築造されるなど、累代的な首長墓が展開する。

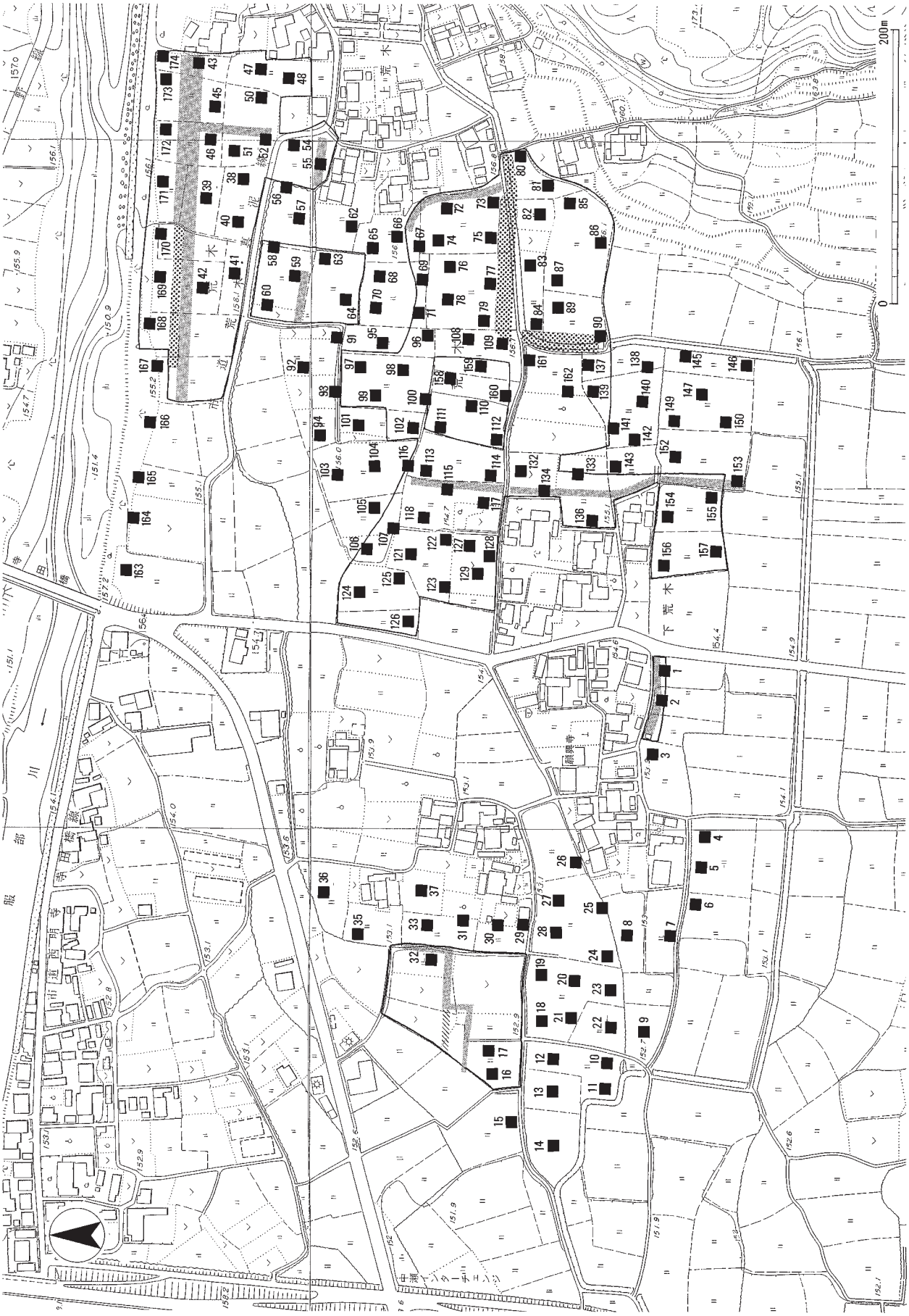
荒木地区の服部川を挟んだ対岸には前山古墳群（６）が、南側にもダラ古墳群（７）が存在する。

白鳳時代には伊賀国４郡には各１寺院を有し、この周辺でも旧阿拝郡に三田廃寺（14）がある。また、この時期における荒木地区を考えるうえで欠かせないのが壬申の乱である。日本書紀の天武天皇元年六月条には、「会明に、莉萩野に至りて、暫く駕を停めて進食す」とあり、荒木の南方にある「ダラ」がその地と推定[(2)]されている。

奈良時代には南側の西明寺地区に、伊賀国分寺（10）・国分尼寺（11）が建立される。この地から真北の坂之下地区には伊賀国府（12）がおかれたことが判明しており、発掘調査によって正殿・脇殿・前殿と考えられる建物が確認[(3)]されている。また、伊賀国府・伊賀国分寺、多数の掘立柱建物が確認され、有力豪族に関連する性格の遺跡とされる森脇遺跡（19）は、ほぼ南北に並び、これらの遺跡を通り東海道と伊勢街道を結ぶ南北の主要な街道があったとされる[(4)]。

中世の伊賀地域では、突出した守護がみられず、

第１図　遺跡分布図（１：50,000）〔国土地理院『上野』『伊勢路』『月ヶ瀬』『島ヶ原』より〕



第２図　荒木地区調査区位置図・範囲確認坑配置図（１：4,000）〔□は範囲確認坑〕

荘園名主や、一族郎党の武装化を促し、地方武士が発生した。これらの勢力は伊賀国衆と呼ばれ、一族郎党を従え、農業経営にあたると共に、自領を守るため城や館を構築するようになった。後に、「惣」とよばれる自治組織をつくり、他国からの侵略に対し、地域結束をはかり、「伊賀惣国一揆」とよばれる自治連合組織を立ち上げた。伊賀地域にはそういった土豪層によって城館が数多く築かれたが、荒木周辺にも服部氏館（15）に代表されるように多くの城館が存在し、これまでにも蓮花寺跡推定地（16）、宮ノ前館などの城館が調査されている。また、詳しいことは不明であるが、文献史料に登場する中世寺院の菩提寺跡（3）は荒木の集落の南東に存在した。

近世の状況

天正伊賀の乱の際には、当地も例外ではなく織田軍との戦火の場となったと考えられる。軍記物ではあるが、『信長公記』には荒木の竹屋一族が殺されたとの記述があり、この地が在地勢力の織田勢への反撃の拠点の一つとなったことを窺わせる。（豊田）

［註］

（1）福永正三『秘蔵の国　伊賀路の歴史地理』地人書房1972年

（2）山田猛「伊賀」（『新修国分寺の研究　第二巻　畿内と東海道』吉川弘文館1991年）

（3）泉雄二『伊賀国府跡（第４次）』発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1992年）

（4）森川常厚『研究紀要－森脇遺跡－』第12号　（三重県埋蔵文化財センター2002年）

（5）石井善人「甲賀郡中惣と伊賀惣国一揆」『史窓』21に所収

（6）石井善人『信長公記』天正９年９月11日条　角川文庫

宮ノ前

試掘坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
1	—		—	陶器	
2	40	40	土器集中・焼土面	瓦器・土師器	
3	—	—	—	—	
4	45	—	—	土師器・陶器	
5	30	—	—	土師器	
6	—	—	—	土師器・陶器	
7	—	—	—	陶器・磁器	
8	—	—	—	—	
9	—	—	—	土師器	
10	65	—	—	土師器皿	
11	45	—	—	—	
12	80	—	—	土師器・須恵器	
13	105	130？	土坑？石組み	土師器多く出土	
14	120	—	—	曲げ物・土師器	
15	110	—	—	—	
16	—	—	—	—	
17	30	50	焼土	土師器・須恵器	
18	50	—	—	土師器・須恵器・瓦器・陶器	
19	45	—	—	土師器・瓦器	
20	50	—	—	土師器	
21	—	—	—	土師器・瓦器	
22	85	—	—	土師器	
23	70	—	—	土師皿・瓦器・五輪塔	
24	65	—	—	土師器	
25	120	—	—	土師器	
26	90	—	—	土師器・黒色土器	
27	50	—	—	土師器	
28	40	—	—	土師器・瓦器	
29	—	—	—	—	
30	—	—	—	—	
31	—	—		—	
32	30	60	土坑	土師器・黒色土器・緑釉・須恵器	
33	—	—	—	—	
34	—	80？	礎石？	土師器・須恵器	
35	—	—	—	—	
36	—	—	—	—	
37	25	—	—	—	
38	45	65	ピット	土師器・瓦器・陶器	
39	30	—	—	土師器・陶器	
40	45	60	ピット	—	
41	40	60	土坑	土師器・瓦器・灰柚	
42	—	—	—	—	

荒木

試掘坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
43	—	—	—	—	
44	—	—	—	—	欠番
45	50	70	ピット	土師器皿	
46			—	—	
47	—	—	—	—	
48	—	—	—	—	
49	—	—	—	—	欠番
50	45	65	—	—	
51	30	55	—	—	
52	60	—	—	土師器	
53	—	—	—	—	欠番
54	50	80	土坑	—	
55	80	—	—	陶器	
56	—	—	—	—	
57	—	—	—	—	
58	—	—	—	—	
59	30		—	土師器	
60	50		—	土師器甕	
61	—	—	—	—	欠番

第１表　範囲確認坑一覧表（１）

試掘坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
62	—	—	—	—	
63	—	—	—	—	
64	50	—	なし	須恵器甕・杯・土師器多い	
65	—	—	—	—	
66	100	—	—	土師器小片	
67	—	50	溝	なし	
68	—	—	なし	なし	
69	40	—	なし	土師器	
70	—	—	—	—	
71	—	—	—	—	
72	40	60	土坑・ピット	黒色土器	
73	—	—	なし	なし	
74	—	—	—	—	
75	40	60	土坑・ピット群・溝	土師器皿	
76	—	—	—	—	
77	40	—	なし	陶器	
78	50	65	溝	土師器片	
79	55	70	溝	土師器片	
80	55		なし	土器片	
81	50	75	—	土器片	
82	40	55	土坑	土師器皿	
83	—	60	ピット	なし	
84	40	50	土坑・ピット	土師器甕・瓦器	
85	40	80	なし	なし	
86	50	70	土坑・ピット	土師器片・瓦器	
87	50	60	溝・ピット	土師器片	
88	30	110	土坑・溝	土師器片	
89	40		—	瓦器椀	
90	30	80	溝・土坑	須恵器・土師器・瓦器	
91	—	—	—	—	
92	—	—	—	—	
93	—	—	—	—	
94	—	—	—	—	
95	—	—	—	—	
96	95		—	—	
97	—	50	土坑・溝	陶器・土師器	
98	45	70	溝・ピット	陶器・土師器	
99	—	—	—	—	
100	40	60	—	—	
101	—	—	—	—	
102	30	60	—	土師器片	
103	—	—	—	—	
104	—	—	—	—	
105	—	—	—	—	
106	—	—	—	—	
107	30	55	竪穴？	土師器甕・瓦器	
108	—	—	—	—	
109	40	—	なし	土師器	
110	—	—	—	—	
111	—	—	—	—	
112	—	—	—	—	
113	40	60	溝	土師器片	
114	40	—	—	須恵器・土師器	
115	50	70	土坑	土師器片・瓦	
116	—	—	—	—	
117	30	60	流路	土師器片	
118	—	30	石組	土師器片	
119	—	—	—	—	
120	—	—	—	—	
121	50	60	溝	土師器片	
122	40	55	石組	土器片	
123	35	—	—	—	
124	40	—	—	瓦器	
125	—	—	—	—	
126	30	—	—	瓦器	
127	30	50	ピット	土師器・陶器・染付	
128	—	—	—	—	

試掘坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
129	40	50	土坑・溝	瓦・土師器	
130	—	—	—	—	
131	—	—	—	—	
132	30	50	石組	—	
133	—	—	—	—	
134	30	—	石組？	土師器片	
135	—	—	—	—	
136	40	60	土坑	土師器・瓦器	
137	—	—	—	—	
138	—	—	—	—	
139	—	40	ピット	なし	
140	40	—	なし	瓦器	
141	—	—	—	—	
142	—	—	—	—	
143	50		—	—	
144	—	—	—	—	
145	—	—	—	—	
146	—	—	—	—	
147	—	—	—	—	
148	—	—	—	—	
149	—	—	—	—	
150	—	—	—	—	
151	—	—	—	—	
152	—	—	—	—	
153	—	—	—	—	
154	40	50	ピット	陶器	
155	60	90	石組	瓦・土師器	
156	30	45	土坑	瓦器・土師器	
157	30	40	土坑	土師器片	
158	40	55	土坑	溝	
159	40	—	—	—	
160	—	—	—	須恵器	
161	40	40	石組	土師器片・瓦器片	
162	—	50	土坑	土師器片・瓦器片	

宮ノ前

試掘坑No.	包含層上面の深さ	遺構上面の深さ	遺構	遺物	備考
163	—	—	—	—	施行可
165	30	—	—	—	施行可
166	—	—	—	—	施行可
167	—	—	—	—	施行可
168	—	—	—	—	施行可
169	30	50	—	—	要本調査
170	30	—	流路内か	多い	要本調査
171	40	60	溝（流路か）		要本調査
172	30	50	溝（流路か）		要本調査
173	—	30	ピット・土坑		要本調査
174	—	30	ピット・土坑		要本調査
175	—	—	—	—	要本調査

第２表　範囲確認坑一覧表（２）

Ⅲ　宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡は、上荒木集落の西に所在する。現況は水田であり、調査区に沿って南側に用水路がある。服部川の護岸工事に伴うもので、平成14・15年度と２ヵ年に分けて調査を行っている。平成14年度の調査面積は1,110㎡である。

基本層序（第４図）

現況は水田であった。表土である耕作土・床土の下には灰色土の褐色土層があり、その下に淡茶褐色土層がある。その下に茶褐色土の中世の遺物を含む包含層があり、検出面とした灰色土がある。その下に黄灰色土があり、その下には河砂である淡黄灰色砂がある。

遺構

溝ＳＤ１　ａ・ｂ９グリットで確認した遺構である。幅は２ｍ以上、深さは約30㎝の溝である。埋土から土師器鍋・白磁・青磁片が出土しており、溝の南にはピット群が広がることから13世紀頃の区画溝と考えられる。

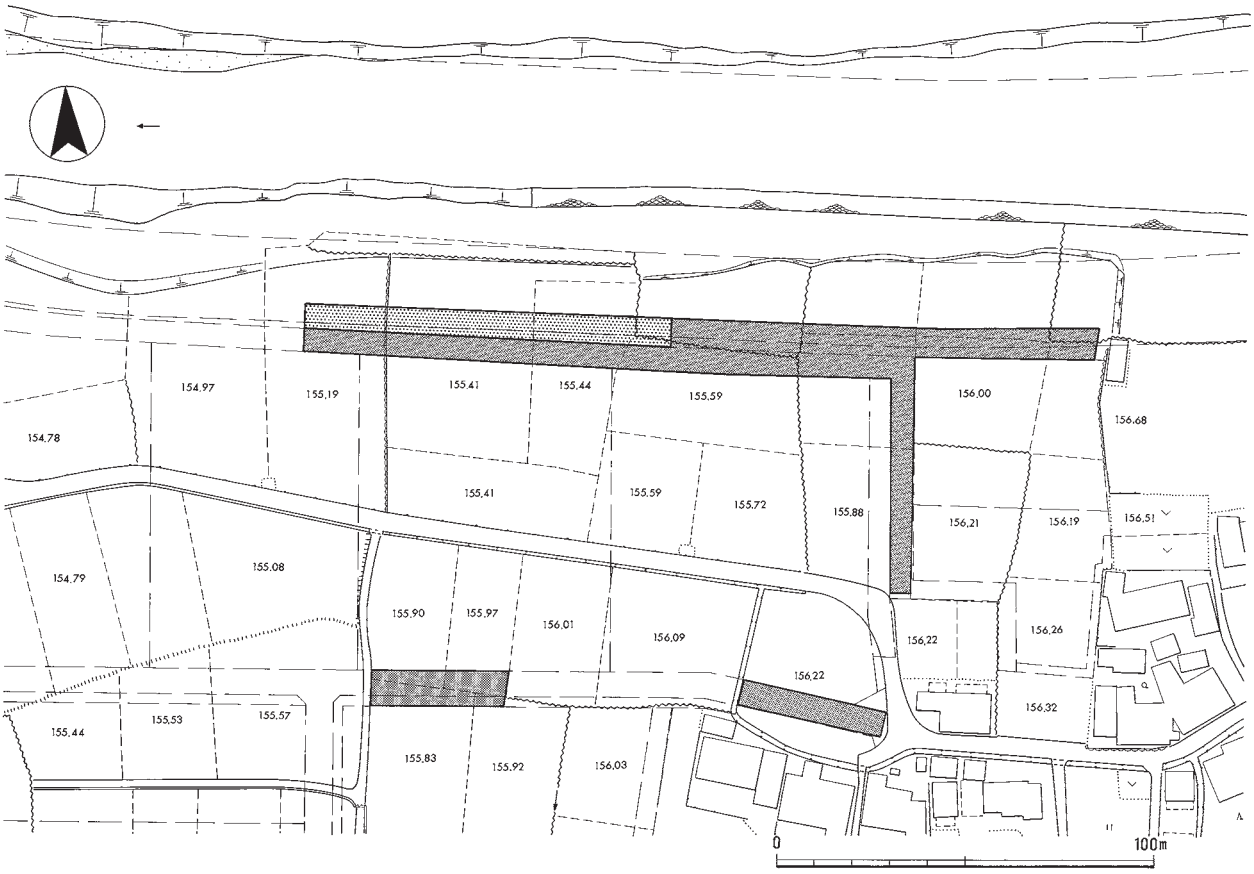
溝ＳＤ２　ａ・ｂ８グリットで確認した遺構である。幅2.4ｍ、深さ10㎝、長さは5.7ｍ分確認した。埋土には拳大～人頭大の石・炭化物を含む。近世から近現代の溝と考えられる。

落ち込みＳＺ４　ａ・ｂ３～４グリットで確認した深さ５㎝ほどの浅い落ち込みである。

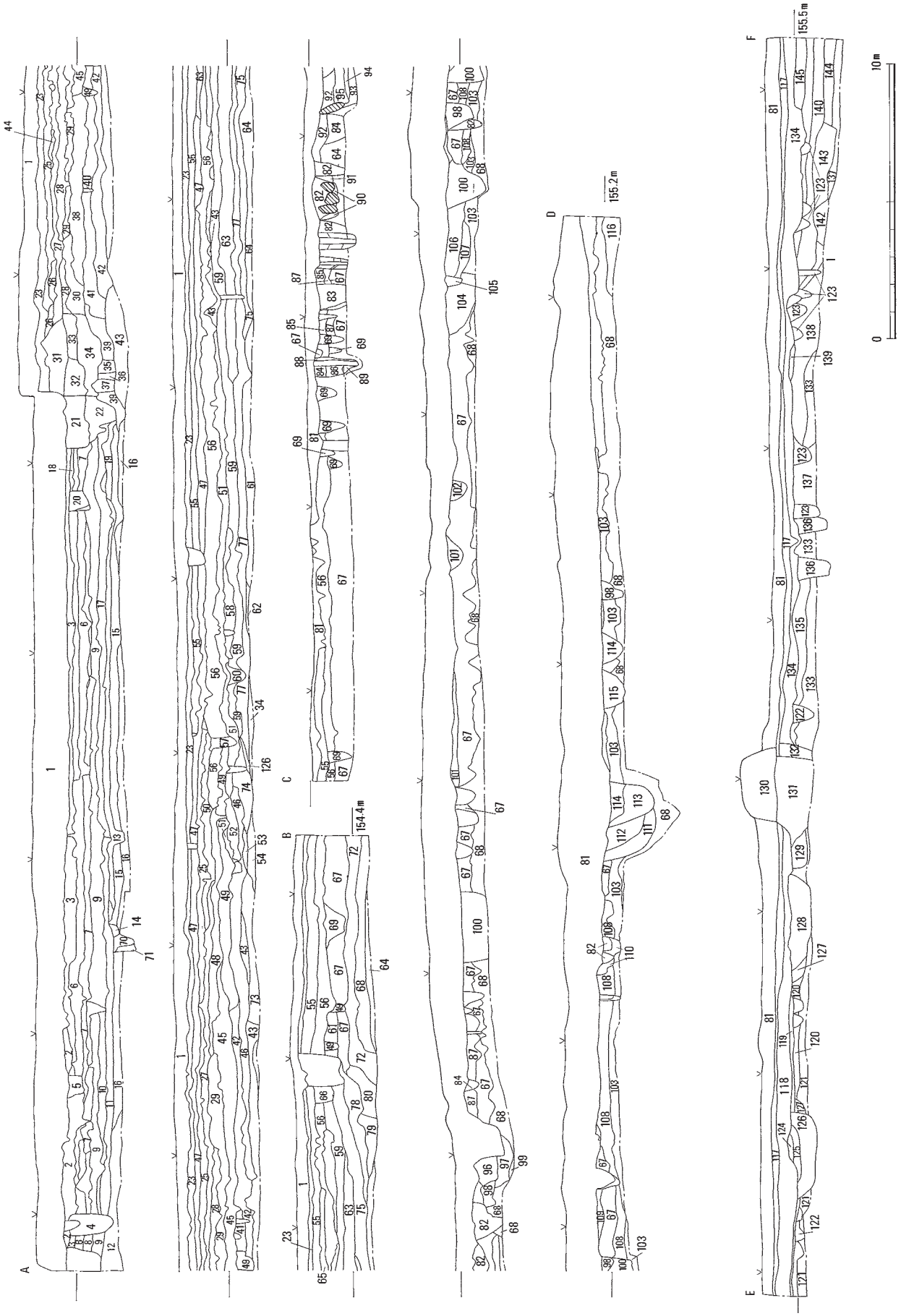
土坑ＳＫ５　ａ４グリットで確認した土坑で、長径1.2ｍ、深さ10㎝の浅い土坑で、炭化物が多い。

土坑ＳＫ６　ａ４グリットで確認した土坑で、長径1.2ｍ、深さ25㎝の浅い土坑で、埋土には炭化物を多く含む。瓦器椀片が出土しており13世紀頃のものであろう。ＳＫ５に切られている。

土坑ＳＫ９　ｂ４グリットで確認した土坑で、長径0.5ｍ・短径0.2ｍ・深さ25㎝である。埋土には炭化物



第３図　宮ノ前遺跡調査区位置図（１：2,000）



第４図　宮ノ前遺跡調査区土層断面図（縦１：40　横１：200）

宮ノ前遺跡
1 耕作土
2 床土①
3 床土②
4 攪乱（近現代の導水管）
5 攪乱（近現代の溝）
6 7.5Y5/1灰色砂質土
7 2.5Y6/2灰黄色砂質土
8 2.5Y5/1黄灰色砂質土
9 7.5Y5/2灰オリーブ砂質土
10 7.5Y4/1灰色砂質土
11 2.5Y4/2暗灰黄色土
12 2.5Y7/4浅黄色砂礫
13 2.5Y6/1黄灰色砂質土（第Ⅰ面の可能性あり）
14 5Y2/1黒色粘質土（遺構埋土SK-6）(炭化物含む)
15 10YR6/2褐灰色土
16 10YR8/4浅黄橙色土
17 2.5Y6/1黄灰色砂質土
18 10YR5/3にぶい黄褐色土
19 2.5Y5/2暗灰黄色土
20 2.5Y5/1黄灰色土（近世の溝）
21 2.5Y5/1黄灰色土（人頭大の礫含む）
22 2.5Y5/2暗灰黄色土(人頭大の礫含む)
23 2.5Y6/2灰黄色土（床土）
24 10YR7/2にぶい黄橙色（床土）
25 10YR7/1褐灰色土（旧耕作土）
26 10YR6/1褐灰色土（旧耕作土）
27 10YR5/1褐灰色土（旧耕作土）
28 10YR6/3にぶい黄橙色土
29 2.5Y8/1灰白色粗砂
30 10YR6/4にぶい黄橙色土
31 10YR8/2灰白色粗砂（礫混じり）
32 10YR7/3にぶい黄橙色土（粗砂）
33 10YR5/3にぶい黄橙色土（礫混じり）
34 10YR5/4にぶい黄褐色土（SD-1）
35 7.5YR6/4にぶい褐色土（中世の溝）（SD18）
36 10YR7/2にぶい黄橙色土（SD-19）
37 7.5YR6/4にぶい褐色土（中世の溝）（SD17）
38 7.5YR5/3にぶい褐色土
39 7.5YR6/3にぶい褐色土
40 7.5YR5/2灰褐色土（中世ピット）
41 7.5YR6/2灰褐色土
42 7.5YR6/1褐灰色土
43 7.5YR8/6浅黄橙色（礫混じり）
44 10YR6/4にぶい黄橙色土
45 7.5YR4/3褐色土
46 7.5YR5/1褐灰色土
47 10YR5/2灰黄褐色土
48 10YR5/1褐灰色土
49 10YR4/6褐色土
50 5YR5/1褐灰色土
51 5YR5/1褐灰色砂質土
52 7.5YR5/2灰褐色土
53 7.5YR6/1褐灰色土
54 10YR6/4にぶい黄橙色粗砂
55 5YR5/2灰褐色土
56 7.5YR8/1灰白色土
57 7.5YR5/1褐灰色土（中世～近世の溝）
58 7.5YR6/1褐灰色砂質土
59 7.5YR4/1褐灰色土
60 7.5YR6/3にぶい褐色土(中世ピット)
61 7.5YR7/6橙色粗砂
62 10YR4/1褐灰色土（中世～近世の溝）
63 10YR5/3にぶい黄褐色土
64 2.5Y6/4にぶい黄色砂質土
65 10YR4/3にぶい黄褐色土
66 2.5Y4/2暗灰黄色土（近世～中世の溝）
67 10YR5/1褐灰色砂礫（拳大～人頭大の石含む）（旧河川）
68 10YR7/4にぶい黄橙色砂礫（拳大～人頭大の石含む）（旧河川）
69 10YR5/3にぶい黄褐色土（拳大～人頭大の礫含む）（中世の溝）
70 10YR4/2灰黄褐色粘質土（炭化物含む）
71 10YR4/2灰黄褐色砂質土
72 2.5Y4/1黄灰色土
73 2.5Y4/1黄灰色砂礫（拳大～人頭大の石含む）
74 10YR4/1褐灰色砂質土
75 10YR4/1褐灰色砂礫（拳大の礫含む）
76 10YR6/2灰黄褐色砂礫（拳大の礫含む）
77 10YR6/2灰黄褐色砂礫（粗砂～拳大の礫含む）
78 7.5YR4/1褐灰色粗砂
79 10YR4/1褐灰色シルト質土
80 7.5YR4/2灰褐色砂質土
81 10BG5/1青灰色粘質土に黒褐、赤褐、褐混じる（攪乱土）
82 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
83 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト（遺構埋土）
84 7.5YR5/6明褐色粘質土に浅黄橙砂混じる
85 7.5YR5/6明褐色細砂
86 83に浅黄橙砂混じる
87 10YR6/6明黄褐細砂に灰黄褐色粘質土混じる
88 83に84混じる
89 10YR6/6明黄褐細砂に83混じる
90 10YR6/6明黄褐細砂に82混じる
91 10YR8/4浅黄橙細砂
92 10YR4/6褐色シルトに褐灰色砂質土混じる
93 10YR4/1褐灰色砂質土
94 10YR8/4浅黄橙粗砂
95 94に93混じる
96 7.5YR5/4にぶい褐色シルト
97 10YR5/6黄褐色シルト
98 10YR5/3にぶい黄褐色シルト
99 2.5Y7/4浅黄粗砂礫混じり
100 10YR5/3にぶい黄褐色シルトに小石・礫混じる
101 明黄褐細砂に灰褐色砂質土混じる
102 10YR5/2灰黄褐細砂
103 10YR5/6黄褐色細砂
104 98に黄橙色粘土混じる
105 7.5YR7/8黄橙色粘土に褐灰色粘質土混じる
106 98に小石･人頭大の礫混じる
107 103に91混じる
108 2.5Y8/3淡黄粗砂に小石混じる
109 91に小石混じる
110 103に108･109混じる
111 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
112 10YR5/3にぶい黄褐色シルトに小石･土器混じる
113 10YR3/3暗褐色粘質土に小石・礫混じる
114 10YR3/4暗褐色砂質土
115 10YR6/6明黄褐色粘土
116 99に礫多数混じる（礫ベース）（旧河川？）
117 耕作土
118 5YR4/8明赤褐色砂質土（形成された床）
119 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土に拳大の礫多数混じる（整地用の客土？）
120 2.5Y5/4黄褐色粗砂
121 10YR5/6黄褐色シルト（検出面）
122 10YR6/8明黄褐細砂
123 7.5YR4/4褐色シルト
124 5Y4/2灰オリーブ色シルトに小石･礫多数混じる
125 5Y4/3暗オリーブ色シルト
126 2.5Y4/2暗灰黄色シルトに拳大・人頭大の礫多数
127 10YR4/6褐色砂質土
128 10YR6/8明黄褐色粗砂に小石混じる
129 10YR4/4褐色粗砂に小石多数混じる
130 127に礫混じる
131 117・118に小石多数混じる（アゼカクラン）
132 129に119混じる（アゼカクラン）
133 121に小石混じる
134 粗砂（明黄褐2.5Y6/6か？）
135 10YR4/6褐色砂質シルト
136 122に小石混じる
137 10YR6/8明黄褐極細砂
138 137に褐色細砂10YR4/6混じる
139 2.5Y4/3オリーブ褐色シルトに小石・礫混じる
140 2.5Y5/4黄褐色シルトに小石混じる
141 10YR5/4にぶい黄褐砂質土に小石混じる
142 2.5Y4/4オリーブ褐粗砂に礫多数混じる
143 139に小石混じる
144 2.5Y3/3暗オリーブシルト
145 10YR4/4褐色砂質土

を含み、砥石が出土しているが、時期は不明である。

土坑ＳＫ12（第８図）　ａ～ｂ４･５グリットで確認した長径４ｍ、短径３ｍ、深さは最大56㎝ほどの楕円形の土坑である。埋土には炭化物を多く含み、完形の瓦器椀が出土している。13世紀頃の遺構であろう。

土坑ＳＫ13　ｂ11グリットで確認した土坑である。長径１ｍ・短径0.8ｍの方形である。詳しい出土状況は不明だが、瓦器椀のほか、刀子や砥石が出土している。出土遺物の内容から中世墓の可能性がある。

土坑ＳＫ16（第８図）　ａ14グリットで確認した長径2.2ｍ、短径1.9ｍ以上の方形の土坑である。土坑の北側には20～30㎝ほどの川原石が列状に並べられ、土坑中央部を中心に楕円状に石の集積が確認された。土坑墓であろうか。遺物は微量しか出土していないが、瓦器片が出土しており中世前期の遺構である。

溝ＳＤ17　ａ・ｂ９グリットで確認した溝である。幅約0.2ｍ、深さ５㎝程の浅い溝である。

土坑ＳＫ20　径1.6ｍ、深さ45㎝ほどの楕円形の浅い土坑で、土師器皿・瓦器皿・椀が出土している。石組などはなかったが、礫の集積や完形の土師皿の出土からみて土坑墓の可能性もある。13世紀前半頃か。

土坑ＳＫ23　ａ17グリットで確認された径0.8ｍ、深さ約40㎝の土坑である。埋土から瓦器皿・椀が出土している。中世墓であろうか。

土坑ＳＫ25　ｂ16グリットで確認された径1.2ｍ、深さ約70㎝の土坑である。瓦器椀が出土している。

土坑ＳＫ26　ｂ16グリットで確認された径1.3ｍ、深さは検出面から90㎝ほど下がる深い土坑である。埋土からは土師器・瓦器が出土している。出土土器より13世紀後半頃か。

土坑ＳＫ27　ｂ16グリットで確認された径1.4ｍ、深さ65㎝の土坑である。埋土には川原石を含む。遺物は瓦器・磁器が出土している。

土坑ＳＫ28　ｂ20グリットで確認されたやや不整形な楕円形の土坑である。長径２ｍ以上、短径は1.6ｍ、深さ70㎝である。埋土には小礫が混じる。

溝ＳＤ30　ａ・ｂ25グリットで確認した溝で、幅80㎝、深さ28㎝である。遺物は中世から近世のものがある。

土坑ＳＫ34　ｂ22・23グリットで確認された遺構で、径0.8ｍ、深さ42㎝の楕円形の土坑である。遺物は瓦器椀が出土している。

土坑ＳＫ38　ａ４グリットで確認された径0.8ｍの土坑で、底を打ち欠いたとみられる土師器の羽釜が出土している。

遺物（第９図）

溝ＳＤ１（１～５）　土師器皿・鍋、陶器が出土している。１は土師器皿、２・３は土師器の鍋である。４は白磁、５は青磁である。

溝ＳＤ２（６）　６は砥石で、表面には使用面が残る。

土坑墓ＳＸ４（７・８）　瓦器が出土している。７は瓦器皿、８は瓦器椀である。瓦器椀（８）は15.5㎝で器高は４㎝である。外面のミガキは消失しており、福田編年[1]の６期頃か。

土坑ＳＫ６（９～15）　９～14は土師器皿、15は瓦器椀である。瓦器椀は口径15㎝、器高5.05㎝で外面のヘラミガキは消滅している。福田編年の５期か。

土坑ＳＫ12（17～31）土師器・瓦器が出土している。17～19は土師器皿で20～23は瓦器皿である。24～31は瓦器椀である。瓦器椀は口径15㎝前後のものが多く、器高は4.5～5.0㎝である。断面三角形の高台が残るが、外面のミガキは施されず、指頭痕がよく残る。福田編年の５期に相当する。

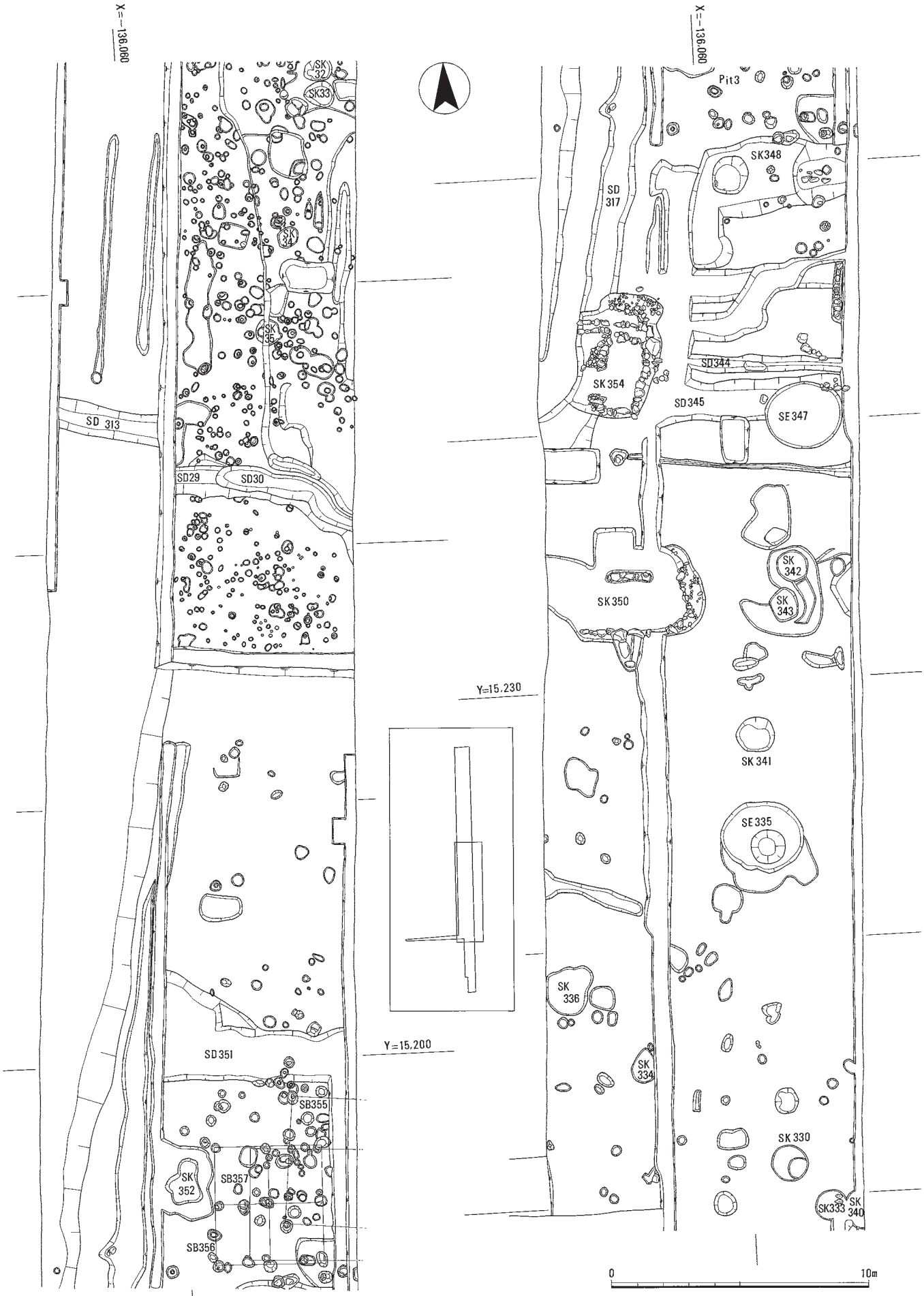
土坑ＳＫ13（32～36）　土師器・瓦器・石製品・鉄器が出土している。32は土師皿・33・34は瓦器椀である。14㎝前後で器高は４㎝に満たず、皿状に近い形態を呈する。高台は退化が進んでおり低く、内面のヘラミガキも粗雑である。福田編年の６期頃か。35は砥石の破片、36は鉄製品の刀子で、鞘や把は残存していないが、ほぼ完存である。

土坑ＳＫ20（37～42）　土師器・瓦器が出土している。37～41は土師皿である。42は瓦器椀で口径は14㎝で器高は3.3㎝である。皿に近いような形態を呈し、高台はわずかに残るのみである。福田編年の７期頃か。

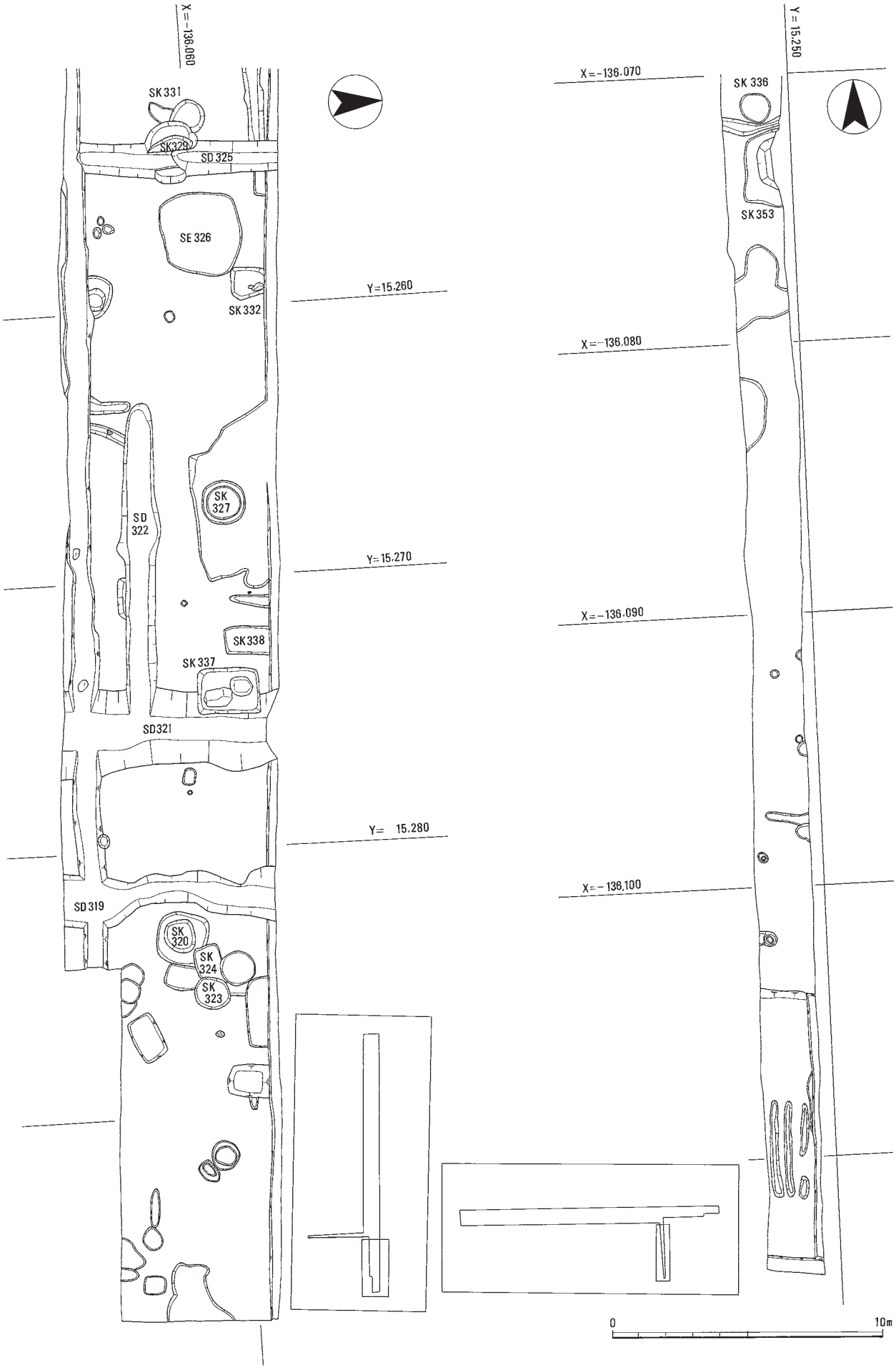
土坑ＳＫ22（43・44）　土師器の羽釜（43）が出土している。口径は24.1㎝で鍔はかなり低く退化している。瓦器（44）は口径14㎝、器高3.9㎝で高台はわずかに残るのみである。福田編年の６期頃か。

土坑ＳＫ23（45・46）　瓦器皿・椀が出土してい

第５図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（１）（１：200）



第６図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（２）（１：200）



第７図　宮ノ前遺跡（１地区）遺構平面図（３）（１：200）

る。46の椀は口径11.5cmと器高3.2cmと矮小化している。福田編年の７期か。

土坑ＳＫ25（47・48）　瓦器椀が出土している。47の口径は14cmで、器高3.6cmで器形・器高の低平化が進んでいる段階のものである。

土坑ＳＫ26（49～52）　土師器・瓦器椀が出土している。49は土師皿である。瓦器椀は、口径は13m前半で器高は3.0～3.5cmと低い。外面のミガキはなく、内面のミガキも粗くなり高台もわずかに残るのみである。福田編年の８期に相当する。13世紀後半頃か。

土坑ＳＫ27（53～55）瓦器・磁器が出土している。55は口縁部を欠損するが青磁の椀である。53・54は瓦器椀で、器高は３cm前半と低く高台もわずかに残るのみである。福田編年８期頃か。

土坑ＳＫ28（56）　瓦器椀が出土している。

溝ＳＤ30（57）　信楽産の甕が出土している。口縁部はＮ字状を呈する。

土坑ＳＫ34（58）　瓦器椀が出土している。口径は14cmで器高は3.5cmである。高台は僅かに残る。みこみには連結輪状文が施されるが、退化してきている。福田編年の８期に相当しよう。

土坑ＳＫ36（59）　瓦器椀が出土している。

落ち込みＳＺ37（60・61）　白磁の椀が出土している。ともに高台の破片である。

土坑ＳＫ38（62）　土師器の羽釜が出土した。口径20.7cmで、短い鍔をもち、口縁部端部は上方につまみ上げる。菅原氏による分類の大和型[(2)]である。

Ｐｉｔ出土遺物（63～84）　土師器・瓦器・陶器・磁器などが出土している。63は土師器皿である。64は瓦器椀、80は青磁椀である。81～83は土釜で84は南伊勢系[(3)]の鍋である。

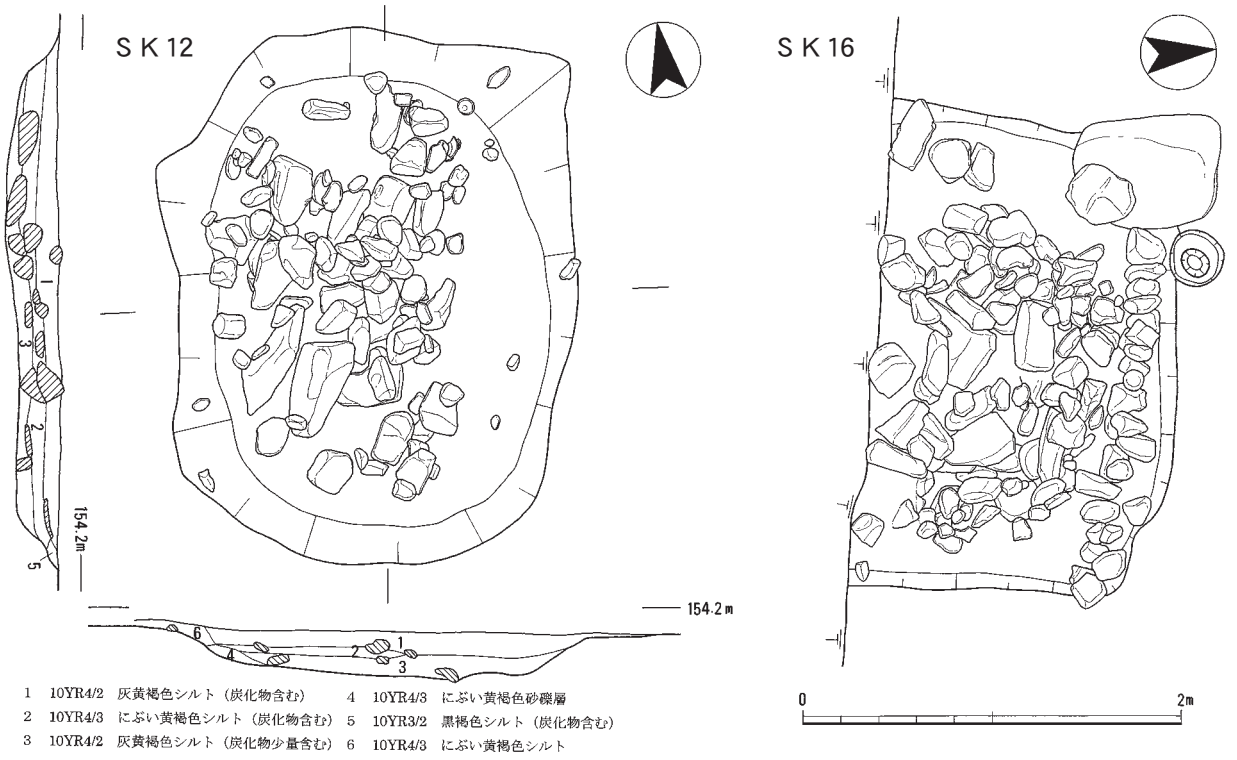
包含層出土遺物（85～112）　土師器・瓦器・陶器が出土している。85～99は土師器皿である。100は土釜、101・102は鍋、103・104は瓦器皿、105～108は瓦器椀である。109・110は青磁椀で、111・112は陶器の椀である。（豊田）

［註］

（１）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

（２）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良文化財研究所　1983年）

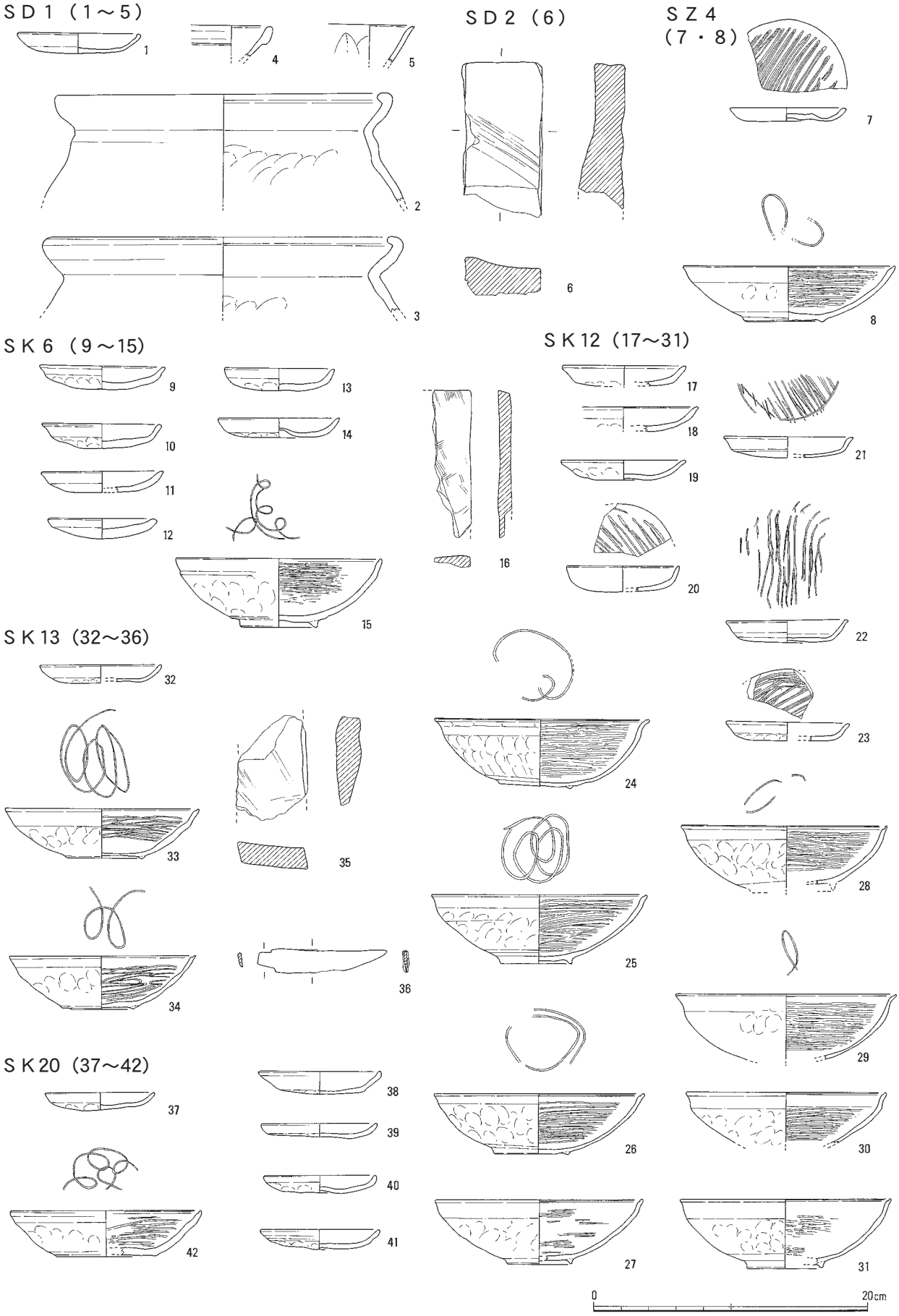
（３）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history Vol.1』三重歴史文化研究会　1990年）



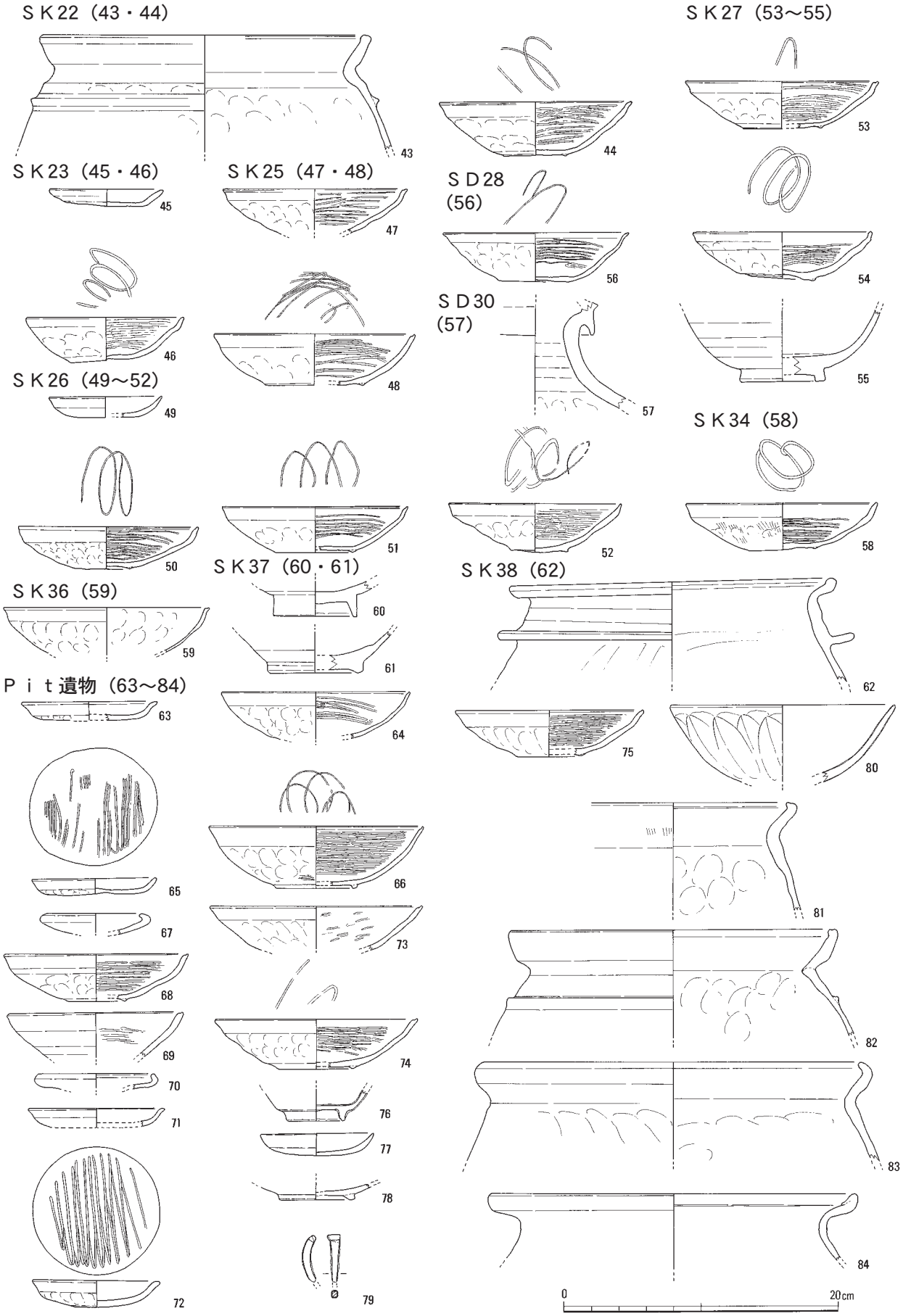
第８図　土坑ＳＫ12・16遺構平面図（１：40）

遺構番号	性　格	時　期	次数	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＤ１	溝	中世前期	1	ａ・ｂ９	南北に伸びる幅2.0m以上、深さ0.3mの区画溝
ＳＤ２	溝	近世	1	ａ・ｂ８	幅約2.4m、深さ0.2m。近世から現代の溝か
ＳＫ３	土坑	－	1	ａ５	径0.27m、深さ0.5mの円形の土坑
ＳＺ４	落ち込み	中世前期	1	ａ・ｂ　3～4	旧河川の堆積
ＳＫ５	土坑	中世前期	1	ａ４	幅約0.3m、深さ0.1m。埋土に炭化物多く含む
ＳＫ６	土坑	中世前期	1	ａ４	長径1.2m、深さ0.3m。埋土に炭化物多く含む
ＳＫ７	土坑	中世前期	1	ｂ４	径0.25m、深さ0.2mの土坑。埋土に焼土含む
ＳＫ８	土坑	中世前期	1	ａ３	径0.3m、深さ0.4mの土坑。
ＳＫ９	土坑	不明	1	ｂ４	径0.5m、深さ0.25mの土坑。埋土に炭化物含む
ＳＫ10	土坑	不明	1	ｂ4	楕円形の土坑
ＳＫ11	土坑	中世前期	1	ａ３	径0.5m深さ0.4mの土坑
ＳＫ12	土坑	中世前期	1	ａ・ｂ　４・５	楕円形の土坑。埋土に炭化物・川原石を多く含む。
ＳＫ13	土坑	中世前期	1	ｂ11	隅丸方形の土坑。鉄製品刀子出土
ＳＺ14	落ち込み	中世前期	1	ａ４～８	浅い落ちこみ
ＳＤ15	溝	－	1	ｂ10～14	耕作溝のため抹消
ＳＫ16	土坑	不明	1	ａ14	ＳＸ16から変更　長径2.2m、短径1.9m
ＳＤ17	溝	中世～近世	1	ａ・ｂ９	長さ３m、幅約0.05m浅い鋤溝
ＳＤ18	溝	－	1	ａ・ｂ９	南北に伸びる幅0.3mの区画溝
ＳＤ19	溝	－	1	ａ15・16	耕作溝のため抹消
ＳＫ20	土坑	中世前期	1	ｂ15	径1.6m、深さ0.45mの楕円形の土坑。
ＳＤ21	溝	－	1	ｂ10～14	耕作溝のため抹消
ＳＫ22	土坑	中世前期	1	ｂ15・16	長さ0.9m以上、幅約1.8m、深さ0.4m
ＳＫ23	土坑	中世前期	1	ａ17	径0.8m、深さ0.4mの土坑
ＳＫ24	土坑	中世前期	1	ｂ17	ＳＸ24から変更。長さ約1.0m、幅約２mの浅い落ち込み
ＳＫ25	土坑	中世前期	1	ｂ16	径1.2m、深さ0.7mの半円形の土坑。瓦器出土
ＳＫ26	土坑	中世前期	1	ｂ16	径1.3m、深さ0.9mの半円形の土坑。瓦器出土
ＳＫ27	土坑	中世前期	1	ｂ16	径1.4m、深さ0.65mの円形の土坑。埋土に川原石含む
ＳＫ28	土坑	中世前期	1	ｂ20	長径2.0m、深さ0.7mの楕円形の土坑。瓦器出土
ＳＤ29	溝	中世前期	1	ａ・ｂ25	長さ6.8m以上、幅約1.0mの素掘りの溝
ＳＤ30	溝	中世～近世	1	ａ・ｂ25	長さ5.0m以上、幅約0.8m。ＳＤ29より新しい
ＳＫ31	土坑	中世前期	1	ｂ17	長さ約1.6mの不整形の土坑
ＳＫ32	土坑	不明	1	ｂ21	長さ1.0m、幅約0.8mの楕円形の土坑
ＳＫ33	土坑	中世前期	1	ｂ21	長さ0.8m、幅約0.8mの楕円形の土坑
ＳＫ34	土坑	中世前期	1	ｂ22・23	径0.8m、深さ0.42mの楕円形の土坑
ＳＫ35	土坑	不明	1	ａ23	径0.8mの円形の土坑
ＳＫ36	土坑	中世前期	1	ａ４	長さ0.2m、幅約1.0mの楕円形の土坑
ＳＺ37	落ち込み	中世前期	1	ａ４	長さ1.8m、幅約0.8mの落ち込み
ＳＫ38	土坑	中世前期	1	ａ４	径0.7m、幅約1.0mの楕円形の土坑

第３表　宮ノ前遺跡遺構一覧表

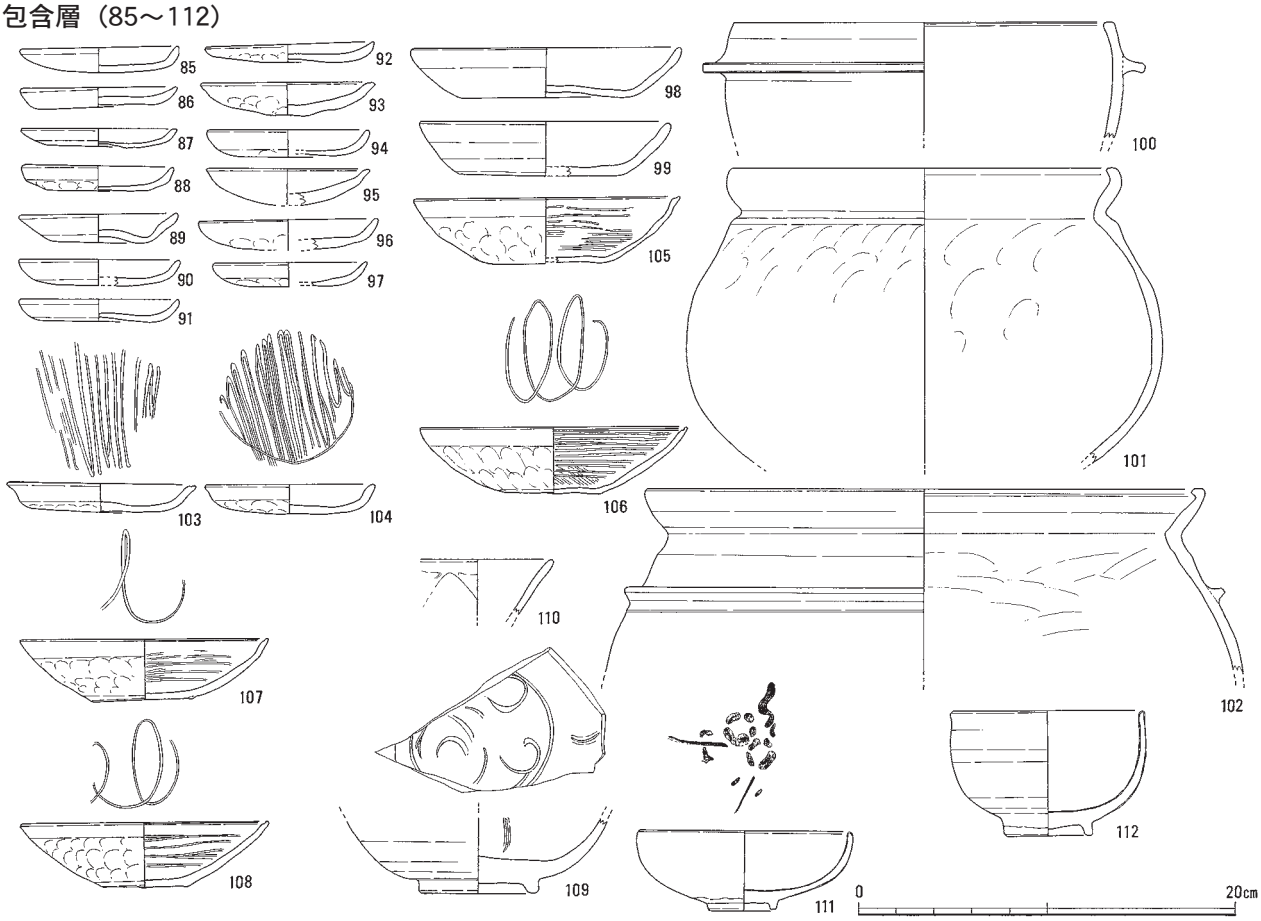


第９図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（１）（１：４）



第10図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（２）（１：４）

包含層（85～112）



第11図　宮ノ前遺跡出土遺物実測図（３）（１：４）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	13-1	土師器	皿	a9	SD1	9	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	淡黄2.5Y8/3	12/12	
2	13-3	土師器	鍋釜	a9	SD1	24.8	外:ナデ 内:何らかの原体による押圧→ヨコナデ	粗	にぶい橙5YR7/4	3/12	煤付着のため調整不明
3	13-4	土師器	鍋釜	a9	SD1	25.4	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ・押圧→ヨコナデ	やや粗	にぶい褐7.5YR6/3	2/12	
4	14-4	白磁	椀	a9	SD1	—	外:ロクロナデ(施釉) 内:ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白7.5Y8/1 (釉)灰白7.5Y7/2	1/12	
5	14-5	青磁	椀	a9	SD1	—	外:ロクロナデ→蓮弁文(施釉) 内:ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白7.5Y7/1 (釉)オリーブ灰10Y6/2	1/12	
6	13-2	石製品	砥石	a9	SD2	幅5.9 厚3.2	使用面は磨耗	—	—	破片	
7	14-2	瓦器	皿	a2	SZ4	8.4	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ？ 内:ミガキ→ヨコナデ	やや密	暗灰N3/	3/12	
8	14-3	瓦器	椀	b3	SZ4	15.5	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内:ヨコナデ→ミガキ	やや粗	灰N5/	3/12	
9	15-3	土師器	皿	a4	SK6	9.1	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/6	6/12	
10	3-2	土師器	皿	a4	SK6No.1	8.7～ 9.0	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	10/12	
11	15-1	土師器	皿	a4	SK6	8.9	外:ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	
12	15-5	土師器	皿	b5	SK12Ⅱ	8	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	密	褐灰10YR4/1	4/12	
13	4-3	瓦器	皿	a4	SK6	8.1	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→ミガキ？	密	暗灰N3/0	5/12	
14	3-1	土師器	皿	a4	SK6No.1	8.9	外:工具ナデ？・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	8/12	なんらかの原体使用か
15	4-2	瓦器	椀	a4	SK6	15	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	1/12	
16	7-6	石製品	砥石	b4	SK9	長さ10.8 幅2.8	使用面は磨耗	—	—	破片	
17	15-2	土師器	皿	a4	SK12Ⅳ	9	外:ナデ・オサエ→ヨコナデ 内:ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	6/12	
18	12-4	土師器	皿	a4	SK12Ⅳ	—	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙2.5YR6/6	残少量	
19	12-3	土師器	皿	a.b 4.5	SK12	9.1	外:オサエ→ヨコナデ 内:ヨコナデ	密	橙2.5YR6/6	口縁部完存	
20	11-5	瓦器	皿	b5	SK12Ⅱ	8.2	外:オサエ・ナデ 内:ミガキ	密	灰白2.5Y8/2	2/12	
21	15-7	瓦器	皿	a5	SK12Ⅲ	9.4	外:ナデ→ヨコナデ 内:ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	3/12	
22	15-6	瓦器	皿	b5	SK12Ⅱ	8.9	外:オサエ・ナデ→ヨコナデ 内:？→ヨコナデ	密	灰N4/	ほぼ完形	

第４表　宮ノ前遺跡遺物観察表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
23	11-3	瓦器	皿	b5	SK12Ⅱ	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	2/12	
24	11-2	瓦器	椀	a.b 4.5	SK12	15.2～15.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	ほぼ完存	
25	11-6	瓦器	椀	a5	SK12Ⅲ	15.8	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	9/12	
26	12-1	瓦器	椀	a.b 4.5	SK12	15.3	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	4/12	
27	11-4	瓦器	椀	a.b 4.5	SK12	15.2	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	4/12	
28	11-1	瓦器	椀	a.b 4.5	SK12	15	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰白5Y8/1	10/12	
29	16-1	瓦器	椀	a5	SK12Ⅲ	16	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	4/12	
30	12-2	瓦器	椀	a5	SK12Ⅲ	14.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	黒N2/0	4/12	
31	16-2	瓦器	椀	a4	SK12Ⅳ	15.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	4/12	
32	15-4	土師器	皿	b11	SK13	8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;オサエ→ヨコナデ	やや密	黄橙7.5YR7/8	4/12	
33	16-4	瓦器	椀	b11	SK13	14.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	ほぼ完形	
34	16-3	瓦器	椀	b11	SK13	13.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	完形	
35	16-6	石製品	砥石	b11	SK13	幅5.0 厚さ1.0	使用により磨耗	―	―	破片	重量77.86g
36	16-5	鉄製品	刀子	b11	SK13	長さ9.5 幅1.5	―	―	―	完形	
37	3-5	土師器	皿	b15	SK20	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	6/12	
38	3-7	土師器	皿	b15	SK20	8.5～9.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	口縁部ほぼ完存	
39	3-4	土師器	皿	b15	SK20	8.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	9/12	
40	3-3	土師器	皿	b15	SK20	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	口縁部完存	
41	3-6	土師器	皿	b15	SK20	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	9/12	
42	4-4	瓦器	椀	b15	SK20	14	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	
43	4-1	土師器	羽釜	b15	SK22	24.1	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	3/12	
44	4-5	瓦器	椀	b15	SK22	14	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	2/12	
45	3-8	土師器	皿	b17	SK23	8.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	6/12	
46	5-4	瓦器	椀	b17	SK23	11.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	5/12	
47	4-6	瓦器	椀	b16	SK25	13.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白7.5YR8/2	5/12	
48	5-3	瓦器	椀	b16	SK25	14.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	
49	2-5	土師器	皿	b16	SK26	8.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	3/12	
50	2-2	瓦器	椀	b16	SK26	13	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙7.5Y8/3	完形	
51	2-1	瓦器	椀	b16	SK26	13.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	3/12	
52	2-4	瓦器	椀	b16	SK26	12.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	口縁部完形	
53	5-2	瓦器	椀	b16	SK27	14	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	4/12	
54	5-1	瓦器	椀	b16	SK27	12.6～13.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N8/0・7/0	口縁部ほぼ完存	
55	6-3	青磁	椀	b16	SK27	(高台)6.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白オリーブ5Y7/1(釉)灰オリーブ5Y6/2	4/12	
56	2-3	瓦器	椀	b20	SK28	13.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/・灰白2.5Y8/1	9/12	
57	14-1	陶器	甕	b25	SD30	―	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや密	にぶい赤褐7.5R4/3	1/12	信楽
58	1-2	瓦器	椀	b23	SK34	16.9	外;ハケメ・オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ? 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	6/12	
59	1-3	瓦器	椀	a4	SK36	15	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	いぶしなし
60	6-1	白磁	椀	a4	SZ37	(高台)6.0	外;ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/2(釉)灰白7.5Y7/2	3/12	
61	6-2	白磁	椀	a4	SZ37	(高台)7.0	外;ロクロケズリ→削り出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)灰白5Y7/2	4/12	
62	1-1	土師器	羽釜	a4	SK38	20.7	外;ケズリ?→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙2.5YR6/6	9/12	外面に煤付着
63	10-5	土師器	皿	a3	pit2	9.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	3/12	
64	9-3	瓦器	椀	b10	pit12	13.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	3/12	
65	10-3	瓦器	皿	b3	pit3	9.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	口縁部完存	
66	9-1	瓦器	椀	b3	pit3	15.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	4/12	
67	7-4	土師器	皿	b11	pit6	8	外;ナデ 内;ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	2/12	

第５表　宮ノ前遺跡遺物観察表（２）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
68	7-1	瓦器	椀	b11	pit6	13.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N6/	2/12	
69	10-4	土師器	椀	a12	pit8	12.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白5Y8/1	3/12	
70	10-6	土師器	皿	a11	pit2	8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	3/12	
71	8-5	土師器	皿	a13	pit5	10	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	
72	10-2	瓦器	皿	a13	pit11	9.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	口縁部完存	
73	7-3	瓦器	椀	b11	pit13	15.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→？	密	灰白2.5Y8/1	2/12	いぶし前の瓦器
74	9-4	瓦器	椀	a12	pit1	14.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白5Y8/1	4/12	
75	9-2	瓦器	椀	a16	pit1	13.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ？ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	4/12	外面に布か何かでおさえたあとあり
76	6-6	青磁	椀	a14	pit6	（高台）4.2	外;ロクロナデ→削り出し高台（施釉） 内;ロクロナデ（施釉）	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)明緑灰10GY7/1	9/12	
77	8-4	土師器	皿	a14	pit8	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	口縁部完存	
78	7-2	瓦器	椀	b14	pit柱痕	（高台）5.5	摩滅の為、調整不明	密	灰N4/	4/12	瓦器台部マメツの為調整不明
79	7-5	鉄製品	釘	b15	pit柱痕	長さ3.4 幅0.5	―	―	―	破片	
80	10-1	青磁	椀	a16	pit1	16.4	外;ロクロ使用→蓮弁文 内;ロクロ使用	密	(素地)灰白2.5Y8/1(釉)灰オリーブ7.5Y5/2	3/12	
81	9-5	土師器	羽釜	b9	pit1	―	外;ハケメ？→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	4/12	
82	8-1	土師器	羽釜	b9	pit1	24	外;ナデ？→ヨコナデ？→貼付ナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ？	やや密	灰褐7.5YR5/2	4/12	大和に多い羽釜・外面に煤付着
83	8-2	土師器	鍋	b9	pit1	29	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	灰白10YR8/2	4/12	外面に煤付着
84	8-3	土師器	鍋	b9	pit3	25	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい褐7.5YR6/3	3/12	
85	21-1	土師器	皿	a11	包含層	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	4/12	
86	21-2	土師器	皿	a11	包含層	8.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	9/12	
87	21-3	土師器	皿	b15	包含層	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	6/12	
88	21-4	土師器	皿	a13	包含層	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙2.5YR6/6	4/12	
89	21-5	土師器	皿	a・b22	包含層	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	6/12	
90	21-6	土師器	皿	a11	包含層	8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/2	3/12	
91	21-7	土師器	皿	a3・4	包含層	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	4/12	
92	17-2	土師器	皿	b17	包含層	8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	9/12	
93	17-3	土師器	皿	a13	包含層	9.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	5/12	
94	17-4	土師器	皿	b16	包含層	8.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	
95	18-3	土師器	皿	a17	包含層	8.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	3/12	
96	18-4	土師器	皿	b10	包含層	9.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	
97	18-5	土師器	皿	b15	包含層	8.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	3/12	
98	20-3	土師器	皿	b4	包含層	14.2	外;ナデ？→ヨコナデ？ 内;ナデ？→ヨコナデ？	やや密	浅黄橙10YR8/3	4/12	
99	21-8	土師器	皿	b-4	包含層	13.3	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	口縁部ほぼ完存	
100	18-2	土師器	羽釜	b16	包含層	20	外;ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N5/	3/12	
101	17-1	土師器	鍋	b13	包含層	20.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙2.5YR6/3	4/12	外面に煤大量付着の為、調整不明瞭
102	18-1	土師器	羽釜	-	包含層	29.5	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ケズリ？工具ナデ→ヨコナデ	やや密	黒褐10YR3/2	2/12	
103	21-9	瓦器	皿	a3・4	包含層	10	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	9/12	
104	20-2	瓦器	皿	b5	包含層	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	4/12	
105	20-1	瓦器	椀	b11	包含層	14	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	4/12	
106	19-1	瓦器	椀	a9	包含層	14.1	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	9/12	
107	19-3	瓦器	椀	b12	包含層	13.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N7/	4/12	
108	19-2	瓦器	椀	a8	包含層	13.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/	5/12	
109	6-4	青磁	椀	不明	包含層	（高台）6.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台（施釉） 内;ロクロナデ（施釉）	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)オリーブ灰10Y6/2	8/12	
110	6-5	青磁	椀	a10	包含層	―	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白10Y7/1(釉)オリーブ灰5GY6/1	1/12	
111	20-4	磁器	椀	b3	包含層	13.3	外;ロクロ使用(施釉) 内;ロクロ使用(施釉)	やや密	(釉)灰白5Y8/2	11/12	
112	20-5	磁器	椀	b３	包含層	10.2	外;ロクロ使用(施釉) 内;ロクロ使用(施釉)	やや密	(釉)灰白5Y7/2	6/12	

第６表　宮ノ前遺跡遺物観察表（３）

Ⅳ　宮ノ前遺跡（第２次）

１．１地区

第１次調査区の南隣と、東隣部分（農林1,100㎡＋土木913㎡）の調査を行った。現況は水田である。

基本層序（第５図）

基本的には流路の堆積の繰り返しにより形成されたと考えられる。表土は１次調査時の埋め戻しのため撹乱を受けており、西側ではその下に灰白色土がみられ、その下に砂礫層・細砂層と堆積する。遺構面は褐灰色の砂礫層であったが、層の上面よりやや下げたレベルで検出を行っている。地形的には現集落のある東にいくほど高くなり、南にいくほど少しずつ低くなる。地山は細砂層である。

遺構

溝ＳＤ319　Ｙ２－１グリットで確認した遺構である。幅2.3m・深さ0.3mで、中世の区画溝であろう。

溝ＳＤ321　Ｘ２－１グリットで確認した遺構である。幅２m、深さ45㎝の溝でＳＤ322と直交する石組の溝。３度ほど掘りこみがある。遺物は土師器皿・鍋、瓦質土器・信楽産の壺などが出土しており15世紀後半頃のものであろう。

溝ＳＤ325　幅1.2m、深さ70㎝の溝である。ＳＫ329に切られている。出土遺物が微量のため詳しい時期は不明であるが、ＳＤ319・321といった溝と同様の方向であることから考えて集落を区画溝する溝と考えられる。

井戸ＳＥ326（第13図）　Ｓ２－２グリットで確認した石組み井戸である。井戸は径３mで、底は検出面から深さ1.7mである。石組みは拳大から人頭大の川原石の乱石積みである。出土遺物は少ないが擂鉢片が出土しており、埋没時期は中世後期であろう。

井戸ＳＥ335（第14図）　Ｎ２－２グリットで出土した石組みの井戸である。井戸は径1.2mで人頭大の石が多数ほうり込まれて埋められている。その中に五輪塔の地輪もあった。底から土師器皿が出土しているが、井筒の痕跡などは確認できなかった。出土遺物より埋没時期は15世紀後半頃とみられる。

土坑ＳＫ331（第16図）　Ｒ２－２グリットで確認した遺構である。幅50㎝、長さ80㎝以上の楕円形の土坑で深さは２㎝と非常に浅い土坑である。土師器皿（47～52）が集中して出土している。

溝ＳＤ344　Ｉ２－２グリットで確認した遺構である。0.6m、深さ25㎝でＳＤ345に平行する細い溝である。

溝ＳＤ345　Ｊ２－２グリットで確認した遺構である。ＳＥ347に切られる。埋土から擂鉢が出土しており、15世紀半ば～後半頃とみられる。他の溝と平行に伸びており、集落の区画溝であろう。

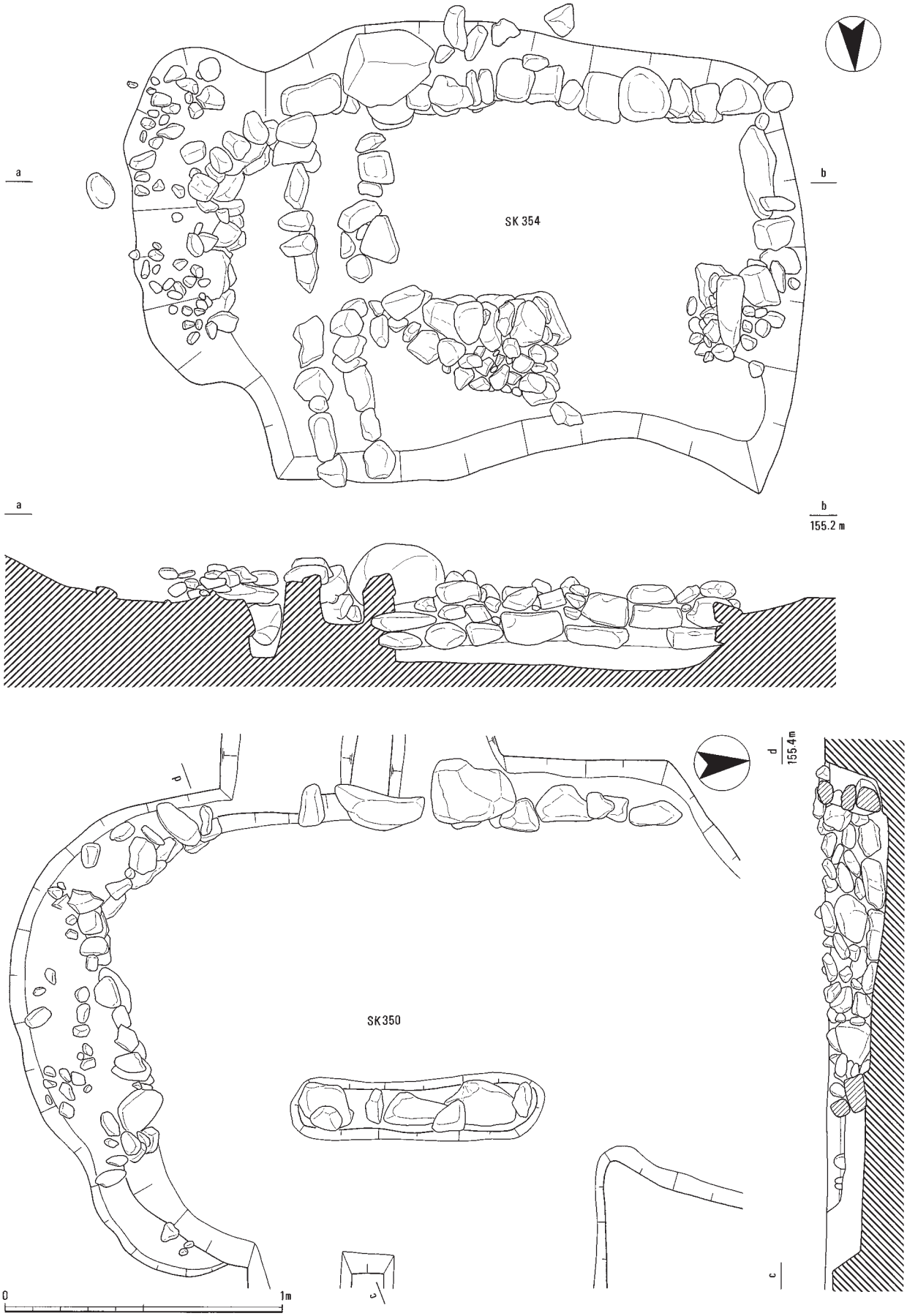
井戸ＳＥ347（第13図）　Ｊ２－２グリットで確認した石組み井戸である。井戸は径1.8mで、検出面から深さ1.8mである。石組は、拳大から人頭大の川原石の乱石積みである。15世紀後半～16世紀前半に廃絶したものだろう。

土坑ＳＫ350（第12図）　Ｋ２－３グリットで出土した石組みの土坑である。1.9m×2.7m以上の楕円形を呈し、深さは最大0.45mである。石組は、拳大から人頭大の川原石を用いて並べられている。土坑の性格は不明である。出土遺物はさほど多くないが、擂鉢片などが出土しており、15世紀後半～16世紀前半頃の遺構である。

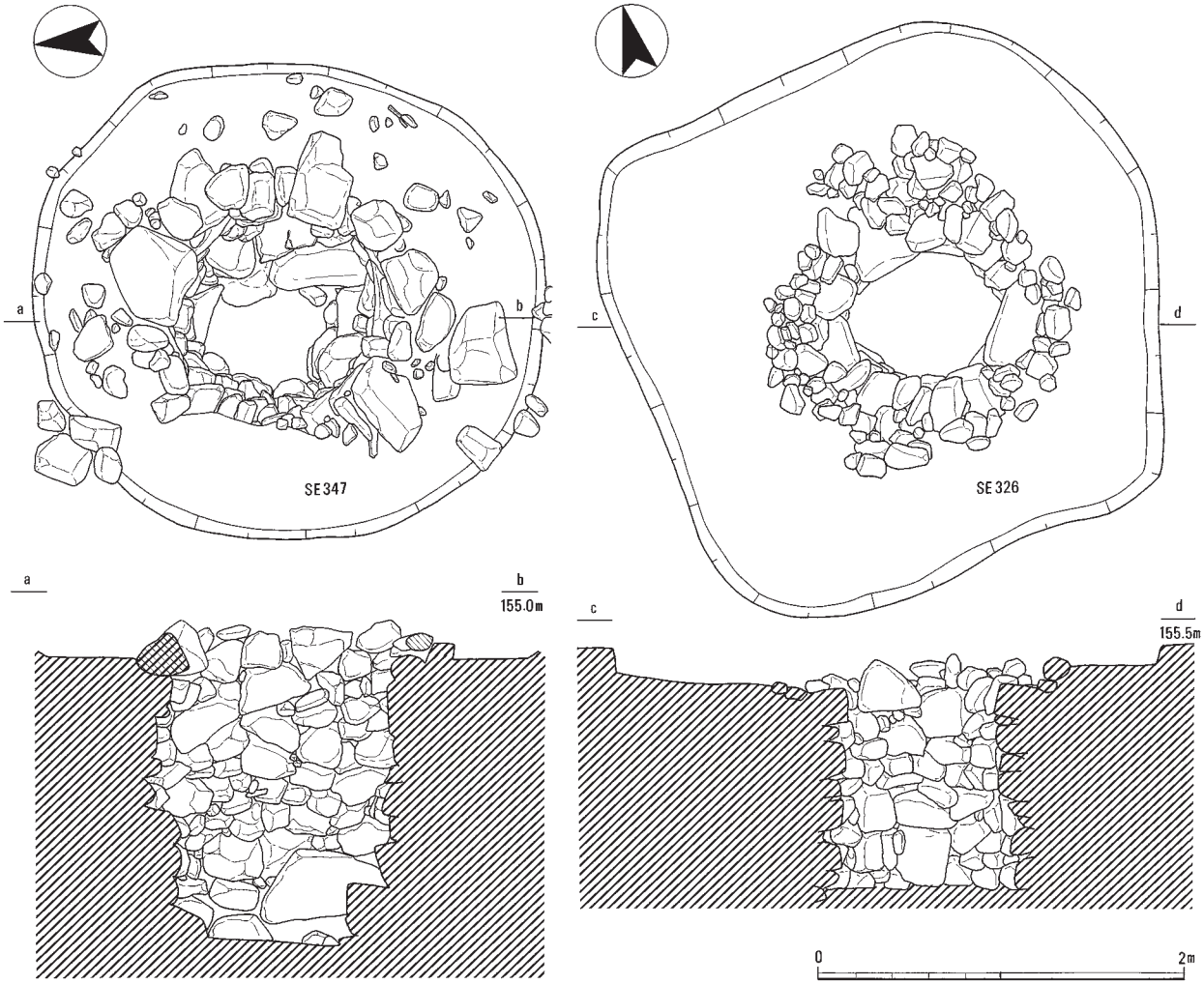
土坑ＳＫ352　Ｆ２－３グリットで出土した土坑である。2.2m×1.8m以上の方形を呈し、深さは最大18㎝である。埋土中から瓦器椀がまとまって出土している。

土坑ＳＫ354（第12図）　Ｉ２－４グリットで確認した遺構である。2.2m以上×６m以上の方形の石組み土坑である。石組は、拳大から人頭大の川原石を用いて２～３段に並べられている。深さは70㎝ほどで最低２回は小さく造り直されており、その規模は0.7m×1.4mである。

溝ＳＤ322　Ｗ２－２グリットで確認された遺構である。東西方向に伸びる幅1.4m、深さ0.5mの溝である。溝からは信楽焼の陶器をはじめとして多くの土器がまとまって出土した。18世紀前半の小杉椀が古く、18世紀後半以降の陶器も出土している。信楽の擂鉢・茶椀（半球椀・平椀など）に混じって常滑産の陶器（水差・菊皿）・唐津焼の皿なども出土



第12図　土坑ＳＫ354・350遺構平面・立面図（１：20）



第13図　ＳＥ347・326平面・断面図（１：40）

している。当該期の土器の様相を知りえる良好な資料である。

掘立柱建物ＳＢ355（第15図）　調査区中央部で確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（5.0m）×南北１間以上（1.8m以上）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ４°Ｅを測る。

柱間間隔は南北が北から1.8m以上、東西が2.5m＋2.4m等間である。梁行２間×桁行３間の掘立柱建物である。

掘立柱建物ＳＢ356（第15図）　ＳＢ355と同様の調査区中央部で確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（4.6m）×南北２間（4.2m以上）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ２°Ｅを測る。柱間間隔は南北が北から2.2m＋2.3m、東西が2.1m等間で、梁行２間×桁行２間の掘立柱建物である。

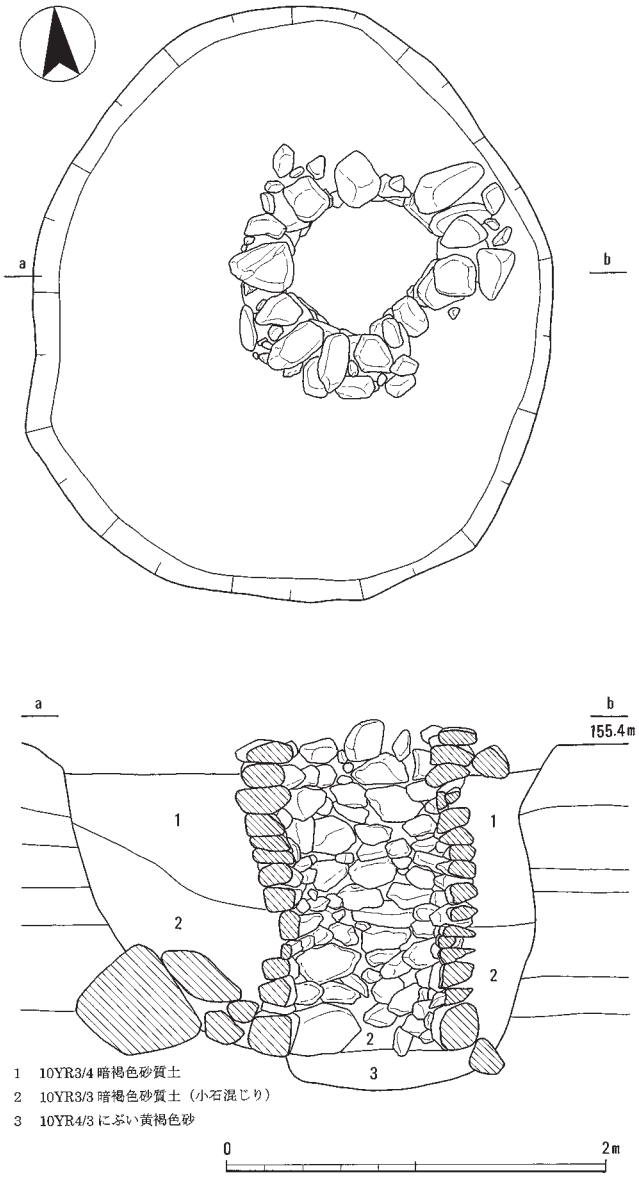
掘立柱建物ＳＢ357（第15図）　調査区中央部で確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（4.3m）以上×南北２間（3.2m以上）の側柱建物と思われ、棟方向はＮ２°Ｅを測る。

柱間間隔は南北が北から2.0m＋2.2m、東西が2.2m等間である。梁行２間×桁行３間の掘立柱建物である。

Ｇ２－２グリットＰｉｔ３（第16図）　径・深さとも40㎝ほどの円形のピットで、瓦器椀（23）が出土している。

遺物（第17図～第22図）

土坑ＳＫ352（１～21）　土師器、瓦器がある。１～３は土師皿である。４～５は瓦器皿である。口径は９㎝で口縁部内面のミガキは確認できないが、内底面には暗文が施される。６～21は瓦器椀でまと



第14図　井戸ＳＥ335平面・断面図（１：40）

まって出土している。外面の調整は、わずかにヘラミガキを残すものと施さないものがある。口径は15～15.5cmで器高は4.5～５cm前後である。内面みこみの暗文は、連結輪状を残すものと崩れてしまっているものがある。以上の要素から法量的にはやや古い要素を残すものの、外面のミガキが一部にわずかながら残るが、消滅しているものも含まれることから、福田典明氏による編年[1]の５期に相当する資料であろう。

土坑ＳＫ359（22）　土師器が出土している。22は土釜で、体部には鍔が付き、「く」の字状に曲がる短い口縁部がつく。菅原氏による分類[2]の大和Ｂ型に相当する。口縁部端部は内側に丸く肥厚する。

Ｐｉｔ遺物（23）　23は瓦器椀である。口径は12.5cm前後で器高は3.2cmと低平・矮小化が進んだ形態を呈し、口縁部端部の沈線も消失しており、高台もわずかに残るのみである。福田氏の編年の８期に相当し、当遺跡での最も新しい段階の瓦器椀である。

包含層（24～26）　土師器・瓦器が出土している。24は土師皿、25は瓦器皿で口径は8.7cm、器高1.85cmである。底部内面のほか口縁部内面にもヘラミガキを施す。26は瓦器椀である。ともに外面のミガキは施されず指圧痕がみられる。内面みこみの連結輪状文は退化している。

溝ＳＤ351（28・29）　土師器皿が出土している。28は口径8.9cm、29は口径12.0cm、器高2.6cmで口縁部はヨコナデが施される。

土坑ＳＫ354（30～32）　土師器皿（30）、信楽産の擂鉢（31・32）が出土している。31は口縁部の破片で、擂目が４条確認できる。32は底部の破片である。

溝ＳＤ345（33）　信楽産の擂鉢が出土している。口径は31.0cmで、内面の擂目は６条確認できる。長野４号窯産[3]か。

井戸ＳＥ347（34～36）　土師器・陶器が出土している。34・35は南伊勢系の土師器鍋で伊藤裕偉氏の編年[4]の第４段階ｃ型式に相当する。36は陶器の壺、もしくは甕の底部で外面には工具によって器壁をかきとったようなナデが確認できる。

土坑ＳＫ350（37～41）　土師器、陶器が出土している。38は信楽産の擂鉢で、擂目は４本である。40は信楽産の甕である。口縁部のみの破片で、口径は約21cmである。41は青磁椀の底部の破片である。

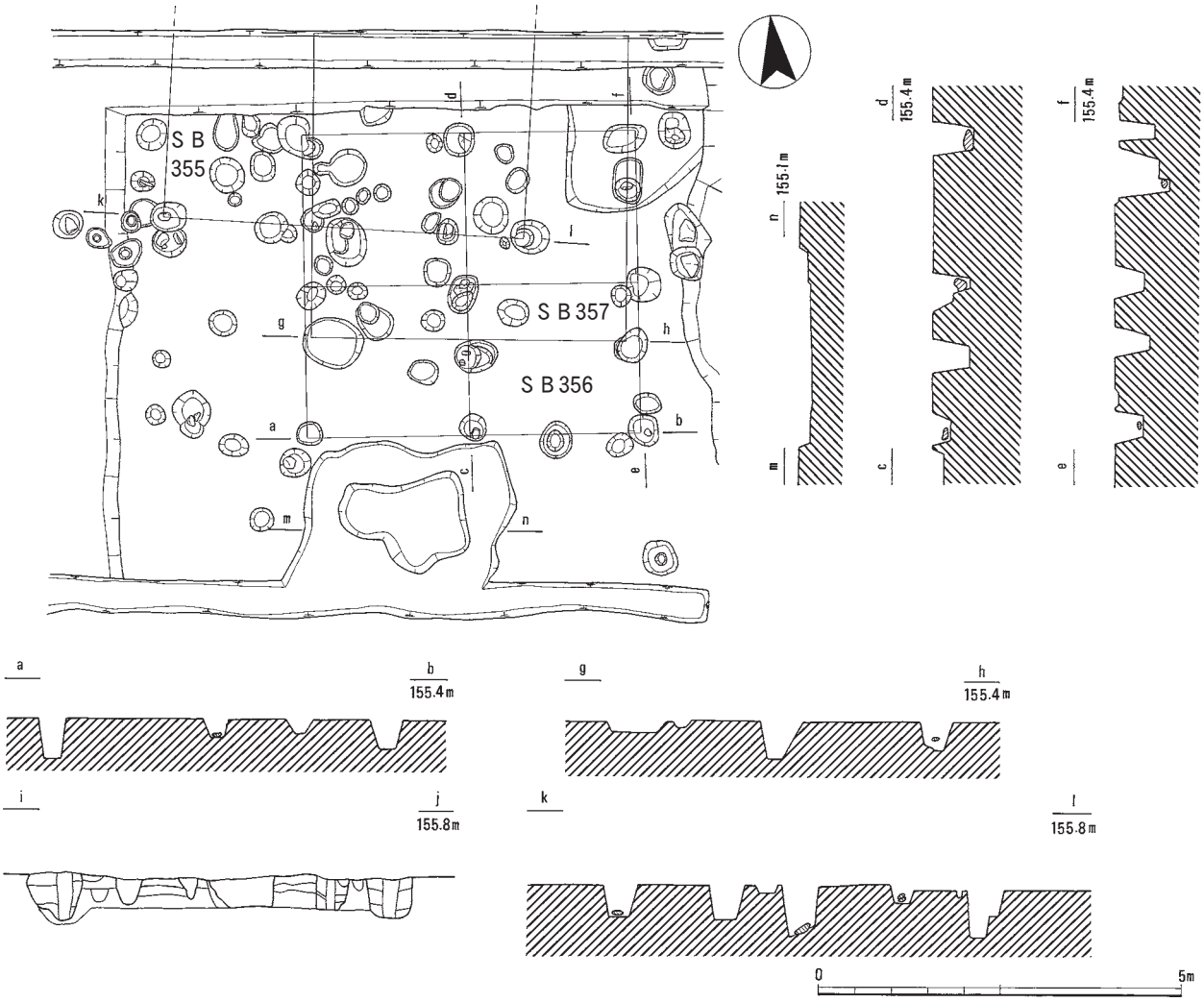
井戸ＳＥ335（42～46）　土師器・陶器が出土している。42～44は土師器皿である。45は南伊勢系の土師器鍋で伊藤裕偉氏の編年の第４段階ｆ型式に相当する。46は信楽産の擂鉢である。口径29.3cm、器高は12.8cmで、擂目は４条で１単位である。長野３号窯産で、15世紀後半と考えられる。

土坑ＳＫ331（47～51）　土師器の皿が出土している。いずれの個体も口径10cm前後で外面にオサエがみられる。内面はナデによる調整である。

井戸ＳＥ326（53・54）　53は陶器の甕口縁部の破片である。信楽産か。

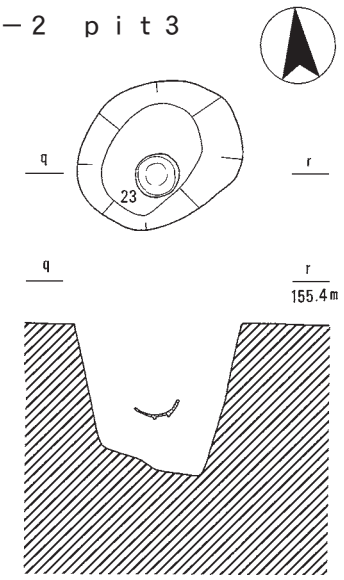
土坑ＳＫ323（55）　軒丸瓦の破片である。巴文

ＳＢ355～357

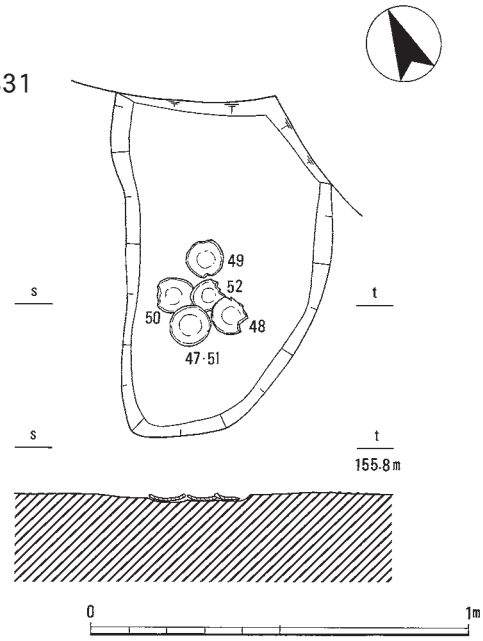


第15図　掘立柱建物ＳＢ355～357平面・断面図（１：100）

Ｇ２－２　ｐｉｔ３



ＳＫ331



第16図　ピット・ＳＫ331土器出土状況図（１：20）

である。

溝ＳＤ321（56～65）　土師器・陶器・石製品が出土している。56・57は土師器皿、58は南伊勢系の土師器鍋で伊藤編年の第４段階ａ型式に相当する。59～61は瓦質土器の火鉢である。62は軒平瓦、63は壺で、おそらく信楽産であろう。64は硯で材質は結晶片岩である。

溝ＳＤ325（67）　67は信楽産の甕の口縁部である。

土坑ＳＫ353（68）　68は土師器皿である。

包含層（69～72）　土師器が出土している。69・70は土師器皿で、71は口径11.2cmの小形の羽釜である。72は信楽産の壺の口縁部である。

溝ＳＤ322（73～131）　陶器が多く出土している。73～77は半球椀である。いずれも信楽産である。78は勅旨産のものと考えられる。97～101は陶器の小杉椀である。いずれも口径11cm程で小型品である。84は信楽産か。87は擂目の間隔が広く、15世紀後半頃か。88は暗赤褐色を呈した椀で瀬戸産か。92は平椀で信楽産である。104は信楽産の皿である。内面には４条の櫛描きの文様が施される。18世紀半ば頃であろう。105は陶器の菊皿である。瀬戸産のものか。106は陶器の大皿である。唐津焼。107は信楽産の鉢である。底部は回転ケズリを施した後、小さな玉状の足を貼りつける。109は陶器の皿である。瀬戸産か。113は磁器の小杯で、仏具であろうか。114は陶器の鉢である。底部には回転糸切り痕が確認できる。116は壺で口縁部は受口状を呈する。信楽産のものと考えられる。

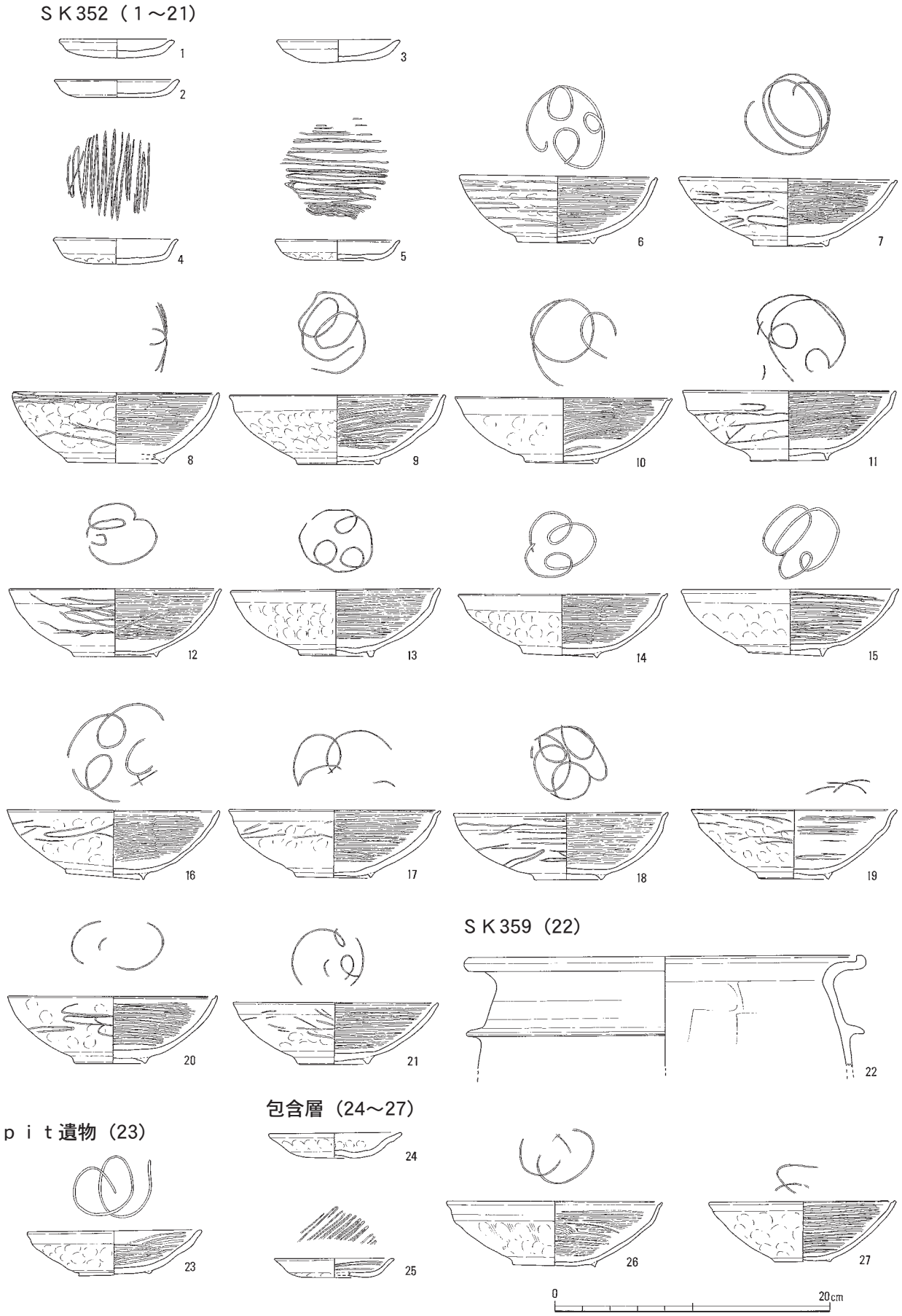
121・122は信楽産の擂鉢である。121は口径34.8cmで、口縁部の形態は縁体が退化した凹線が付される。内面の擂目は１単位内の擂目は５本で、全面に施される。122は、口径36.4cm、器高14.3cm、口縁端部が受け口状を呈し、内面の擂目は１単位内の擂目は５本で、全体に擂目を施す。125は土師質の火舎で、口径17cm、器高11.7cm、口縁部付近に３方向に径６mmほどの小孔が２ないしは４箇所穿孔されている。高台部にも４箇所に穿孔が施されている。外面には煤が付着している。126・127は陶器の大甕、129～130は土師器皿、131は南伊勢系の鍋である。これらの資料は18世紀中葉頃の良好な一括資料といえよう。

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＤ３０１	―	―	1	Ｐ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０２	―	―	1	Ｋ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＫ３０３	土坑	中世前期	1	Ｏ１～３	石組or敷きか？1:20平面図に石あり。
ＳＤ３０４	―	―	1	Ｌ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０５	―	―	1	Ｋ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０６	―	―	1	Ｎ１～４	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０７	―	―	1	Ｍ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０８	―	―	1	Ｐ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３０９	―	―	1	Ｎ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１０	―	―	1	Ｍ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１１	―	―	1	Ｐ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１２	―	―	1	Ｐ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１３	溝	中世？	1	Ｘ２～１	第１次の調査区の溝とつながる可能性。土師器・須恵器
ＳＤ３１４	―	―	1	Ｔ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１５	―	―	1	Ｖ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１６	―	―	1	Ｖ１～３	近現代の耕作溝のため抹消
ＳＤ３１７	溝	中世	1	Ｆ２～３	浅い溝、SK354に先行か？　土師器片出土

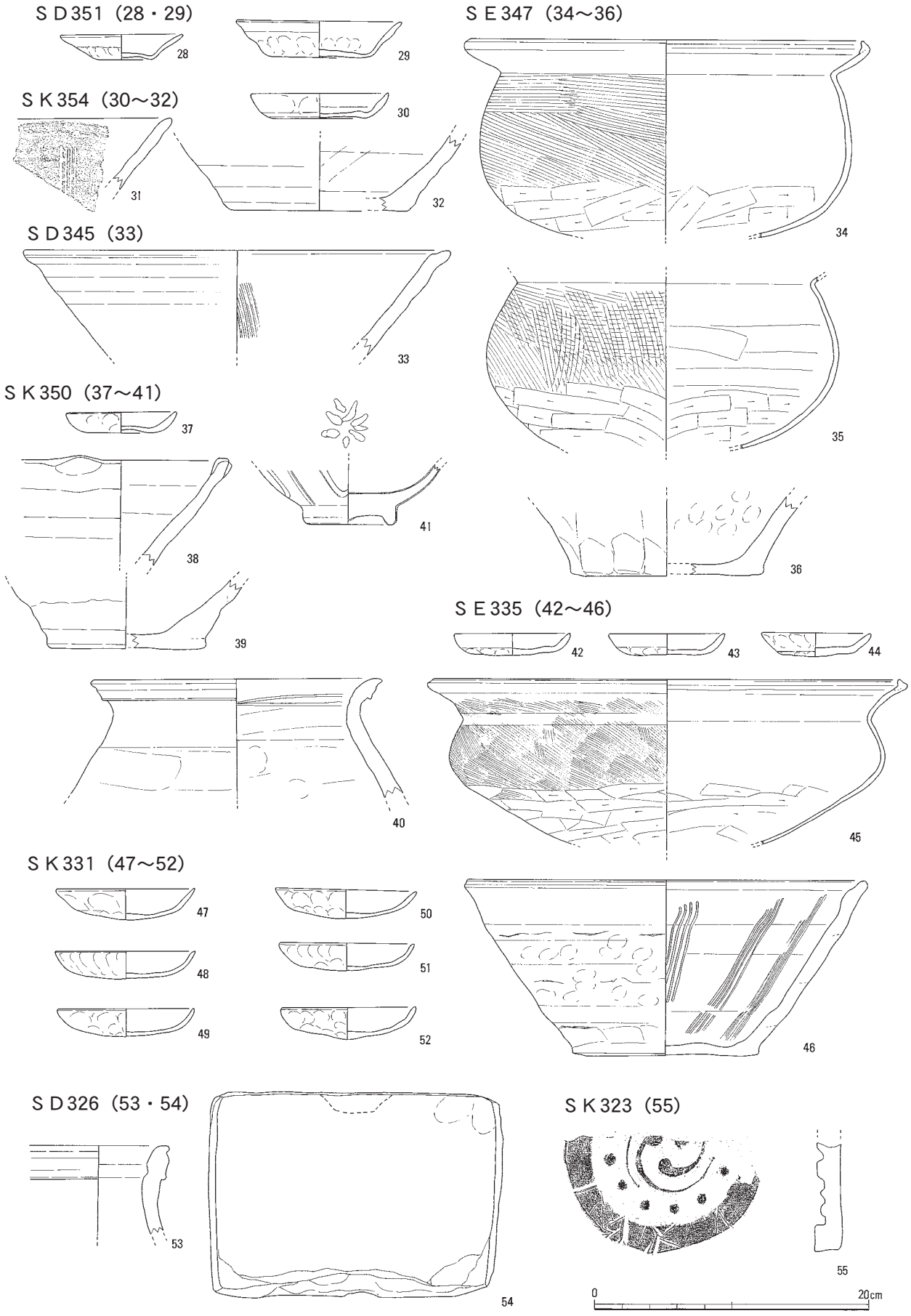
第７表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺構一覧表（１）

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＤ３１８	―	―	1	Ｍ１～Ｚ２－３	撹乱（現代溝）
ＳＤ３１９	溝	中世	1	Ｙ２－１	幅2.3m、深さ0.3m、中世の区画溝か？
ＳＫ３２０	土坑	中世～近世	1	Ｙ２－２	瓦片出土
ＳＤ３２１	溝	中世	1	Ｘ２－１	SD322と直交する溝。３回ほど掘り込みがなされる。中世の屋敷地を区画する溝か？石組・底を石敷きとしていた可能性もあり。幅２m、深さ0.7m。
ＳＤ３２２	溝	近世	1	Ｗ２－２	近世の遺物出土の溝東西方向の石組。 信楽焼の陶器がまとまって出土した。18世紀前半の小杉椀が古く、18世紀後半以降の陶器も出土。
ＳＫ３２３	土坑	近世	1	Ｚ２－２	陶器片
ＳＫ３２４	土坑	中世？	1	Ｚ２－２	土師器片
ＳＤ３２５	溝	中世	1	Ｒ２－２	中世の区画溝か。幅1.2m、深さ0.7m。
ＳＥ３２６	井戸	中世	1	Ｓ２－２	石組井戸　径３m、深さ1.7m。
ＳＫ３２７	土坑	―	1	Ｕ２－２	遺物ほとんどなし。
ＳＫ３２８	土坑	近世？	1	Ｒ２－２	瓦片
ＳＫ３２９	土坑	中世	1	Ｒ２－２	擂鉢片・南伊勢系鍋片出土
ＳＫ３３０	土坑	―	1	Ｑ２－２	遺物ほとんどなし。
ＳＫ３３１	土坑	中世前期	1	Ｒ２－２	土師器皿出土
ＳＫ３３２	土坑	近世	1	Ｓ２－１	陶器片
ＳＫ３３３	土坑	中世後期～近世	1	Ｑ２－１	遺物ほとんどなし。
ＳＫ３３４	土坑	中世前期	1	Ｐ２－３	土師器片
ＳＥ３３５	井戸	中世後期	1	Ｎ２－２	石組井戸。径1.2m。
ＳＫ３３６	土坑	中世後期～近世	1	Ｑ２－４	土坑か
ＳＫ３３７	土坑	中世後期	1	Ｗ２－１	SD321を壊す土坑。瓦質土器片あり
ＳＫ３３８	土坑	古代？	1	Ｗ２－１	緑釉陶器片あり
ＳＤ３３９	溝	不明	1	Ｒ２－１	石が並ぶ溝。SK346に酷似。
ＳＫ３４０	土坑	中世前期	1	Ｑ２－１	土師器片
ＳＫ３４１	土坑	中世前期	1	Ｍ２－２	土師器・瓦器片出土
ＳＫ３４２	土坑	近世か	1	Ｋ２－２	土師器片・陶器片
ＳＫ３４３	土坑	近世	1	Ｋ２－２	瓦片
ＳＤ３４４	溝	中世後期～近世	1	Ｉ２－２	深さ0.25mの浅い溝。区画溝にしては小規模。SD345と平行。
ＳＤ３４５	溝	中世	1	Ｊ２－２	中世の区画溝か　擂鉢・土師器皿出土
ＳＫ３４６	土坑	中世後期	1	Ｈ２－２	石が並ぶ溝。SK339に酷似。
ＳＥ３４７	井戸	中世後期	1	Ｊ２－２	石組井戸。溝に掘形が半分切られている。
ＳＤ３４８	溝	中世前期～近世	1	Ｇ２－２	中世の流路か
ＳＫ３４９	土坑	中世～近世	1	Ｇ２－１	土坑。石組みあり。擂鉢片出土
ＳＫ３５０	土坑	中世後期	1	Ｋ２－３	石組遺構。擂鉢片あり
ＳＤ３５１	溝	中世後期	1	Ｋ２－２	中世の区画溝か　深さ非常に浅い。
ＳＫ３５２	土坑	中世前期	1	Ｆ２－３	中世の土坑。瓦器椀がまとまって出土。
ＳＫ３５３	土坑	不明	1	Ｑ２－５～６	土坑か
ＳＫ３５４	土坑	中世後期	1	Ｉ２－４	石組遺構。最低2回は小さく造り直されている。
ＳＢ３５５	掘立柱建物	中世前期	1	Ｆ２－１	東西２間（5.0m）×南北１間（1.8m以上）　N4°E
ＳＢ３５６	掘立柱建物	中世前期	1	Ｆ２－２	２間×２間　東西2.1m等間　N2°E
ＳＢ３５７	掘立柱建物	中世前期	1	Ｆ２－２	東西２間以上（4.3m以上）×南北２間以上（3.2m以上）N2°E

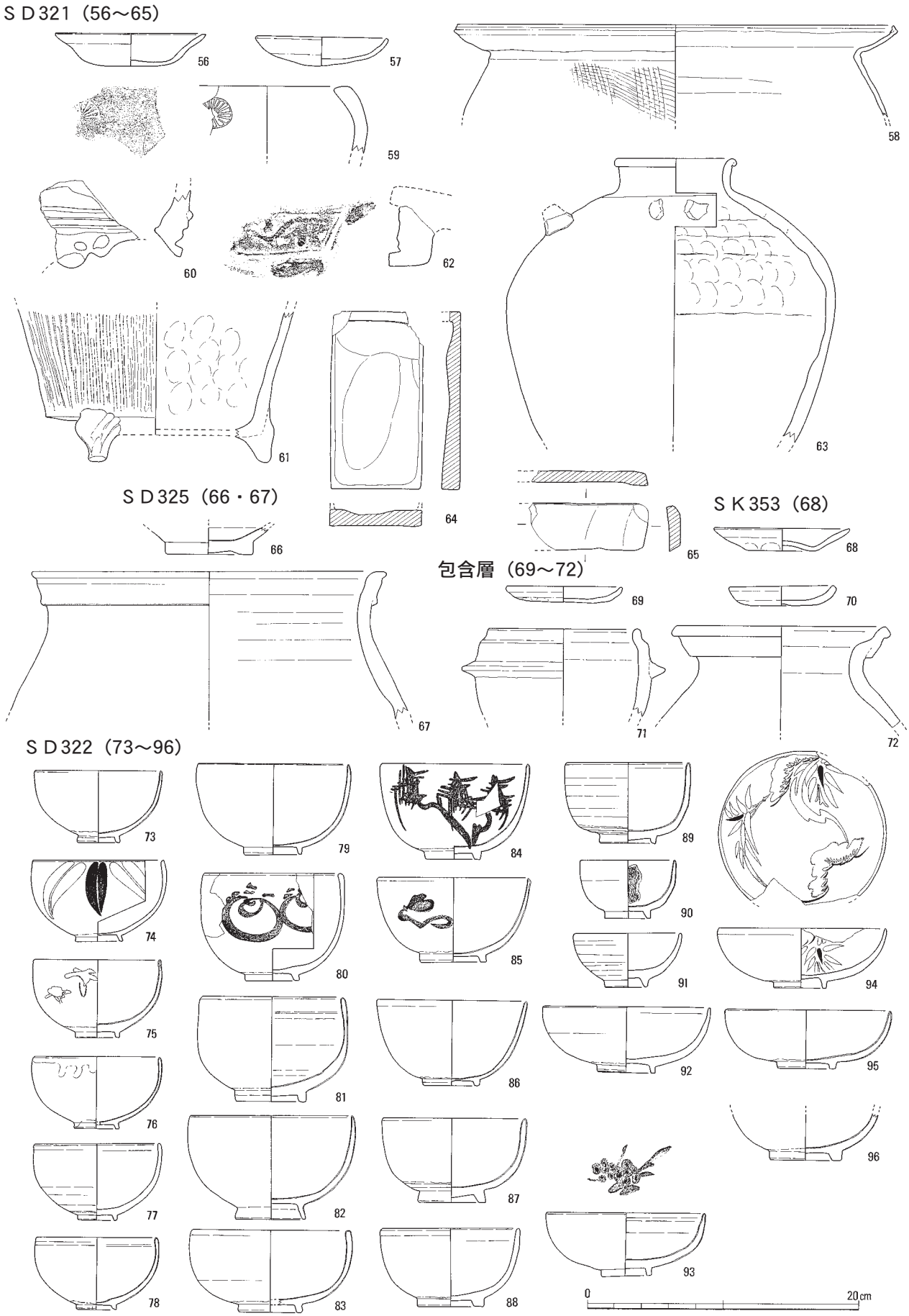
第８表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺構一覧表（２）



第17図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（１）（１：４）

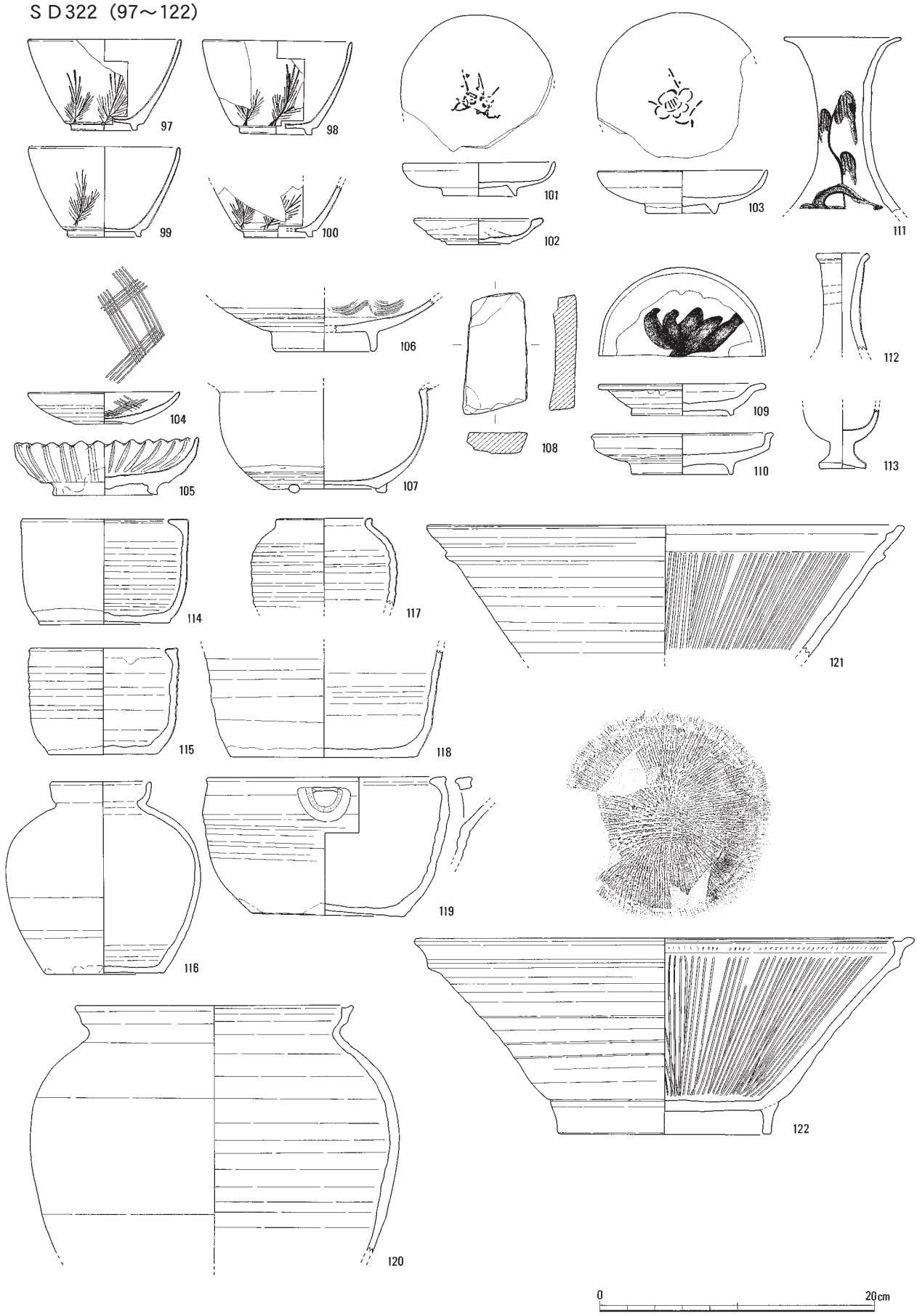


第18図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（２）（１：４）



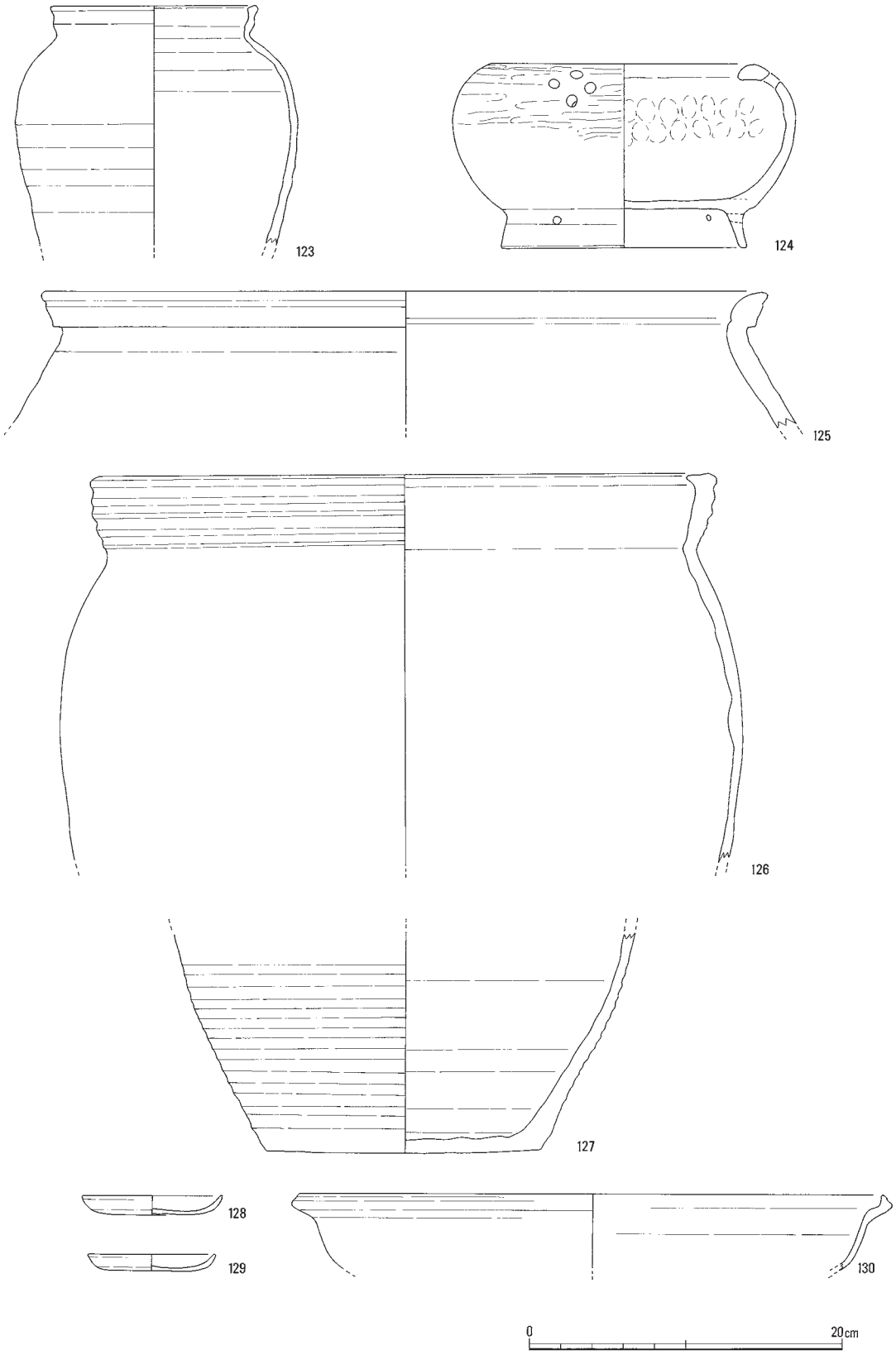
第19図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（３）（１：４）

ＳＤ322（97～122）



第20図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（４）（１：４）

ＳＤ322（123～130）



第21図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（５）（１：４）

土坑ＳＫ320（135）135は石製品の粉挽き臼である。４分画のものである。（豊田・小倉）

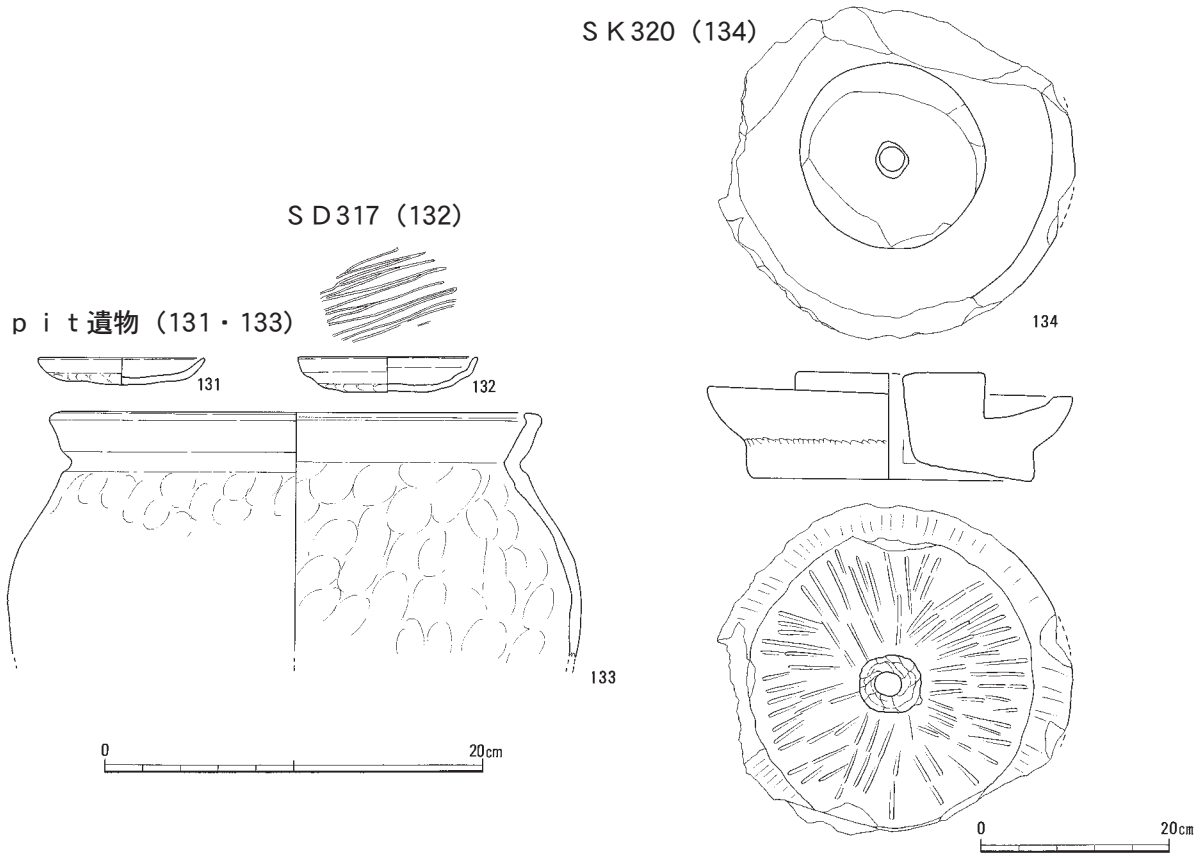
［註］

（１）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

（２）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良文化財研究所　1983年）

（３）以下信楽産の陶器については、畑中英二氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、信楽製品の産地については畑中英二氏の見解により記述する。畑中英二『信楽焼古窯跡群分布調査報告書』（信楽町文化財報告書　第11集　信楽町教育委員会　2003年）畑中英二『信楽焼の考古学研究』（サンライズ出版2003年）

（４）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history Vol.1』三重歴史文化研究会　1990年）



第22図　宮ノ前遺跡（第２次）１地区出土遺物実測図（６）（134のみ１：８、他は１：４）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	45-3	土師器	皿	F2-1	SK352	8.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	ほぼ完形	
2	42-2	土師器	皿	F2-3	SK352	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	黄灰2.5Y5/1	5/12	
3	45-4	土師器	皿	F2-3	SK352 P①	8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	8/12	
4	45-2	瓦器	皿	F2-3	SK352	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	完形	
5	42-1	瓦器	皿	F2-3	SK352	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	8/12	
6	41-1	瓦器	椀	F2-3	SK352	14.4～15.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N6/	ほぼ完形	
7	49-3	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.6～15.9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや粗	灰N5/	10/12	
8	41-4	瓦器	椀	F2-3	SK352	15	外;オサエ→ミガキ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	灰N6/	5/12	
9	44-4	瓦器	椀	F2-1	SK352	15.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/	9/12	
10	49-1	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/	7/12	歪みあり
11	48-3	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/～N5/	10/12	
12	41-3	瓦器	椀	F2-1	SK352	15.4	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰白5Y8/1	5/12	
13	44-1	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	9/12	
14	49-2	瓦器	椀	F2-3	SK352 P②	15.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	5/12	
15	38-1	瓦器	椀	F2-1	SK352	15.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N8/0	6/12	
16	48-2	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.3～15.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N5/～4/	口縁部ほぼ完存	
17	44-3	瓦器	椀	F2-1	SK352	15.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	6/12	
18	41-2	瓦器	椀	F2-1	SK352	15.5	外;ミガキ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	ほぼ完形	
19	45-1	瓦器	椀	F2-3	SK352	15	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	3/12	
20	48-1	瓦器	椀	F2-3	SK352	15.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	7/12	
21	44-2	瓦器	椀	F2-3	SK352	14.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	6/12	
22	51-2	土師器	土釜	F2-3	SK359	29.2	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐10YR3/2,4/2	3/12	大和型・内面 に炭化物付着
23	37-6	瓦器	椀	G2-2	pit3	12.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	口縁部完存	
24	45-5	土師器	皿	R1-3	包	9.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	
25	37-7	瓦器	皿	O1-3	包	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N8/0	5/12	
26	39-4	瓦器	椀	F2-2	包	15.6	外;ハケメ→オサエ→ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	8/12	
27	46-1	瓦器	椀	J2-2	SE347	13.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ 貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0		
28	39-3	土師器	皿	E2-2	SD351	8.9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	淡橙5YR8/4	9/12	へそ皿
29	39-2	土師器	皿	E2-2	SD351	12	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	
30	47-4	土師器	皿	I2-4	SK354	10	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	指紋あり？
31	47-3	陶器	擂鉢	J2-4	SK354	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	信楽
32	47-5	陶器	擂鉢	I2-4	SK354	(底)13.0	外;ナデ 内;ナデ	粗	にぶい橙5YR6/4	(底)1/12	信楽
33	37-1	陶器	擂鉢	I2-2	SD345	31	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	信楽・一部煤付着
34	21-1	土師器	鍋	J2-2	SE347	29.2	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	8/12	外面に煤付着、 内面は一部付着
35	21-2	土師器	鍋	J2-2	SE347	—	外;ハケメ→ケズリ→ナデ 内;ナデ・工具ナデ→ケズリ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	胴部完存	煤付着
36	50-2	陶器	壺・甕	J2-2	SE347	(底)14.0	外;工具ナデ・ナデ 内;オサエ・ナデ	やや密	黄灰2.5Y6/1　5/1	2/12	信楽
37	46-8	土師器	小皿	K2-4	SK350	8	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	
38	47-2	陶器	擂鉢	K2-3	SK350	—	外;ロクロナデ(鉄釉) 内;ロクロナデ(鉄釉)	やや密	(素地)灰白　(釉)にぶい橙	1/12	信楽？ 鉄釉
39	45-6	陶器	擂鉢		SK350	(底)11.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ	やや密	橙5YR7/6	3/12	粘土のつなぎ目？
40	47-1	陶器	甕	K2-3	SK350	21.2	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白2.5Y8/1	3/12	信楽
41	47-6	青磁	椀	K2-4	SK350	(高台)6.8	外;ロクロケズリ→削り出し高台 内;ロクロナデ	密	(素地)灰白N8/0(釉)オリーブ灰10Y6/2	底部完存	
42	50-3	土師器	小皿	N2-2	SE335(井戸底)	8.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	11/12	
43	50-4	土師器	小皿	N2-2	SE335(井戸底)	8.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	6/12	

第９表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺跡観察表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
44	50-5	土師器	小皿	N2-2	SE335(井戸底)	7.8～8.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	11/12	油煙あり
45	51-1	土師器	鍋	N2-2	SE335	34.8	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ケズリ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	8/12	内面に炭化物付着
46	50-1	陶器	擂鉢	N2-2	SE335	29.3	外;回転ナデ→ナデ 内;回転ナデ・オサエ→櫛目	粗	灰白10YR8/2	6/12	信楽 内面使用痕あり
47	46-4	土師器	小皿	R2-2	SK331No.1	10.1	外;オサエ・ナデ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	9/12	
48	46-7	土師器	小皿	R2-2	SK331N0.2	10.3	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	7/12	
49	46-3	土師器	小皿	R2-2	SK331No.3	10	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	11/12	
50	46-6	土師器	小皿	R2-2	SK331No.4	10.2	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	密	橙7.5YR7/6	7/12	
51	46-5	土師器	小皿	R2-2	SK331No.5	9.4～9.9	外;オサエ 内;ナデ	密	橙7.5YR7/6	口縁部ほぼ完存	
52	46-2	土師器	小皿	R2-2	SK331No.6	9.3	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	7/12	
53	51-3	陶器	甕	S2-2	SE326	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ	密	にぶい橙5YR6/4	1/12	信楽
54	52-1	石製品	硯?	S1-2	SE326	(長)21.4(幅)15.0	—	—	—	完存	
55	38-2	瓦	軒丸瓦	Z2-2	SK323	(径)14.0	外;ナデ 内;ナデ	密	灰N4/0・5/0		
56	42-3	土師器	皿	W2-2	SD321	11	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	
57	40-4	土師器	皿	W2-3	SD321	9.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	4/12	
58	42-4	土師器	鍋	W2-2	SD321	32	外;ハケメ→ヨコナデ 内;工具によるナデ・ナデ→ヨコナデ	密	黒10YR2/1	2/12	外面スス付着
59	42-5	瓦質土器	火鉢	W2-1	SD321	—	外;ナデ? 内;ナデ?	密	黄灰2.5Y5/1	1/12	奈良火鉢?
60	40-3	瓦質土器	火鉢	W2-3	SD321	—	外;ナデ 内;ナデ	やや密	黄灰2.5Y4/1	破片	
61	40-5	瓦質土器	火鉢	X2-3	SD321	(高台)16.0	外;ミガキ→貼付高台ナデ 内;回転ナデ・オサエ	やや密	灰N6/	ごくわずか	三脚
62	43-2	瓦	軒平瓦	X2-3	SD321	—	凸面;唐草文 凹面;ナデ	やや粗	灰7.5Y5/1	小片	
63	39-1	陶器	四耳壺	W2-1	SD321	8.9	外;回転ナデ(施釉) 内;回転ナデ・オサエ	粗	(素地)灰白5Y8/1(釉)にぶい橙7.5YR7/3	4/12	信楽
64	43-1	石製品	硯	X2-2	SD321	(長)13.1(幅)6.7	外; 使用痕あり	—	—	ほぼ完存	石質 結晶片岩
65	39-6	石製品	硯	X2-2	SD321	(幅)3.4 (厚さ)0.8	表面は使用痕あり	—	—	破片	
66	39-5	白磁	椀	R2-2	SD325	(高台)6.4	外;削り出し高台 内;ロクロナデ	やや密	灰白7.5Y7/1	8/12	白磁Ⅳ類
67	40-1	陶器	甕(壺)	R2-3	SD325	26	外;回転ナデ?→ヨコナデ 内;回転ナデ?→ヨコナデ	粗	橙2.5YR7/6	1/12	信楽
68	46-9	土師器	小皿	Q2-5	SK353	10	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	
69	37-4	土師器	皿	P1-4	包	8.3～8.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	9/12	
70	37-3	土師器	皿	P1-4	包	7.9～8.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙5YR7/6	口縁部完存	
71	37-2	瓦質土器	羽釜	H2-2	包	11.2	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰N6/0	2/12	
72	40-2	陶器	壺	—	包	16	外;回転ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙2.5YR6/4	2/12	信楽
73	53-4	陶器?	椀	U2-2	SD322	9.4	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	4/12	施釉 信楽
74	25-1	陶器	椀	U2-2	SD322	9.7	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)(釉)灰白2.5Y8/2	11/12	絵付け竹 異様に軽い 万古?信楽
75	23-3	陶器	椀	U2-2	SD322	9.4	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)明オリーブ灰2.5GY7/1	9/12	絵付け 信楽
76	53-3	陶器?	椀?	U2-2	SD322	9.4	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N7/0(釉)灰白7.5Y7/1	5/12	信楽
77	24-3	陶器	茶碗	U2-2	SD322	9.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y8/2(釉)浅黄2.5Y7/3	7/12	信楽
78	22-6	磁器	椀	U2-2	SD322	9	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)明オリーブ灰5GY7/1	5/12	信楽・勅旨産
79	26-3	磁器	椀	W2-2	SD322	11	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)灰白7.5Y7/2	4/12	
80	25-2	陶器	椀	U2-2	SD322	10.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/1(釉)灰白5Y7/2	6/12	絵付け
81	28-5	陶器	椀	U2-2	SD322	10.5	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)明オリーブ灰2.5GY7/1	2/12	
82	30-3	磁器	茶碗	U2-2	SD322	12.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)灰白7.5Y7/1	5/12	
83	22-5	陶器	椀	U2-2	SD322	12	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)灰白5Y8/1	2/12	
84	28-6	陶器	椀	U2-2	SD322	10.9	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)淡黄2.5Y8/3(釉)灰オリーブ7.5Y6/2	11/12	絵付け 信楽
85	53-5	陶器?	椀	U2-2	SD322	11.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	1/12	絵付け 信楽
86	22-7	磁器	椀	U2-2	SD322	11.1	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)にぶい赤褐2.5YR4/4	10/12	
87	53-1	陶器	椀	U2-2	SD322	10.65	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/2	2/12	
88	24-4	陶器	茶碗	U2-2	SD322	10.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白10YR8/2(釉)暗赤褐5YR3/2	6/12	瀬戸
89	24-5	陶器	茶碗	U2-2	SD322	9.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y8/1(釉)にぶい赤褐5YR4/4	4/12	
90	26-4	陶器	椀	U2-2	SD322	7	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白7.5Y8/1(釉)灰白7.5Y8/1	7/12	

第10表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺跡観察表（２）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
91	26-5	磁器	椀	U2-2	SD322	8	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや粗	(素地)灰白N8/(釉)明オリーブ灰2.5GY7/1	9/12	
92	24-2	陶器	椀	U2-2	SD322	12.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)浅黄5Y7/3	8/12	信楽
93	29-2	陶器	椀	U2-2	SD322	11.7	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)淡黄5Y8/3	5/12	絵付け
94	27-1	陶器	皿	U2-2	SD322	12.2	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉)灰白2.5Y8/2	8/12	信楽・絵付け
95	53-2	陶器？	椀？	U2-2	SD322	12.25	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	3/12	
96	28-3	近世	椀	U2-2	SD322	(高台)5.3	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰黄2.5Y7/2(釉)極暗褐7.5YR2/3	台部完存	
97	53-8	陶器	椀？	U2-2	SD322	11.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	1/12	絵付け
98	53-6	陶器	椀？	U2-2	SD322	10.9	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	1/12	絵付け
99	23-2	陶器	椀	U2-2	SD322	11	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y8/1(釉)灰白5Y7/2	6/12	絵付け小杉
100	53-7	陶器	椀？	U2-2	SD322	(高台)4.9	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白7.5Y7/1	底部4/12	絵付け
101	28-2	陶器	椀	U2-2	SD322	9.3	外;ロクロナデ→糸切り痕(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)淡黄2.5Y8/3(釉)極暗褐7.5YR2/3	3/12	
102	27-3	陶器	皿	U2-2	SD322	11.1	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)灰白5Y7/1	6/12	絵付け
103	27-2	陶器	椀	U2-2	SD322	12.3	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)灰白7.5Y7/2	5/12	絵付けの色は 濃紺
104	29-3	陶器	皿	U2-2	SD322	11	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ→櫛描の文様(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)灰白7.5Y7/2	4/12	信楽
105	29-5	陶器	菊皿	U2-2	SD322	13.4	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ヨコナデ・ 貼付高台ナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)淡黄2.5Y8/4	5/12	瀬戸？
106	29-4	陶器	大皿	U2-2	SD322	(高台)7.6	外;ロクロケズリ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰黄2.5Y7/2(釉)灰オリーブ5Y5/3	4/12	唐津焼
107	30-4	陶器	鉢	U2-2	SD322	(底)7.9	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1(釉)にぶい赤褐5YR4/3	6/12	3方？に脚あり 信楽
108	26-6	石製品	砥石	U2-2	SD322	10	—	—	—	—	泥岩
109	29-1	陶器	皿	U2-2	SD322	12.1	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)にぶい黄橙10YR6/3(釉)オリーブ黄5Y6/3	6/12	絵付け？　瀬戸
110	30-1	陶器	皿	U2-2	SD322	13.3	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→ 貼付高台ナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)淡黄2.5Y8/3(釉)浅黄2.5Y7/3	3/12	
111	23-4	磁器	壺	U2-2	SD322	8.5	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白N8/0	8/12	絵付け
112	28-4	陶器	花瓶	U2-2	SD322	3.8	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)極暗褐7.5YR2/3	4/12	
113	22-4	磁器	杯	U2-2	SD322	(底)3.4	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白N8/0	底部完存	
114	30-2	陶器	鉢	U2-2	SD322	12.2	外;ロクロナデ→ケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白2.5Y8/2(釉)灰白2.5Y8/1	11/12	
115	28-1	陶器	鉢	U2-2	SD322	10.7	外;ロクロナデ→糸切り痕(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)淡黄2.5Y8/3(釉)黒N2/	2/12	
116	32-2	陶器	壺	U2-2	SD322	7.2	外;ロクロナデ→ケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/(釉)褐7.5YR4/3	7/12	信楽
117	27-4	陶器	茶入れ	U2-2	SD322	7	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ	やや密	(素地)灰白N8/(釉)極暗褐7.5YR2/3	4/12	信楽・内面に 鉄分付着
118	26-2	陶器	鉢	U2-2	SD322	(底)13.5	外;ロクロナデ→ケズリ・ナデ(施釉) 内;ロクロナデ	やや粗	(釉)灰白10YR8/1	底部完存	
119	23-1	陶器	急須	U2-2	SD322	17.3～17.7	外;ロクロナデ→糸切り痕(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	灰白2.5Y8/2	完存	信楽
120	32-1	陶器	壺、甕？	U2-2	SD322	20.2	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/(釉)灰黄褐10YR4/2	3/12	
121	33-1	陶器	擂鉢	U2-2	SD322	34.8	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(鉄釉) 内;ロクロナデ→櫛目(鉄釉)	やや密	(素地)にぶい橙7.5YR7/4(釉)暗赤褐2.5YR3/2	2/12	信楽
122	34-1	陶器	擂鉢	U2-2	SD322	36.4	外;ロクロナデ→ナデ→貼付高台ナデ (鉄釉) 内;ロクロナデ→櫛目(鉄釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/1(釉)暗赤灰10R4/1	6/12	信楽
123	35-1	陶器	壺？	U2-2	SD322	13.2	外;ロクロナデ(サビ釉) 内;ロクロナデ(サビ釉)	やや密	(素地)灰白10YR8/2(釉)褐灰5YR4/1	11/12	信楽
124	24-1	土師質	火舎	U2-2	SD322	17	外;ミガキ→オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4・6/4	9/12	穿孔あり・ 部分的に煤付着
125	26-1	陶器	大甕	V2-2	SD322	46.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ？オサエ？→ヨコナデ	粗	橙5YR7/6	1/12	信楽
126	36-1	陶器	大甕	U2-2	SD322	40	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)浅黄橙10YR8/3(釉)灰褐5YR5/2	8/12	信楽
127	31-1	陶器	甕？	O2-2	SD322	(底)17.5	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	褐灰10YR4/1	底部完存	信楽 底部以外サビ釉？
128	22-2	土師器	皿	U2-2	SD322	8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	
129	22-3	土師器	皿	U2-2	SD322	8.1	外;ナデ・オサエ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	
130	22-1	土師器	鍋	U2-2	SD322	38.3	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・板ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	近世　南伊勢
131	54-1	土師器	小皿	P1-4	pit3	8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	8/12	
132	54-2	瓦器	皿	G2-3	SD317	9.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰白10YR8/2	4/12	
133	54-3	土師器	甕	R1-3	Pit1	26	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	2/12	大和型・内面 に炭化物付着
134	55-1	石製品	臼	Y2-2	SK320	35	外;加工痕	—	—	—	砂岩

第11表　宮ノ前遺跡（第２次）１地区遺跡観察表（３）

２．２地区

基本層序（第24図）

宮ノ前２地区は、上荒木集落の西端に所在する。現況は水田であり、調査区に沿って南側に用水路がある。調査面積は222㎡である。

基本的な層序は、現耕作土下から順に、

第１層　10BG5/1　青灰色砂質シルト（旧耕作土）

第２層　7.5Y6/1　灰色砂質シルト

第３層　10YR5/1　灰黄褐色砂質シルト

第４層　5Y6/1　灰色中砂（礫混じり）

第５層　2.5Y7/1　灰白色砂質シルト（小石混じり）

となっており、河川の氾濫を示す砂礫層が堆積している。

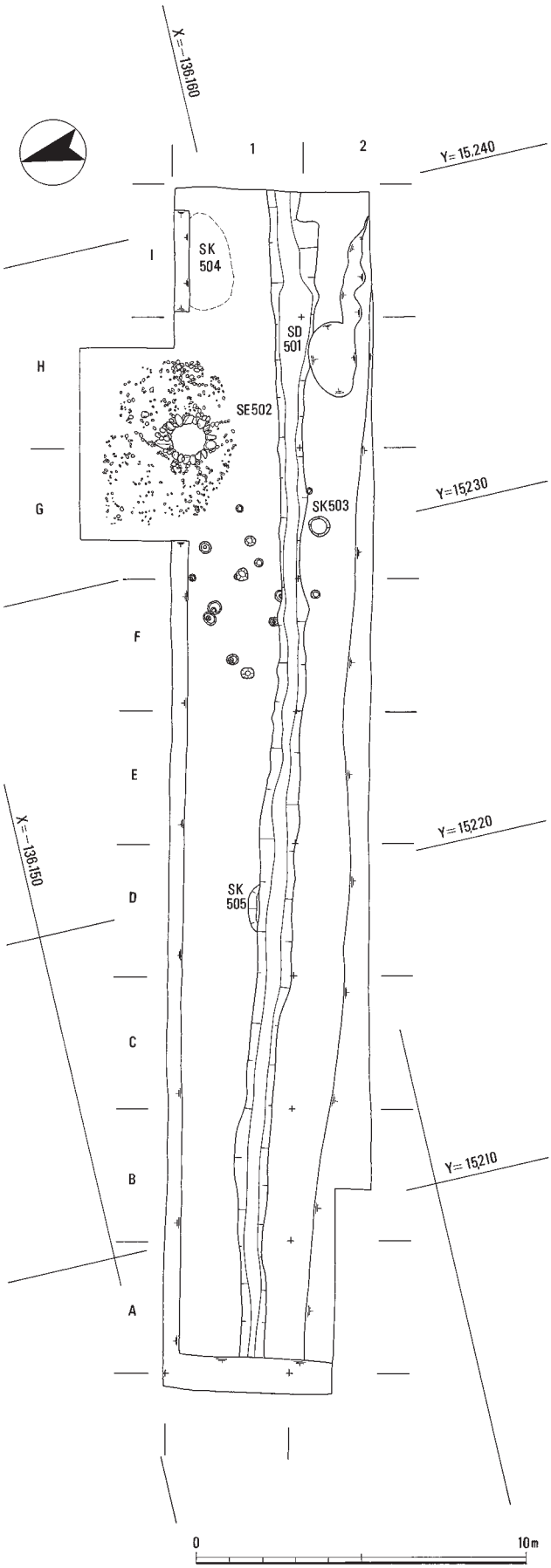
遺構

溝ＳＤ501　調査区を東西に走る溝である。東端付近で、人頭大の石群と交わる。西端に試掘坑跡が確認できたが、溝はさらに西に向かって延伸する様相を呈している。遺物は新旧の遺物が混じるが、他の遺構に比べ残りは良くないが白磁や青磁片が含まれており注意を要する。

井戸ＳＥ502（第25図）　調査区の北東にあり、径は約１m、深さは約２mの石組み井戸である。中ふくらみのプランおよび下層の出土遺物から、中世に掘削されたものと考えられる。埋没過程は不明であるが、ほとんど差異のない埋土の様子から、ある時期に、一挙に埋まったものと考えられる。

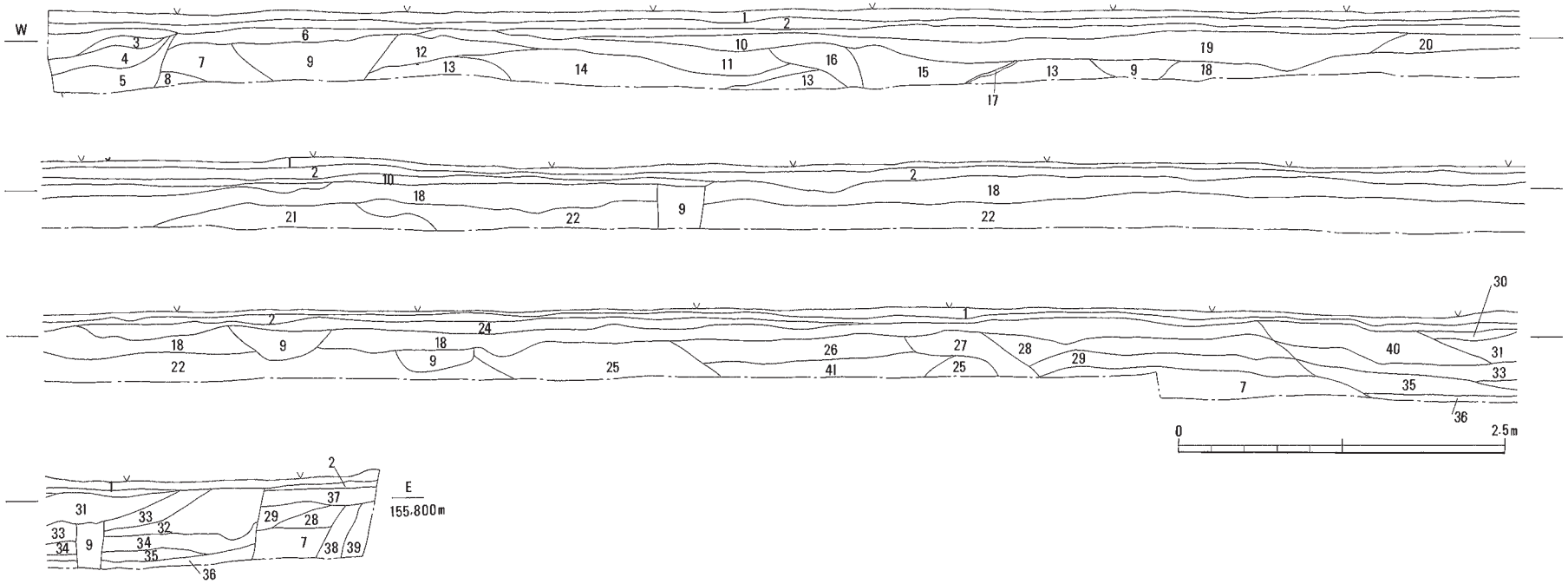
土坑ＳＫ503　埋土は、炭化物を多く含む黒褐色粘質土で、薄い板状の木片がわずかに存し、その下にオリーブ褐色の砂質土が堆積していた。上層部からは、近世陶器が多数出土した。

土坑ＳＫ504　調査区の北東、SE502の東側で確認した。径は検出段階で約３mである。遺構に沿って径20㎝ほどの石列が確認できたが、途中で消滅していた。現耕土から約80㎝下では、褐灰色砂質シルトに浅黄色シルトブロックの混入した厚さ約５㎝の張床が確認できた。

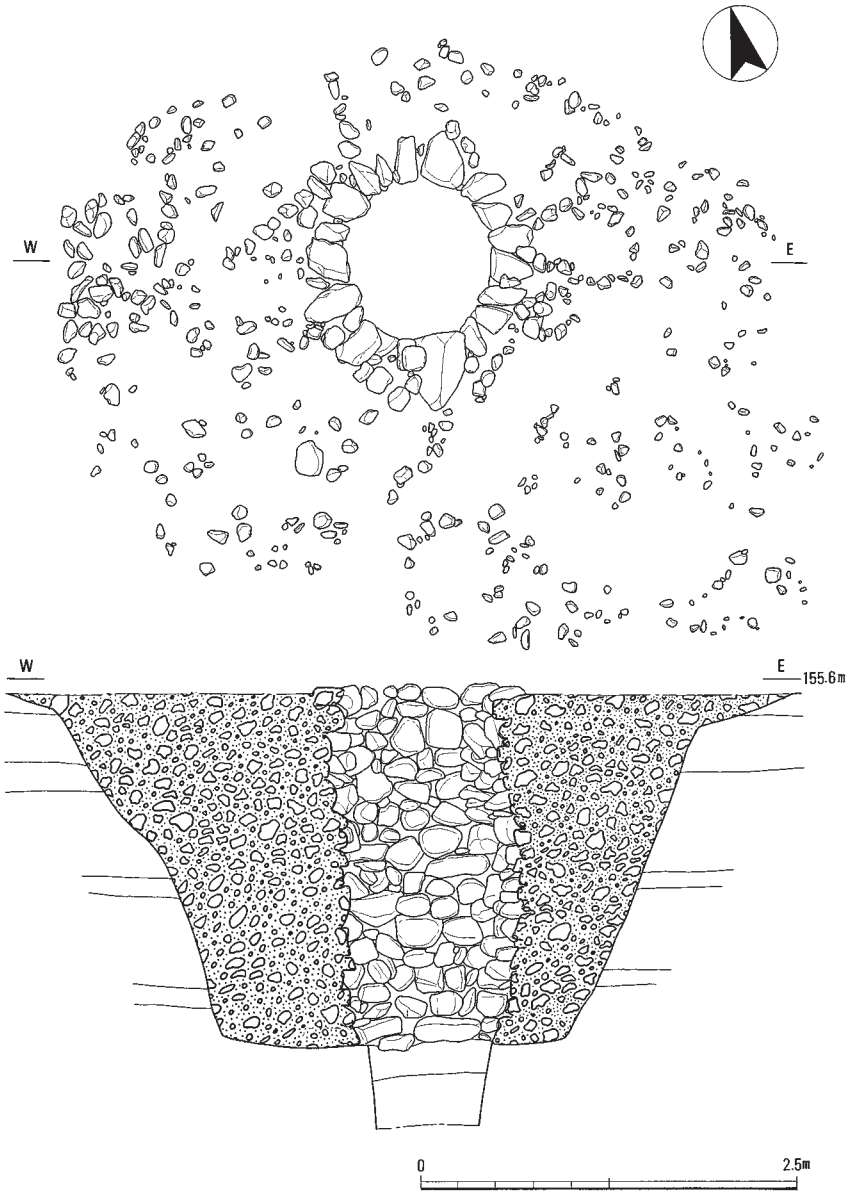


第23図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺構平面図（１：200）

第24図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区土層断面図（１：50）



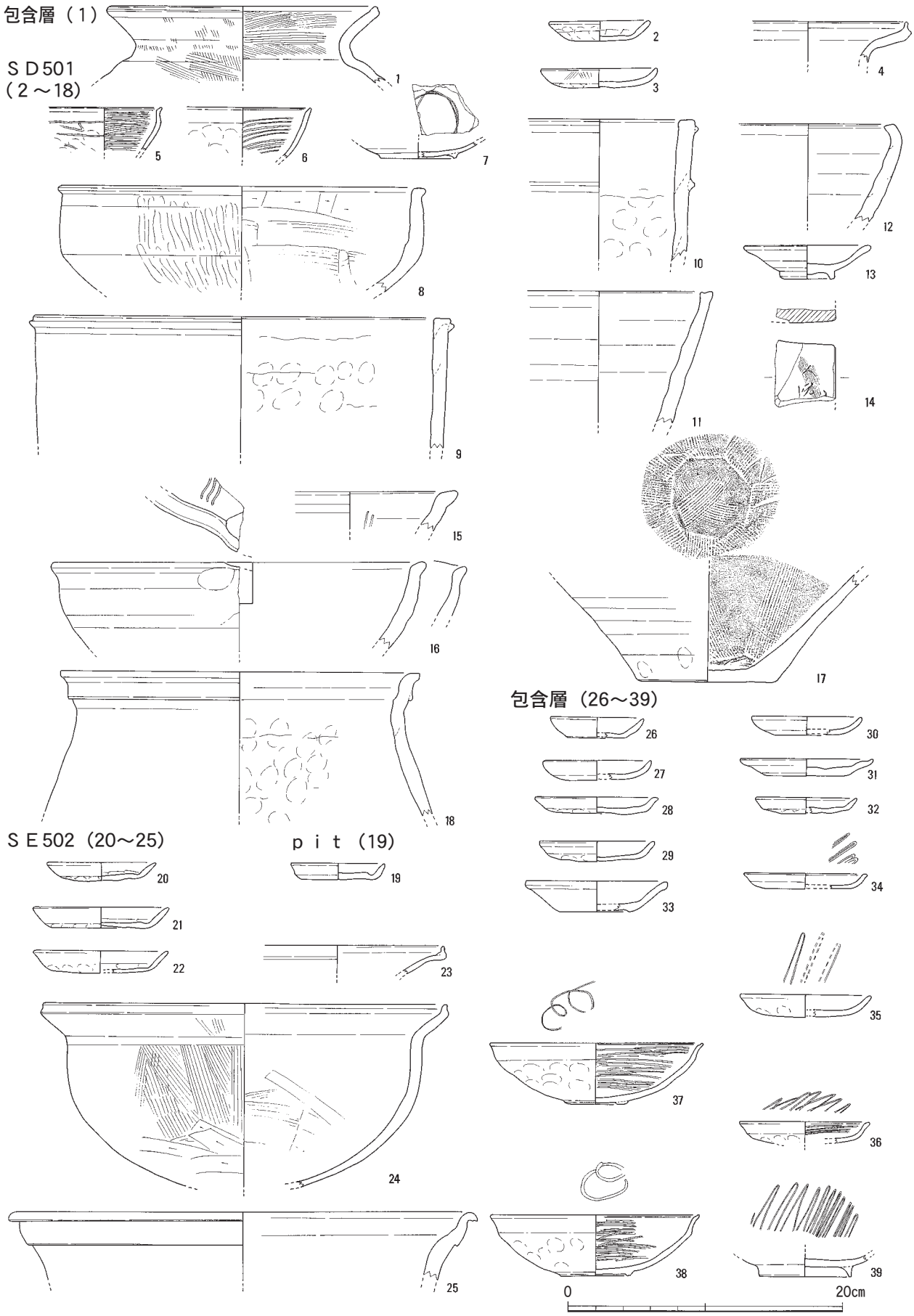
1　10BG5/1青灰色砂質シルト（旧耕作土）
2　7.5Y6/1灰色砂質シルト（床土・鉄分混じり）
3　5Y6/1灰色砂質シルト（鉄分･焼土混じり）
4　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト（焼土･炭化物混じり）
5　2.5Y5/1黄灰色砂質シルト（焼土･炭化物混じり）
6　5Y5/1灰色砂質シルト
7　2.5Y6/3にぶい黄色中砂
8　2.5Y7/2灰黄色中砂
9　10YR5/1褐灰色砂質シルト（中砂混じり）
10　10YR6/2灰黄褐色砂質シルト（第２床土）
11　7.5YR6/1褐灰色砂質シルト
12　10YR6/1褐灰色砂質シルト
13　2.5Y7/1灰白色粗砂（小石混じり）
14　2.5Y6/2灰黄色粗砂（礫混じり）
15　5Y7/1灰白色シルト質細砂
16　10YR7/2にぶい黄橙色砂質シルト
17　5Y5/1灰色砂質シルト（炭化物混じり）
18　5Y6/1灰色中砂（礫混じり）
19　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト
20　10YR6/2灰黄褐色砂質シルト（鉄分含む）
21　礫層
22　2.5Y7/1灰白色砂質シルト（小石混じり）
23　2.5Y6/3にぶい黄色砂質シルト（床土）
24　10Y6/1灰色砂質シルト
25　10Y5/1灰色砂質シルト（井戸裏ごめ）
26　2.5Y4/1黄灰色砂質シルト（炭化物含む）
27　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（炭化物含む）
28　10YR4/1褐灰色砂質シルト（炭化物多く含む）
29　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト（炭化物含む）
30　10Y5/1褐灰色砂質シルト（小石混じり）
31　7.5YR5/1褐灰色砂質シルト
32　7.5YR5/1褐灰色砂質シルト（炭層）
33　7.5YR5/1褐灰色細砂質シルト
34　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト（砂利・炭化物混じり）
35　10YR5/1褐灰色砂質シルト（砂利混じり,炭化物含む）
36　7.5Y4/1褐灰色砂質シルト（炭化物含む）
37　10YR6/2灰黄色褐色砂質シルト（鉄分･小石混入、床土）
38　10YR5/3にぶい黄褐色中砂（砂利混じり）
39　10YR4/3にぶい黄褐色中砂（礫含む）
40　10YR5/1褐灰色砂質シルト（礫混じり）
41　2.5Y6/4にぶい黄色細砂（井戸埋土）



第25図　井戸ＳＥ502平面・断面図（１：50）

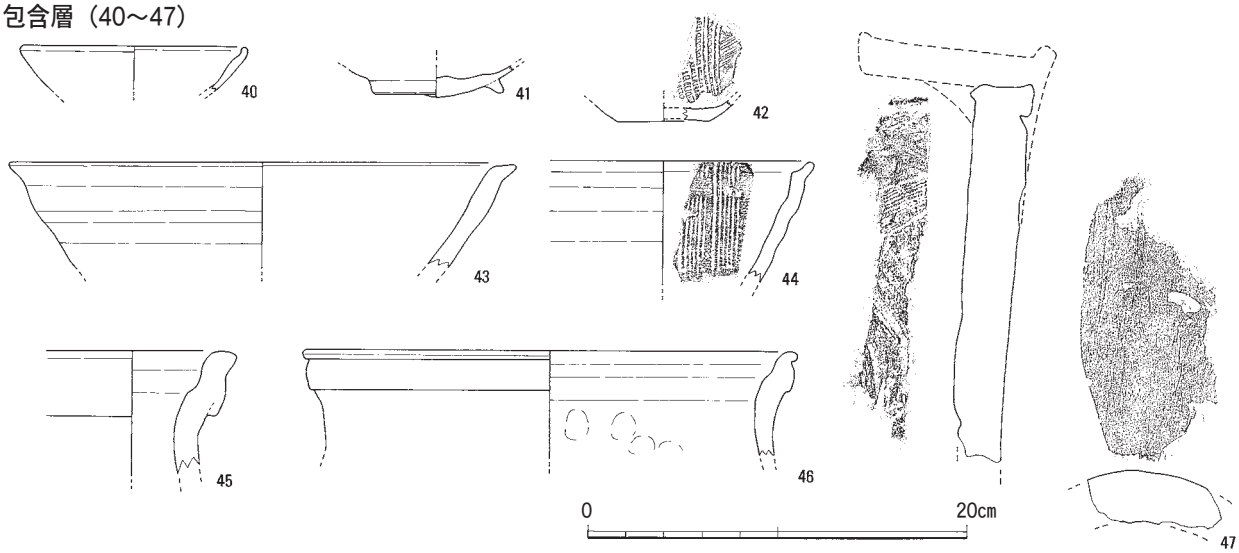
遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＤ５０１	溝	近世	2	Ｂ１～９	信楽焼擂鉢・瓦片
ＳＥ５０２	井戸	中世前期	2	Ａ７，Ｂ７・８	瓦器皿片・山茶椀片
ＳＫ５０３	土坑	近世	2	Ｃ７	陶器片
ＳＫ５０４	土坑	不明	2	Ｂ９	
ＳＫ５０５	土坑	近世	2	Ｂ４	

第12表　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺構一覧表



第26図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区出土遺物実測図（１）（１：４）

包含層（40～47）



第27図　宮ノ前遺跡（第２次）２地区出土遺物実測図（２）（１：４）

出土遺物

包含層（１）　壺が出土している。広口壺の口縁部の破片で、外面にはタテハケ・ヨコハケが施される。

溝ＳＤ501（２～18）　土師器・瓦器・陶器が出土している。２・３は土師器の皿、４は南伊勢系の鍋の破片である。５～７は瓦器椀である。５の体部外面には若干ミガキが施されるが、６にはみられず指圧痕のみである。７は高台の破片で、断面三角形の高台が貼りつけられる。内面のみこみにも暗文がみられる。８は瓦質の鉢である。口縁部は垂直状に立ち上がり体部中間辺りで屈曲する。口径は26.7㎝前後で、外面は丁寧にミガキが施され、内面には板状工具による横方向のナデののち、端部付近にケズリを施す。９・10は瓦質の火鉢で口縁部は垂直方向に伸びる。10の体部には細い突帯が貼りつけられる。11・12は信楽産の鉢で11の口縁部端部は面をもつ。12は口縁部が内彎し、端部に面をもつ。13は白磁の椀で、底部内面の一部をかき取っている。従ってこの部分には釉薬がかかっていない。14は土符で「人院」と書かれている。表面が擦り減っており、硯として転用されたのかもしれない。15・16は信楽産の擂鉢である。18は信楽産の大甕で口縁部内面には段をもつ。

また、小片であるため図示していないが、青磁・白磁も出土している。

溝ＳＤ502（20～25）土師器・陶器が出土している。24は土師器の鍋である。器壁が厚く口縁端部もややシャープ差を欠くなど南伊勢系の鍋そのものではなく、模倣して製作されたものと考えられる。25は信楽産の甕の口縁部である。

包含層（26～47）　土師器・瓦器が出土している。26～32は土師器皿、35・36は瓦器皿で、36は口径9.4㎝で、器高1.6㎝ほどで、口縁部内面にはミガキが施される。37～39は瓦器椀である。37・38はともに口径15.2～15.5㎝、器高4.4㎝で、外面のヘラミガキが施されない。福田編年の５期[1]に相当するとみられる。

41は内面の黒い黒色土器Ａ類[2]で、高台の破片である。42は陶器の卸皿、43・44は信楽産の擂鉢で、43の口縁部の端部は内傾する面をもつ。44は黄茶色を呈し、ロクロナデによって口縁部の平坦面が凹面となったものである。16世紀前半頃のものか。

45・46は甕の口縁部で45は口縁部内面の沈線が浅く46はほとんど消滅している。47は軒丸瓦で、内面には布目の痕跡、外面はミガキが施される。

（豊田）

［註］

（１）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

（２）田中琢「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」（『日本の考古学』Ⅳ　1967年）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	18-1	土師器	壺	B9	包	19.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ハケメ→ヨコナデ	やや粗	橙7.5YR7/6	3/12	
2	13-4	土師器	皿	B1	SD501	7.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・強い工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	7/12	
3	13-3	土師器	皿	B2	SD501下層	8.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	9/12	
4	12-4	土師器	鍋	B2	SD501	−	外;ナデ・ケズリ状ナデ 内;ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	小片残	南伊勢・外面に煤付着
5	11-4	瓦器	椀	B5	SD501	−	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	小片残	
6	11-5	瓦器	椀	B3	SD501	−	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/0	小片残	
7	11-6	瓦器	椀	B3	SD501	(高台)5.4	外;オサエ・ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	
8	12-3	瓦質	鉢	B	SD501	26.7	外;ヨコナデ→ミガキ 内;板ナデ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	灰N4/0	1/12	
9	11-1	瓦質	火鉢	B4	SD501	30.8	外;ナデ→ヨコナデ・ケズリ? 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰N6/0・5/0	1/12	
10	11-2	瓦質	火鉢	B4	SD501	−	外;ヨコナデ→貼付ナデ→ケズリ 内;オサエ→ヨコナデ	やや粗	灰N4/0	小片残	
11	11-3	陶器	鉢	B3	SD501	−	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや粗	にぶい赤褐5YR5/3	小片残	信楽
12	12-2	陶器	鉢	B5	SD501	−	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→工具ナデ	粗	にぶい橙5YR6/4	小片残	信楽
13	12-6	白磁	椀	B3	SD501	9.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白2.5GY8/1	小片残	
14	13-5	石製品	砥石	B2	SD501	幅4.4 厚さ0.8	表面磨耗	—	—	小片残	転用硯
15	12-5	陶器	擂鉢	B3	SD501	−	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→スジ目	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	小片残	信楽
16	13-1	陶器	擂鉢	B1	SD501	27.3	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→スジ目	やや密	灰白10YR8/2	2/12	信楽
17	13-2	陶器	擂鉢	B4	SD501	(底)11.2	外;ロクロナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ→スジ目	密	(素地)にぶい橙7.5YR7/4(釉)褐灰5YR4/1	底部完存	美濃瀬戸
18	12-1	陶器	甕	B1	SD501	26	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ・オサエ	粗	にぶい橙5YR7/4	1/12	信楽
19	19-5	土師器	皿	C6	pit1	7.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	5/12	
20	14-2	土師器	皿	B8	SE502 4層	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	
21	14-3	土師器	皿	B8	SE502 4層	9.9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/3	3/12	
22	14-4	土師器	皿	B8	SE502 2層	9.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・工具ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白10YR8/2	1/12	
23	15-2	土師器	鍋	B8	SE502 3層	—	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	灰褐7.5YR5/2	1/12	外面に煤付着
24	14-1	土師器	鍋	B8	SE502 4層	29.6	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ・工具ナデ?→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	南伊勢を伊賀で模倣か?
25	15-1	陶器	甕	B8	SE502 2層	34.1	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや粗	にぶい赤褐5YR4/3・5/4	1/12	信楽
26	19-10	土師器	皿	C2	包	6.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	4/12	
27	19-4	土師器	皿	C7	包	8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	2/12	
28	15-3	土師器	皿	B3	旧河道	8.7～8.9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR7/1	10/12	
29	15-4	土師器	皿	B3	旧河道	8.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	5/12	
30	19-3	土師器	皿	B4	包	8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	
31	19-9	土師器	皿	B9	包	9.7	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	
32	19-6	土師器	皿	C7	包	7.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	2/12	
33	19-7	陶器	小皿	C4	包	10.4	外;ロクロナデ→削り出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	褐7.5YR4/3	1/12	
34	19-8	瓦器	小皿	B4	包	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N6/	1/12	
35	16-4	瓦器	皿	B3	旧河道	9.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;→ヨコナデ	密	灰N4/0	2/12	
36	16-3	瓦器	皿	B3	旧河道	9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	
37	16-1	瓦器	椀	B2	旧河道	15.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	9/12	
38	16-2	瓦器	椀	B2	旧河道	15.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	1/12	
39	15-5	瓦器	椀	B3	旧河道	(高台)6.8	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	密	暗灰N3/0	5/12	
40	19-2	瓦器	椀	C7	包	12	外;ナデ・オサエ?→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	2/12	
41	19-1	黒色土器	椀	B9	包	(高台)6.8	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;オサエ・ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3	底部完存	
42	17-2	陶器	卸皿	B9	包	(底)4.8	外;ケズリ・ナデ? 内;スジ目	やや密	灰白2.5Y8/2	5/12	
43	18-3	陶器	擂鉢	B2	包	26.7	外;回転ナデ 内;回転ナデ	粗	灰白2.5Y8/1	2/12	信楽
44	18-4	陶器	擂鉢	B9	包	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ→スジ目	粗	淡橙5YR8/4	1/12	信楽
45	18-5	陶器	甕	B2	包	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ	粗	にぶい橙5YR7/4	1/12	
46	18-2	陶器	甕	B9	包	26	外;ヨコナデ 内;オサエ→ヨコナデ	粗	橙5YR7/6	1/12	
47	17-1	瓦	軒丸瓦	C2	包	19.6	外;タテ方向ミガキ 内;布目圧痕	粗	灰5Y6/1	破片	

第13表　宮ノ前遺跡（第２次）２地区遺物観察表

３．３地区

基本層序（第28図）

調査区の現状は水田であった。表土の耕作土・床土を除去すると、灰黄褐色の細砂・砂礫が現れ、遺構が確認された。包含層は確認されず、調査区は水田の耕作の際にやや削平をうけたものと考えられる。なお、調査面積は257㎡である。

遺構

土坑ＳＫ521　Ｂ・Ｃ７グリットで確認した遺構である。幅約1.5m、南北に約４m以上の楕円形の土坑である。埋土には炭化物が多く含まれ、土師器皿・鍋・羽釜、瓦器椀、陶器の壺などが出土している。

竪穴住居ＳＨ522（第30図）　Ｂ９・10グリットで確認した遺構である。規模は、南北約3.6m×東西約3.6mで、平面形は方形である。中央付近で粘土塊があり、竈の一部を確認したが中世のピットなどで破壊されており形状等は不明であるが、焼土や炭化物もみられる。出土遺物は須恵器杯身や土師器の甕などが出土しており、奈良時代前期のものであろう。

落ち込みＳＺ523　Ｂ７グリットで確認した遺構である。不整形な土坑で深さは７㎝程である。出土土器は少ないが、瓦器片が出土しており中世前期の遺構か。

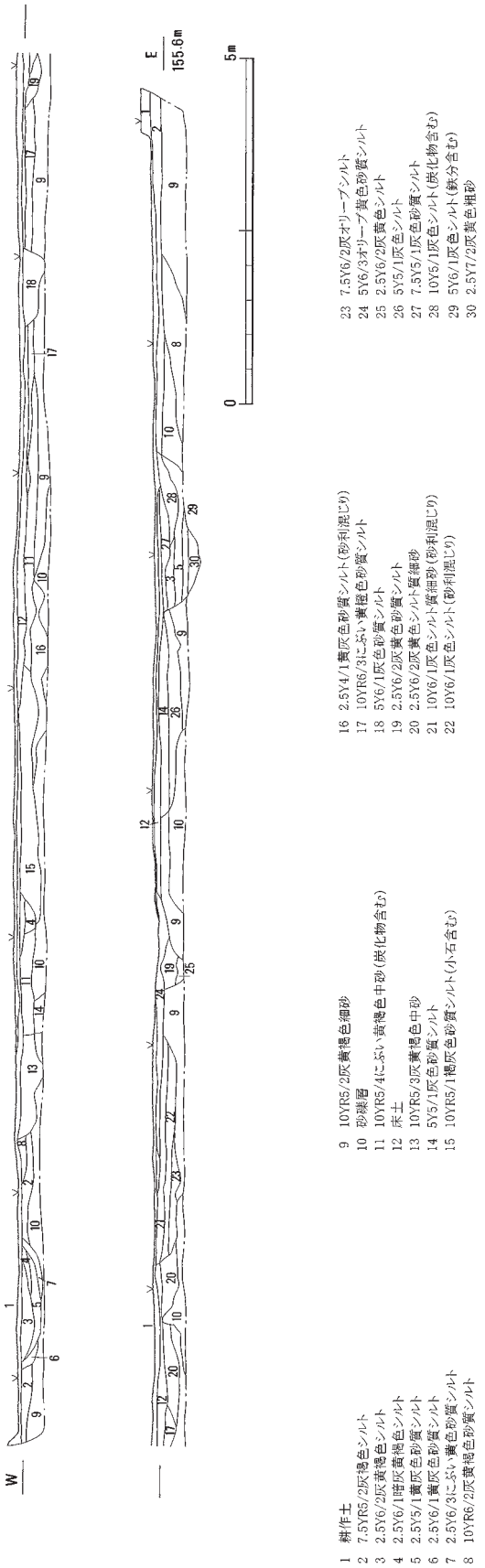
土坑ＳＫ524　Ｂ８グリットで確認した遺構である。不整形な方形を呈する土坑で、埋土には炭化物が多く含まれている。

土坑ＳＫ525　Ｃ９・10グリットで確認した遺構である。埋土には拳大の礫が含まれていたが、詳しい土坑の性格は不明である。土器は擂鉢、瓦質土器、古瀬戸の壺が出土している。

溝ＳＤ526　Ｂ・Ｃ９グリットで確認した遺構で、ＳＫ524に切られている溝である。出土遺物は少ない。

溝ＳＤ528　Ｂ５グリットで出土した遺物で、幅最大0.8m、深さ６㎝の浅い溝である。出土遺物は少ないが、須恵器と土師器片が出土しており、奈良時代頃の遺構であろう。

土坑ＳＫ529　Ｂ１グリットで確認した遺構で、規模は径1.8m・深さ16㎝ほどで、２段堀の円形の土坑である。埋土より、土師器の羽釜・瓦質土器片



第28図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区土層断面図
（１：100）

が含まれることから中世前期の遺構であろう。

遺物（第31・32図）

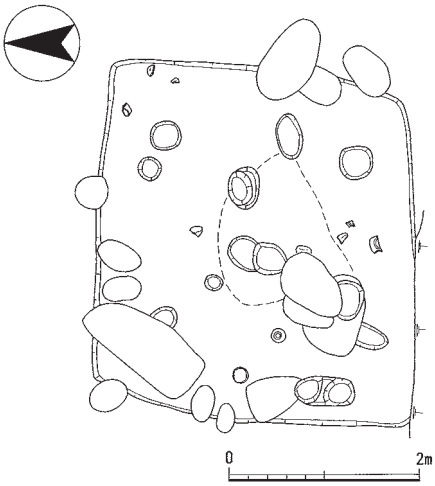
竪穴住居ＳＨ522出土遺物（１～７）　土師器の椀・甕、須恵器の椀・長頸壺がある。１・２は土師器の椀である。１の底部にはヘラ削りが施されている。３は土師器の甕である。口縁部は欠損している。内外面ともナナメ方向のハケ目が施される。４は須恵器の長頸壺、５～７は杯である。８世紀前半頃と考えられる。

落ち込みＳＺ523出土遺物（８・９）　瓦器椀と土師器の釜が出土している。

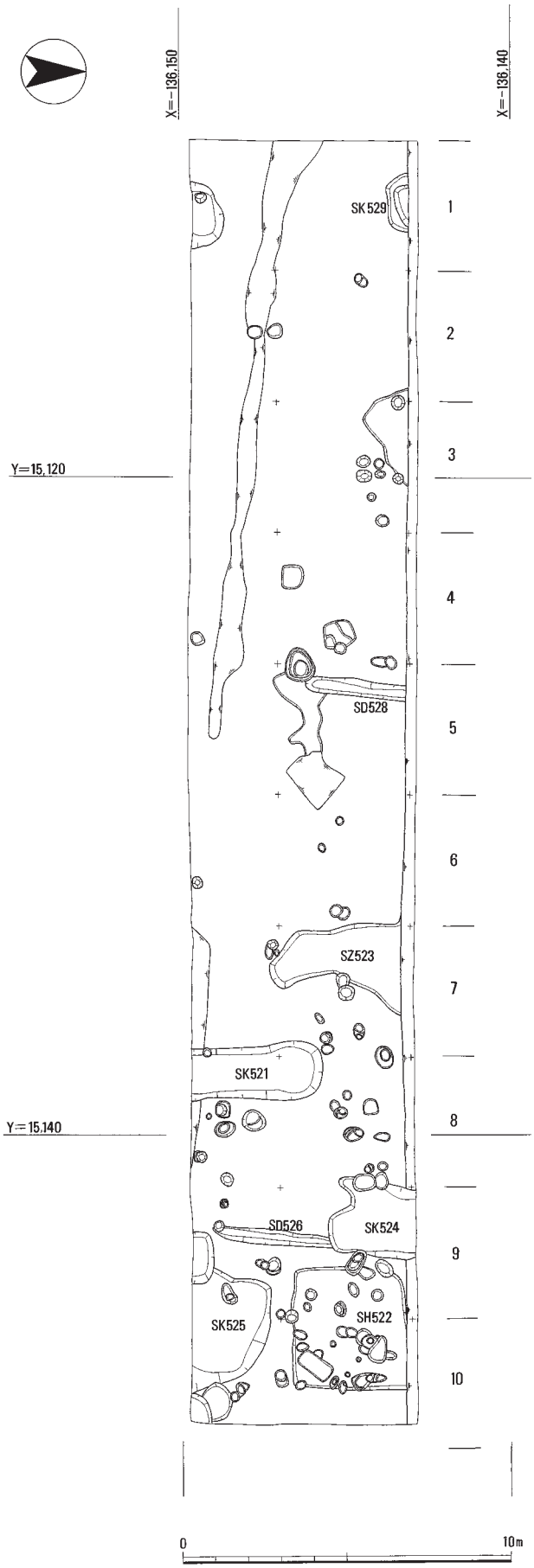
土坑ＳＫ521出土遺物（10～21）　土師器皿・鍋・羽釜、瓦器椀、陶器壺が出土している。10～12は土師器皿である。口径は10cm前後である。13～18は瓦器椀である。口縁部端部の沈線は端部にやや近く、外面のヘラミガキも粗雑である。口径は16cm前後、残存高5.0cmもあり14はやや新しそうであるが、それ以外は福田編年の４期頃のものであろうか。19は大和型の土釜、20は羽釜の口縁部である。

土坑ＳＫ524出土遺物（22～29）　土師器皿・羽釜、瓦器椀がある。22・23は土師皿で薄手のものと厚手のものがある。26・27は瓦器椀で、26は内外面ともヘラミガキが施されている。27は内面のみ施される。28・29は土釜で頸部よりやや下に鍔をもち、口縁部端部は折り曲げられている。

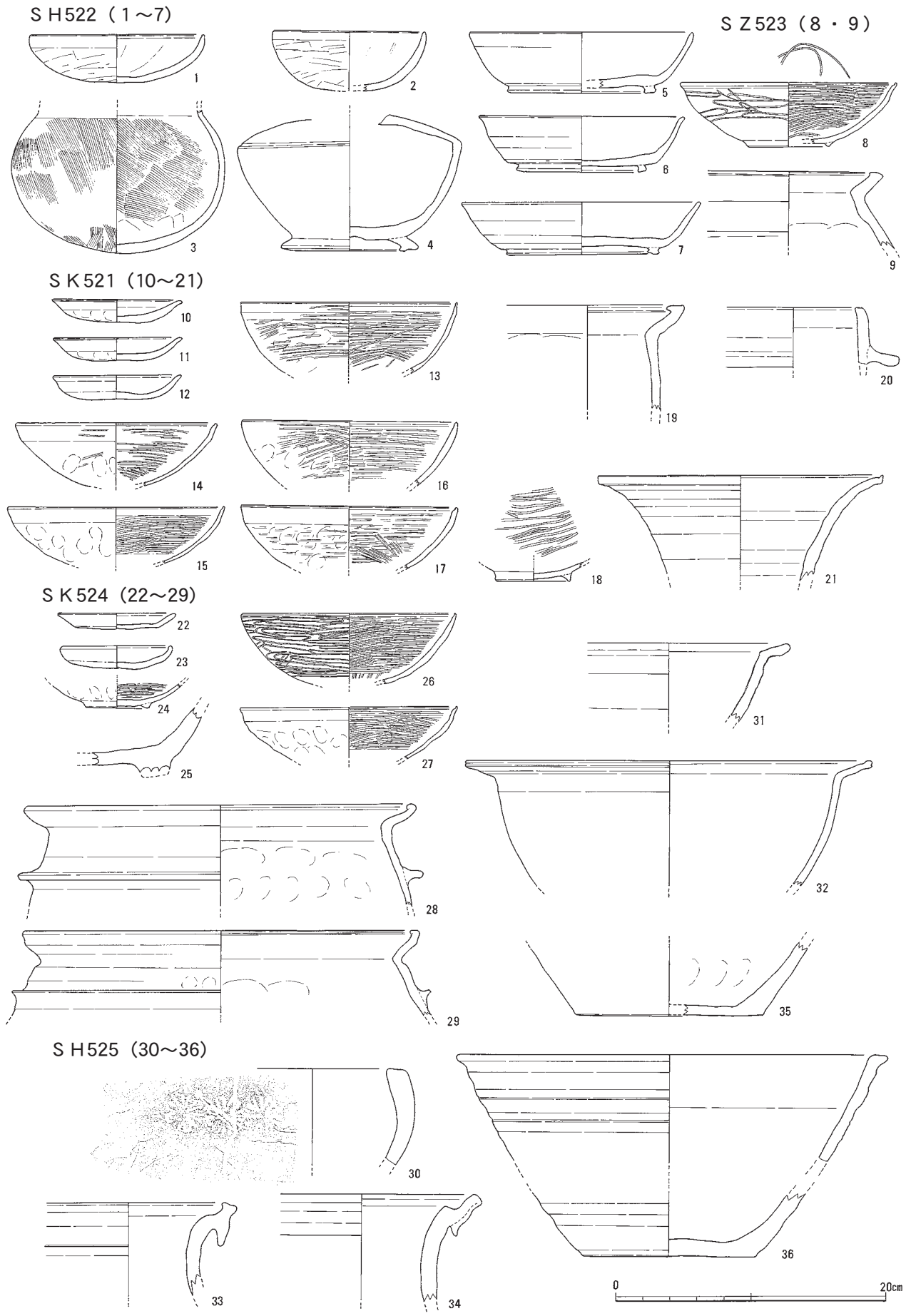
土坑ＳＫ525出土遺物（30～36）　奈良火鉢、陶器の甕・擂鉢、瓦質土器が出土している。30は瓦質の奈良火鉢の浅鉢で、体部外面には家文のスタン



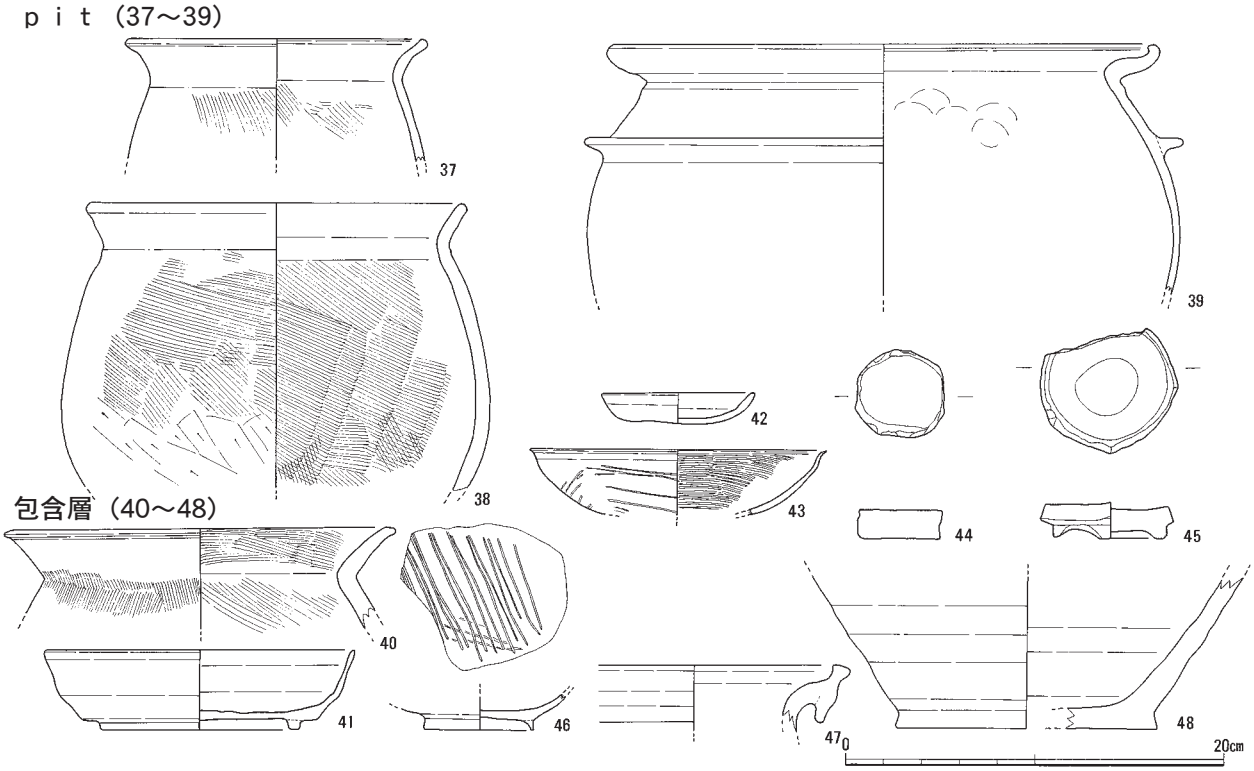
第30図　竪穴住居ＳＨ522平面図（１：80）



第29図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺構平面図（１：200）



第31図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区出土遺物実測図（１）（１：４）



第32図　宮ノ前遺跡（第２次）３地区出土遺物実測図（2）（１：４）

遺構番号	性　格	時　期	次数	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＫ５２１	土坑	中世前期	3	Ｂ・Ｃ７	土師器羽釜・瓦器片
ＳＨ５２２	竪穴住居	奈良	3	Ｂ９・10	埋土に焼土・炭化物混じる
ＳＺ５２３	落ち込み	中世前期	3	Ｂ７	
ＳＫ５２４	土坑	中世前期	3	Ｂ８	
ＳＫ５２５	土坑	中世後期	3	Ｃ９・１０	
ＳＤ５２６	溝	中世後期	3	Ｂ・Ｃ９	
ＳＤ５２７	溝	中世？	3	Ｃ４～７	
ＳＤ５２８	溝	古代か	3	Ｂ５	須恵器・土師器片
ＳＫ５２９	土坑	中世	3	Ｂ１	土師器羽釜・瓦質土器

第14表　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺構一覧表

プが押捺されている。31は古瀬戸の折縁深皿で後期１段階[1]のものである。33・34は信楽産の甕と考えられる破片で、口縁はN字状を呈し、口縁部内面の段も明瞭であることから古相を呈する。32は瓦質土器である。35は甕の底部、36は信楽産の擂鉢で、これらの遺物群は一括資料に準じる扱いができよう。

Ｐｉｔ出土遺物（37～39）　土師器甕・羽釜が出土している。37・38は土師器の甕で外面にはナナメ方向の刷毛目が施され、38の体部下半部にはヘラ削りがみられる。39は大和型の土釜である。

包含層出土遺物（40～48）　土師器甕、須恵器、瓦器椀、陶器擂鉢、加工円盤などが出土している。40は土師器甕、41は須恵器の杯、44・45は加工円盤、47は信楽産の甕の口縁部である。（豊田）

［註］

（１）愛知学院大学の藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、古瀬戸製品については藤澤氏の編年により記述する。藤澤良祐「施釉陶器生産技術の展開と編年」（『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の伝播　発表要旨集』2005年）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	02-03	土師器	杯	3地区 B10	SH522	(口) 13.0	外;ヘラケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	内面にヘラ描？
2	02-02	土師器	杯	3地区	SH522 №2	(口) 11.4	外;ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁3/12	
3	02-04	土師器	?	3地区	SH522 №5	(体) 15.8	外;ハケメ 内;ハケメ→ケズリ	やや密	浅黄橙 10YR8/4		外面に炭化物付着
4	01-01	須恵器	壷	3地区	SH522 №6	(底) 10.1 (体) 16.5	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰 N6/0	底部完存	
5	01-04	須恵器	杯	3地区	SH522 №3	(口) 16.5 (底) 11.0	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰 10Y5/1	口縁2/12 底部3/12	
6	01-03	須恵器	杯	3地区	SH522 №4	(口) 15.2 (底) 9.6	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰 N6/0	口縁2/12 底部6/12	
7	01-02	須恵器	杯	3地区	SH522 №5、7～9	(口) 17.6 (底) 11.2	外;ロクロナデ→糸切り→ロクロケズリ→ 貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰白 N7/0	口縁8/12 底部完存	内面に炭化物付着
8	07-04	瓦器	椀	3地区 B7	SZ523	(口) 16.0 (底) 6.1	外;ヨコナデ→ミガキ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰 N5/0	口縁3/12 底部小片	内面底部に暗文
9	08-04	土師器	羽釜	3地区 B7	SZ523	―	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部片	内面に当て具の オサエ？残
10	06-01	土師器	皿	3地区 B8	SK521	(口) 9.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁11/12	
11	06-02	土師器	皿	3地区 B8	SK521	(口) 9.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	ほぼ完形	
12	06-04	土師器	皿	3地区 B8	SK521	(口) 9.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁11/12	
13	04-03	瓦器	椀	3地区 C8	SK521	(口) 16.0	外;ヨコナデ→ミガキ(オサエ残) 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 10YR8/2		
14	04-05	瓦器	椀	3地区 C8	SK521	(口) 15.0	外;ヨコナデ→ミガキ(オサエ残) 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 2.5Y8/1	口縁2/12	
15	06-07	瓦器	椀	3地区 B8	SK521	(口) 16.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0 ～4/0	口縁2/12	
16	04-04	瓦器	椀	3地区 C8	SK521 北	(口) 16.0	外;ヨコナデ→ミガキ(オサエ残) 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰 N5/0	口縁3/12	
17	04-01	瓦器	椀	3地区 C8	SK521 北	(口) 16.0	外;ヨコナデ→ミガキ(オサエ?) 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 2.5Y8/2	口縁2/12	内面に黒い部分残
18	05-03	瓦器	椀	3地区 C8	SK521 北	(底) 5.6	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	灰白 2.5Y8/2	底部完存	
19	08-03	土師器	甕	3地区 B8	SK521	–	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐 10YR6/2	口縁部片	
20	06-10	土師器	羽釜	3地区 B8	SK521	–	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部片	
21	07-02	須恵器	壷	3地区 B8	SK521 南	(口) 21.2	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	粗	灰白 2.5Y7/1	口縁2/12	外内面に自然釉
22	06-05	土師器	皿	3地区 B7	SK524	(口) 8.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁3/12	
23	06-03	土師器	皿	3地区 B7	SK524	(口) 8.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 5YR7/4	口縁8/12	
24	06-06	瓦器	椀	3地区 B7	SK524	(底) 4.7	外;ナデ・オサエ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	灰白 2.5Y8/1	底部ほぼ完存	
25	03-03			3地区 C9・10	SK525	–	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	やや粗	灰白 10YR8/2	底部片	3足か？
26	06-08	瓦器	椀	3地区 B7	SK524	(口) 16.0	外;ヨコナデ→オサエ後ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰 N4/0	口縁2/12	
27	06-09	瓦器	椀	3地区 B7	SK524	(口) 16.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰 5Y6/1	口縁2/12	
28	08-02	土師器	羽釜	3地区 B7	SZ523	(口) 29.0	外;ナデ→貼付ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	灰褐 7.5YR5/2	口縁1/12	
29	08-01	土師器	羽釜	3地区 B7	SK524	(口) 29.2	外;ナデ・オサエ→貼付ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙 5YR5/3	口縁2/12	外面に煤付着 内面に当て具使用？
30	05-01	陶器	鉢	3地区	SK525	–	外;回転ナデ？→ナデ 内;回転ナデ？・オサエ痕あり	やや密	灰 N6/0	口縁部片	外面に印花文
31	05-02	陶器	鉢	3地区 C9・10	SK525	–	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	やや密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部片	
32	03-01	土師器	鉢	3地区 C9・10	SK525	(口) 30.0	外;ナデ？→ヨコナデ 内;ナデ？→ヨコナデ	やや密	灰白 2.5Y8/2	口縁2/12	外面に煤付着
33	03-05	陶器	甕	3地区	SK525	–	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	赤褐 10R64/3	口縁部片	
34	03-04	陶器	甕	3地区	SK525	–	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい赤褐 2.5YR5/4	口縁部片	
35	03-02	陶器	甕	3地区	SK525	(底) 14.0	外;ナデ 内;工具ナデ・オサエ→ナデ	やや密	にぶい橙 5YR7/4	底部2/12	
36	04-02	陶器	鉢	3地区	SK525	(底) 13.0	外;回転ナデ→ナデ 内;回転ナデ→ナデ	粗	灰白 2.5Y8/2	底部6/12	
37	07-03	土師器	甕	3地区 B4	Pit1	(口) 16.0	外;ハケメ？→ヨコナデ 内;ハケメ？・ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁3/12	
38	02-01	土師器	甕	3地区	Pit5	(口)20.0(体)22.6	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁2/12	
39	07-01	土師器	羽釜			(口)29.1	外;ナデ→貼付ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐 10YR5/2	口縁2/12	外面に煤付着
40	09-04	土師器	甕	3地区	包含層	(口)20.6	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ・ナデ	やや粗	浅黄橙 7.5YR8/6	口縁2/12	
41	10-01	須恵器	杯	3地区 BC7・9	包含層	(口) 16.3 (高台)10.5	外;ロクロナデ→ヘラ切り→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰 N6/0	口縁1/12 高台3/12	
42	09-05	土師器	皿	3地区	包含層	(口) 8.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁6/12	
43	09-03	瓦器	椀	3地区 BC5・6	包含層	(口) 15.6	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰 N5/0	口縁3/12	
44	10-04	瓦質	加工円盤	3地区 BC5・8	包含層	(幅) 4.4 (厚) 1.5	外; 内;	やや密	灰 N4/0	完形	
45	10-05	陶器	加工円盤	3地区	包含層	(幅) 7.0 (厚) 1.7	外;ロクロケズリ→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白 7.5Y8/1	完形？	施釉陶器転用 (打ち欠き？)
46	10-02	瓦器	椀	3地区 BC5・6	包含層	(高台) 5.8	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→暗文	やや密	灰 N4/0	高台完存	
47	09-02	陶器	甕	3地区	包含層	–	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや密	赤褐 10R4/4	口縁部片	
48	09-01	陶器	鉢	3地区	包含層	(底) 13.7	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや密	赤 10R5/6	底部2/12	

第15表　宮ノ前遺跡（第２次）３地区遺物観察表

Ⅴ　寺前遺跡

寺前遺跡は菩提寺跡の西、上荒木の集落の西端に位置する。調査区は現水路に沿い、上荒木から下荒木の集落に向かう農道を一部縦断するかたちで設定された。従ってＬ字形を呈する。また、調査区内には電柱が存在したためその周辺を残したうえで掘削を行った。調査区は、途中で分断しており、東西方向の１地区、南北方向の２地区に分けて調査を行っている。調査面積は2,194㎡であった。

基本層序（第34図）

寺前遺跡は、基本的には地山が砂礫で、その上に流路の繰り返しにより砂層が幾重にも堆積して形成されている。地形的には、東西方向のトレンチである１地区については現集落に向かうほど高くなり、西に向かって徐々に低くなっている。検出面は砂礫層の上面でおこなった。

南北方向のトレンチである２地区は、砂礫層の上に砂が幾重にも堆積し、安定した面がなかったため、砂礫層の上に堆積する砂層の遺構の確認できるレベルで検出を行っている。地形的には、地山である砂礫層が確認されている調査区中央部分が一番高く、南北に向かってそれぞれ落ち込んでいく。

遺構

１地区

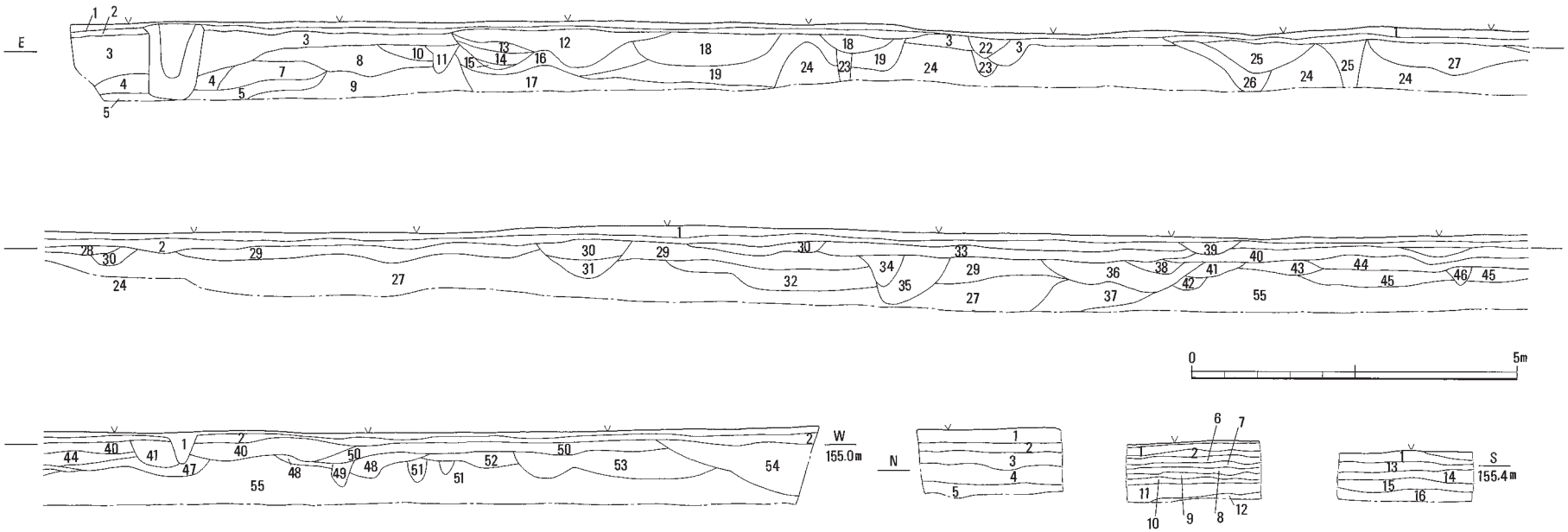
溝が多く検出され、住居跡は確認されていないが、Ｒ・Ｓ８グリット付近では図示していないものの、人間の足跡が確認されていることを付記しておく。

流路ＳＲ１　P24～S36グリットにかけて確認された河道である。幅は1.5～1.8mで、深さは40㎝ほどの浅い流路で東西方向に伸びる。

流路ＳＲ４　ｒ18～ｓ20グリットにかけて確認された遺構である。一部撹乱により不明であるが、幅約２～３m、深さ約10㎝である。

第33図　寺前遺跡調査区位置図（１：2000）

第34図　寺前遺跡調査区土層断面図（1：100）



寺前遺跡2地区

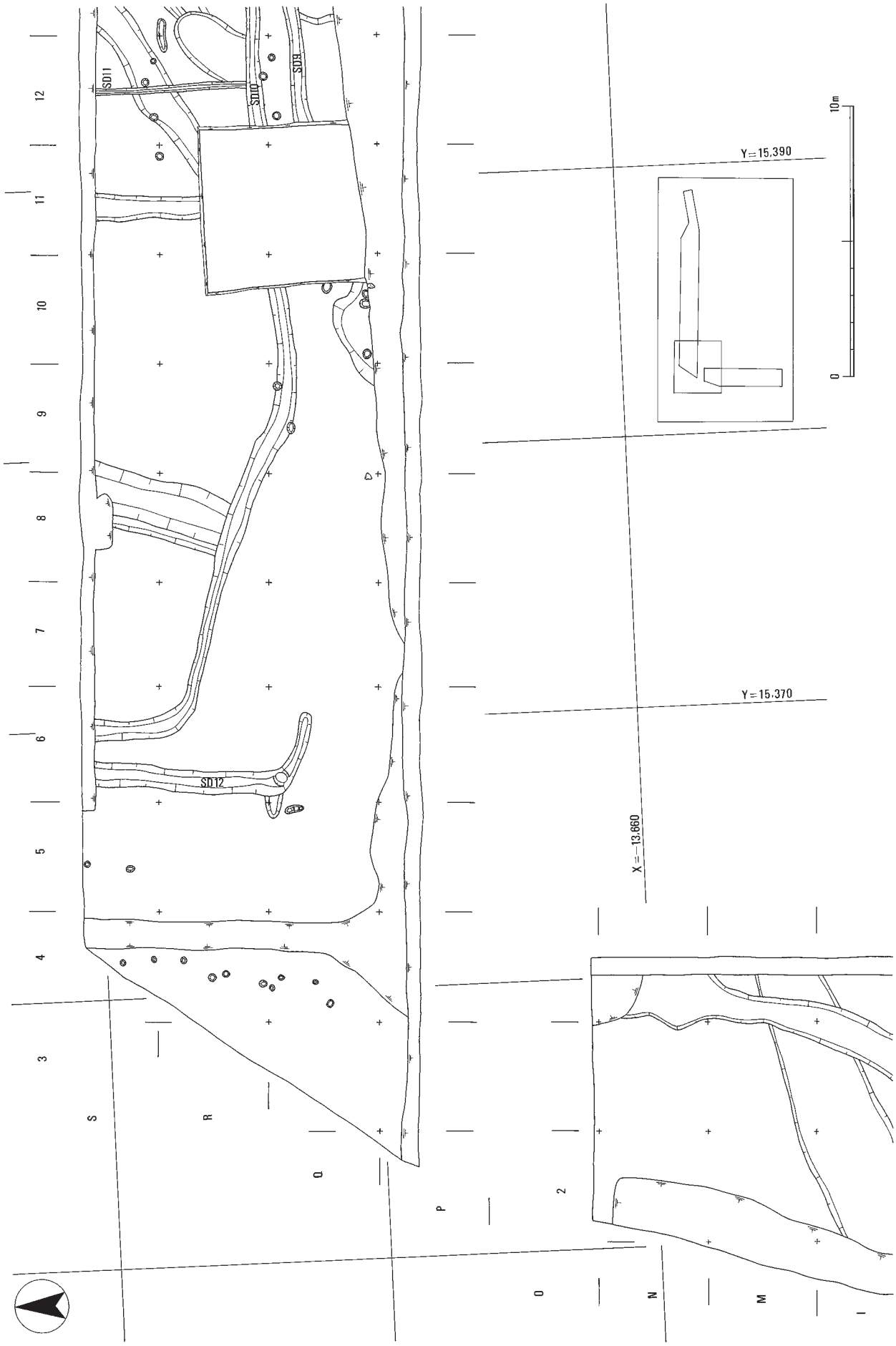
1　10YR6/1褐灰色土
2　10YR6/8明黄褐色土＋10YR6/1褐灰色土（やや粘性あり）
3　10YR5/2灰黄褐色砂質土（やや粘性あり）
4　2.5GY5/1オリーブ灰砂質土
5　7.5YR4/4褐色細砂
6　10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
7　10YR6/4にぶい黄橙色砂
8　7.5YR4/2灰褐色砂質土
9　2.5Y4/2暗灰黄色土
10　5Y5/2灰オリーブ色砂質土
11　7.5YR5/4にぶい褐色砂質土
12　2.5Y4/2暗灰黄色土
13　5Y5/2灰オリーブ色砂質土
14　7.5Y5/4にぶい褐色砂質土
15　7.5YR4/4褐色砂
16　2.5Y5/3黄褐色砂
17　7.5YR4/4褐色砂（石混じりφ15cm）
18　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
19　7.5YR4/3褐色極細砂
20　7.5YR4/3褐色砂質土
21　10YR4/4褐色砂
22　7.5Y4/2灰オリーブ色砂質土
23　10YR4/4褐色細砂（石混じりφ20cm）
24　7.5Y4/2灰褐色砂質土）
25　7.5YR4/1灰色砂質土
26　7.5YR3/2黒褐色細砂
27　7.5YR4/4褐色粗砂（石混じりφ20cm）
28　7.5Y5/3にぶい褐色砂質土（やや粘性あり）
29　10YR7/2にぶい黄褐色土（やや粘性あり）＋7.5YR4/4褐色土
30　7.5YR6/2灰褐色砂質土（やや粘性あり）
31　10YR6/3にぶい黄橙色粗砂
32　10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
33　5YR6/2灰褐色砂質土（やや粘性あり）
34　7.5YR6/3にぶい褐色極細砂
35　10YR5/4にぶい黄褐色極細砂
36　7/5YR5/4にぶい褐色砂質土
37　7.5Y8/4浅黄橙色細砂
38　10YR5/2灰黄褐色砂質土
39　7.5YR3/1黒褐色砂質土
40　10YR3/3暗褐色砂質土
41　7.5YR6/3褐色砂
42　10YR7/4黄橙色砂
43　10YR5/2灰黄褐色砂質土（砂混じり）
44　10YR5/3にぶい黄褐色砂質土
45　2.5Y5/4黄橙色細砂
46　7.5YR4/3褐色細砂
47　2.5Y5/4黄橙色細砂
48　5YR5/4にぶい赤褐色細砂
49　7.5YR5/2灰褐色細砂（やや粘性あり）
50　5YR5/2灰褐色砂質土
51　7.5YR5/3にぶい褐色細砂（やや粘性あり）
52　2.5Y5/3黄褐色細砂
53　7.5YR4/3褐色細砂
54　5YR5/3にぶい赤褐色砂質土（やや粘性あり）

寺前遺跡1地区

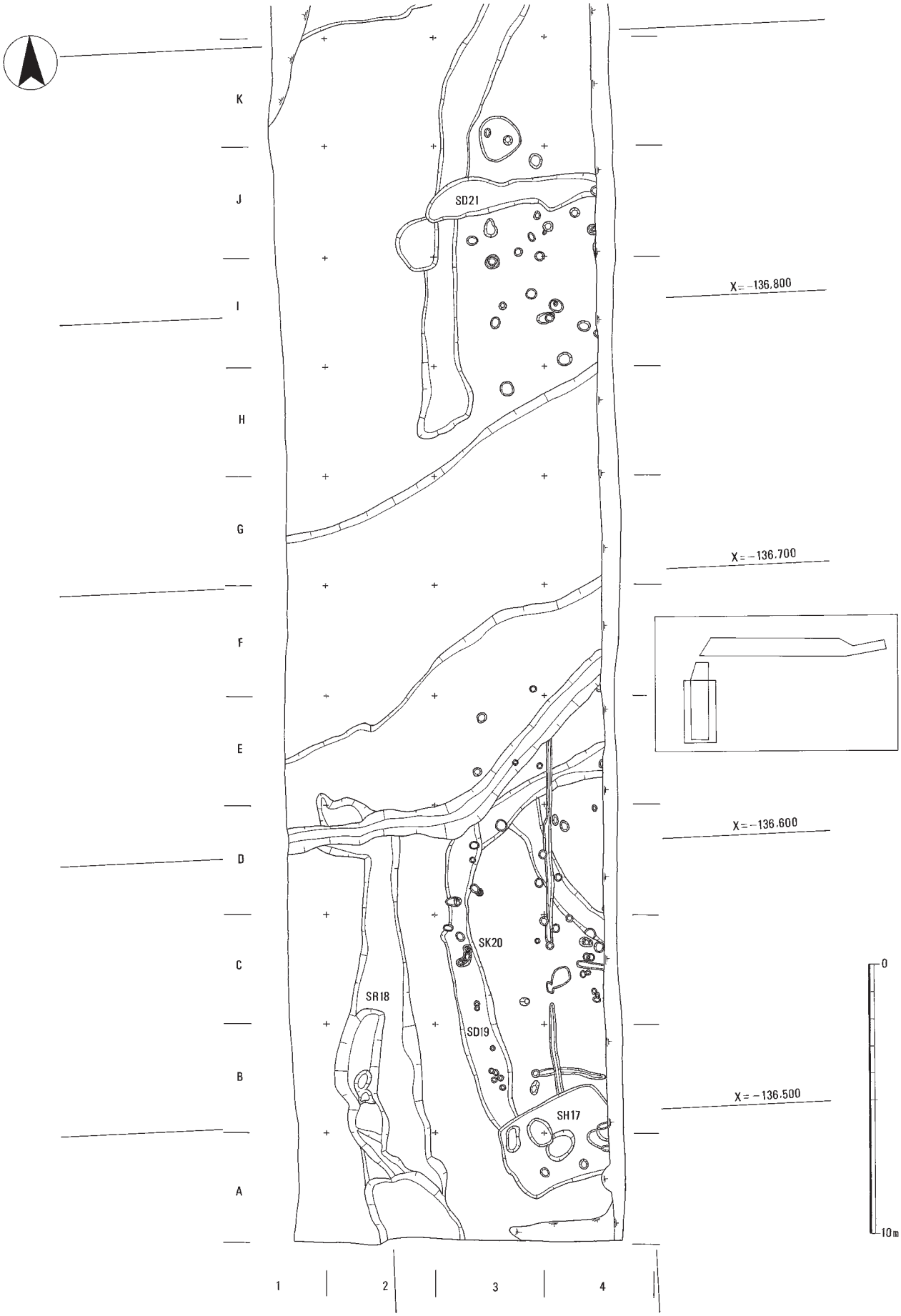
1　耕作土
2　床土
3　5Y6/1灰色砂質土
4　7.5Y6/2灰オリーブ砂質土
5　5Y7/3浅黄色砂質土
6　5Y6/2灰オリーブ粘質土
7　5Y7/1灰白色砂質土
8　2.5Y5/1黄灰色砂質土粘性あり
9　2.5Y7/2灰黄色砂質土
10　2.5Y7/4浅黄色砂質土
11　10YR6/1褐灰色砂質土
12　10YR6/8明黄褐砂質土
13　5YR5/2灰褐色土
14　5YR5/1褐灰色砂質土
15　7.5YR2/2黒褐色砂質土石混じり
16　7.5YR2/1黒色砂質土（φ2cmの小石混じり）

第35図　寺前遺跡１地区遺構平面図（１）（１：200）

第36図　寺前遺跡１地区遺構平面図（２）（１：200）



第37図　寺前遺跡１・２地区遺構平面図（１：200）



第38図　寺前遺跡２地区遺構平面図（１：200）

流路ＳＲ６　ｇ・ｒ31・32グリットで確認された遺構である。幅は最大2.5m、深さ約５㎝である。ＳＲ１に切られる。

溝ＳＤ10　ｓ６～ｒ13グリットにかけて確認された溝である。幅は0.8m前後、深さは８㎝である。東西方向に伸びる溝であるが、ｒ６グリットで北側へ折れる。

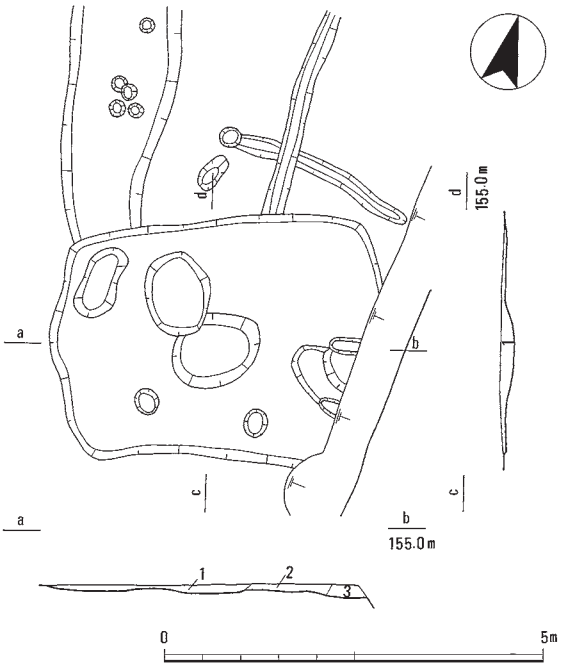
流路ＳＲ13　ｒ13～ｓ15グリットで確認された遺構である。幅は最大2.4m、深さは５㎝である。埋土から奈良時代の土器が出土している。

２地区

竪穴住居ＳＨ17（第39図）　ａ・ｂ３～４グリットで確認された遺構である。３ｍ×4.4mの方形の竪穴住居跡である。支柱穴は確認できなかったが、東壁に近い位置で焼土を確認しており、残存していなかったが、カマドが存在していたものとみられる。土師器の甕（７）が壁際部分から排水溝掘削の際に出土しており、これを竪穴住居の遺物とすれば、奈良時代の遺構と考えられる。

流路ＳＲ18　ａ～ｄ２グリットで確認された遺構である。幅2.2m、深さ10㎝ほどの溝である。埋土から土師器の甕が出土している。

溝ＳＤ19　ｂ～ｄ３グリットで確認された遺構で、幅1.5m、深さ４㎝ほどの浅い溝である。埋土から黒色土器が出土している。



第39図　寺前遺跡竪穴住居ＳＨ17実測図（１：100）

遺物

溝ＳＤ18（１・２）　土師器の甕が出土している。１・２ともに口縁部の破片である。外面は縦方向のハケ、口縁内面は横方向のハケが施される。８世紀頃のものであろう。

流路ＳＲ13（３・４）　土師器杯（３）と須恵器杯蓋（４）が出土している。３は杯で、口径11.9㎝、器高3.7㎝で底部の外面にヘラ削りが施される。４は蓋で、宝珠つまみをもつ。

流路ＳＲ６（５）　須恵器の杯身の高台が出土している。

溝ＳＤ16（６）　土師器の甕が出土している。口径は25.8㎝で、口縁部は内彎し、外面は縦方向のハケの後、口縁部はヨコナデ、内面は縦方向のハケの後、横ハケである。

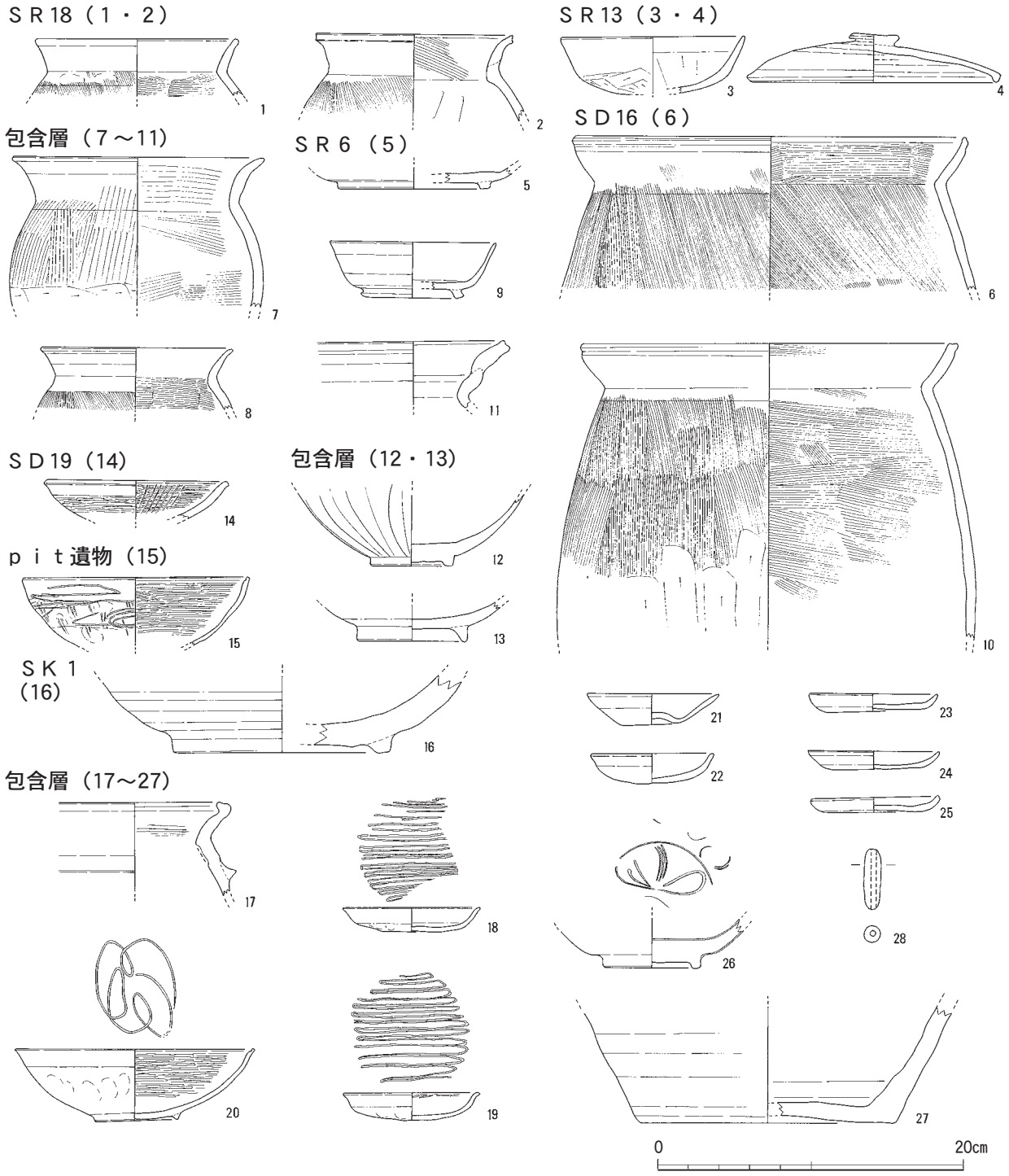
流路ＳＲ18（２・８）土師器の甕が出土している。２・８はともに口縁部の破片である。外面は縦方向のハケ、口縁内面は横方向のハケが施される。７世紀頃のものであろう。

溝ＳＤ19（14）　瓦器椀がある。口径12㎝、残存高2.5㎝である。外面にはヘラミガキが残る。

土坑ＳＲ１（16）　須恵器の鉢がある。底径は14.2㎝で、底部外面・底部にはロクロケズリが施される。底部内面には擦った痕が残っており、捏鉢として使用されていたのかもしれない。

Ｐｉｔ出土遺物（15）　瓦器椀（15）がある。外面にはヘラミガキが残っている。

包含層（７～13・17～27）　土師器・瓦器・陶器・磁器が出土した。21～25は土師皿で、12・26は青磁である。18・19は瓦器皿で、ともに口径9.0㎝、器高1.5㎝前後である。20は瓦器椀で、外面は押圧痕が残る。内面は横方向のヘラミガキが施され、見込みの暗文は連結輪状文が施される。28は土錘である。（豊田）



第40図　寺前遺跡出土遺物実測図（１：４）

遺構番号	性 格	時 期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
SR1	河道	古代～中世前期	1	p24～s36	東西方向に伸びる溝
SR2	河道	不明	1	r36	
SR3	河道	不明	1	r27	
SR4	河道	不明	1	r18～s20	SR5と平行
SR5	河道	不明	1	s19	SR4と平行
SR6	河道	古代	1	g・r31・32	幅最大2.5m、SR7より新
SR7	河道	古代	1	r32	SR6より古い
SD8	溝	中世前期	1	r16	土師器片
SD9	溝	中世前期	1	g13	土師器片
SD10	土坑	古代	1	s6～r13	幅0.8m前後、深さ0.08m、土師器片
SD11	溝	古代	1	r12	須恵器片
SD12	河道	中世前期	1	r6	
SR13	河道	奈良	1	r13～s15	幅最大2.4m、深さ0.05m
SR14	河道	奈良	1	s15	SR13より新、須恵器高台片
SK15	土坑	不明	1	s17	
SD16	—	古代～中世前期	—	—	
SH17	竪穴住居	奈良	2	a・b3～4	3m×4.4mの方形。焼土あり
SR18	河道	奈良	2	a～d2	土師器片
SD19	溝	古代	2	b～d3	幅1.5m、深さ0.04mほどの浅い溝。竪穴住居SH17より古い
SK20	土坑	不明	2	C3	SD20に一部切られる
SD21	溝	不明	2	J3～4	

第16表　寺前遺跡遺構一覧表

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特記事項
1	1-5	土師器	甕	a2	SR18	13.3	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	灰黄褐10YR6/2	2/12	
2	2-1	土師器	甕	b2	SR18	12.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ・工具痕→ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい赤褐5YR5/3	わずか	
3	5-1	土師器	杯	s15	SR13	11.9	外;ヘラケズリ→ヨコナデ 内;ヘラケズリ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	3/12	
4	6-1	須恵器	杯蓋	s15	SR13	16.5	外;ロクロナデ→貼付ナデ 内;ロクロナデ	密	灰N6/	3/12	
5	1-2	須恵器	杯	r32	SR6	(底)10	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰N6/	2/12	
6	6-2	土師器	甕	e4	包含層	25.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/4	1/12	
7	5-2	土師器	甕	a4	側溝	16.3	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや粗	赤橙10R6/6	3/12	
8	4-3	土師器	甕	a3	包含層	12.4	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	3/12	
9	4-2	須恵器	杯	g13	包含層	10.8	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付高台 内;ロクロナデ	密	灰白N7/	3/12	
10	7-1	土師器	長胴甕	a2	カクラン	24.6	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	6/12	
11	1-4	土師器	壺or甕	r35	包含層	—	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	粗	にぶい黄橙10YR7/2	3/12	
12	2-4	白磁	椀	q19	包含層	(底)5.2	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1 (釉)灰オリーブ7.5Y6/2	(底)完存	外面に文様
13	1-3	陶器	椀	q32	包含層 (褐灰砂)	(底)7.2	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ	密	灰白2.5Y7/1	4/12	灰釉？
14	3-2	瓦器	椀	d3	SD19	12	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	
15	3-4	瓦器	椀	c3	P3	14.8	外;指オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	3/12	
16	8-1	須恵器	鉢	s34	SR1	(高台)14.2	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付高台→ヘラ切り？ 内;ロクロナデ	やや密	灰白N8/0	3/12	
17	2-2	土師器	羽釜	p16	側溝	—	外;貼付ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ハケメ？→ヨコナデ	やや密	灰黄褐10YR5/2	2/12	外面に煤付着
18	3-1	瓦器	皿	r29	カクラン	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	7/12	
19	3-5	瓦器	皿	r29	カクラン	8.9～9.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	11/12	
20	5-3	瓦器	椀	r17	包含層	15.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/	6/12	内面底部に暗文
21	4-5	土師器	へそ皿	a4	包含層	8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/6	6/12	
22	1-1	土師器	皿	q30	包含層	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	橙2.5YR7/6	4/12	
23	4-6	土師器	皿	r6	SD12	8.3	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	完存	
24	4-1	土師器	皿	q28	包含層	8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	6/12	
25	4-4	土師器	皿	q13	包含層	8.4	外;オサエ→ケズリ→ヨコナデ 内;オサエ→ケズリ→ヨコナデ	やや密	淡黄2.5Y8/3	11/12	
26	2-3	青磁	椀	q29	包含層	(底)6.4	外;ロクロナデ(施釉)→削出高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y7/1 (釉)オリーブ黄5Y6/3	3/12	内面底部に文様
27	8-2	須恵器	鉢	q29	包含層	(底)16.6	外;ロクロナデ→ケズリ？→へら切り？ 内;ロクロナデ	やや密	灰白N8/0・7/0	3/12	
28	3-3	土製品	土錘	p14	包含層	長さ3.9	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3	完存	

第17表　寺前遺跡遺物観察表

Ⅵ　寺前遺跡（第２次）

調査区は、上荒木地内の西側に所在し、今は水田となっているが、「寺前」という字名が示すとおり、遺跡の南東には「菩提寺跡」が所在する。

寺前遺跡の現況は水田であるが、現集落よりは一段低く、ごみ捨て場跡や排水路跡が残っていた。調査面積は233㎡である。

基本層序

調査区の中央は微高地となっており、そこから南北にそれぞれ低くなっていく。基本層序は表土下に床土・旧表土・床土があり、その下に包含層であるオリーブの褐色シルトが堆積している。その下ににぶい黄褐色砂質土がありその面で遺構が確認できたため検出を行っている。しかし調査区の南部・北部は地形的に下がっているため土層は安定しておらず、砂質土ベースで検出を行っている。

遺構

溝ＳＤ201　調査区南端にある東西方向に流れる溝で、幅1.2m、深さ10㎝である。

溝ＳＫ206　Ｅ14グリットで確認された遺構である。2.4m、幅１m、深さ15㎝の土坑である。

溝ＳＤ208　Ｅ７～13グリットで確認された溝である。北ほど幅が広く最大1.5mあり、深さは最大12㎝ほどの浅い溝である。埋土から黒色土器などが出土している。９世紀頃の遺構であろう。

溝ＳＤ209　Ｄ２・３グリットで確認された幅1.2m、深さ60㎝の溝である。

流路ＳＲ212　Ｅ４・５グリットで確認した遺構である。幅約４m前後で深さは40㎝ほどである。埋土からは土師器・黒色土器・土錘が出土している。

土坑ＳＫ218（第44図）　Ｅ７グリットで確認した土坑である。長径１m、短径0.9mの不整形な楕円形である。深さは36㎝ほどで、無頸の壺が土師皿を３枚重ねて蓋をした状態で出土した。底にも土師皿が２枚重ねられ、その上に壺が置かれていた。当初は骨壺と考えられたが、壺の中には少量の泥状の堆積物があったものの、骨などは出土していないため土坑の性格は特定しがたい。

遺物（第43図）

溝ＳＤ208（１～４）　土師器・黒色土器が出土している。１・２は土師器皿で、３・４は黒色土器の椀の高台である。内面が黒くＡ類[1]に相当する。

流路ＳＲ212（５～９）　土師器・黒色土器・土製品が出土している。５は土師器甕で、短い口縁部に上半分が膨らみをもつ形態を呈する。６は土師器皿である。７～９は黒色土器Ａ類である。やや高い高台をもち、口径14.4㎝、器高4.8㎝のもの（７）と、口径15㎝前後、器高5.3㎝で断面三角状の高台をもつもの（８・９）に分類される。

土坑ＳＫ218（10）　10は土師器の皿である。口縁部の外面にはヨコナデが施され、内面にはハケ目が確認できる。

土坑ＳＫ213（11）　11は土師器皿である。薄手のもので、外面にはオサエがみられる。

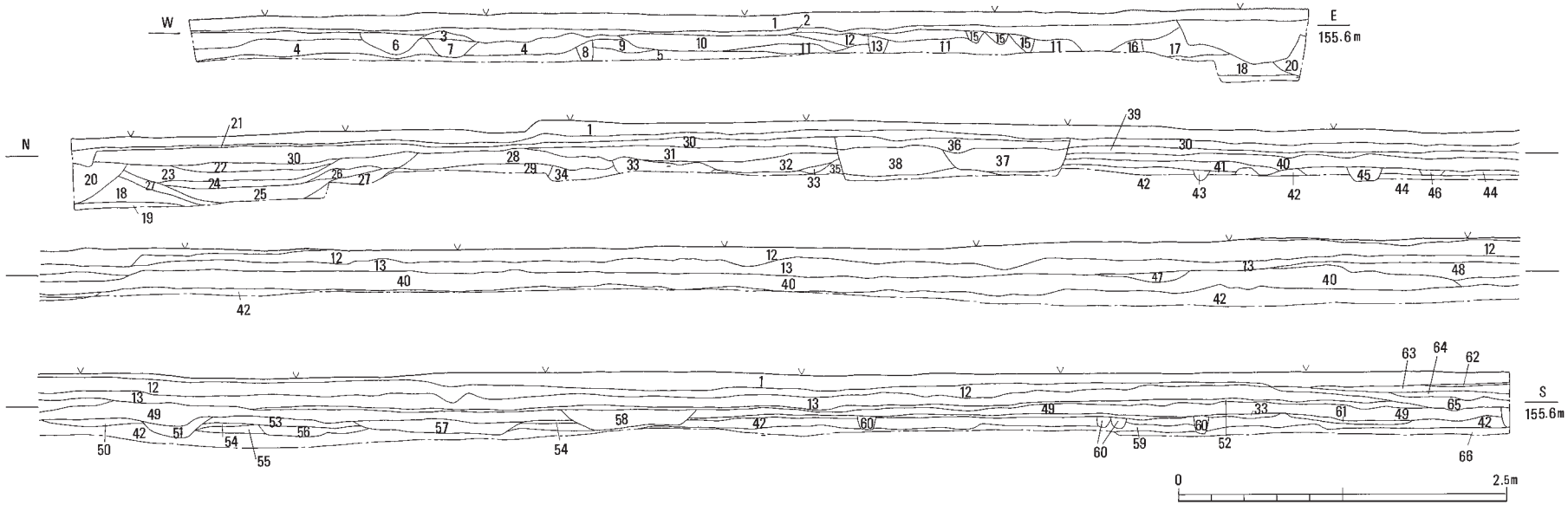
溝ＳＤ209（12）　12は土師器皿である。口径は13㎝で、内外面とも横ナデが施される。

Ｐｉｔ・包含層出土の土錘（13～20）　13～20は土錘である。長さは2.9～4.5㎝で、円筒形のものや、切子玉のような形をしたものもある。

土坑ＳＫ218（21～26）　土師器が出土している。21～25は土師器皿である。26は土師器の壺で、口縁部はすぼまって終わる。外面には粘土紐の積み上げ痕が残り、板ナデが施されるなど粗製の土器である。底部には籾殻痕が確認できる。

包含層（27～46）　瓦器・瓦質土器・陶器などが出土している。27～31は土師器皿である。27・28はいわゆる「ての字皿」である。29は内彎気味の口縁をもち、30はやや上げ底である。34は黒色土器Ａ類である。35は土師器の杯、37は瓦質土器の椀、38は土師器の鍋、39は土師器の椀である。口縁部外面に墨書らしき痕跡がみられるが判然としない。40はロクロ土師器で底部に回転糸切り痕が確認できる。41・43は灰釉陶器の高台である。43は猿投産とみられる。44は青磁椀の高台である。

また、小片であるため図化していないが緑釉陶器片も出土している。（豊田）



1 耕作土
2 5B6/1青灰色シルト
3 10YR5/6黄褐色シルト
4 10YR4/2灰黄褐色砂質土
5 10YR3/3暗褐色砂質土(礫混じり)
6 2.5Y5/3黄褐色シルト
7 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
8 7.5YR4/2灰褐色砂質土(礫混じり)
9 7.5YR4/3褐色砂質土(鉄分含む)
10 2.5Y4/1黄灰色シルト(鉄分含む)
11 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
12 2.5Y5/4黄褐色砂質土(鉄分含む)
13 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土(鉄分含む)
14 2.5Y6/2灰黄色砂質土
15 2.5Y6/3にぶい黄色砂質土
16 2.5Y5/3黄褐色砂質土
17 10YR6/6明黄褐色細砂
18 2.5Y4/4オリーブ褐色細砂
19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色細砂
20 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
21 2.5Y6/1黄灰色シルト(鉄分含む)
22 2.5Y4/6オリーブ褐色シルト
23 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト(礫混じり)
24 2.5Y5/4黄褐色シルト
25 10YR4/2灰黄褐色シルト(鉄分含む)
26 5Y4/1灰色砂質土
27 5Y4/2灰オリーブ砂質土(鉄分含む)
28 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土
29 10YR4/2灰黄褐色砂質土(礫混じり)
30 2.5Y5/2暗灰黄色シルト(鉄分含む)
31 2.5Y5/3黄褐色砂質土(礫混じり)
32 5Y4/4暗オリーブ砂質土
33 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(礫混じり)
34 10YR4/4褐色砂質土(礫混じり)
35 2.5Y6/2灰黄色砂質土(礫混じり)
36 10YR5/1褐灰色シルト
37 2.5Y4/1黄灰色砂質土(円礫多く含む)
38 2.5Y5/1黄灰色シルト(鉄分含む)
39 7.5Y4/2灰オリーブ色シルト(鉄分含む)
40 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土(鉄分含む)
41 10YR4/2灰黄褐色砂質土
42 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土(鉄分含む)
43 10YR4/3にぶい黄橙色砂質土(鉄分含む)
44 5Y4/4暗オリーブ色砂質土
45 5Y4/2灰オリーブ色砂質土(鉄分含む)(SD217埋土)
46 2.5Y5/1黄灰色シルト
47 5Y4/2灰オリーブシルト
48 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土
49 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト
50 5Y4/2灰オリーブ砂質土
51 2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土(SD206埋土)
52 2.5Y5/3黄褐色シルト
53 2.5Y5/4黄褐色シルト
54 5Y5/2灰オリーブシルト
55 2.5Y5/2暗灰黄色砂質土
56 2.5Y6/4にぶい黄色シルト(SD203埋土)
57 5Y4/3灰オリーブ色砂質土(SD205埋土)
58 5Y4/2灰オリーブ色砂質土(SD204埋土)
59 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土
60 5Y6/2灰オリーブ色砂質土
61 5Y7/1灰白色(SD201埋土)
62 2.5Y4/1黄灰色シルト
63 5Y5/1灰色シルト
64 5BG6/1青灰色シルト
65 10Y6/1灰色シルト(明黄褐色シルト混じり)
66 7.5Y7/1灰白色砂

第41図　寺前遺跡（第２次）調査区土層断面図（１：100）

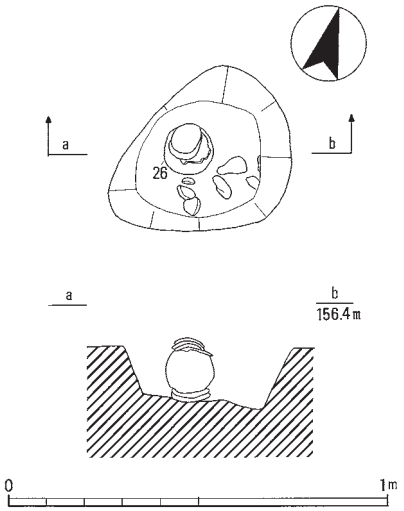
第42図　寺前遺跡（第２次）遺構平面図（１：200）

遺構番号	性　格	時　期	グリット	特徴・形状・計測数値など
ＳＤ２０１	溝	不明	Ｆ・Ｅ19	土師器片
ＳＫ２０２	土坑	中世前期	Ｅ16	埋土に礫混じる
ＳＤ２０３	溝	不明	Ｅ16	ＳＤ204・205と同一
ＳＤ２０４	溝	不明	Ｅ15・16	
ＳＤ２０５	溝	中世前期	Ｅ15	土師器片・瓦器片
ＳＫ２０６	土坑	中世前期	Ｅ14	土師器片・瓦器片
ＳＫ２０７	土坑	中世前期	Ｅ13	ＳＤ２０８より新しい
ＳＤ２０８	溝	平安末	Ｅ７～13	ＳＤ２１７より新しい
ＳＤ２０９	溝	中世	Ｄ２・３	ＳＤ２２１よりも古い
ＳＫ２１０	土坑	古代	Ｅ14	ＳＤ２１１より新しい
ＳＤ２１１	溝	古代	Ｅ14	土師器片
ＳＲ２１２	河道	古代	Ｅ４・５	土師器片。埋土に炭化物混じる
ＳＫ２１３	土坑	中世	Ｄ３	ＳＤ２２１よりも新しい。土師器片。
ＳＤ２１４	溝	不明	Ｅ５	
ＳＤ２１５	溝	古代	Ｅ６	土師器片
ＳＫ２１６	土坑	中世前期	Ｅ７	
ＳＤ２１７	溝	不明	Ｅ７	
ＳＫ２１８	土坑	中世前期	Ｅ７	無頸の壺が、土師器皿で蓋をされて出土した。 土坑墓か？
ＳＫ２１９	土坑	不明	Ｅ７	
ＳＤ２２０	溝	不明	Ｅ４	
ＳＤ２２１	溝	不明	Ｄ２・３	

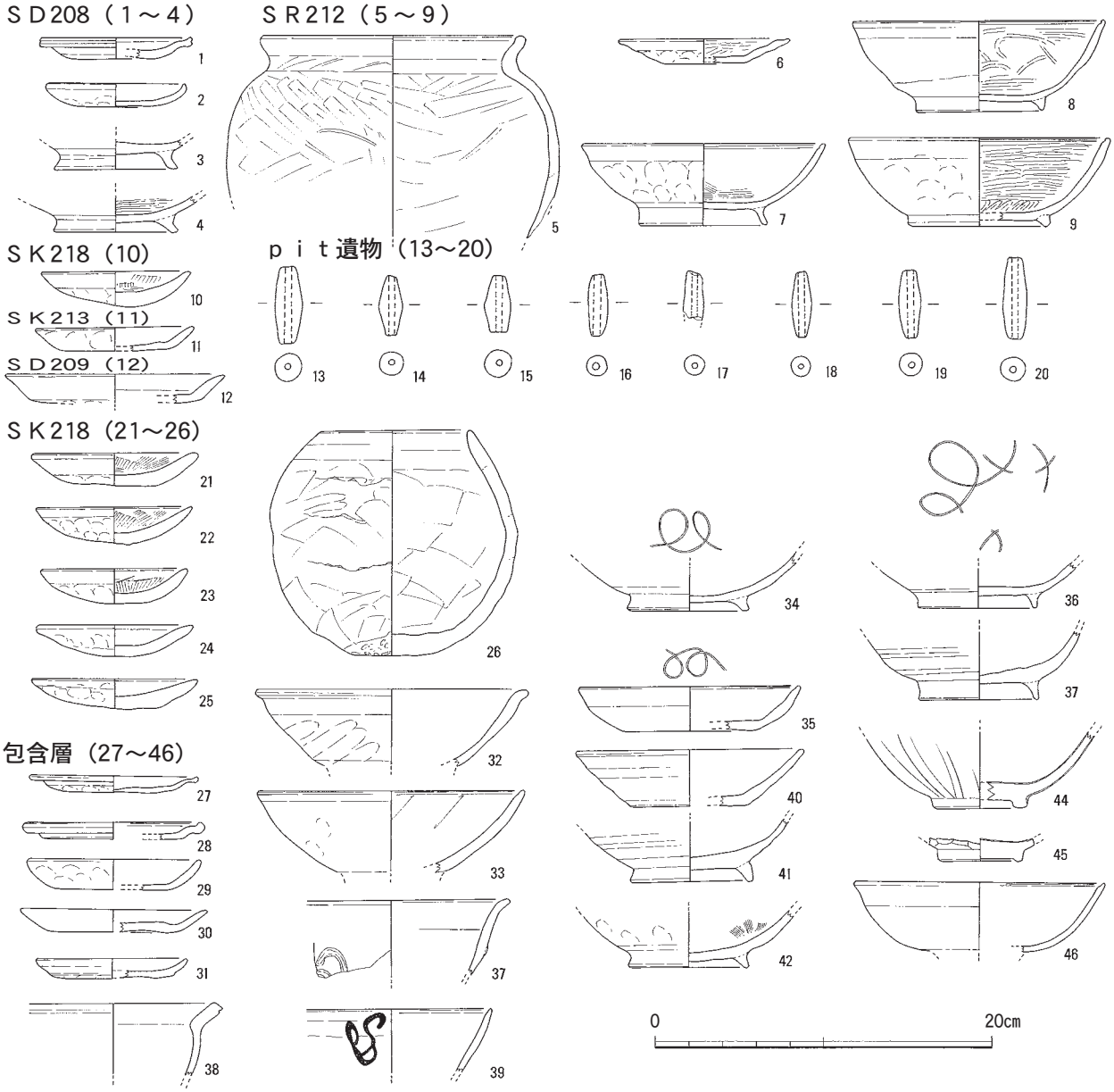
第18表　寺前遺跡（第２次）遺構一覧表

［註］

（1）田中琢「古代・中世における手工業生産の発達（4）
　　畿内」（『日本の考古学』Ⅳ　1967年）



第44図　土坑ＳＫ218土器出土平面・断面図（１：２）



第43図　寺前遺跡（第２次）出土遺物実測図（１：４）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
1	5-3	土師器	皿	E8	SD208	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	「て」の字状口縁
2	5-4	黒色土器	椀A類	E8	SD208	8.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	4/12	
3	5-2	黒色土器	椀A類	E8	SD208	(高台) 7.2	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ？	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	小片	
4	5-1	土師器	椀	E8	SD208	(高台) 7.3	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	橙2.5YR6/6	5/12	
5	4-1	土師器	甕	E5	SR212	15.6	外;ケズリ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐10YR4/2	3/12	
6	5-6	土師器	皿	E5	SR212	10.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;工具ナデ？→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	2/12	
7	4-2	黒色土器	椀A類	E5	SR212	14.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ハケ後ミガキ？→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	
8	4-3	黒色土器	椀A類	E5	SR212	15	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	4/12	
9	4-4	黒色土器	椀A類	E5	SR212	15.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい黄橙10YR7/4	4/12	
10	5-5	土師器	皿	E7	SK218-5	8.6～9.2	外;工具ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/3	8/12	
11	5-7	土師器	皿	D3	SK213	9.4	外;オサエ→ナデ 内;ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	
12	5-8	土師器	皿	D3	SD209	13	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	1/12	
13	6-1	土製品	土錘	E7	pit1	長さ4.5　幅1.7	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	完存	
14	6-2	土製品	土錘	E15	pit4	長さ3.5　幅1.4	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	完存	
15	6-3	土製品	土錘	E4	包含層	長さ3.3　幅1.6	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	橙2.5YR6/6	完存	
16	6-5	土製品	土錘	E7	包含層	長さ3.6　幅1.15	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	明赤褐2.5YR5/8	完存	
17	6-6	土製品	土錘	E7	包含層	長さ2.9　幅1.2	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2	完存	
18	6-4	土製品	土錘	E6	包含層	長さ3.85　幅 1.15	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや粗	黒褐7.5YR3/2	完存	
19	6-8	土製品	土錘	E8	包含層	長さ4.0　幅1.3	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	完存	
20	6-7	土製品	土錘	E7	包含層	長さ4.8　幅1.4	外;ナデ→穿孔 内;ナデ	やや密	灰黄2.5Y7/2	完存	
21	7-2	土師器	皿	E7	SK218	9.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完形	
22	7-3	土師器	皿	E7	SK218	9.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完形	
23	7-4	土師器	皿	E7	SK218	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完形	
24	7-5	土師器	皿	E7	SK218	9.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完形	
25	7-6	土師器	皿	E7	SK218	9.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい褐7.5YR5/4	6/12	
26	7-1	土師器	壺	E7	SK218	8.4	外;ナデ・オサエ→工具ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	完存	底部に籾殻痕あり
27	2-3	土師器	皿	E7	包含層	10	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙2.5YR6/6	4/12	「て」の字皿
28	1-1	土師器	皿	C1・2	包含層	10.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	「て」の字皿
29	1-2	土師器	皿	E3	包含層	10.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	4/12	
30	1-3	土師器	皿	E5・6	排水溝	11	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	2/12	
31	2-5	土師器	皿	E8	包含層	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	4/12	
32	1-6	黒色土器	椀A類	E6	包含層	16.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	3/12	墨書？
33	1-5	黒色土器	椀A類	E5・6	包含層	15.8	外;ナデ・オサエ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい赤褐色5YR4/4	2/12	
34	1-7	黒色土器	椀A類	E7	包含層	(高台)7.2	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ハケメ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	暗文あり
35	2-6	土師器	杯	E12	包含層	13.1	外;ナデ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙2.5YR7/6	2/12	暗文？
36	2-1	黒色土器	椀	E7	包含層	(高台) 7.1～7.3	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	やや粗	橙5YR6/6	(高台)完存	暗文あり
37	3-1	瓦質土器	椀	E12	包含層	―	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰白N8/0	小片	
38	1-4	土師器	鍋	E5・6	包含層	―	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	暗灰N3/0	小片	
39	2-4	土師器	椀	E7	包含層	―	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	小片	墨書？
40	3-2	土師器	椀	―	包含層	13.5	外;ロクロナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ	やや粗	橙7.5YR7/6	3/12	ロクロ土師器
41	3-4	灰釉陶器	椀	E7	包含層	(高台) 7.2	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ	密	灰白N8/0	(高)完存	自然釉　重ね焼き痕
42	2-2	黒色土器	椀	E7	包含層	(高台) 7.1	外;ナデ・オサエ→貼付高台ナデ 内;工具ナデ→ハケメ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	5/12	
43	3-5	灰釉陶器	椀	E7	包含層	(高台) 7.1	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ→糸切り痕 内;ロクロナデ	密	灰白N8/0	6/12	猿投 重ね焼き痕　自然釉
44	3-6	青磁	椀	E8	包含層	(高台) 5.6	外;ロクロナデ(施釉)→削り出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N7/0(釉)灰オリーブ7.5Y5/2	(高)完存	
45	3-3	陶器	椀	E6	包含層	(高台) 5.0	外;ロクロケズリ→削り出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白5GY8/1	9/12	加工円盤
46	2-7	黒色土器	椀	E12	包含層	14.9	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	2/12	

第19表　寺前遺跡（第２次）遺物観察表

Ⅶ　荒木氏館跡

下荒木の集落に所在する荒木氏館跡（現荒木氏宅）の東側の水路建設に伴う調査で、調査面積は1,680㎡であった。地割より堀の存在が想定され、堀の規模が、現状の屋敷地よりも広がることが充分に予想された。

北地区

基本層序（第49図）　遺跡の現状は水田である。耕作土・床土を除去すると包含層が検出されたが、南端は耕作土直下で遺構面を確認している。

溝ＳＤ１（第47図）　幅５ｍ以上、深さ約1.2ｍの溝である。調査区の北端で西側に曲がり。南へ向かって伸びるが、まっすぐではなくＢ６・７グリットで緩く西側に屈曲する箇所がある。南側は幅は５ｍ以上と広い。調査区中央部では溝の内側の肩部が確認された。また、内側からは、溝に流れ込む溝を数本確認している。

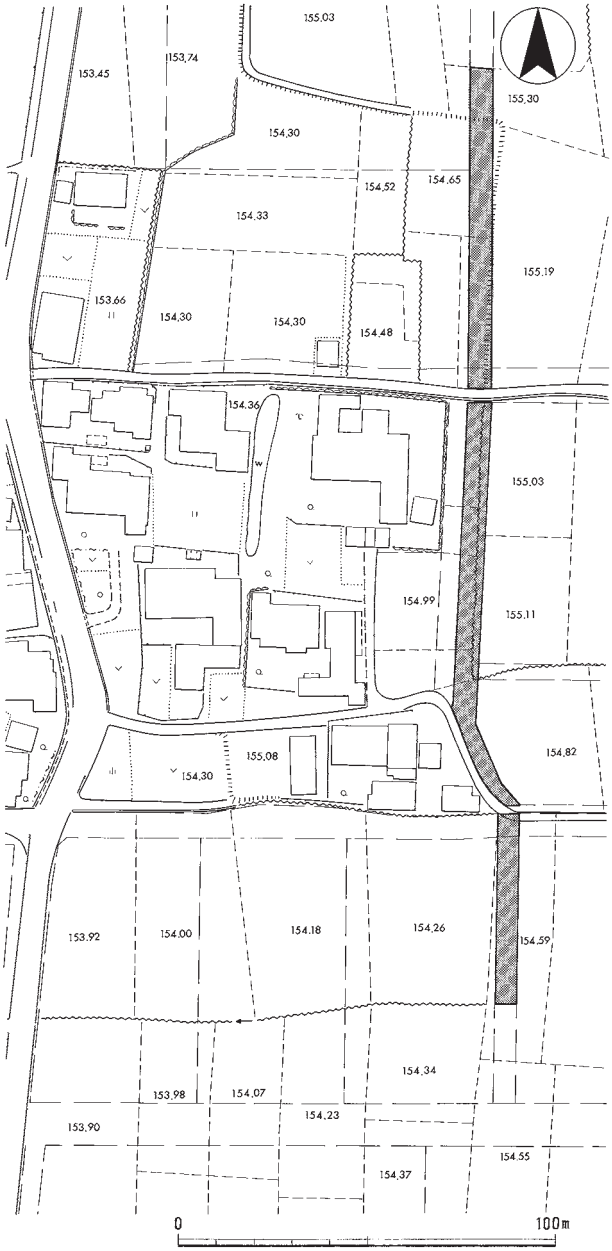
溝の断面には、中央部が窪み、細砂が堆積しているが、埋土上層になると、拳ほどの礫が堆積していることから、最初は水が澱んでいた状態であったが、後にはある程度の水流があったことが窺える。また、堀の断面は逆台形や船底形といった形状ではなく、中央部はやや窪むものの全体としてはややなだらかに落ちており、城館の堀にしては防御の面で不自然である。しかも、溝は中央部でやや西に彎曲していることから、堀と捉えるよりは水路と考えたい。レベル差から、南から北端部の方向へ流れていたと推定される。遺物は埋土下層からは、信楽産の擂鉢、軒丸瓦、軒平瓦、青磁などが出土しており、掘削時期については15世紀頃と考えられ、近世に埋没したものであろう。

溝ＳＤ２　幅1.2ｍ、深さ0.6ｍの溝で、溝SD１に流れ込んでいる。遺構埋土からは土師器皿、小型の茶釜、擂鉢のほか、鞴の羽口、鉄滓が多く出土している。出土遺物より14世紀後半頃と考えられる。付近に鍛冶に関連する遺構の存在を想起させるものである。

土坑ＳＫ３　幅約２ｍ、深さ約20㎝の円形の土坑である。検出当初は井戸と思われたが、浅いものであった。遺物は少量出土しているのみである。

土坑ＳＫ４　幅約0.8ｍ、深さ20㎝の楕円形の土坑である。SD１の肩部分に相当するため、土坑というよりは、溝のかた部分の澱みと考えることもできる。土坑内からは信楽産の擂鉢が出土している。

河道ＳＲ５（第47図）　Ｂ４・５グリットで確認した自然流路である。南東から北西方向に流れていたとみられる。流路のかた部分からは土師器の台付甕・甕、須恵器の杯身が出土しており、古墳時代後期頃の流路であろう。

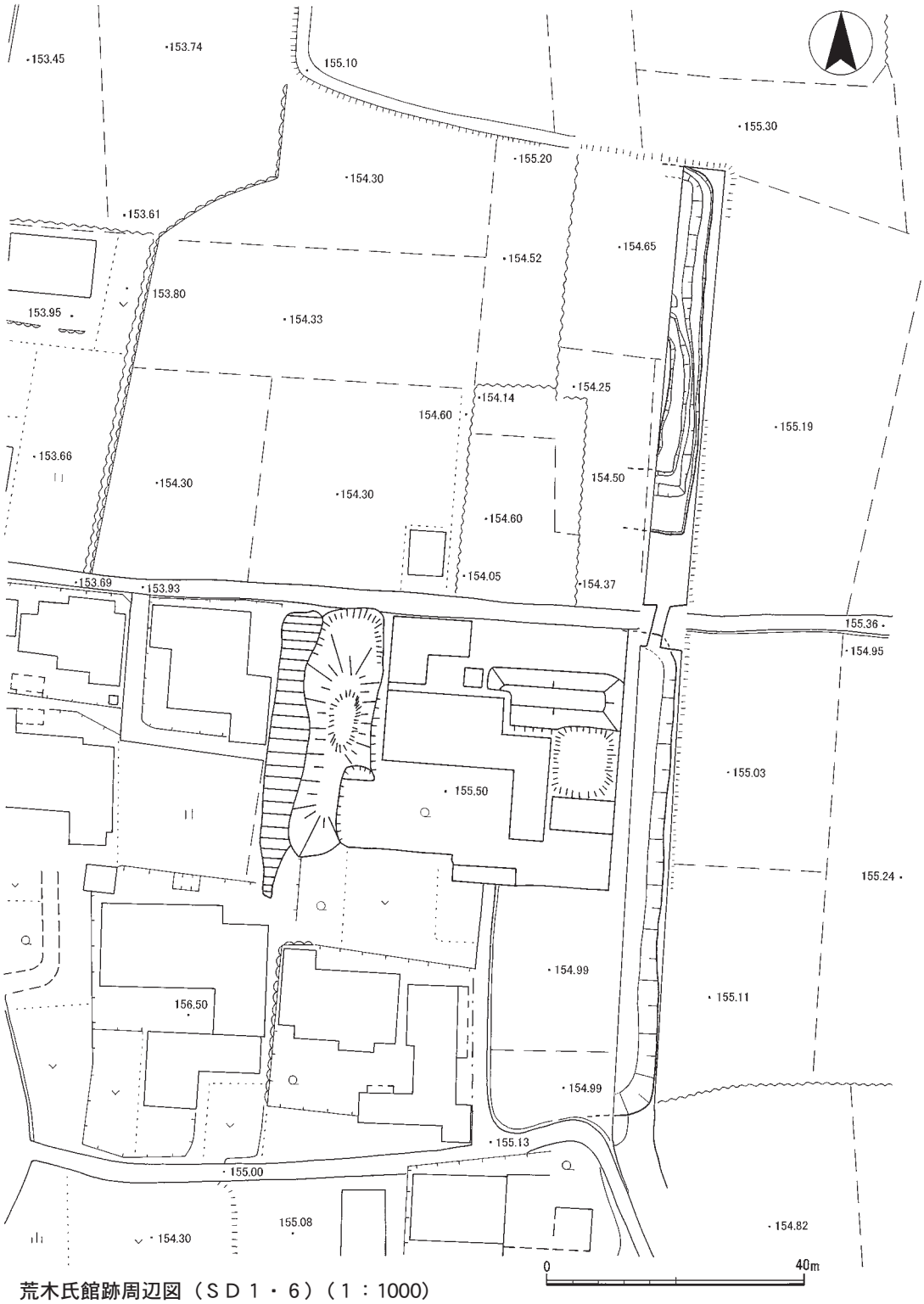


第45図　荒木氏館跡調査区位置図（１：2,000）

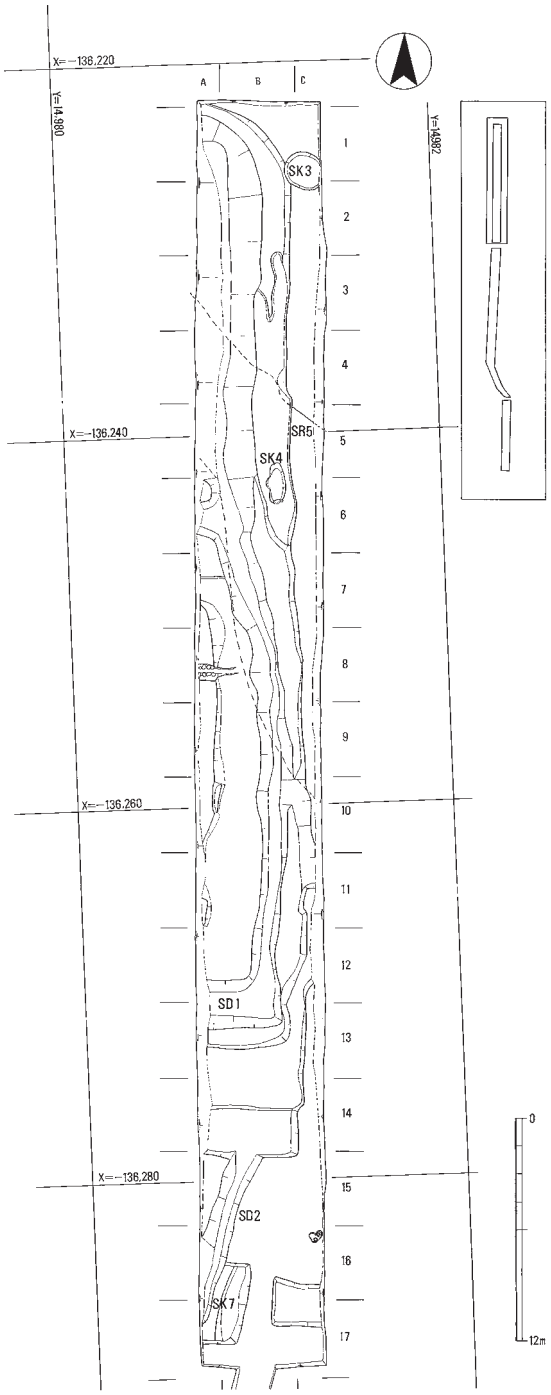
中地区

基本層序（第50・51図）　調査区の現況は水田である。耕作土を除去すると堀の肩が検出された。

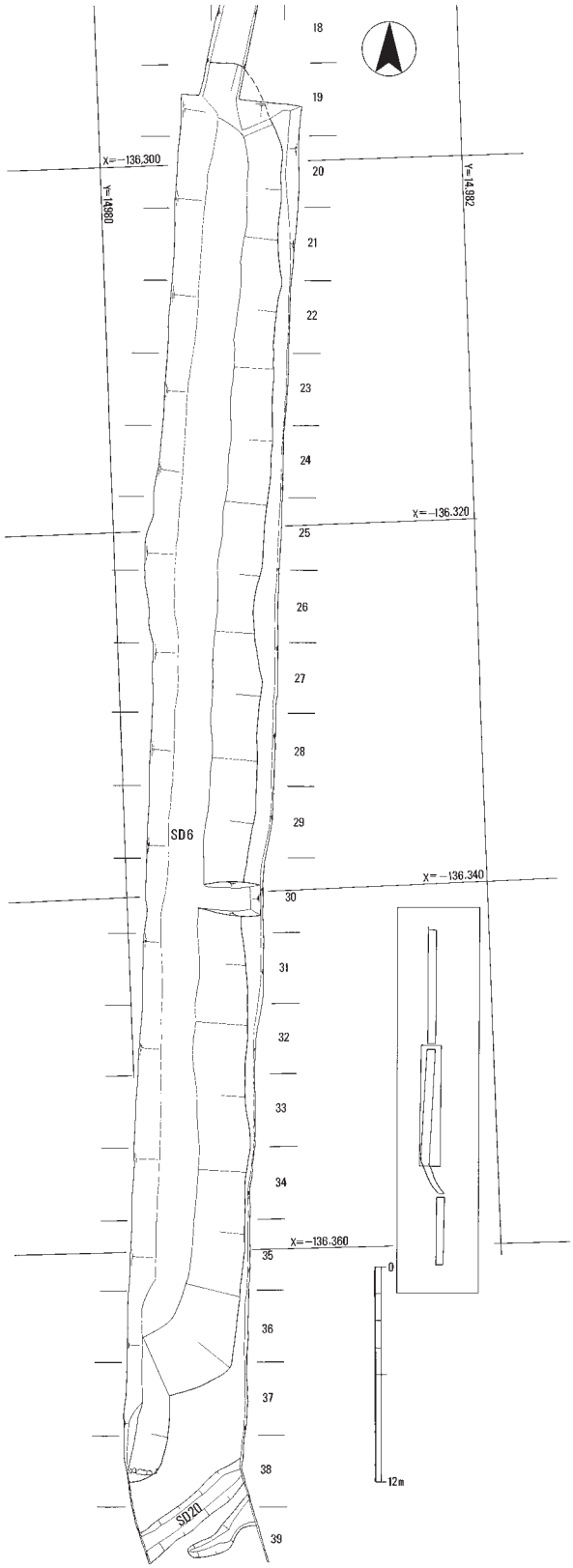
溝ＳＤ６（第48図）　Ａ・B19～37グリットで確認した遺構である。荒木氏館の堀である。調査区は、その大半が堀部分に相当し、外側の肩と堀の南北隅を確認したのみである。堀は、南北76m、深さ約2.2m、幅約5.5m以上の規模で、断面は逆台形を呈する。調査区中央部の土層断面（第52図）では、２度掘り直されていることが判明した。堀の南部に関しては３度ないしは４度ほど改変が加えられている（第51図）が、調査区が堀の一部のみの調査である



第46図　荒木氏館跡周辺図（ＳＤ１・６）（１：1000）



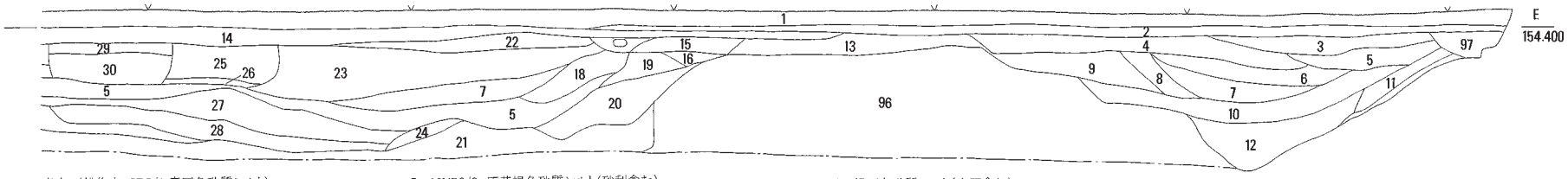
第47図　荒木氏館跡北地区遺構平面図（１：400）



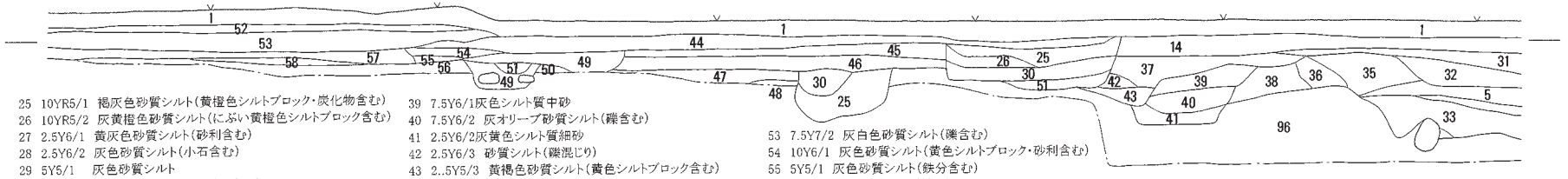
第48図　荒木氏館跡中地区遺構平面図（１：400）

ため、平面からの検討はできなかった。堀の埋土は拳より大きい川原石が大量に含まれている部分もあり、人為的に埋められた可能性が高い。

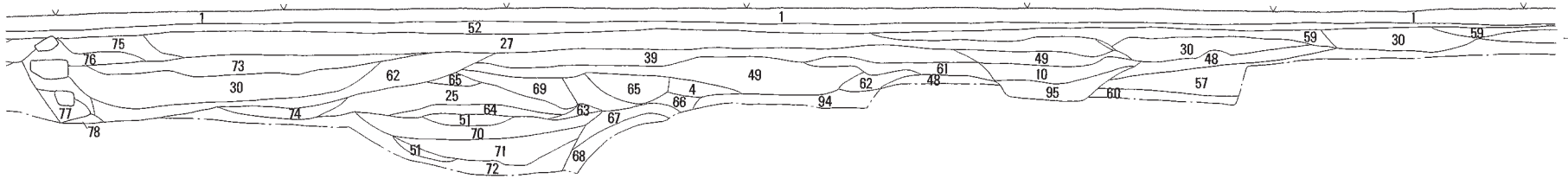
一旦埋没後、再掘削された堀については、幅最大4.5mの堀である。外側の肩部分には拳大の礫が並べられており、土留めのために施されたとみられる。埋土には拳ほどの大きさのものや小礫が大量に含まれており、人力での掘削では厳しいため、やむなく重機にて掘削した。最初の堀と再掘削後の堀に関しては15世紀～16世紀の擂鉢、土師器皿・瓦などが出土しており、堀の掘削時期は15世紀前半頃ではないかと考えられる。



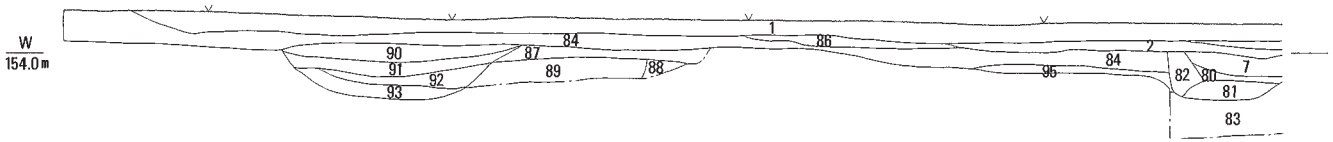
1 表土（耕作土 5B5/1 青灰色砂質シルト）
2 7.5Y6/1 灰色砂質シルト(礫混・床土)
3 5Y6/1 灰色砂質シルト(礫含む)
4 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト(砂利含む)
5 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト(砂利含む)
6 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト(砂利含む)
7 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト(砂利含む)
8 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(砂利含む)
9 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト(砂利含む)
10 10YR6/1 褐灰色砂質シルト(砂利含む)
11 10YR5/2灰黄褐色粗砂
12 10YR4/1 褐灰色粗砂(砂利含む)
13 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト(小石含む)
14 10YR7/1 灰白色砂質シルト(小石含む)
15 10YR5/3 にぶい黄橙色砂質シルト(礫含む)
16 7.5Y6/2 オリーブ砂質シルト(焼土・炭化物含む)
17 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
18 10YR5/4 にぶい黄橙色シルト質細砂
19 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質細砂(砂利含む)
20 10YR5/2 灰黄褐色粗砂(礫含む)
21 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂(礫含む)
22 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(砂利含む)
23 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
24 2.5Y5/3 黄褐色粗砂(砂利含む)



25 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(黄橙色シルトブロック・炭化物含む)
26 10YR5/2 灰黄橙色砂質シルト(にぶい黄橙色シルトブロック含む)
27 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト(砂利含む)
28 2.5Y6/2 灰色砂質シルト(小石含む)
29 5Y5/1 灰色砂質シルト
30 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト(礫多く含む)
31 5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト(礫含む)
32 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト(砂利含む)
33 2.5Y6/1 黄灰色シルト質細砂(砂利含む)
34 2.5Y6/1 黄灰色シルト質細砂
35 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト(礫混じり)
36 5Y5/1 灰色シルト質中砂
37 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(砂利含む)
38 5Y6/2 灰オリーブ中砂
39 7.5Y6/1灰色シルト質中砂
40 7.5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(礫含む)
41 2.5Y6/2灰黄色シルト質細砂
42 2.5Y6/3 砂質シルト(礫混じり)
43 2..5Y5/3 黄褐色砂質シルト(黄色シルトブロック含む)
44 2..5Y5/1 黄褐色砂質シルト(鉄分含む)
45 10YR5/1 褐灰色灰色シルト
46 10YR6/2 灰黄褐色
47 2.5Y6/2 灰黄色粗砂
48 5Y6/2 灰オリーブ疎砂
49 5Y5/1 灰色シルト
50 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト(砂利含む)
51 5Y5/1 灰色砂質シルト
52 10Y6/2 砂質シルト(鉄分含む)
53 7.5Y7/2 灰白色砂質シルト(礫含む)
54 10Y6/1 灰色砂質シルト(黄色シルトブロック・砂利含む)
55 5Y5/1 灰色砂質シルト(鉄分含む)
56 2.5Y6/1 黄灰色シルト質細砂
57 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(黄色シルトブロック・砂利含む)
58 5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト(小石含む)
59 10YR6/1 褐灰色砂質シルト(砂利含む)
60 10Y6/1 灰色シルト(灰色細砂含む)
61 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト(黄橙色シルト含む)
62 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(明黄灰色シルトブロック含む)
63 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト(炭化物含む)
64 5Y6/1 灰色砂質シルト(炭化物・灰白色シルトブロック・小石含む)
65 5Y5/1 灰色砂質シルト
66 7.5Y5/1 灰色砂質シルト(砂利含む)
67 5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(炭化物・砂利含む)
68 10Y6/1 灰色シルト質細砂(炭化物含む)
69 7.5Y5/1 灰色砂質シルト(炭化物・砂利含む)
70 7.5Y6/1 灰色砂質シルト(炭化物・土器片含む)

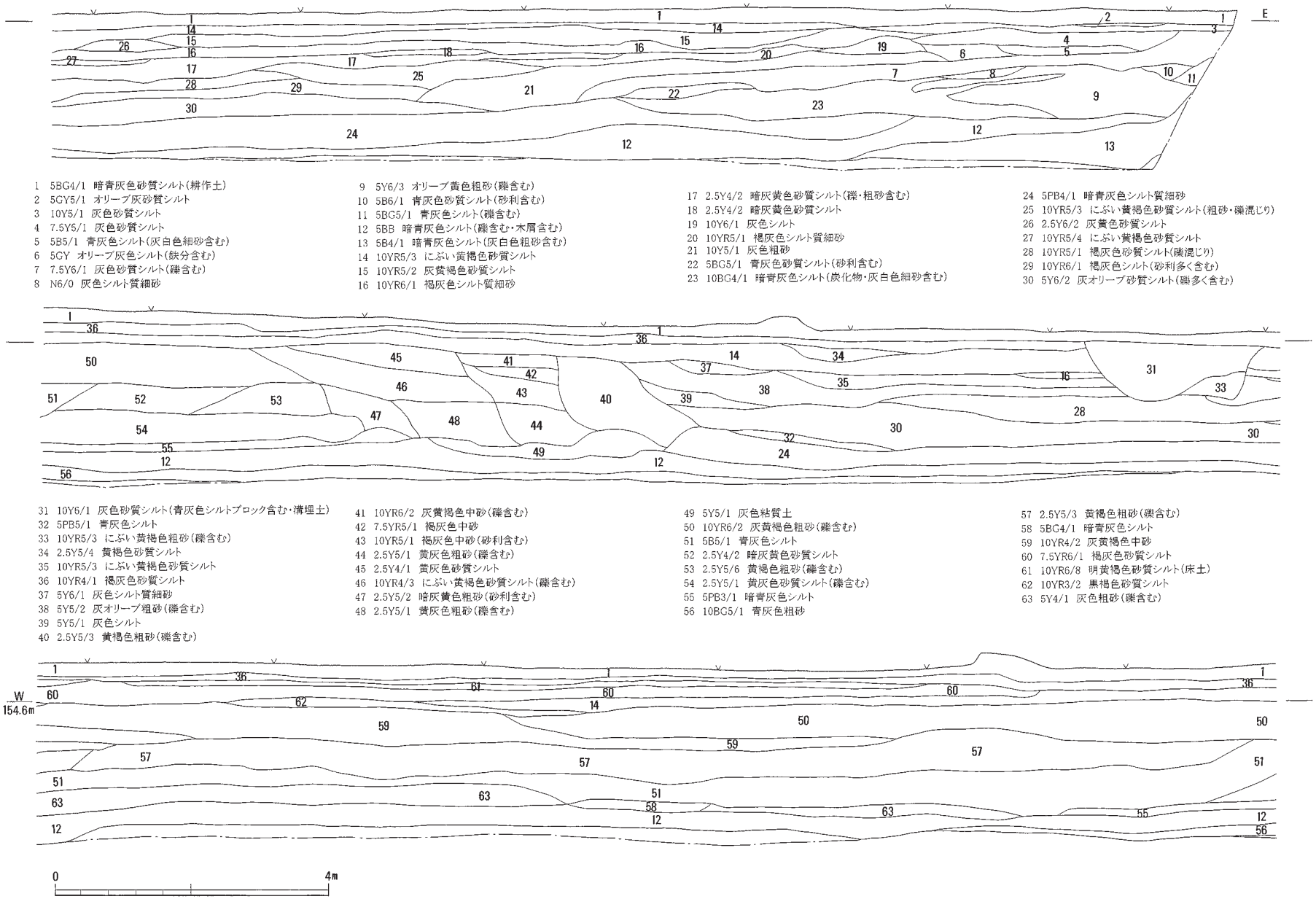


71 7.5Y5/1 灰色シルト(炭化物・砂礫含む)
72 7.5Y6/1 灰色シルト(炭化物・砂礫含む)
73 5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(黄色ブロック・砂利含む)
74 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト(砂利含む)
75 2.5GY オリーブ灰砂質シルト(砂利含む)
76 10G5/1 緑灰色砂質シルト(砂利含む)
77 7.5Y5/1 灰色砂質シルト(やや粘性あり)
78 7.5Y6/2 灰オリーブ粗砂(礫含む)
79 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(炭化物・砂利含む)
80 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト(鉄分含む)
81 2.5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト
82 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト(砂礫含む)
83 2.5Y7/3 浅黄色粗砂(地山)
84 7.5Y7/4 にぶい　色砂質シルト(礫含む・鉄分含む)
85 10YR7/6 明黄褐色粗砂(砂利含む)
86 5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト
87 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂(礫含む)
88 2.5Y5/4 黄褐色粗砂(礫含む)
89 2.5Y5/3 黄褐色粗砂(砂利含む)
90 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト(炭化物・鞴羽口・鉄さい)
91 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(礫含む)
92 5Y6/1 灰色砂質シルト(やや粘性あり)
93 7.5YR5/2 灰褐色砂質シルト(礫含む)



0 4m

第49図　荒木氏館跡北地区西壁土層断面図（1：80）

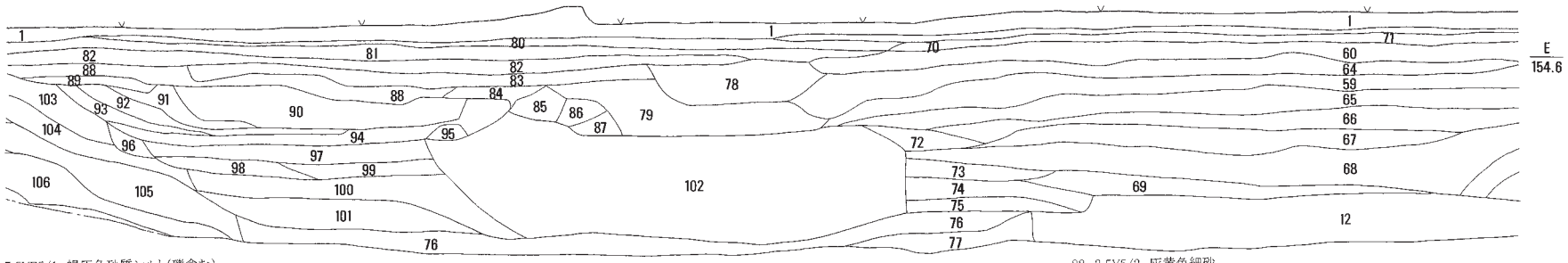


1 5BG4/1 暗青灰色砂質シルト(耕作土)
2 5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト
3 10Y5/1 灰色砂質シルト
4 7.5Y5/1 灰色砂質シルト
5 5B5/1 青灰色シルト(灰白色細砂含む)
6 5GY オリーブ灰色シルト(鉄分含む)
7 7.5Y6/1 灰色砂質シルト(礫含む)
8 N6/0 灰色シルト質細砂
9 5Y6/3 オリーブ黄色粗砂(礫含む)
10 5B6/1 青灰色砂質シルト(砂利含む)
11 5BG5/1 青灰色シルト(礫含む)
12 5BB 暗青灰色シルト(礫含む・木屑含む)
13 5B4/1 暗青灰色シルト(灰白色粗砂含む)
14 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
15 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
16 10YR6/1 褐灰色シルト質細砂
17 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト(礫・粗砂含む)
18 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
19 10Y6/1 灰色シルト
20 10YR5/1 褐灰色シルト質細砂
21 10Y5/1 灰色粗砂
22 5BG5/1 青灰色砂質シルト(砂利含む)
23 10BG4/1 暗青灰色シルト(炭化物・灰白色細砂含む)
24 5PB4/1 暗青灰色シルト質細砂
25 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(粗砂・礫混じり)
26 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
27 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト
28 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(礫混じり)
29 10YR6/1 褐灰色シルト(砂利多く含む)
30 5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(礫多く含む)

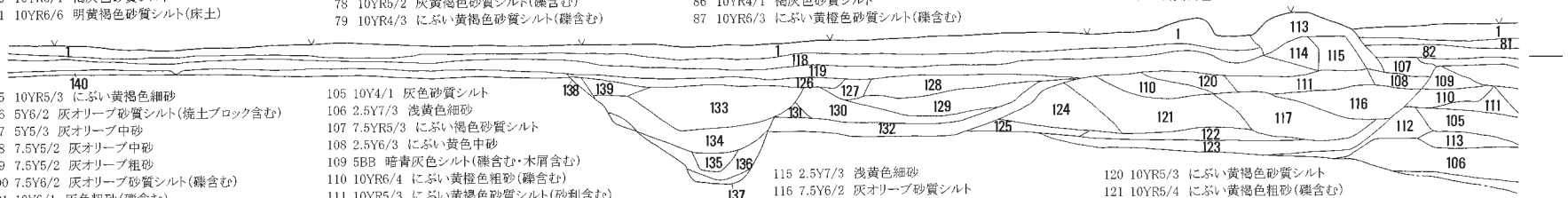
31 10Y6/1 灰色砂質シルト(青灰色シルトブロック含む・溝埋土)
32 5PB5/1 青灰色シルト
33 10YR5/3 にぶい黄褐色粗砂(礫含む)
34 2.5Y5/4 黄褐色砂質シルト
35 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
36 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
37 5Y6/1 灰色シルト質細砂
38 5Y5/2 灰オリーブ粗砂(礫含む)
39 5Y5/1 灰色シルト
40 2.5Y5/3 黄褐色粗砂(礫含む)
41 10YR6/2 灰黄褐色中砂(礫含む)
42 7.5YR5/1 褐灰色中砂
43 10YR5/1 褐灰色中砂(砂利含む)
44 2.5Y5/1 黄灰色粗砂(礫含む)
45 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルト
46 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト(礫含む)
47 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂(砂利含む)
48 2.5Y5/1 黄灰色粗砂(礫含む)
49 5Y5/1 灰色粘質土
50 10YR6/2 灰黄褐色粗砂(礫含む)
51 5B5/1 青灰色シルト
52 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
53 2.5Y5/6 黄褐色粗砂(礫含む)
54 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト(礫含む)
55 5PB3/1 暗青灰色シルト
56 10BG5/1 青灰色粗砂
57 2.5Y5/3 黄褐色粗砂(礫含む)
58 5BG4/1 暗青灰色シルト
59 10YR4/2 灰黄褐色中砂
60 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト
61 10YR6/8 明黄褐色砂質シルト(床土)
62 10YR3/2 黒褐色砂質シルト
63 5Y4/1 灰色粗砂(礫含む)

第50図 荒木氏館跡中地区土層断面図(1)(1:80)

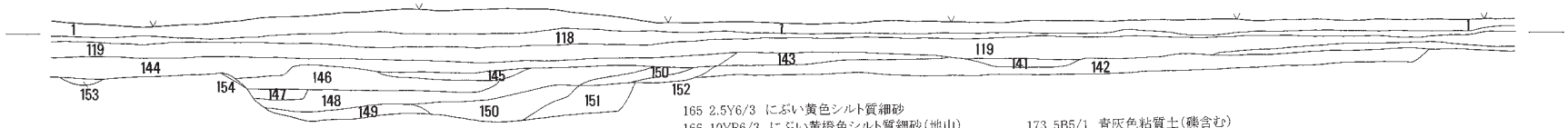
第51図　荒木氏館跡中地区土層断面図（2）（1：80）



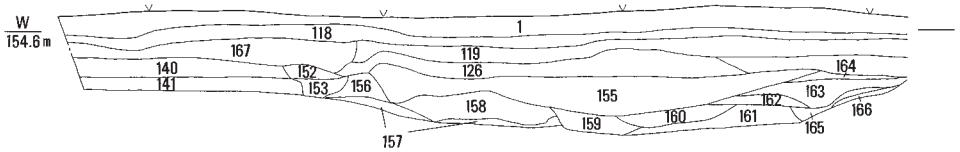
64 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト(礫含む)
65 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂
66 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト(砂利含む)
67 2.5Y6/2 灰黄色中砂
68 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト質中砂
69 5B4/1 暗青灰色シルト
70 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
71 10YR6/6 明黄褐色砂質シルト(床土)
72 5Y5/2 灰オリーブシルト(砂利含む)
73 2.5Y6/2 黄灰色シルト質細砂
74 2.5Y5/1 黄灰色シルト質細砂
75 10BG5/1 青灰色粘質土
76 10Y5/1 灰色粘質土(砂利含む)
77 7.5Y6/1 灰色シルト質細砂
78 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(礫含む)
79 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト(礫含む)
80 10Y4/2 オリーブ灰砂質シルト
81 7.5Y6/3 オリーブ黄色砂質シルト
82 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト
83 2.5GY4/1 暗オリーブ灰砂質シルト
84 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト(砂利含む)
85 10YR3/3 暗褐色砂質シルト(砂利含む)
86 10YR4/1 褐灰色砂質シルト
87 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト(礫含む)
88 2.5Y5/2 灰黄色細砂
89 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
90 砂礫
91 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト
92 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(焼土含む)
93 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
94 10YR6/8 明黄褐色シルト

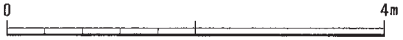


95 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
96 5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(焼土ブロック含む)
97 5Y5/3 灰オリーブ中砂
98 7.5Y5/2 灰オリーブ中砂
99 7.5Y5/2 灰オリーブ粗砂
100 7.5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(礫含む)
101 10Y6/1 灰色粗砂(礫含む)
102 10YR5/1 褐灰色粘質土(礫多く含む・粘性強い)
103 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(礫混じり)
104 10Y5/1 灰色砂質シルト
105 10Y4/1 灰色砂質シルト
106 2.5Y7/3 浅黄色細砂
107 7.5YR5/3 にぶい褐色砂質シルト
108 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂
109 5BB 暗青灰色シルト(礫含む・木屑含む)
110 10YR6/4 にぶい黄橙色粗砂(礫含む)
111 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト(砂利含む)
112 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト(砂利含む)
113 2.5Y6/4 にぶい黄色中砂
114 10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト
115 2.5Y7/3 浅黄色細砂
116 7.5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト
117 2.5Y6/4 にぶい黄色中砂(砂利含む)
118 2.5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト
119 5Y6/2 灰オリーブ砂質シルト(炭化物含む)
120 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
121 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂(礫含む)
122 10YR6/2 灰黄褐色シルト質細砂
123 2.5Y6/1 灰色粘質土
124 2.5Y5/3 黄褐色中砂(礫含む)



125 10YR6/2 灰黄褐色シルト
126 7.5Y5/1 灰色砂質シルト(土器片・礫含む)
127 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト(砂利含む)
128 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト
129 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト
130 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
131 5Y6/1 灰色粗砂
132 5Y5/1 灰色シルト
133 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト(礫大量に含む)
134 2.5Y6/3 にぶい黄色砂質シルト(小石含む)
135 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
136 2,5Y6/2 灰黄色粘質土
137 2.5Y6/1 黄灰色シルト質中砂
138 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質シルト(礫含む)
139 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト
140 7.5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト(砂利含む)
141 5Y7/3 灰オリーブシルト質細砂(鉄分含む)
142 5Y6/1 灰色砂質シルト(土器片・炭化物・包含層)
143 10Y6/2 オリーブ灰砂質シルト
144 10YR5/1 褐灰色砂質シルト(包含層)
145 10YR6/4 にぶい黄褐色砂質シルト(小石含む)
146 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(礫含む)
147 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト
148 10YR5/2 灰黄褐色砂質シルト(砂利含む)
149 2.5Y4/1 黄灰色中砂
150 7.5YR5/1 褐灰色砂質シルト(炭化物・礫含む)
151 5Y5/1 灰色砂質シルト(礫多く含む)
152 5Y6/1 灰色砂質シルト
153 2.5Y5/3 黄褐色シルト質細砂
154 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト質細砂
155 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト(礫含む)
156 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
157 5Y6/1 灰色シルト中砂
158 10YR6/2 灰黄褐色砂質シルト(礫含む)
159 10YR5/1 褐灰色砂質シルト
160 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト(土器片含む)
161 2.5Y5/2 灰黄色細砂
162 2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
163 5Y6/1 灰色砂質シルト(炭化物含む)
164 7.5Y6/1 灰色砂質シルト
165 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質細砂
166 10YR6/3 にぶい黄橙色シルト質細砂(地山)
167 5GY5/1 オリーブ灰砂質シルト(礫含む)
168 2.5Y7/4 浅黄色粗砂(礫含む)
169 2.5Y6/3 にぶい黄色粗砂
170 10YR5/2 灰黄褐色粗砂(鉄分含む)
171 5GY5/1 オリーブ灰シルト質粗砂
172 5BG5/1 青灰色シルト(砂利含む)
173 5B5/1 青灰色粘質土(礫含む)
174 N5/0 灰色シルト質粗砂(礫含む)
175 7.5Y5/1 灰色砂質シルト(礫含む)
176 10Y5/1 灰色シルト(礫含む)
177 7.5Y5/2 灰オリーブ砂質シルト(砂利含む)
178 10YR7/6 明黄褐色砂質シルト(床土)
179 10YR5/1 褐灰色粗砂(礫含む)





また、館の北部分の堀に関しては、南北28mほどの最終段階とみられる堀が確認でき、近世に館の規模が縮小したものと考えられる。埋土中には近世の擂鉢や伊賀焼の急須などが出土しており、18世紀頃に埋没したと考えられる。

土坑ＳＫ７　Ｂ16・17グリットで検出した遺構である。ＳＤ２に切られているため全体は不明であるが、方形の土坑である。竪穴住居と想定して掘削を始めたが、ピット、竈等が確認できなかったため土坑と判断した。埋土からは少量であるが須恵器・土師器片が出土している。

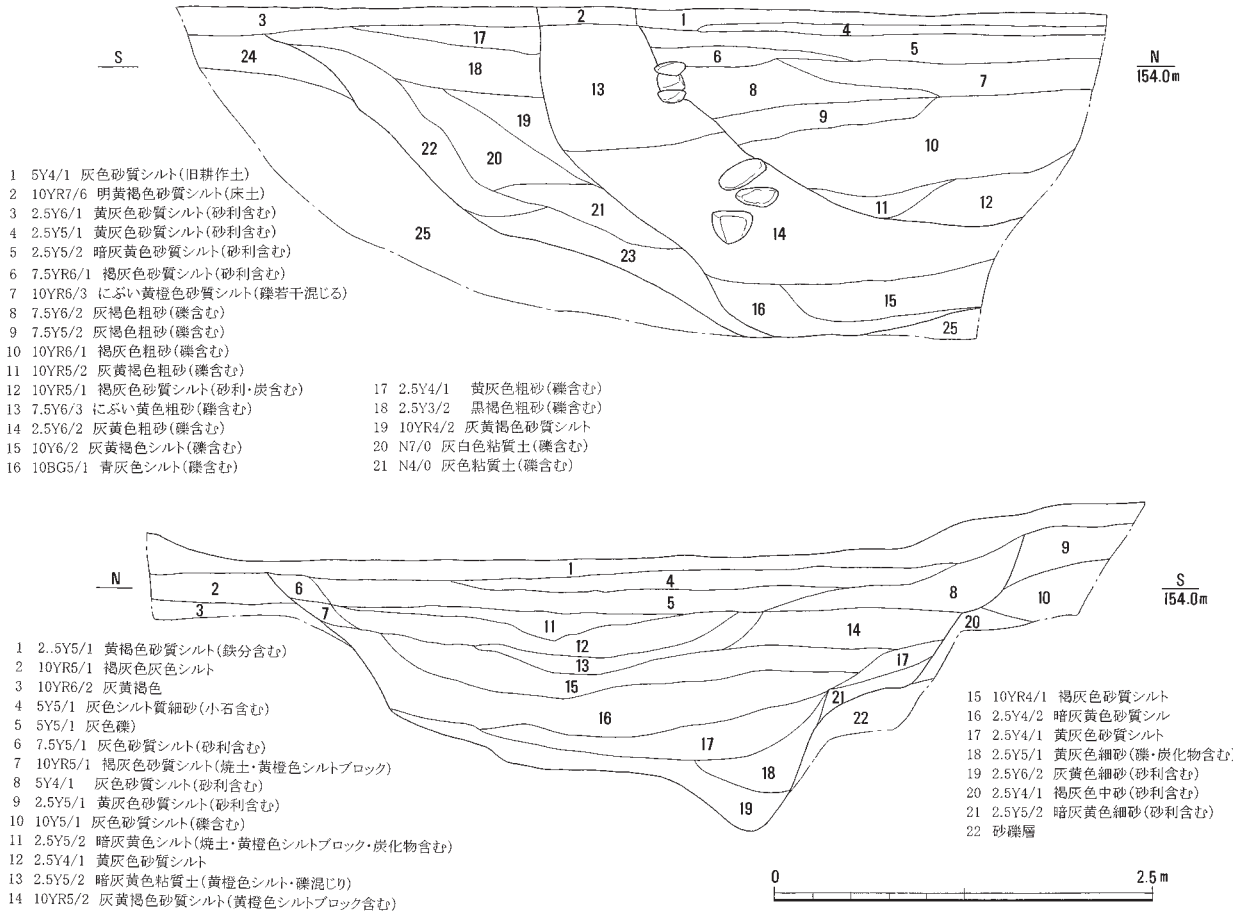
土坑ＳＫ10　Ｃ43・44グリットで検出した遺構である。埋土には、炭化物と拳大の礫が混じっていたが、遺構の性格は不明である。

溝ＳＤ20　Ａ･Ｂの38･39グリットで確認した遺構で、幅2.8m、深さ1.2m前後の溝である。埋土下層には粘土層があり、埋土上層には礫が多く含まれおり、恒常的に通水していたものとみられ、溝は底のレベルより北東方向から南西方向に流れていたものと考えられるが、堀に接続しているのか否かは、調査範囲が狭いため確認出来ていない。出土遺物は陶器の小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

掘立柱建物ＳＢ21（第55図）　Ｂ･Ｃの42・43グリットで確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（4.4m）以上×南北２間（4.2m）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ３°Ｗを測る。

柱間間隔は南北が北から2.0m＋2.2m、東西が2.2m等間である。梁行２間×桁行３間の掘立柱建物である。

掘立柱建物ＳＢ22（第55図）　Ｂ・Ｃの42～44グリットで確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（4.1m）以上×南北３間（6.2m）の側柱建物と思われ、棟方向はＮ１°Ｅを測る。柱間間隔は南北が北から2.2m＋2.3m＋2.1m、東西が2.6m等間である。梁行２間以上×桁行３間の掘立柱建物である。



第52図　溝ＳＤ１・６土層断面図（１：50）

南地区

基本層序（第53図）　調査区の現況は水田であった。耕作土、床土の下には、整地の際のものとみられる埋土に礫の混じった溝が確認できた。その下には砂質シルト層・砂層がみられる。調査区北端は遺構がなく、砂層が広がる。この砂層は南に向かって落ち込んでいく。調査区南側は、明確な包含層がないが、ピットが存在する明黄褐色シルト質細砂層を検出面として調査を行った。

土坑ＳＫ12　D55グリットで確認した遺構で、約1.8m×約2.2mの方形の土坑である。坑内からは石がややまとまって出土している。

溝ＳＤ13　D･E57グリットで確認した遺構で、幅約1.5m、深さ約50cmの溝である。遺物は瓦器片が少量出土している。ＳＢ23と同様の方向であることから建物に伴う区画の溝であろうか。

溝ＳＤ14　D54～57グリットで確認した溝である。幅約40m、深さ10cm前後の浅い溝で耕作溝であろう。

土坑ＳＫ15　D56グリットで確認した遺構で、幅１m、深さ40cmほどの円形の土坑である。ＳＫ16を切っており後出する。埋土から瓦器椀が出土している。

土坑ＳＫ16　D55グリットで確認した遺構で、幅約1.2m、深さ約40cmの円形の土坑である。

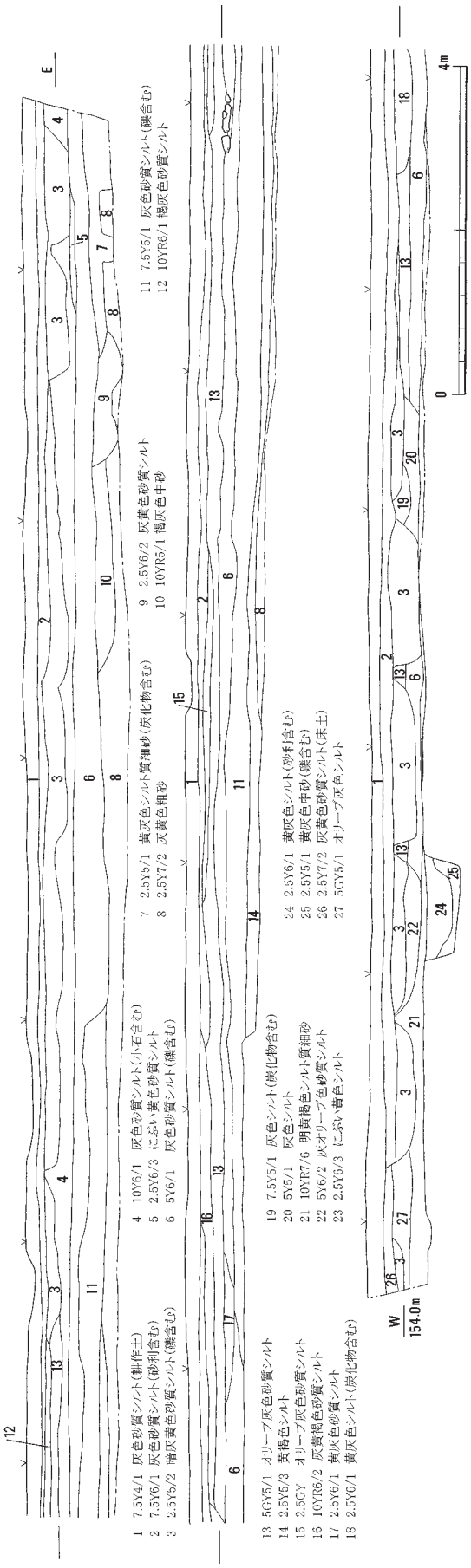
埋土には炭化物が多く含まれており、瓦器椀が完形で出土している。出土遺物より13世紀頃と考えられる。

土坑ＳＫ17　D55グリットで検出した遺構で、円形の土坑である。瓦器椀などが出土している。

溝ＳＤ18　E55～57グリットで検出した遺構で浅い溝である。耕作溝であろうか。

土坑ＳＫ19（第55図）　E55グリットで確認した遺構である。方形の土坑である。坑内からは石がややまとまって出土している。

掘立柱建物ＳＢ23（第55図）Ｂ・Ｃの55・56グリットで確認した遺構である。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（2.5m）以上×南北２間（4.1m）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ２°Ｅを測る。柱間間隔は南北が北から2.2m＋2.0m、東西が2.3m等間である。梁行２間×桁行２間以上の掘立柱建物である



第53図　荒木氏館跡南地区土層断面図（１：80）

出土遺物

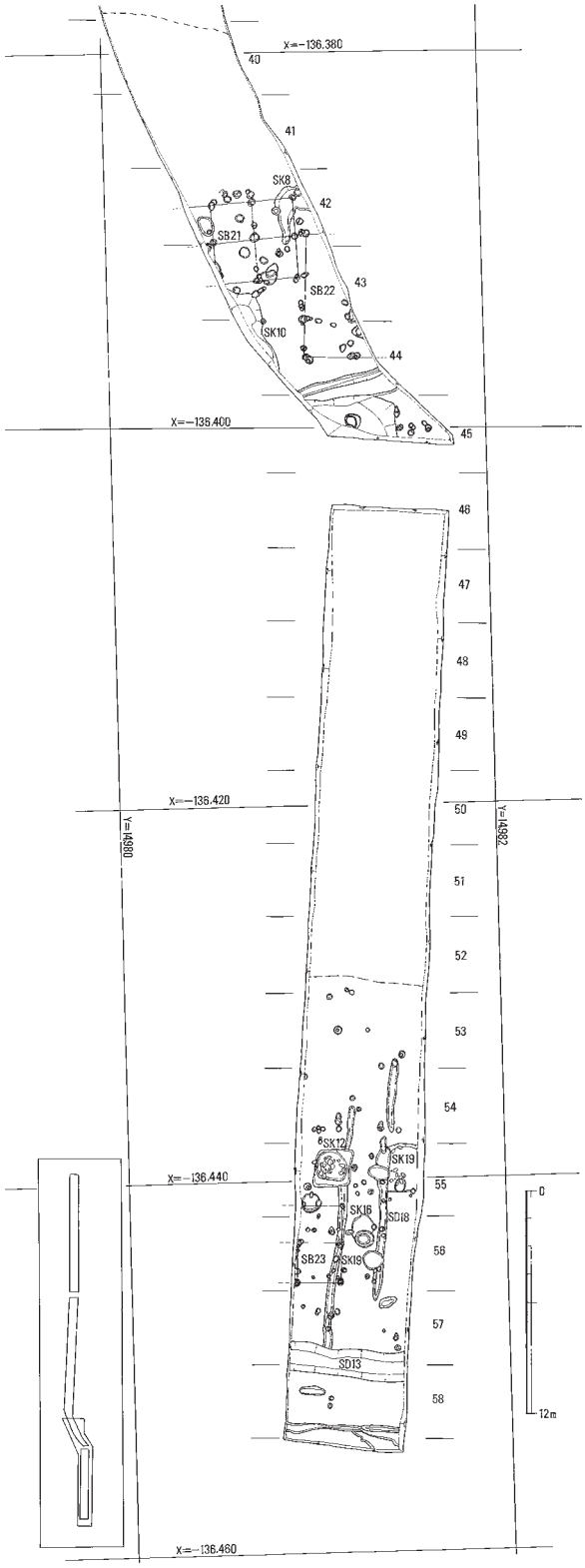
北地区（第56～62図）

溝ＳＤ１（１～75）　土師器皿・瓦質土器・陶器・瓦などが出土しているが、中世のみならず近世のものも含まれている。１～７は土師器皿である。在地産であろう。４はへそ皿である。８～10は陶器の擂鉢で信楽産[1]である。８は、端部内面に凹線をもち16世紀後半のものである。９は乳白色を呈し、端部にやや内傾する平坦面をもつ、12は水こぼしであろうか。14は瓦質の羽釜である。15は瓦質の奈良火鉢の脚部である。16は瓦質の火鉢である。胴部には２条の突帯が巡り文様が施されている。内面の調整はヘラミガキである。17は浅鉢である。18は瓦質の火舎である。19は青磁の皿である。20～21も青磁の高台であるが、円盤状に加工されている。22は陶器の皿である。23は陶器の信楽産の壺である。24は唐津焼の天目茶椀である。25～33は土師器の焙烙で、南伊勢系[2]のものである。34は天目茶椀で連房３～４段階[3]である。35は美濃の尾呂産の茶椀で、登窯５か６段階のものである。36は瀬戸のわはげ皿で連房５段階、37は志野皿で連房１段階、38は天目茶椀で、連房６段階、39は美濃の丸椀で連房６段階、40～49は擂鉢である。40は信楽産で、口縁部は若干外方に反りながら広がる。口径は34.7㎝、器高15.2㎝で、器壁は薄手である。擂目は１単位８本と多く、見込みも含め全面に施される。18世紀頃とされる。45は器壁が薄く、口縁部は屈曲し水平に伸び、端部には面をもつ。擂目は粗く、１単位６本あり、全面に施され高台をもつ。50～64は中世瓦である。50・51は軒丸瓦で巴文である。52～59は丸瓦で、凹面には布目痕が残存し、55・57の凹面にはヒモずれ痕[4]が残る。63・64は軒平瓦で、瓦当が残る。

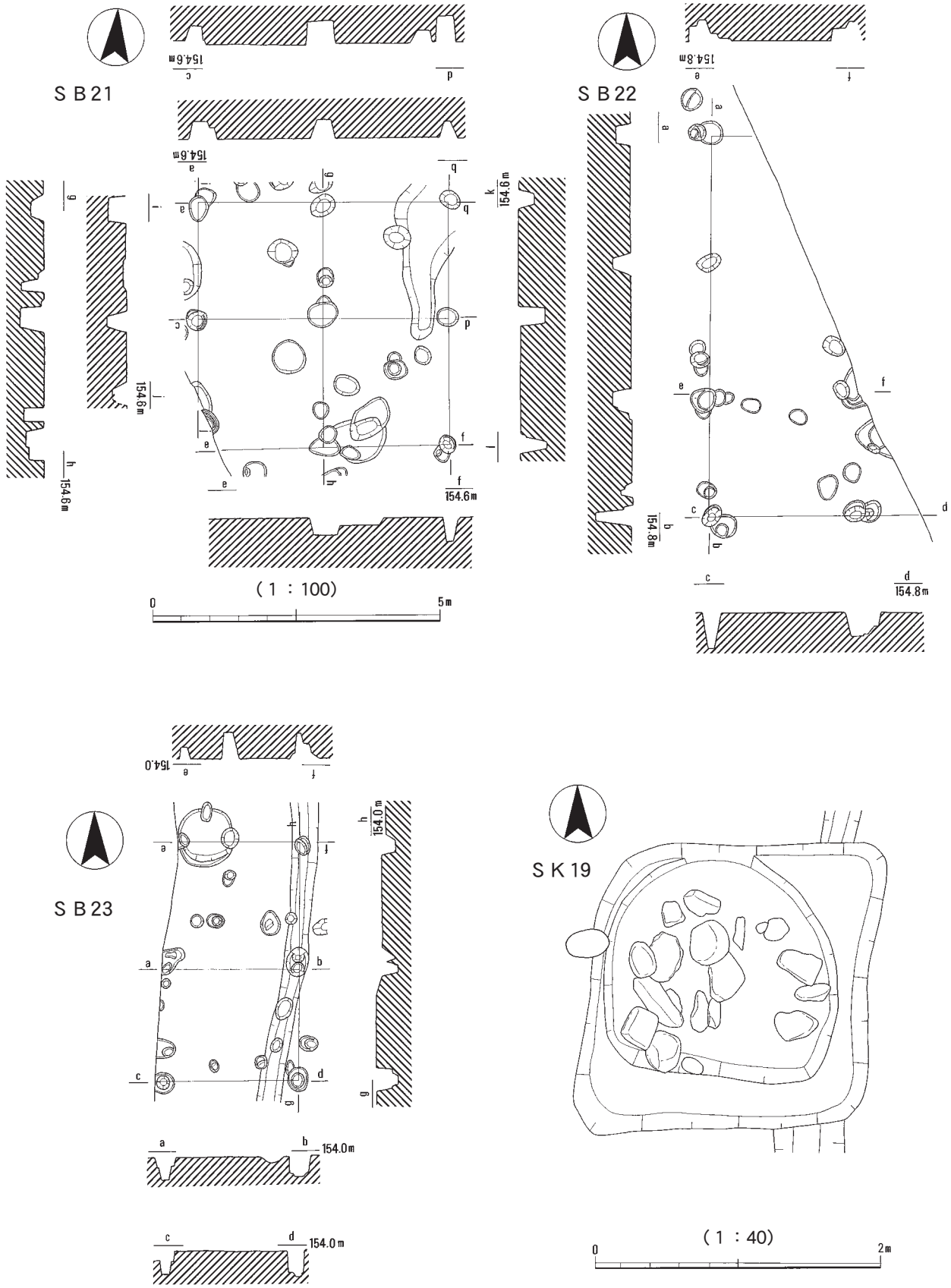
66～71は陶器、72・73は伊賀焼で73は行平鍋である。75は鉢で、鉄釉が施される。

土坑ＳＫ４（76）　76は信楽産の擂鉢である。口径は33.0㎝、器高15.2㎝、底部から外方に直線的に広がり、口縁部の端部は面をもち、内面には工具によるナデがある。擂目は１単位６本で、１～２㎝の間隔で施される。17世紀中頃のものである。

溝ＳＤ２（77～107）　鞴の羽口・土師器の茶釜・陶器の擂鉢などが出土している。また図示していないが、コンテナバッド１箱分の鉄滓が出土している。77～80は土師器皿、81は小型の茶釜である。85はるつぼ、86・87は信楽産の擂鉢である。88～105は鞴の羽口で溶解炉に取り付けられていた部分の破片である。先端部分には、鉄滓が残り、表面には籾殻痕が残る。107は瓦である。

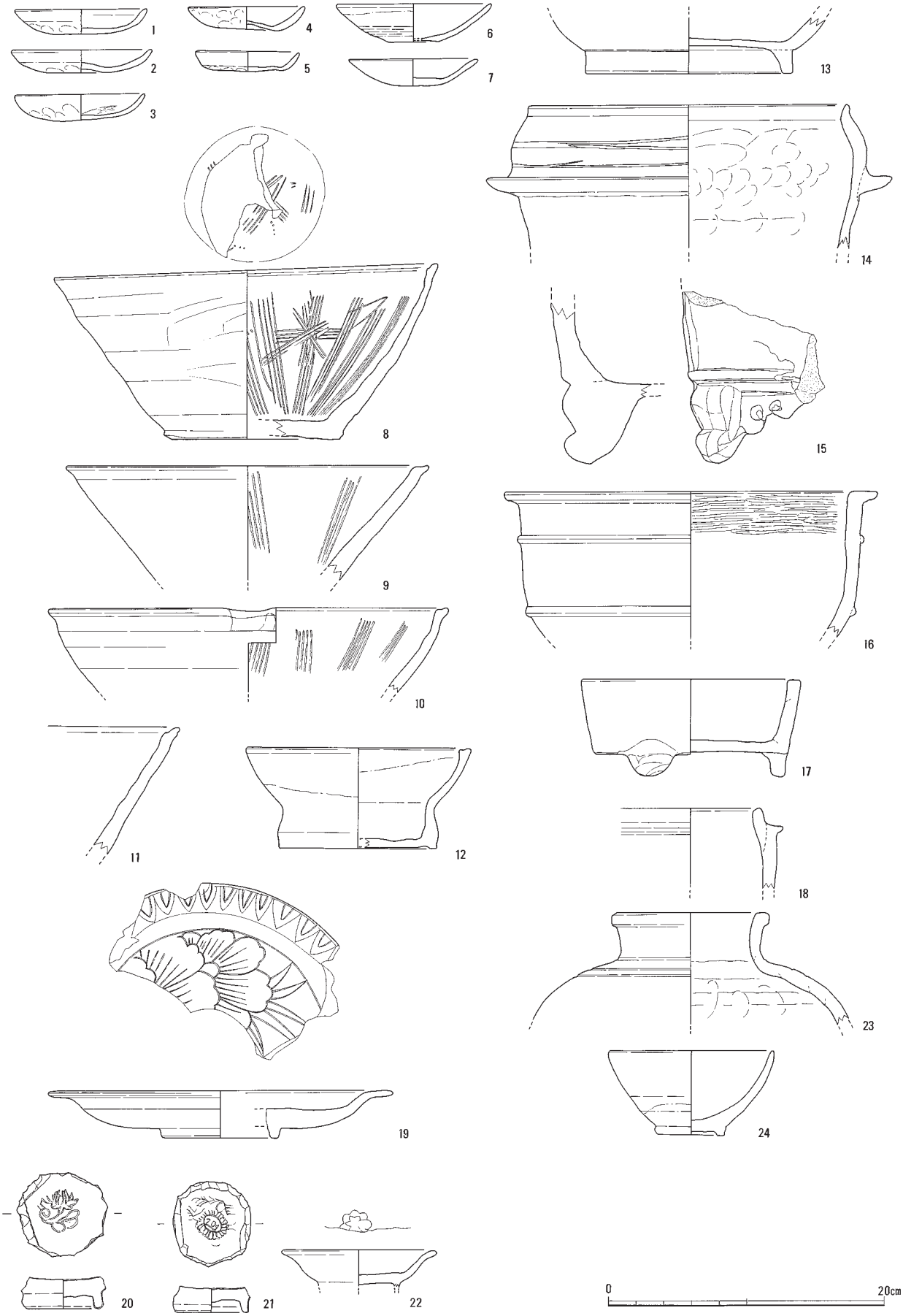


第54図　荒木氏館跡南地区遺構平面図（１：400）



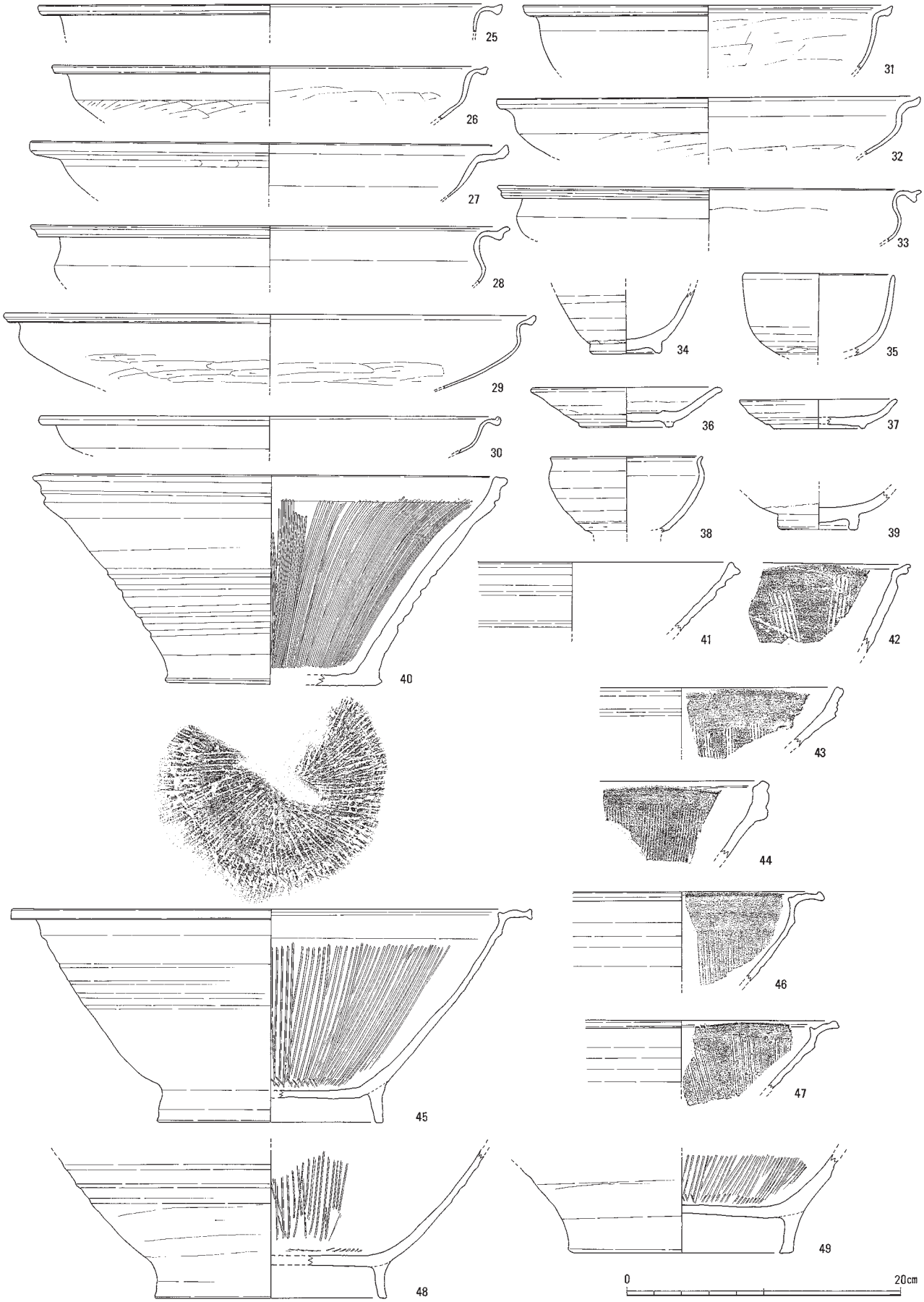
第55図　掘立柱建物ＳＢ21～23平面・断面図，土坑ＳＫ19平面図

ＳＤ１（１～24）



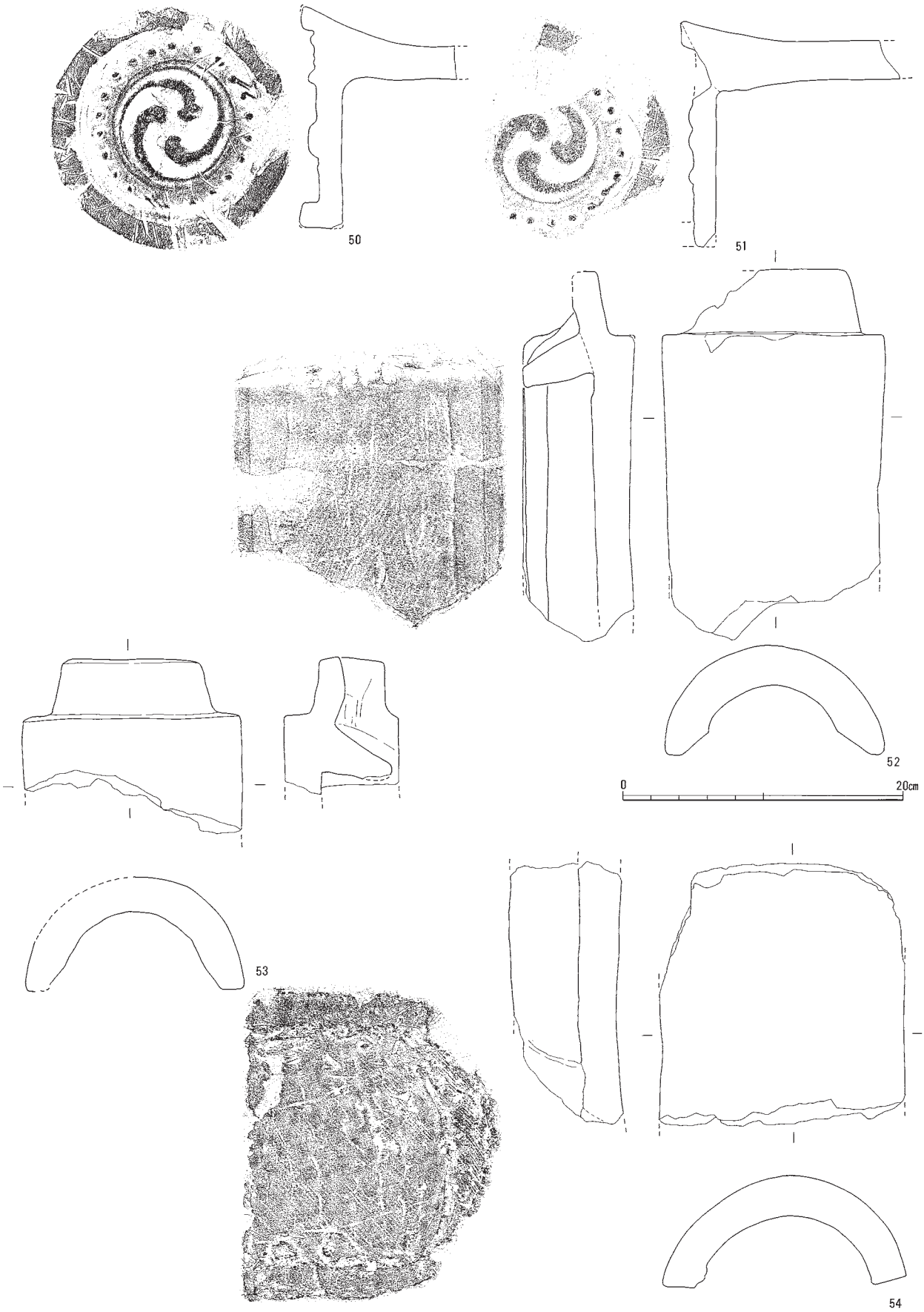
第56図　荒木氏館跡出土遺物実測図（１）（１：４）

ＳＤ１（25～49）



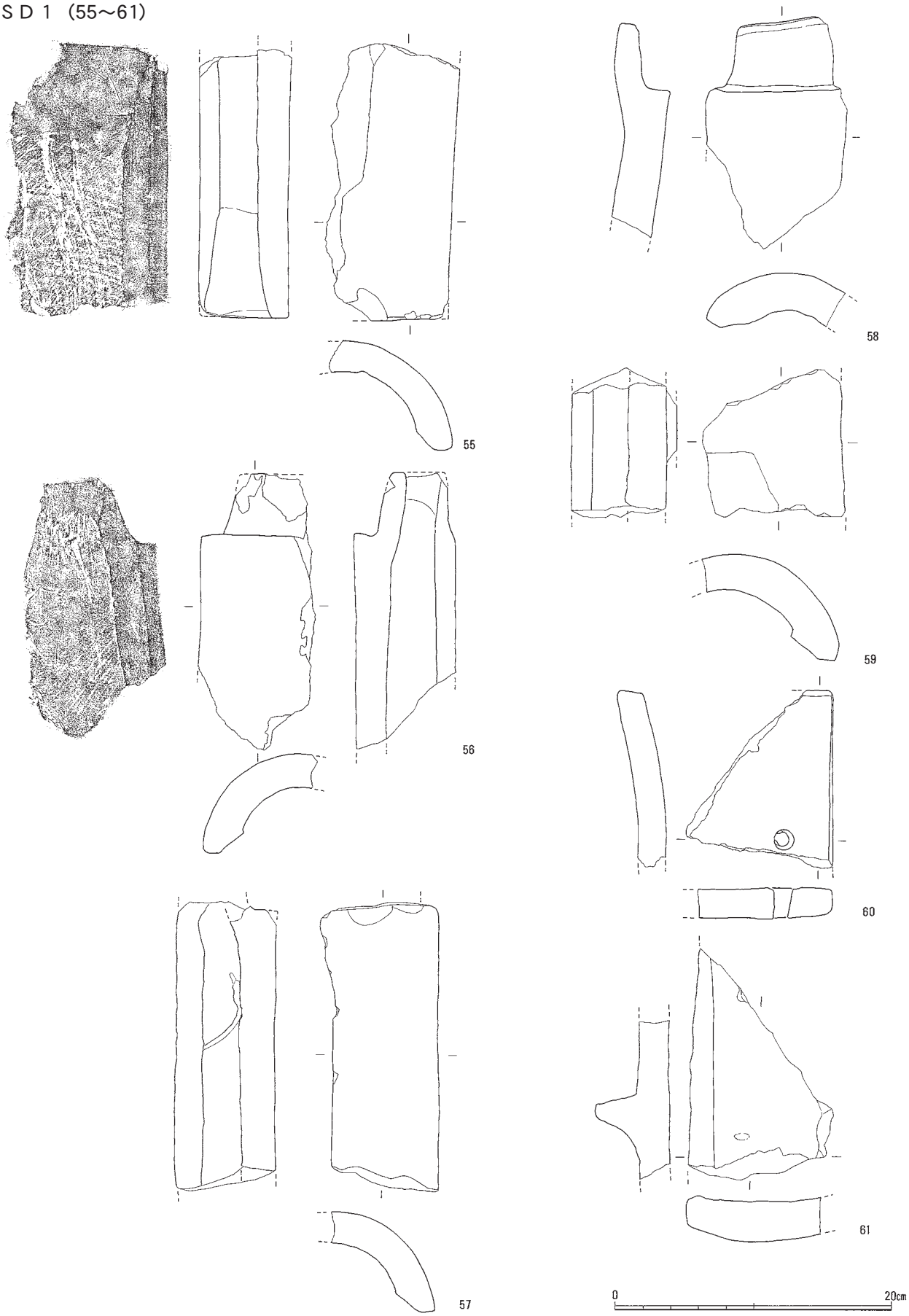
第57図　荒木氏館跡出土遺物実測図（２）（１：４）

ＳＤ１（50～54）



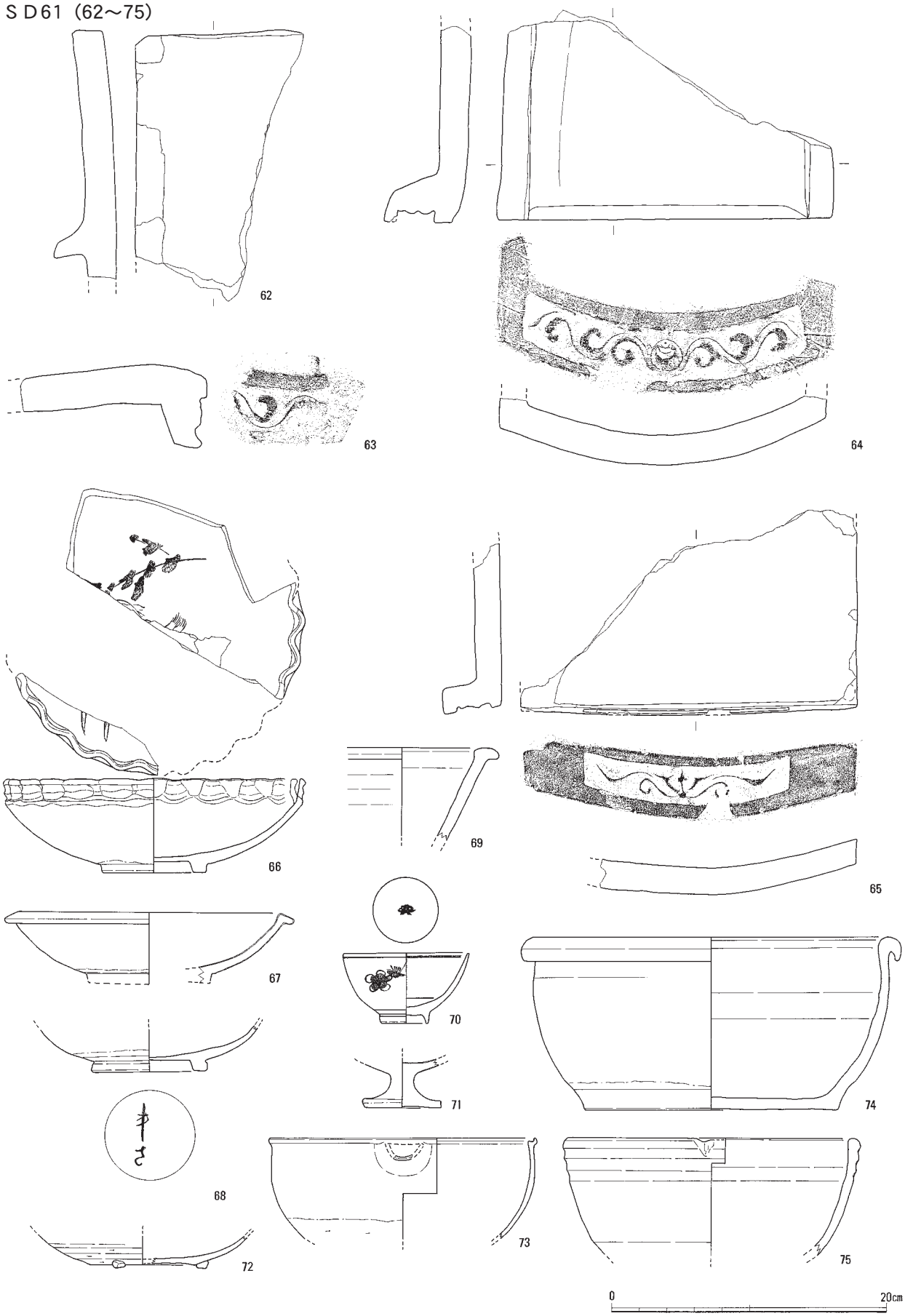
第58図　荒木氏館跡出土遺物実測図（３）（１：４）

ＳＤ１（55～61）

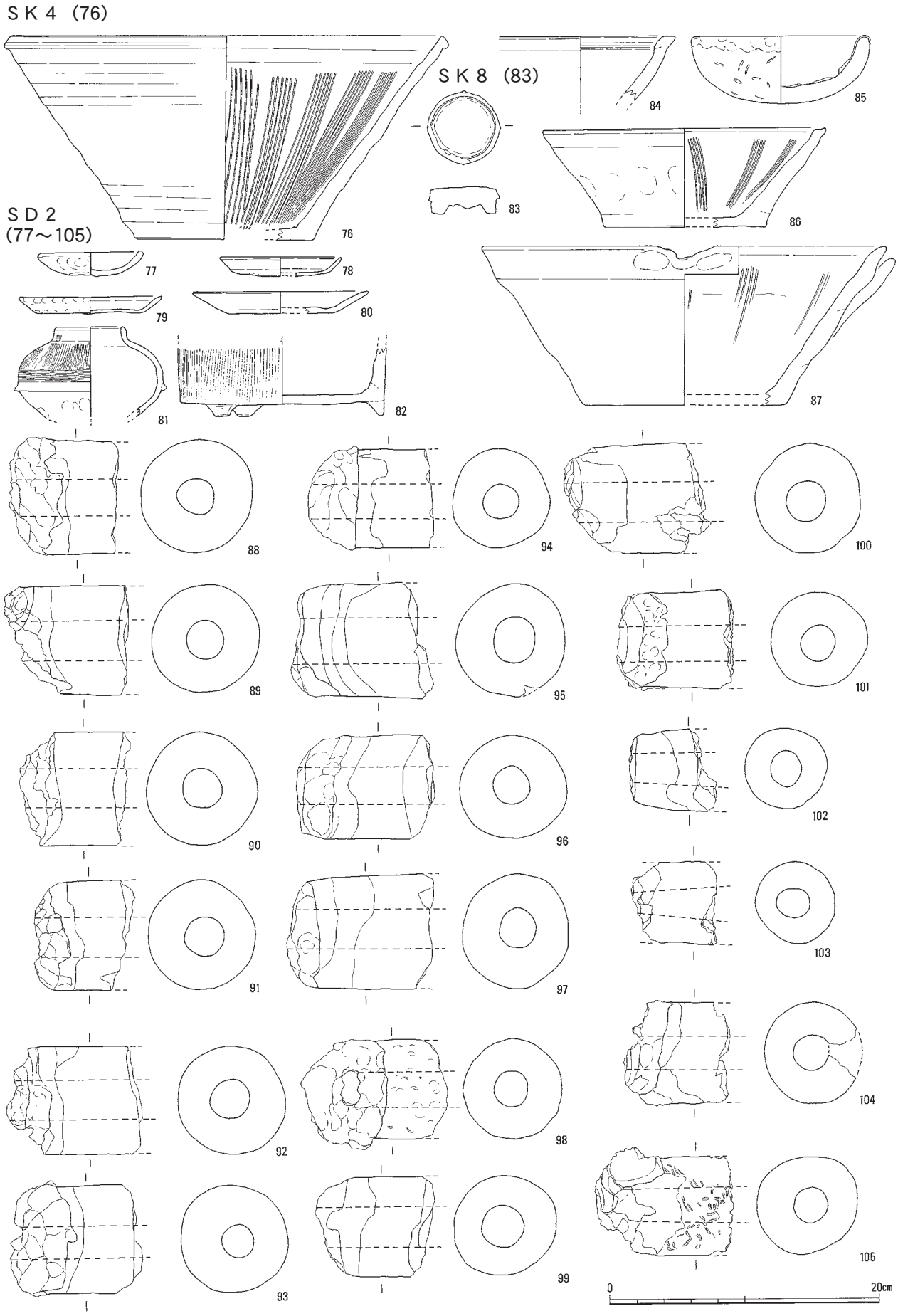


第59図　荒木氏館跡出土遺物実測図（４）（１：４）

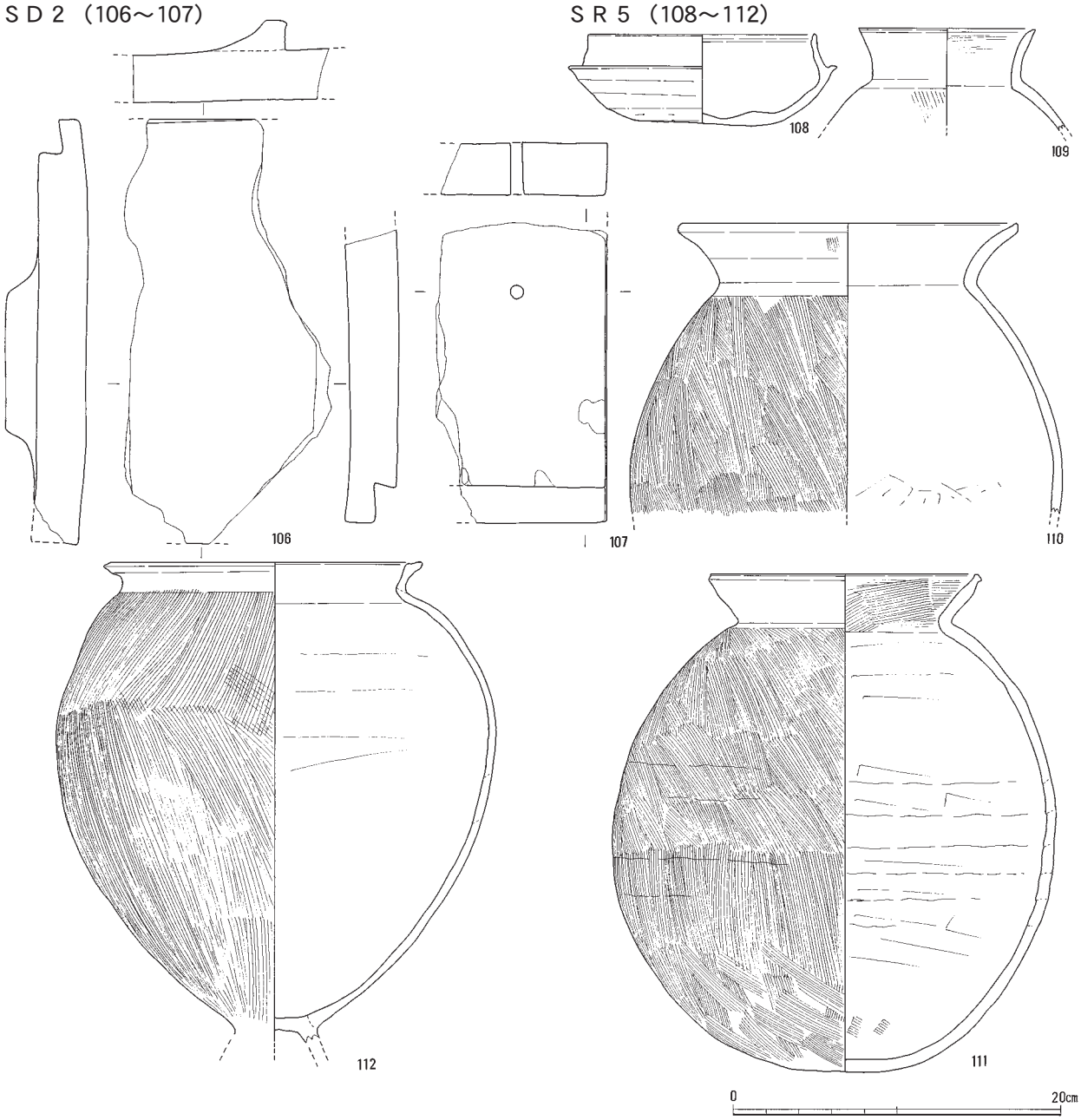
ＳＤ61（62～75）



第60図　荒木氏館跡出土遺物実測図（５）（１：４）



第61図　荒木氏館跡出土遺物実測図（６）（１：４）



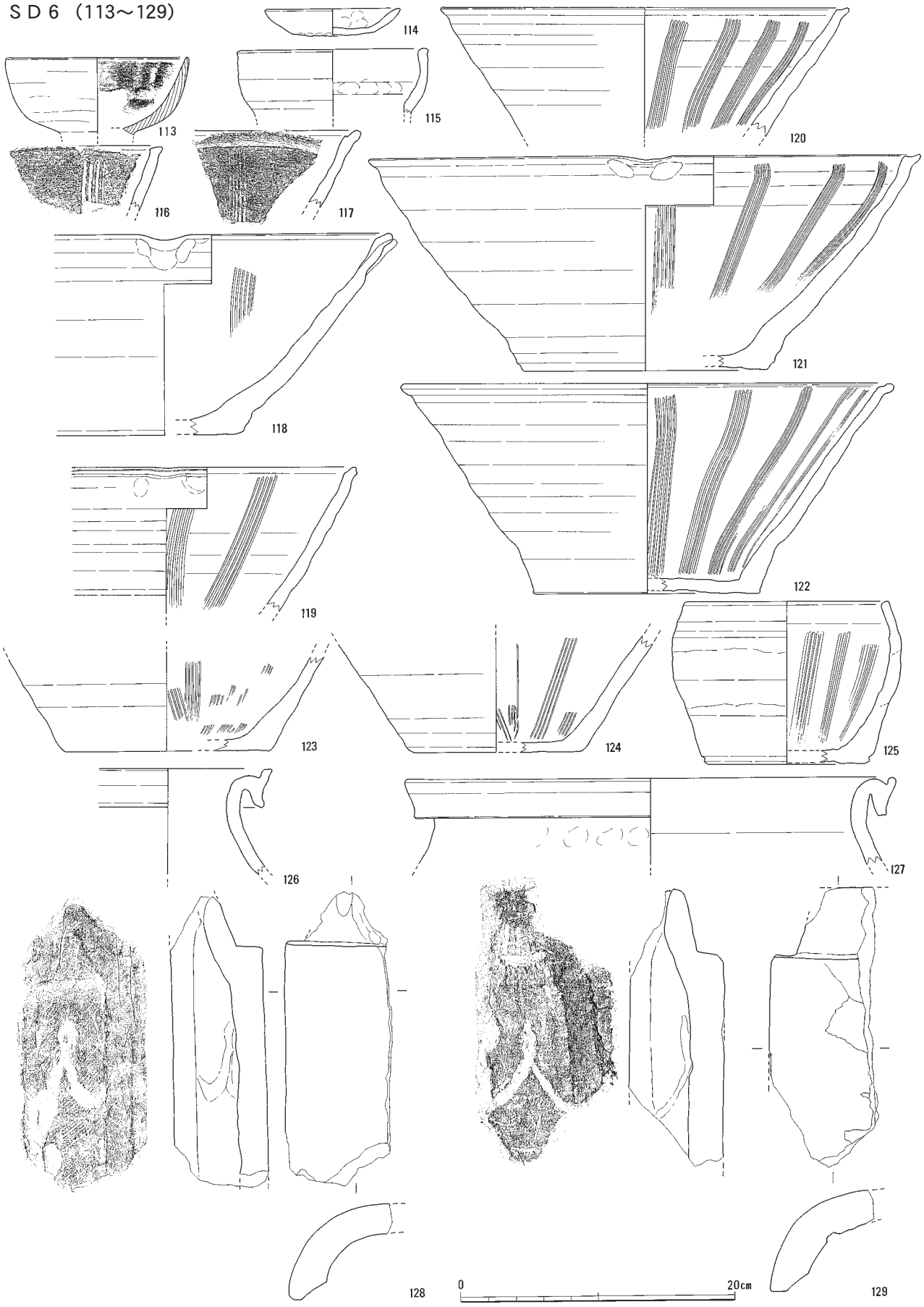
第62図　荒木氏館跡出土遺物実測図（７）（１：４）

河道ＳＲ５（108～112）　108は須恵器の杯身、109は土師器甕である。外面にはタテ方向のハケが施される。110～111は土師器甕、112は台付甕である。赤塚次郎氏の分類の「Ｄ類」[5]に相当する。

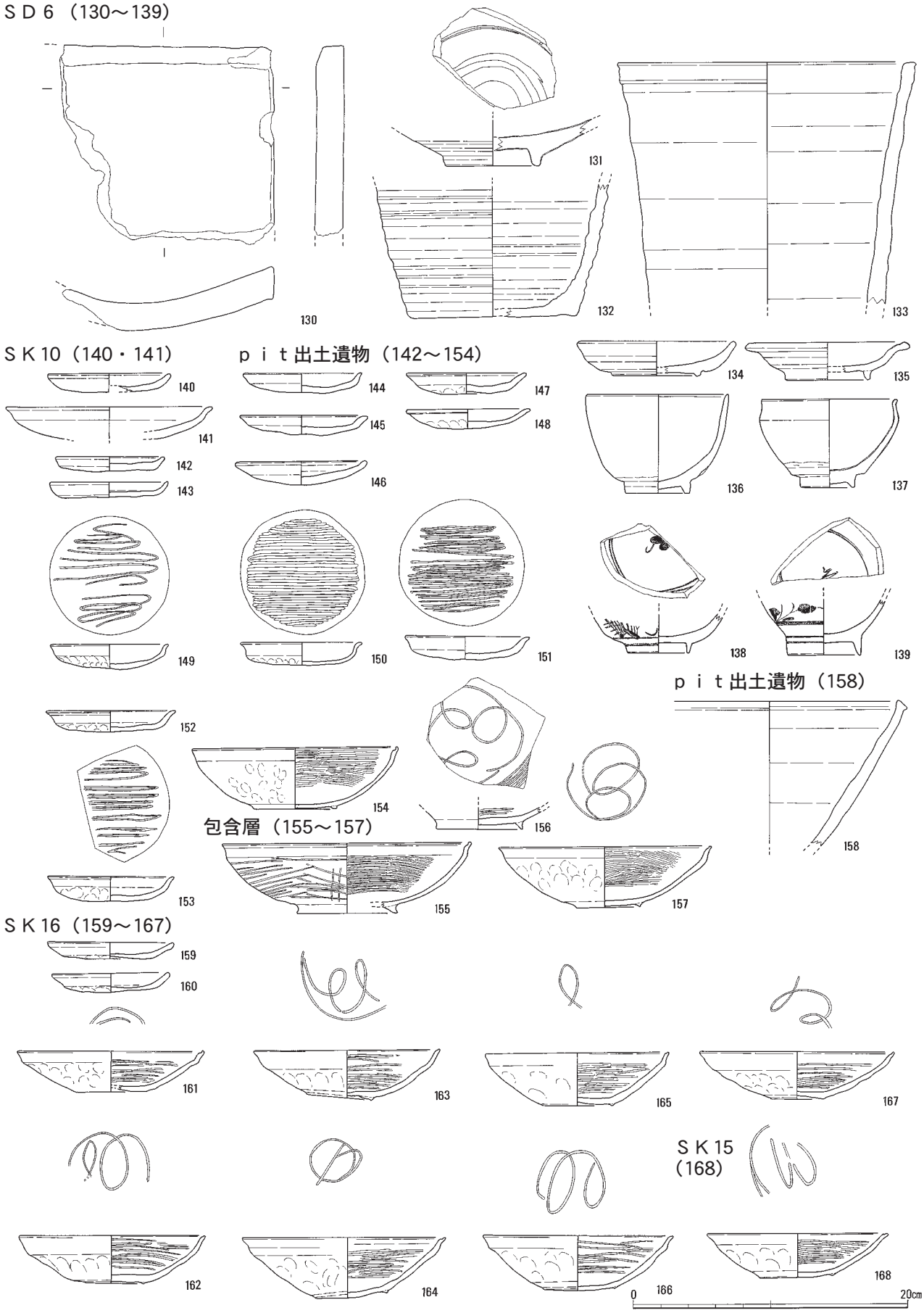
中地区

溝ＳＤ６（113～139）　陶器の擂鉢・大甕・天目茶椀・瓦・木器の漆椀が出土している。113は木器の漆椀である。高台は欠損するが、内面に漆が残る。114は土師器皿、116～125は信楽産の擂鉢で、116は口縁部のみの破片である。擂目が１単位４本で、口縁端部は面をもつ。121は口径40.2㎝、器高15.6㎝で平らな底部に外方にやや内彎気味にのびる。口縁部は端面がゆるく窪む。擂目は１単位５条で、底部は使い込まれたため磨耗している。122は口径36㎝、器高16.6㎝で、擂目は１単位６条で、底部内面のみこみに十字状にクロスして擂目が刻まれ、口縁部端部はやや外方につまみ出し、端部の窪みが内側に凹線状になっている。黄瀬５号窯産か。やや古手の116を除き他は16世紀後半に生産されたものであろう。125は擂盆とよばれる茶器で、口縁は内彎する形状を呈する。内面には１単位５本の擂目がある。

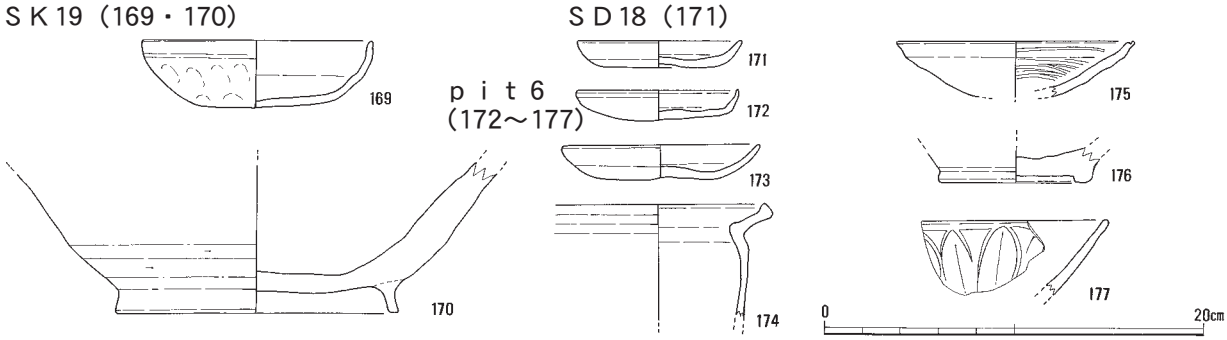
ＳＤ６（113～129）



第63図　荒木氏館跡出土遺物実測図（８）（１：４）



第64図　荒木氏館跡出土遺物実測図（９）（１：４）



第65図　荒木氏館跡出土遺物実測図（10）（１：４）

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝（水路）	中世後期	北	A・B1～14	方形の区画をもつ溝、 堀というよりは人工的な水路か
SD2	溝	中世後期	北	A・B15・16	埋土中に鞴の羽口、鉄さいを含む
SK3	土坑	中世後期	北	B・C1	検出段階では井戸と考えていたが 非常に浅い土坑。
SK4	土坑	中世後期	北	B5・6	水路のかたに相当、信楽産の擂鉢 が出土
SR5	流路	古墳後期	北	B4・5	北西方向に流れる。かたより台付甕・ 須恵器が出土
SD6	堀	中世後期 ～近世	中	19～38	何度も再掘削されており、近世に埋没
SK7	土坑	不明	中	B16・17	SD2に切られる
SK8	土坑	中世前期	中	C42	瓦器椀などが出土。
SK9	土坑	—	—	—	SK8と重複のため抹消
SK10	土坑	中世前期	中	C43・44	瓦器椀などが出土。
SR11	流路	中世前期	中	B16・17	
SK12	土坑	中世前期	南	D55	方形の土坑、拳大の石が出土
SD13	溝	中世前期	南	D・E57	区画溝か
SD14	溝	中世前期	南	D54～57	瓦器椀などが出土。
SK15	土坑	中世前期	南	D56	
SK16	土坑	中世前期	南	D55	円形の土坑、瓦器椀出土。
SK17	土坑	中世前期	南	D55	瓦器椀出土。
SD18	溝	中世前期	南	E55～57	
SK19	土坑	中世前期	南	E55	
SD20	溝	中世前期	中	A・B38・39	
SB21	掘立柱建物	中世前期	中	B・C42・43	N3°Ｗ　梁間2以上×桁行2間
SB22	掘立柱建物	中世前期	中	B・C42～44	N1°Ｅ　2以上×2
SB23	掘立柱建物	中世前期	南	B・C55・56	N2°Ｅ　2以上×2

第20表　荒木氏館跡遺構一覧表

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	01-03	土師器	皿	北地区 B4	SD1	(口)	9.65	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁7/12	
2	01-02	土師器	皿	北地区 B4	SD1	(口)	10.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰黄褐 10YR6/2	口縁5/12	
3	01-04	土師器	皿	北地区 B3	SD1 かた	(口)	9.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁8/12	
4	01-05	土師器	皿	北地区	SD1	(口)	8.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→工具ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁11/12	口縁部に油煙付着 ? へそ皿
5	16-06	土師器	皿	北地区 B9	SD1	(口)	7.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁2/12	
6	13-02	陶器	皿	北地区	SD1	(口)	11.1	外;ロクロナデ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰白 5Y8/2	口縁3/12	
7	39-02	土師器	灯明皿	北地区	SD1	(口)	9.4	外;ナデ・オサエ 内;ナデ(不定方向)	密	浅黄橙 10YR8/4	口縁10/12	内面に油煙付着
8	38-01	陶器	擂鉢	北地区	SD1	(口) (底)	27.8 12.9	外;ロクロナデ後一部ナデ→未調整 内;ロクロナデ後一部ナデ→櫛目	粗	にぶい橙 5YR7/4		信楽産 内面一部黒い 内面と内面底部に櫛目あり
9	02-01	陶器	擂鉢	北地区 B5	SD1	(口)	26.2	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	灰白 10YR8/2	口縁1/12	信楽産 外面摩滅の為 調整不明瞭
10	03-01	陶器	擂鉢	北地区	SD1	(口)	28.9	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	密	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁2/12	片口? 信楽産
11	02-02	陶器	擂鉢	北地区 B2	SD1	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 2.5YR6/6	口縁部小片	信楽産 片口部有
12	01-01	陶器	鉢?	北地区 B3	SD1 かた部分	(口) (底)	16.2 11.3	外;ロクロナデ(鉄釉?) 内;ロクロナデ(鉄釉?)	粗	浅黄橙 10YR8/4	口縁3/12 底部5/12	外面底部に煤?
13	19-02	瓦質	鉢	北地区 B5	SD1(底付近)	(高)	15.0	外;ロクロナデ→ハリ付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	灰 N5/0	底部2/12	
14	18-01	瓦質	羽釜	北地区 B5	SD1	(口)	23.2	外;ロクロナデ→ハリツケナデ→沈線 内;ロクロナデ→オサエ	粗	オリーブ黒 5Y3/1	口縁3/12	
15	19-01	瓦質	奈良火鉢	北地区 C11	SD1	—		外;ナデ 内;ナデ	密	灰 N6/0	脚部片	奈良火鉢 磨耗著しく剥離
16	18-02	瓦質	火鉢	北地区	SD1	(口)	27.0	外;ロクロナデ→ハリ付突帯後押印文 内;ロクロナデ→ミガキ	密	灰 N5/0	口縁1/12	外面に押印文
17	01-06	土師質	三脚鉢	北地区 B4	SD1	(口)	15.9	外;ロクロナデ→ハリツケナデ 内;ロクロナデ	粗	灰白 10YR8/2	口縁3/12	三足か?(1ヵ所残) 足に煤付着
18	19-03	瓦質	羽釜	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰 N5/0	口縁1/12	
19	35-02	青磁	皿	北地区	SD1	(口) (高)	24.9 8.5	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 明緑灰 7.5GY7/1	口縁2/12 底部4/12	青磁
20	17-05	陶器	加工円盤	北地区	SD1	(幅) (厚)	6.1 2.3	—	密	(釉) 明オリーブ灰 5GY7/1	完形	緑釉陶器転用(打ち欠き)
21	17-06	陶器	加工円盤	北地区 A5	SD1	(幅) (厚)	5.5 1.8	—	密	(釉) 明緑灰 10GY8/1	完形	緑釉陶器転用(打ち欠き)
22	02-05	陶器	稜皿	北地区 B9	SD1 底	(口)	11.2	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰白 7.5Y7/2	口縁1/12	外面底部に重ね焼き痕残 内面に印花文
23	03-02	陶器	壺	北地区	SD1	(口)	11.4	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰白 5Y7/1	口縁2/12	外面に自然釉残 信楽産
24	03-04	陶器	椀	北地区 B5	SD1 かた	(口) (高)	12.0 5.0	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰オリーブ 7.5Y6/2	口縁3/12 高台11/12	天目茶椀 唐津焼
25	15-02	土師器	焙烙	北地区 B3	SD1 かた	(口)	33.8	外;ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁2/12	南伊勢系 外面に煤付着
26	15-03	土師器	焙烙	北地区 B4	SD1	(口)	31.8	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ケズリ→ヨコナデ	密	にぶい褐 7.5YR5/3	口縁2/12	南伊勢系 外面に煤付着
27	16-02	土師器	焙烙	北地区	SD1	(口)	25.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰褐 7.5YR5/2	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着
28	16-03	土師器	焙烙	北地区 A4	SD1	(口)	25.0	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰褐 7.5YR5/2	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着
29	16-01	土師器	焙烙	北地区 B4	SD1 かた	(口)	38.8	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ・ケズリ→ヨコナデ	密	にぶい橙 5YR7/4	口縁2/12	南伊勢系 外面に煤付着
30	15-01	土師器	焙烙	北地区 C5	SD1 かた	(口)	33.8	外;ナデ・ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい赤褐 5YR5/3	口縁2/12	南伊勢系 外面に煤付着
31	15-05	土師器	焙烙	北地区 B4	SD1	(口)	27.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着
32	15-04	土師器	焙烙	北地区 B3	SD1	(口)	31.0	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰褐 7.5YR4/2	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着
33	16-04	土師器	焙烙	北地区	SD1	(口)	31.0	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰褐 5YR5/2	口縁1/12	南伊勢系 外面に煤付着
34	17-02	陶器	椀	北地区 C13	SD1	(高)	5.3	外;ロクロナデ(鉄釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(鉄釉)	密	(釉) 褐灰 5YR4/1	底部完存	天目茶椀
35	17-03	陶器	椀	北地区	SD1	(口)	11.2	外;ロクロナデ(鉄釉)→ロクロケズリ 内;ロクロナデ(鉄釉)	密	(釉) オリーブ褐 2.5Y4/3	口縁3/12	天目茶椀 尾呂産
36	01-07	陶器	皿	北地区	SD1	(口) (高)	14.0 6.8	外;ロクロナデ(施釉)→糸切り→ロクロケズリ → ハリ付高台ナデ 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰白 5Y8/2	口縁2/12 高台6/12	わはげ皿 瀬戸産
37	03-03	陶器	皿	北地区 B10	SD1	(口) (高)	11.5 6.6	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰白 2.5Y7/1	口縁4/12 高台5/12	志野皿
38	17-04	陶器	椀	北地区	SD1	(口)	11.1	外;ロクロナデ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 黒 10YR2/1	口縁3/12	天目茶椀
39	01-08	陶器	椀	北地区	SD1	(高)	5.9	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(釉) 灰白 10Y7/2	高台	美濃産
40	04-01	陶器	擂鉢	北地区 C5	SD1 かた	(口) (底)	34.7 15.8	外;ロクロナデ(施釉)→ケズリ・未調整 内;ロクロナデ(施釉)→櫛目	粗	(釉) 灰赤 10R5/2	口縁6/12 底部8/12	信楽産 内面底部に櫛目残 外面に施釉
41	12-04	陶器	擂鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)→櫛目	密	(釉) 灰赤 2.5YR4/2	口縁部片	
42	02-03	陶器	擂鉢	北地区 B8	SD1	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	密	橙 2.5YR6/6	口縁部片	
43	13-01	陶器	擂鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	密	淡黄 2.5Y8/3	口縁部片	
44	02-04	陶器	擂鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)→櫛目	密	(釉) 赤褐 10R4/3	口縁部片	
45	33-01	陶器	擂鉢	北地区	SD1	(口) (高)	38.2 16.4	外;回転ナデ→ハリ付高台ナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ→櫛目	粗	暗赤灰 10R4/1	口縁1/12 底部9/12	信楽産 内面底部に櫛目残

第21表　荒木氏館跡出土遺物観察表（1）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
46	12-03	陶器	擂鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)→櫛目	密	(釉) 暗赤灰 10R4/1	口縁部片	
47	12-05	陶器	擂鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)→櫛目	密	(釉) 暗赤灰 7.5R4/1	口縁部片	
48	34-01	陶器	擂鉢	北地区	SD1	(高)	17.0	外;回転ナデ→ケズリ→ハリ付高台ナデ 内;回転ナデ→櫛目	粗	灰赤 7.5R5/2	底部5/12	内面底部に櫛目残
49	34-02	陶器	擂鉢	北地区 C5	SD1	(高)	16.5	外;回転ナデ→ケズリ→ハリ付高台ナデ 内;回転ナデ→櫛目	粗	灰赤 2.5YR5/2	底部6/12	内面底部に櫛目残
50	36-01	瓦	軒丸瓦	北地区	SD1			凸面;ケズリ? 凹面;布目 巴文・珠文帯 瓦当部裏面ナデ	粗	灰 N6/0	破片	
51	22-01	瓦	軒丸瓦	北地区	SD1			凸面;ケズリ? 凹面;布目 左巻き三巴文・珠文帯 瓦当部 裏面ナデ・ハリ付	粗	灰 N6/0	破片	
52	21-01	瓦	丸瓦	北地区 A5	SD1			凸面;縄タタキ 凹面;布目 側縁部ケズリ	粗	灰白 N7/0	破片	
53	20-01	瓦	丸瓦	北地区 A5	SD1			凸面;工具ナデ 凹面;ナデ	粗	灰白 2.5Y7/1	破片	
54	29-01	瓦	丸瓦	北地区 B2	SD1			凸面;ヘラ状工具ナデ 凹面;布目 側縁部ケズリ	粗	灰 N4/0	破片	
55	31-01	瓦	丸瓦	北地区 B8	SD1			凸面;タタキ後工具ナデ 凹面;布目 側縁部ケズリ	密	灰 N4/0	破片	
56	30-02	瓦	丸瓦	北地区	SD1			凸面;タタキ後ナデ 凹面;布目 コビキ痕残 側縁部ケズリ	粗	灰 N5/0	破片	
57	26-01	瓦	丸瓦	北地区	SD1			凸面;工具ナデ(タタキ痕残) 凹面;布目 吊紐痕残 側縁部ケズリ	密	灰 N5/0	破片	
58	25-01	瓦	丸瓦	北地区	SD1			凸面;ナデ・縄タタキ 凹面;布目 吊紐痕残 側縁部ケズリ	密	灰 N6/0	破片	
59	26-02	瓦	丸瓦	北地区	SD1			凸面;工具ナデ 凹面;布目 側縁部ケズリ	密	灰 N6/0	破片	
60	30-01	瓦	平瓦	北地区	SD1			凸面;ナデ 凹面;工具ナデ 側縁部ケズリ	粗	灰 N6/0	破片	穿孔有
61	28-01	瓦	平瓦	北地区	SD1			凸面;ナデ 凹面;工具ナデ 側縁部ケズリ	粗	灰 N6/0	破片	
62	27-01	瓦	平瓦	北地区	SD1			凸面;ナデ 凹面;工具ナデ 側縁部ケズリ	密	灰 N6/0	破片	
63	23-01	瓦	軒平瓦	北地区 B7・8	SD1			凸面;ナデ 唐草文 凹面;ナデ 瓦当裏面ケズリ 側縁部ケズリ	粗	灰 N5/0	破片	
64	24-01	瓦	軒平瓦	北地区	SD1			凸面;ナデ 宝珠唐草文 凹面;ナデ	密	灰 N5/0	破片	室町中期
65	32-01	瓦	軒平瓦	北地区 B11	SD1			凸面;ナデ 凹面;ナデ 瓦当裏面ヨコナデ 側縁部ケズリ	密	灰 N6/0	破片	
66	05-01	陶器	鉢	北地区	SD1	(口) (高)	22.0 7.6	外;ロクロ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 2.5Y8/1	口縁3/12 高台5/12	内面底部に絵付け
67	05-03	陶器	鉢	北地区	SD1	(口) (高)	21.0 8.9	外;ロクロ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 5Y7/1	口縁3/12 高台小片	
68	13-04	陶器	鉢	北地区	SD1	(高)	8.1	外;ロクロ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 10Y8/1	底部完存	外面底部に墨書残 外面に釉の垂れ有
69	04-02	陶器	鉢	北地区	SD1	—		外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 5Y7/1	口縁部片	
70	13-03	陶器	椀	北地区	SD1	(口) (高)	9.0 3.5	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 青灰 5B6/1	口縁4/12 底部完存	外面と内面底部に染付け
71	04-03	陶器?	?	北地区	SD1	(底)	5.6	外;ロクロ(施釉)→糸切り痕 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) にぶい橙 5YR7/4	底部完存	
72	04-04	陶器	小型鍋	北地区	SD1	(底)	7.5	外;ロクロケズリ→ハリツケナデ 内;ロクロ(施釉)	密	灰黄 2.5Y7/2	底部7/12	伊賀焼 外面に煤付着 2ヶ所残(三足)
73	05-02	陶器	行平鍋	北地区	SD1	(口)	19.5	外;ロクロ(施釉)→ケスリ出し高台 内;ロクロ(施釉)	密	淡黄 2.5Y8/3	口縁1/12 体部2/12	外面に煤付着 伊賀焼
74	14-01	陶器	鉢	北地区	SD1	(口) (底)	26.0 18.4	外;ロクロ(施釉)→ケズリ? 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 7.5Y7/1	口縁3/12 底部6/12	
75	17-01	陶器	鉢	北地区	SD1	(口)	21.6	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 黒褐 7.5YR3/2	口縁3/12	片口? 鉄釉
76	35-01	陶器	擂鉢	北地区 B6	SK4	(口) (底)	33.0 13.3	外;ロクロナデ→ケズリ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 2.5YR6/6	口縁9/12 底部完存	信楽産
77	07-02	土師器	皿	北地区 A16	SD2	(口)	7.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	完形	
78	07-03	土師器	皿	北地区	SD2	(口)	9.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁2/12	
79	07-01	土師器	皿	北地区 A16	SD2	(口)	12.6	外;ユビナデ・オサエ 内;ユビナデ・オサエ	密	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁6/12	
80	07-04	土師器	皿	北地区 A16	SD2	(口)	13.0	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰黄 2.5Y6/2	口縁2/12	
81	06-03	土師器	ミニチュア 茶釜	北地区 A16	SD2	(口)	5.4	外;隆帯ハリツケナデ・ハケメ→ナデ 内;摩滅の為調整不明	密	灰褐 7.5YR4/2	口縁3/12	外面に煤付着? 内面に自然釉?
82	07-05	瓦質土器	鉢	北地区	SD2	(底)	15.2	外;ロクロケズリ・未調整→ハリツケナデ→ ミガキ 内;ロクロナデ	密	灰 N4/0	底部6/12	三足
83	44-04	陶器	加工円盤	中地区 C42	SD2	(幅) (厚)	5.4 2.0	—	密	(釉) 灰オリーブ 7.5Y5/2	完形	施釉陶器転用
84	07-06	陶器	鉢	北地区 A16	SD2	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	粗	(釉) 橙 5YR7/6	口縁部片	
85	07-07	土製品	坩堝	北地区 A17	SD2	(口)	13.4	外;ナデ 内;付着物の為調整不明	粗	灰白 5Y7/1	口縁3/12	還元焼成 外面に籾殻痕残
86	06-02	陶器	擂鉢	北地区 A17	SD2	(口) (底)	21.0 12.0	外;ナデ 内;ナデ→櫛目	粗	灰黄 2.5Y7/2	口縁 底部4/12	信楽産山田Ⅱa型式 口縁に歪み有(片口か?)
87	06-01	陶器	擂鉢	北地区 A17	SD2	(口)	30.0	外;ケズリ→ナデ 内;ケズリ→ナデ	粗	灰白 10YR8/2	口縁7/12	信楽産山田Ⅰ型式 14C前半 磨耗大
88	08-01	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
89	08-02	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
90	08-03	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解

第22表　荒木氏館跡出土遺物観察表（２）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
91	08-04	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
92	09-01	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
93	09-02	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
94	09-03	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
95	09-04	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
96	10-01	土製品	鞴の羽口	北地区	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
97	10-02	土製品	鞴の羽口	北地区	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
98	10-03	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
99	10-04	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
100	11-01	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
101	11-02	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
102	11-03	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
103	11-04	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	密	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
104	12-01	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	先端部分は高熱により溶解
105	12-02	土製品	鞴の羽口	北地区 A16	SD2	径		外;ナデ→穿孔	粗	灰白 10YR8/2	破片	籾殻痕残
106	54-01	瓦	隅木蓋瓦	北地区 A17	SD2	—		外; 内;	密	灰 5Y6/1	破片	
107	54-02	瓦	?	北地区 A17	SD2	—		外; 内;	密	灰 5Y7/1	破片	
108	38-02	須恵器	杯身	北地区 C5	SR5	(口)	14.0	外;ロクロナデ→ロクロケズリ 内;ロクロナデ	密	灰 N6/0	口縁9/12	
109	16-05	土師器	甕	北地区 C5	SD1	(口)	10.8	外;ハケメ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙 7.5YR8/4	口縁5/12	
110	39-01	土師器	甕	北地区 C5	SR5	(口)	20.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ・ケズリ→ヨコナデ	密	橙 7.5YR7/6	口縁3/12	
111	62-01	土師器	甕	北地区 C5	SR5	(口) (高)	16.6 30.3	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ﾊｹﾒ・ナデ・ｹｽﾞﾘ→ﾊｹﾒ	密	灰黄褐 10YR5/2	口縁9/12	外面体部に煤付着
112	37-01	土師器	台付甕	北地区 C5	SR5	(口)	19.4	外;ﾊｹﾒ・ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁1/12 体部1/12	外面体部に煤?付着
113	63-01	木製品	漆椀	北地区	SD6 黒粘	(口)	13.1	横木取柾目	—	黒色	口縁4/12	内面に漆残 口縁に歪み有
114	39-03	土師器	灯明皿	北地区	SD6 黒粘	(口)	9.9	外;ナデ・オサエ→ナデ 内;ナデ・オサエ→ナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁4/12	内面に油煙付着
115	42-03	土師器	?	中地区 B34	SD6 かた	(口)	14.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	粗	褐灰 10YR6/1	口縁3/12	
116	46-01	陶器	擂鉢	中地区 B34	SD6	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 7.5YR6/6	口縁部小片	信楽産
117	46-02	陶器	擂鉢	中地区	SD6(新)	—		外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 2.5YR7/6	口縁部小片	信楽産
118	40-02	陶器	擂鉢	中地区	SD6 黒色粘土	—		外;ロクロナデ→未調整 内;ロクロナデ→櫛目	粗	にぶい橙 2.5YR6/4	口縁部小片	信楽産 山田Ⅲか 注口有 使用痕有
119	43-04	陶器	擂鉢	中地区 B34	SD6	—		外;回転ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ→櫛目	粗	橙 2.5YR7/6	口縁部小片	信楽産
120	41-02	陶器	擂鉢	中地区 畦付近	SD6	(口)	29.8	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	密	橙 2.5YR7/6	口縁3/12	信楽産 山田Ⅲb型式 16C前半
121	41-01	陶器	擂鉢	中地区	SD6 黒色粘土	(口) (底)	40.2 18.0	外;ロクロナデ→未調整 内;ロクロナデ・オサエ→櫛目	粗	橙 2.5YR6/6	口縁4/12 底部7/12	信楽産 山田Ⅲb型式 注口有 使用痕有
122	40-01	陶器	擂鉢	中地区	SD6 黒色粘土	(口) (底)	36.0 16.6	外;ロクロナデ→未調整 内;ロクロナデ→ヨコナデ・ナデ→櫛目	粗	にぶい橙 2.5YR6/3	口縁3/12 底部5/12	信楽産 山田Ⅳa型式 外面底部に籾殻痕 内面底部に櫛目・使用痕有
123	47-02	陶器	擂鉢	中地区 B35	SD6 かた	(底)	15.0	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 5YR7/6	底部6/12	信楽産
124	47-01	陶器	擂鉢	中地区 B34	SD6(古)	(底)	12.0	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ→櫛目	粗	橙 2.5YR7/6	底部4/12	使用痕有 信楽産
125	43-01	陶器	擂鉢	中地区	SD6(新)	(口) (底)	14.8 12.2	外;回転ナデ→未調整→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ→櫛目	粗	赤褐 10R5/4	口縁1/12 底部4/12	信楽産
126	43-03	陶器	甕	中地区 B34	SD6	—		外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	灰褐 7.5YR5/1	口縁部小片	常滑産
127	42-01	陶器	甕	中地区	SD6 灰白粘質土	(口)	35.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰褐 7.5YR6/2	口縁1/12	常滑産
128	45-03	瓦	丸瓦	中地区	SD6	—		凸面;ケズリ後工具ナデ 凹面;布目 吊紐痕残 側縁部ケズリ	粗	にぶい橙 7.5YR7/4		
129	46-03	瓦	丸瓦	中地区 B22	SD6(古)	—		凸面;タタキ後工具ナデ 凹面;布目 吊紐痕残 側縁部ケズリ	密	灰白 N5/0		
130	44-01	瓦	平瓦	中地区	SD6	—		凸面;ナデ 凹面;ナデ 側縁部ケズリ	粗	橙 5YR6/6		
131	43-07	陶器	皿	中地区 B24	SD6(新)	(高)	7.0	外;ロクロ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 淡青 (断) 灰白N8/0	底部3/12	
132	42-04	陶器	?	中地区 B34	SD6 かた	(底)	12.0	外;ロクロナデ→ナデ 内;ロクロナデ→ナデ	密	灰白 N8/0	底部3/12	
133	42-02	陶器	水差し	中地区 B19	SD6	(口)	21.8	外;回転ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ	粗	灰褐 7.5YR6/2	口縁2/12	信楽産 16C後半
134	43-05	陶器	丸皿	中地区 B32	SD6	(口) (高)	11.6 6.4	外;施釉 内;施釉	粗	(釉) 灰白 5Y8/1	口縁3/12 底部3/12	志野焼
135	43-02	陶器	折縁皿	中地区 B24	SD6	(口) (高)	12.0 6.2	外;ロクロナデ→ハリ付高台ナデ 内;ロクロナデ(施釉)	密	にぶい黄 2.5Y6/3	口縁5/12 底部5/12	瀬戸焼

第23表　荒木氏館跡出土遺物観察表（３）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
136	44-03	陶器	椀	中地区	SD6	(口) 10.4 (高) 4.7	外;ロクロ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 褐 7.5YR4/3	口縁2/12 底部完存	天目茶椀
137	43-06	陶器	椀	北地区 B22	SD6 粘土層	(口) 10.0 (高) 4.0	外;ロクロ(施釉)→ケズリ出し高台 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 赤黒 10YR1.7/1	口縁6/12 底部完存	天目茶椀
138	45-02	陶器	椀	中地区 B21	SD6	(高) 4.4	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 N8/0	底部6/12	外内面に染付け
139	45-01	陶器	椀	中地区 B23	SD6	(高) 5.4	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) 灰白 2.5GY8/1	底部6/12	外内面に染付け
140	48-05	土師器	皿	中地区 C43・44	SK10	(口) 9.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	にぶい橙 7.5YR6/4	口縁4/12	
141	48-01	土師器	皿	中地区 C43・44	SK10	(口) 15.0	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙 7.5YR7/6	口縁1/12	
142	48-04	土師器	皿	南地区 D56	Pit6	(口) 7.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	灰白 10YR8/2	口縁6/12	
143	48-08	土師器	皿	南地区 D56	Pit6	(口) 8.6	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙 10YR8/3	口縁11/12	
144	55-01	土師器	皿	中地区 C42	Pit1	(口) 8.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4		
145	55-04	土師器	皿	中地区 D43	Pit1	(口) 9.3	外;ナデ・オサエ 内;ナデ	密	灰白 10YR8/1	口縁9/12	
146	48-02	土師器	皿	中地区 C42	Pit4	(口) 9.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙 5YR7/6	口縁5/12	
147	55-03	土師器	皿	中地区 C42	Pit4	(口) 8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙 5YR7/6	口縁6/12	
148	55-02	土師器	皿	中地区 D44	Pit2	(口) 9.0	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙 10YR8/3	口縁6/12	
149	55-06	瓦器	皿	中地区 C42	Pit4 №.1	(口) 8.6	外;ユビオサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	暗灰 N3/0		内面に暗文
150	55-07	瓦器	皿	中地区 C42	Pit4	(口) 8.9	外;ユビオサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	暗灰 N3/0	口縁11/12	内面に暗文
151	56-01	瓦器	皿	中地区 C42	Pit4	(口) 9.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	暗灰 N3/0		内面に暗文
152	49-04	瓦器	皿	中地区 B34	Pit4	(口) 9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰 N6/0	口縁3/12	
153	49-02	瓦器	皿	中地区 B34	Pit4	(口) 9.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	暗灰 N3/0	口縁4/12	内面に暗文
154	56-02	瓦器	椀	中地区 D44	Pit3	(口) 15.0 (高) 6.0	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ナデ 内;ナデ・沈線→ミガキ	粗	灰 N4/0	口縁3/12	内面に暗文
155	49-03	瓦器	椀	中地区 C42	包含層	(口) 18.1 (高) 7.3	外;ハリ付高台ナデ→ミガキ→ヨコナデ 内;ヨコナデ・沈線→ナデ・ミガキ	密	灰 N4/0	口縁1/12 高台2/12	内面に暗文
156	49-01	瓦器	椀	中地区 C42	包含層	(高) 6.3	外;ナデ→ハリ付高台ナデ 内;ナデ・ﾊｹﾒ	粗	灰 N4/0	高台11/12	内面に暗文
157	50-02	瓦器	椀	中地区 D44	包含層	(口) 15.5 (高) 4.6	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ナデ・ミガキ	密	暗灰 N3/0	口縁7/12 高台完存	内面に暗文 信楽産
158	55-05	陶器	ねり鉢	中地区 D44	Pit2	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	粗	灰白 2.5Y8/1	口縁部片	
159	53-02	土師器	皿	南地区 D56	SK16	(口) 9.0 ～9.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白 10YR8/2	完存	在地産
160	53-03	土師器	皿	南地区 D56	SK16	(口) 8.6 ～8.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白 10YR8/2	口縁11/12	在地産
161	52-03	瓦器	椀	南地区 D56	SK16	(口) 15.7	外;ナデ・オサエ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁3/12	内面に暗文
162	51-02	瓦器	椀	南地区 D56	SK16-②	(口) 13.5 (高) 4.5	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁11/12 高台8/12	内面に暗文
163	52-01	瓦器	椀	南地区 D56	SK16	(口) 13.6 (高) 4.8	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁4/12 高台9/12	内面に暗文
164	52-02	瓦器	椀	南地区 D56	SK16	(口) 14.8 (高) 5.2	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	粗	灰白 2.5Y8/1	口縁3/12 高台9/12	内面に暗文
165	51-04	瓦器	椀	南地区 D56	SK16	(口) 13.4 (高) 5.1	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 2.5Y8/1	口縁4/12 高台5/12	内面に暗文
166	51-01	瓦器	椀	南地区 D56	SK16-①	(口) 13.8 (高) 5.3	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁11/12 高台11/12	内面に暗文
167	51-03	瓦器	椀	南地区 D56	SK16	(口) 14.2 (高) 4.0	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁6/12 高台4/12	内面に暗文
168	52-04	瓦器	椀	南地区 D56	SK15	(口) 13.2	外;ナデ・オサエ→ハリ付高台ナデ→ ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白 N8/0	口縁4/12 高台2/12	内面に暗文
169	53-01	土師器	椀	南地区 E55	SK19	(口) 12.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁11/12	
170	50-01	陶器	ねり鉢	南地区 E55	SK19	(高) 14.9	外;ロクロナデ→ロクロズリ→ハリ付高台ナデ 内;ロクロナデ(摩滅のため不明瞭)	粗	灰白 2.5Y7/1	高台3/12	
171	48-07	土師器	皿	南地区 D56	SD18	(口) 8.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁5/12	
172	48-03	土師器	皿	南地区 D56	Pit6	(口) 8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙 10YR8/4	口縁11/12	
173	48-06	土師器	皿	南地区 D57	SD13	(口) 10.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙 10YR8/4	口縁6/12	
174	49-05	土師器	甕	南地区 C56	Pit2	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	暗灰 N3/0	口縁部片	
175	48-09	瓦器	椀	南地区 D54	Pit2	(口) 12.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ミガキ→ヨコナデ・沈線	密	灰 N5/0	口縁3/12	
176	44-02	陶器	椀	中地区 C42	Pit4	(高) 8.1	外;ケズリ出し高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	粗	(釉) 灰白 10Y8/1	底部完存	
177	39-04	磁器	椀	南地区 E53	包含層	—	外;ロクロ(施釉) 内;ロクロ(施釉)	密	(釉) ｵﾘｰﾌﾞ灰 10Y6/2	口縁部片	青磁 外面に陰刻花文？

第24表　荒木氏館跡出土遺物観察表（４）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)		調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
178	57-01	瓦	丸瓦	菩提寺跡				凸面:タタキ(縄目痕)後工具ナデ 凹面:布目　側縁部ケズリ・ヘラ切りナデ	密	灰黄 2.5Y6/2		
179	59-01	瓦	丸瓦	菩提寺跡				凸面:ナデ 凹面:布目・ナデ　側縁部ケズリ	密	黒褐 7.5YR3/2		
180	58-01	瓦	軒平瓦	菩提寺跡				凸面:ヨコナデ　？文 凹面:ヨコナデ　側縁部ケズリ　瓦当部裏面ケズリ	粗	灰 N5/0		
181	61-01	瓦	丸瓦	菩提寺跡				凸面:ナデ 凹面:布目　側縁部ケズリ	密	橙 5YR7/6		
182	60-01	瓦	平瓦	菩提寺跡				凸面:ナデ 凹面:布目　側縁部ケズリ	密	灰白 5Y7/1		

第25表　荒木氏館跡出土遺物観察表（５）

126・127は常滑産の甕の口縁部で、断面はＮ字状である。13世紀頃のものか。128～129は丸瓦の破片である。ともに凹面には布目の圧痕が残存し、紐ズレ痕も明瞭に確認できる。130は平瓦、133は信楽産の水差である。口縁部には低い扁平な突帯状を呈し、内面には僅かに段がある。

134～139は近世の遺物で、陶器の皿、茶椀、染付が出土している。134は志野皿で連房１段階。135は鉄絵皿である。連房３段階。136は丸椀で連房の２段階・137は天目茶椀で連房６段階のものである。

南地区

土坑ＳＫ10（140・141）　土師器皿が出土している。140の口径は９㎝ほどであるが、141は口径が15㎝と大きいものである。

ピット出土遺物（144～154）　土師器皿、瓦器皿・椀が出土している。144～148は土師皿である。149～153は瓦器皿で、底部内面にはヘラミガキが施される。154は瓦器椀である。

包含層出土遺物（155～157）　155・157は瓦器椀で、底部内面には螺旋状の暗文がみられる。156は信楽産の擂鉢であろう。

土坑ＳＫ16（159～167）　土師器、瓦器椀が出土している。159・160は土師皿で在地産か。161～167の瓦器椀はいずれも底部に螺旋状の暗文が施されているが、かなり退化している。また、器形も低平化しており、器高は３㎝後半のものが多く福田氏による編年[(6)]の６～７期に相当する。

土坑ＳＫ19（169～170）　土師器の椀と陶器の練鉢が出土している。中世前期の遺構であろう。

Ｐｉｔ遺物（172・174～176）　土師器皿と甕、瓦器椀が出土した。

包含層遺物（177）　青磁椀の破片（177）が出土している。176は古代の長頸壺である。

［註］

（１）以下信楽産の陶器については、畑中英二氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、信楽製品については畑中英二氏の編年により記述する。畑中英二『信楽焼古窯跡群分布調査報告書』（信楽町文化財報告書　第11集　信楽町教育委員会　2003年）
畑中英二『信楽焼の考古学研究』（サンライズ出版　2003年）

（２）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history Vol.1』三重歴史文化研究会　1990年）

（３）荒木氏館跡出土の登窯製品については、愛知学院大学の藤澤良祐氏に実見のうえ、ご教示を得た。以下、登窯製品については藤澤良祐氏の編年により記述する。藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅵ』瀬戸市歴史民俗資料館　1987年）藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅶ』瀬戸市歴史民俗資料館　1988年）藤澤良祐『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅷ　瀬戸市歴史民俗資料館　1989年』

（４）瓦については以下の文献を参照したほか、河北秀実氏・伊藤裕偉氏のご教示を得た。
小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦法隆寺出土古瓦の調査速報（２）」（『伊珂留我　法隆寺昭和資財帳調査概報10』1989年）

（５）赤塚次郎「廻間式土器」（『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター　1990年）

（６）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

Ⅷ　服部氏館跡（第１・２次）

１地区（第66図）

調査区は服部氏館跡と想定されている箇所の南に位置する。調査面積は水路工事部分の170㎡である。

調査区には中央部分に電柱があり、調査の安全上、その周辺に関しては調査対象から省き、東西に分割して調査を行っている。

調査の結果、東側に関しては小溝とピットが若干確認されたのみで、現代の撹乱によって遺構は殆ど確認できなかった。従ってここでは、主に西側の調査区について報告する。

基本層序（第67図）

表土・旧耕作土に続き、オリーブ・暗褐色の砂質土が堆積していたが、後世の撹乱溝が何条にもわたって掘削されている。地山は黄褐色の砂で、この層の上面よりやや下げたレベルにて検出を行ったが、後世の撹乱坑が多く、特に東側の調査区に関しては遺構の残りは良くなかった。

遺構

溝ＳＤ１　Ｂ・Ｃ３グリットで確認された遺構である。幅約1.5m、深さ10㎝程の浅い溝である。瓦器椀が出土しており、13世紀頃の遺構であろう。

溝ＳＤ２　Ｃ４グリットで確認された遺構である。撹乱坑により、全体の形状は不明である。幅1.2m、深さ10㎝ほどの溝である。

土坑ＳＫ３　Ｃ５グリットで確認された遺構である。南側が調査区外のため全体の形状は明確ではないが、楕円形の土坑であろう。埋土には長さ20㎝ほどの川原石が混じる。埋土より黒色土器が出土している。

土坑ＳＫ５　Ｄ５グリットで確認された、径0.8mほどの土坑である。古代の遺構か。

溝ＳＤ６　Ｂ・Ｃ２グリットで確認された遺構である。幅0.6m、深さ0.1mほどの溝である。遺物はわずかながら出土しているが、時期は不明である。

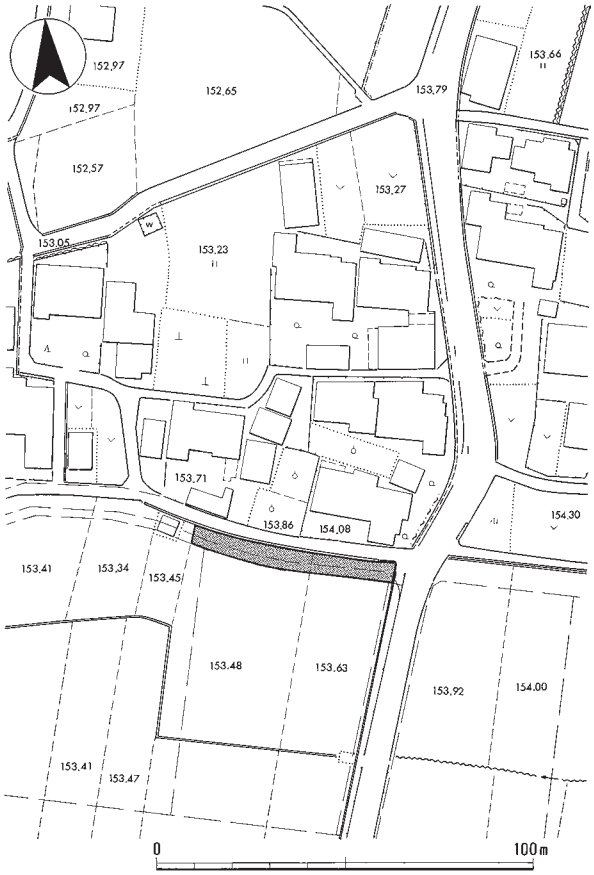
溝ＳＤ７　Ｂ・Ｃ３グリットで確認された遺構である。幅0.4m、深さ0.1mほどの溝である。この溝からも、遺物はわずかながら出土しているが、時期は不明である。

土坑ＳＫ８　Ｄ11グリットで確認された遺構である。幅0.4m、深さ0.1mほどの楕円形の土坑である。遺物はわずかながら出土しているが、時期は不明である。

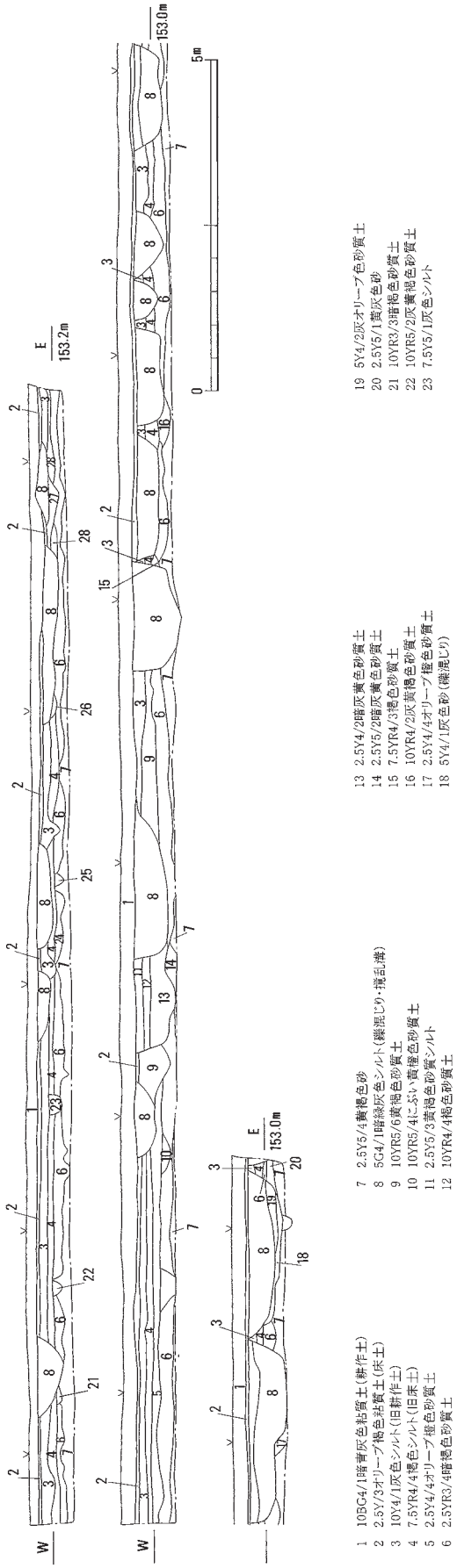
遺物（第74図）

土坑ＳＫ５（１）　土師器の甕（１）が出土している。口径の径は13.2㎝である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は若干つまみあげる。９世紀頃のものか。

溝ＳＤ１（２～４）　瓦器椀が出土している。２の外面にミガキはなく、指圧痕が残る。内面は横方向のミガキが施される。高台は低い断面三角形を呈する。３は口径14.4㎝、器高4.5㎝で、杯部は浅い形態である。外面にはヘラミガキが残る。４は口径15.5㎝、器高4.0㎝で、外面にヘラミガキが残る。福



第66図　服部氏館跡１地区位置図（1：200）



第67図　服部氏館跡１地区調査区土層断面図（１：100）

田編年[1]の６期頃か。

溝ＳＤ２（５～７）　土師器皿、瓦器椀・皿が出土している。５は土師器の皿である。６は瓦器椀の小片である。外面にミガキは確認できないが、内面には確認できる。７の瓦器皿は口径8.9cmで、底部内面に暗文を施す。内外面にヘラミガキは確認できない。

土坑ＳＫ３（８・９）　黒色土器が出土している。８の口径は15.6cm前後で、器高は4.9cmである。外面にはヘラミガキが施されていないが、内面には施す。また内面のみこみには暗文が施される。内黒焼成で黒色土器Ａ類[2]に相当する。９は口縁部が欠損するが手法的に共通し、８と同様のもので10世紀後半頃のものであろう。

Ｐｉｔ遺物（10～16）　瓦器が出土している。11・12は瓦器椀で、11の椀は口径14.9cmで外面に粗雑なヘラミガキを施す。内面には横方向のヘラミガキが施される。12も瓦器椀であるが内面は風化により調整は不明である。13～15は瓦器皿で、いずれも口径は９cm前後、器高は13が1.9cm、14・15が1.5cm前後である。内底面の暗文・口縁部内面のミガキを施す。椀・皿ともに福田編年の４期頃か。（豊田）

［註］

（１）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

（２）田中琢「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」（『日本の考古学』Ⅳ　1967年）

第68図　服部氏館跡（西側）１地区遺構平面図（１：200）

２地区（第69図）

調査区は服部氏館の北西へ約80mほどの地点である。１次調査では、調査対象地の一部になっていた箇所のビニールハウスの撤去が完了していなかったため、調査可能な部分、332㎡のみ調査を行い、残りの72㎡を次年度に２次調査として補足調査を行っている。したがって調査区は、いびつな形状を呈している。

基本層序（第70図）

表土・旧耕作土に続き、包含層である灰オリーブ色の砂質土が堆積し、地山は灰黄色砂である。L12・13グリット地点が最も高い微高地であり、東西方向に向かってそれぞれ下がっている。北方向に伸びる21・22ライン上のトレンチは表土・床土に続き、礫混じりの砂質土・細砂の順に堆積する。

遺構

流路ＳＲ11　Ｐ６・７グリットで確認された幅4.5m、深さ最大40㎝の溝である。埋土から土師器の甕が出土している。

流路ＳＲ12　Ｏ・Ｐ11・12グリットで確認された流路である。幅５m、深さは30㎝ほどで、埋土から暗文土師器や須恵器片が出土している。

流路ＳＲ13　M12・13グリット付近で確認された遺構である。幅は3.8m、深さ10㎝ほどの流路で、埋土からは奈良時代頃の土師器が含まれており、墨書の土師器はここで出土している。

土坑ＳＫ16　Ｌ21グリットで確認されている遺構で径２mほどの不整形な土坑である。深さは最大30㎝ほどある。

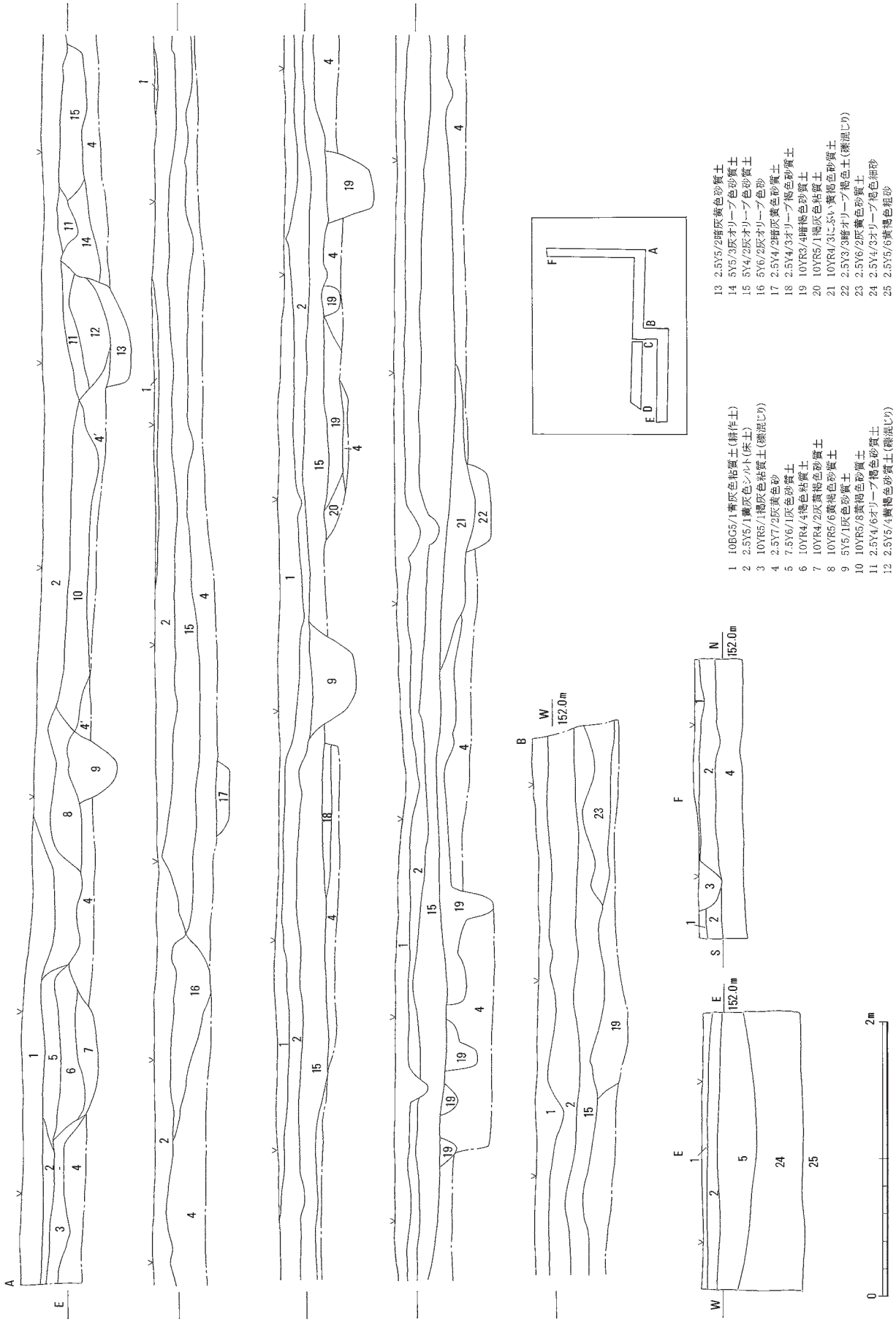
溝ＳＲ18　Ｅ21・22グリットで確認された溝で、幅0.6m、深さ40㎝である。遺物は小片のみで時期は不明である。

遺物（17～30）

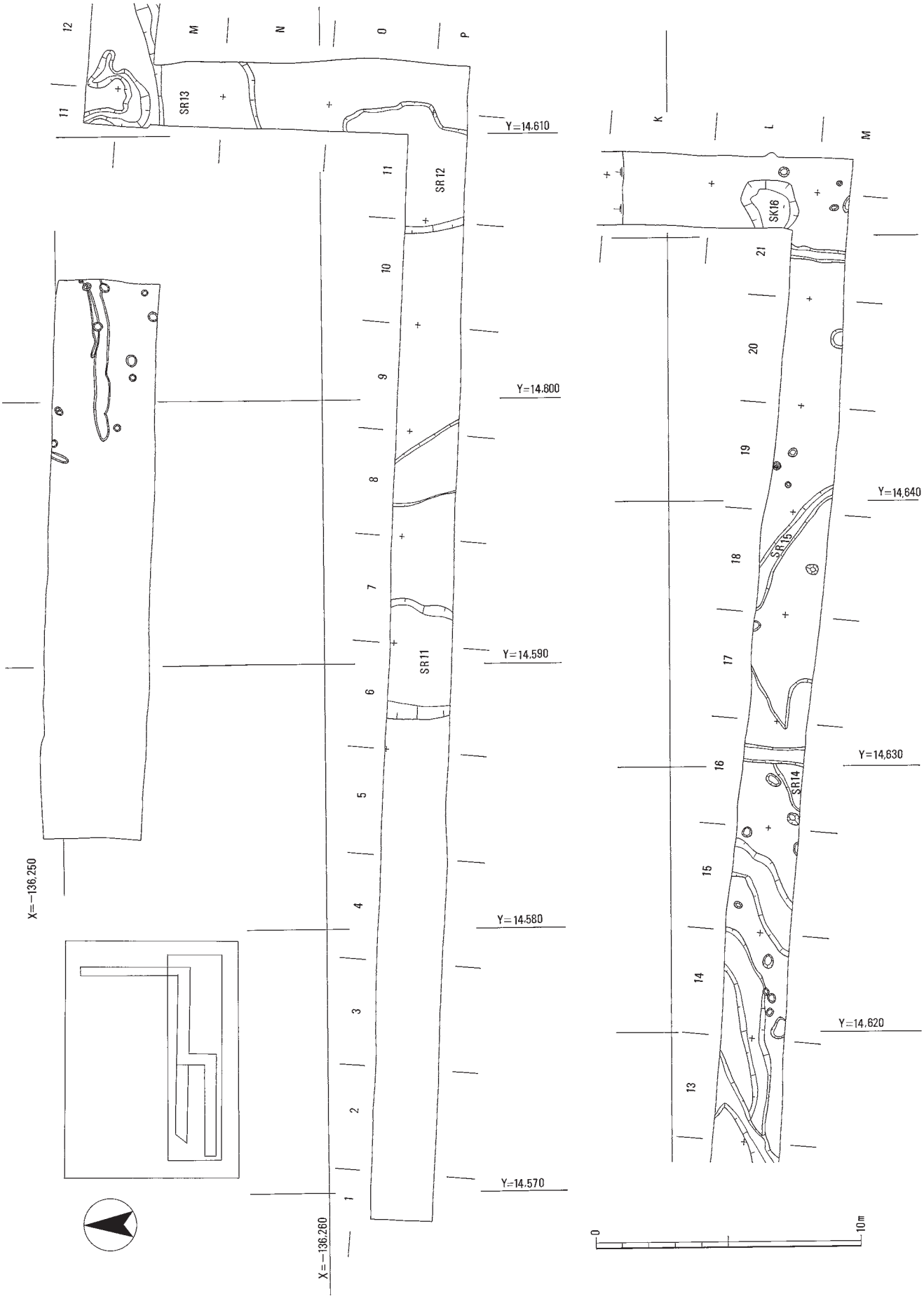
土師器・陶器などが出土している。

流路ＳＲ11（17～20）土師器の皿・甕が出土して

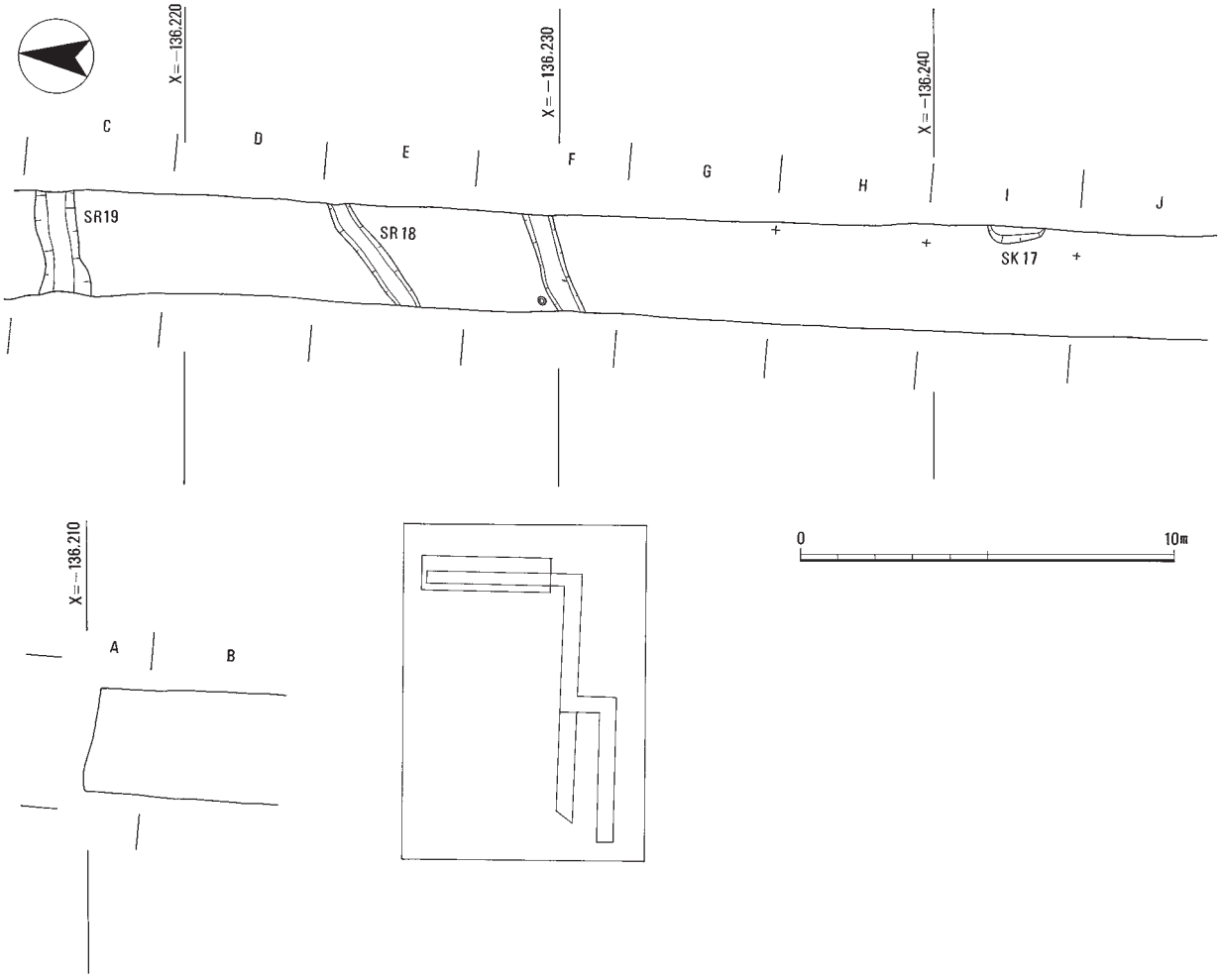
第69図　服部氏館跡２地区調査区位置図（1：1,000）



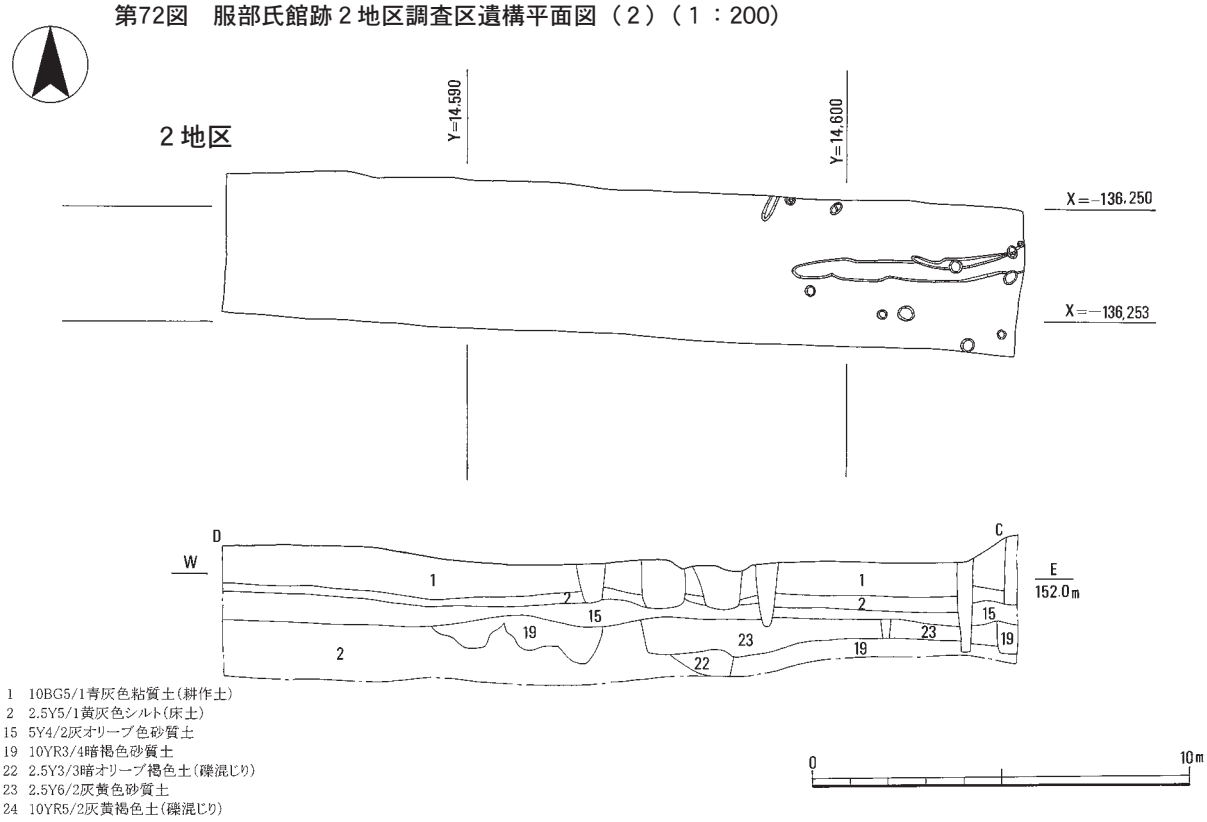
第70図　服部氏館跡２地区調査区土層断面図（１：40）



第71図　服部氏館跡２地区調査区遺構平面図（１）（１：200）

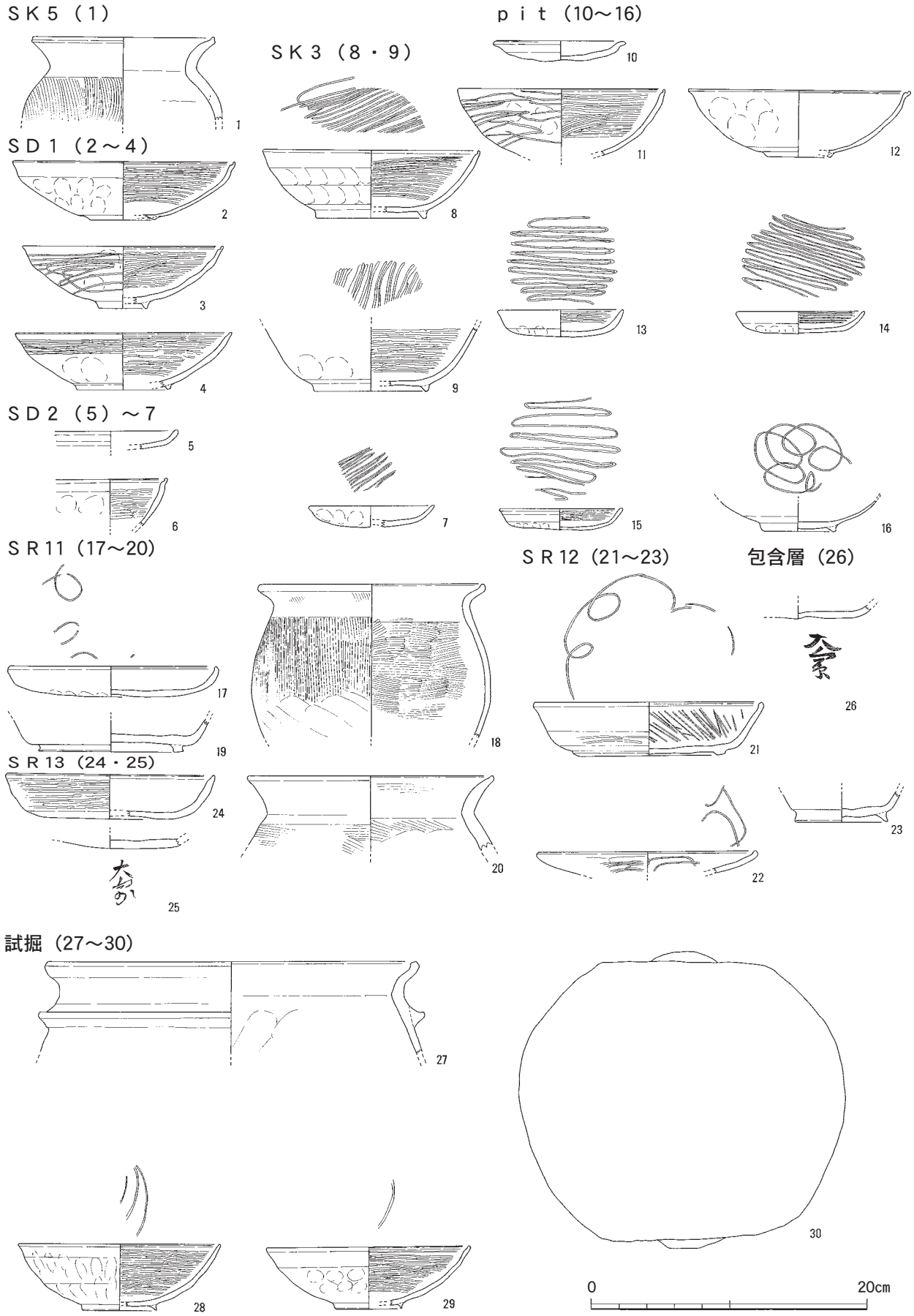


第72図　服部氏館跡２地区調査区遺構平面図（２）（１：200）



1　10BG5/1青灰色粘質土（耕作土）
2　2.5Y5/1黄灰色シルト（床土）
15　5Y4/2灰オリーブ色砂質土
19　10YR3/4暗褐色砂質土
22　2.5Y3/3暗オリーブ褐色土（礫混じり）
23　2.5Y6/2灰黄色砂質土
24　10YR5/2灰黄褐色土（礫混じり）

第73図　服部氏館跡（第２次）２地区補足調査区土層断面図・遺構平面図（１：200）



第74図　服部氏館跡出土遺物実測図（１：４）

いる。18は、口径16.4㎝で緩やかに外反する口縁をもち、体部外面にはタテ方向のハケを施し、下半部にはナナメ方向のケズリが施される。内面には横方向の断続的なハケが確認[1]できる。７世紀代のものか。20も甕の口縁部であるが、器壁が18よりも厚手であり、頸部は屈曲する。

流路ＳＲ12（21～23）　土師器・須恵器が出土している。21・22は暗文土師器である。21は口径16.6㎝、器高3.9㎝の杯で、内面に放斜状暗文が施される。22には螺旋状の暗文がある。23は須恵器の杯の高台である。

流路ＳＲ13（24・25）　24・25はともに土師器で、24の杯は口径15㎝で、外面には横方向のミガキが施される。25は底部の破片であるが、底部外面には墨書が確認でき、「大衆」の文字がある。

包含層（26）　26は土師器杯の底の破片で、25と同様に墨書が確認でき、「大衆」の文字がある。

試掘坑出土遺物（27～30）　27は大和型[2]の羽釜、28・29は瓦器椀、30は五輪塔の水輪である。瓦器椀（28・29）は口径14㎝、器高4.5～4.8㎝で、外面のヘラミガキは消失している。福田編年[3]の６期頃のものと考えられる。（豊田）

［註］

（１）笠井賢治「北伊賀における古代前半期の土師器甕」（『瓦衣千年　森郁夫先生還暦記念論文集』1999年）

（２）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良文化財研究所　1983年）

（３）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝	中世前期～後期	1	B・C3	幅1.5m、深さ0.1m、瓦器片出土
SD2	溝	中世前期	1	C4	幅2.2m、深さ0.1m、瓦器片出土
SK3	土坑	古代～中世	1	C5	楕円形の土坑、埋土に川原石混じる
SD4	溝	—	1	C・D12	
SK5	土坑	古代	1	D5	径0.8mほどの土坑
SD6	溝	—	1	B・C2	幅0.6mの土坑
SD7	溝	—	1	B・C3	
SK8	土坑	—	1	D11	幅0.4m、深さ●mの楕円形の土坑
9	—	—	—	—	欠番
10	—	—	—	—	欠番
SR11	流路	奈良	2	P6・7	幅4.5m、深さ最大0.4mの溝である。土師器片多い
SR12	流路	奈良	2	O・P11・12	幅最大5m、深さ約0.3m、土師器片多い
SR13	流路	奈良	2	M・N12・13	幅最大3.8m、深さ約0.1m、須恵器大甕片出土
SR14	流路	中世	2	M16	土師器片
SR15	流路	古代	2	L・M18・19	土師器片
SK16	土坑	中世前期	2	L21	径2mほどの不整形な土坑、土師器・瓦器片出土
SK17	土坑	奈良か	2	I22	須恵器片
SR18	流路	奈良か	2	E21・22	幅最大0.6m、深さ約0.4m、土師器片出土
SR20	流路	奈良か	2	C21	土師器片

第26表　服部氏館跡遺構一覧表

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	3-4	土師器	甕	1-D5	SK5	13.2	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙 7.5YR7/4	2/12	外面にスス付着
2	2-3	瓦器	椀	1-B3・C3	SD1	16	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	3/12	
3	2-4	瓦器	椀	1-B3・C3	SD1	14.4	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ→貼付高台 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	1/12	内面底部に暗文
4	3-2	瓦器	椀	1-B3・C3	SD1	15.5	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ→貼付高台 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	1/12	
5	1-2	土師器	皿	1-C4	SD2	—	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	2/12	
6	2-1	瓦器	椀	1-C4	SD2	—	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	1/12	
7	1-3	瓦器	皿	1-C4	SD2	8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ミガキ→ヨコナデ	やや粗	灰N5/	3/12	内面底部に暗文
8	3-3	瓦器	椀	1-C5	SK3	15.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/4	3/12	内面底部に暗文
9	3-1	黒色土器	椀	1-C5	SK3	高台8.2	外;オサエ・ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	暗灰N3/	4/12	内面底部に暗文
10	1-1	土師器	皿	1-C4	pit1	9.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	11/12	
11	2-2	瓦器	椀	1-C4	pit1	14.9	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	4/12	
12	2-5	瓦器	椀	1-C4	pit5	16	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;マメツ	やや密	暗灰N3/	4/12	
13	1-7	瓦器	皿	1-C3	pit8	9.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	12/12	内面底部に暗文
14	1-6	瓦器	皿	1-C3	pit4	9.3	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	6/12	内面底部に暗文
15	1-4	瓦器	皿	1-C3	pit8	8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	12/12	内面底部に暗文
16	1-5	瓦器	皿	1-C3	pit8	(底)5.4	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	やや密	暗灰N3/	底12/12	内面底部に暗文
17	5-3	土師器	皿	2-P6・7	SR11	15.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	橙5YR7/6	7/12	内面底部に暗文
18	4-1	土師器	甕	2-P6・7	SR11	16.4	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ハケメ→ヨコナデ	粗	灰白 10YR8/7	3/12	内面に炭化物付着
19	4-3	須恵器	杯	2-P6・7	SR11	10.4	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	青灰5PB6/1	3/12	
20	4-2	土師器	甕	2-P6・7	SR11	18.8	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケのちナデ→ヨコナデ	やや粗	橙5YR7/6	ごくわずか	
21	5-1	土師器	杯	2-O11・ P11	SR12	16.6	外;オサエ・ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	橙5YR7/6	5/12	放斜状暗文
22	5-4	土師器	皿	2-O11・ P11	SR12	16	外;ケズリ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	にぶい褐 7.5YR5/3	1/12	螺旋状暗文
23	4-4	土師器	杯	2-O11・ P11	SR12	6.8	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや粗	灰白N8/	6/12	
24	5-2	土師器	杯	2-M11・12	SR13	15	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい赤褐 5YR5/4	5/12	
25	4-5	土師器	皿	2-M11・12	SR13	—	外;ナデ 内;ナデ	密	橙5YR7/6	—	外面底部に墨書 (大衆)
26	4-6	土師器	皿	2-M11	包含層	—	外;オサエ・ナデ 内;ハケメ	やや密	にぶい橙 5YR7/4	—	外面底部に墨書 (大衆)
27	44-1	土師器	羽釜	試No.2	試掘坑	27	外;ヨコナデ→貼付ナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	やや密	灰褐 7.5YR5/2	2/12	大和型　内外面に スス付着
28	44-3	瓦器	椀	試No.2	試掘坑	14.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文
29	44-2	瓦器	椀	試No.2	試掘坑	14.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文
30	42-1	五輪塔		試No.23	表採	胎部23.5	—	—	—	—	

第27表　服部氏館跡遺物観察表

西明寺地内遺跡群
Ⅸ　有井遺跡

1　立地

有井・西明寺三反田遺跡（第75図）は、上野城下町が乗る上野台地の東麓、服部川左岸の沖積地に広がる遺跡である。遺跡所在地は、東から西にかけて緩やかに低くなっていく地形で、南側を服部川に流れ込む小河川、矢谷川が流れる。地形図をみると、調査地やその南側の水田面には、蛇行しつつ西流する旧河道の痕跡が水田畦畔として残っており、調査地もある時期それら旧河道の流路であったことがわかる。

調査地の東北側には、西明寺集落の一角を形成する現集落があるが、この集落は東西に延びる舌状の微高地の上に形成されており、調査地は旧河道の痕跡もあるとはいえ、巨視的にはこの舌状微高地が低くなりつつ南側へ張り出した南縁部を占める。

有井遺跡では、東西２ヶ所の調査区が存在するが、このうち東調査区は舌状微高地が南側へ張り出した部分に、西調査区は南北の低地部(旧河道)がひとつに閉じる手前の微高地西端に相当する。

西明寺三反田遺跡は、集落の南東部に位置し、北東方向から西流する流路を挟んで東側の微高地に位置する。

現在の集落は服部川の左岸には近世伊賀街道沿いにあるが、南の中庵寺のあるところが元村とされ、中庵寺の南の「宮ノ前」にはかって正八幡・天神神社が存在したとされるが、明治期に荒木の須智荒木神社に合祀された。

2　調査の方法

調査区の設定　三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を４ｍ×４ｍの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリットの１単位として調査を行っている。その際、グリット名の表記は、通常グリットの北西隅を表示の原点としている。

今回の有井遺跡の場合、施工工事の関係で調査対象個所が東西２地点存在し、ともにトレンチ自体は細長い線的なトレンチであった。しかし、両調査区とも、トレンチ主軸の方位は大体において国土座標の整数値方向と合致するものであったため、地区設定は国土座標の整数値を基準として行った。

表土除去　包含層より上位は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。

検出・掘削　表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。

遺構カード　小地区を単位として1/40で作成し、略図・土質・切り合いを記すとともに、遺物が出土した場合には、付与した遺構番号も記録した。

遺構番号の付与　当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種別を超えた遺跡毎の通し番号を与える方式で行っており、本遺跡においてもそれに従った。西調査区と東調査区も遺構番号は両調査区通しの遺構番号として付与している。また、調査時点では遺構番号を付与していなかったが、その後の整理の過程で必要と判断したもの（掘立柱建物など）も、調査時の遺構番号に追加して通し番号として付与した。

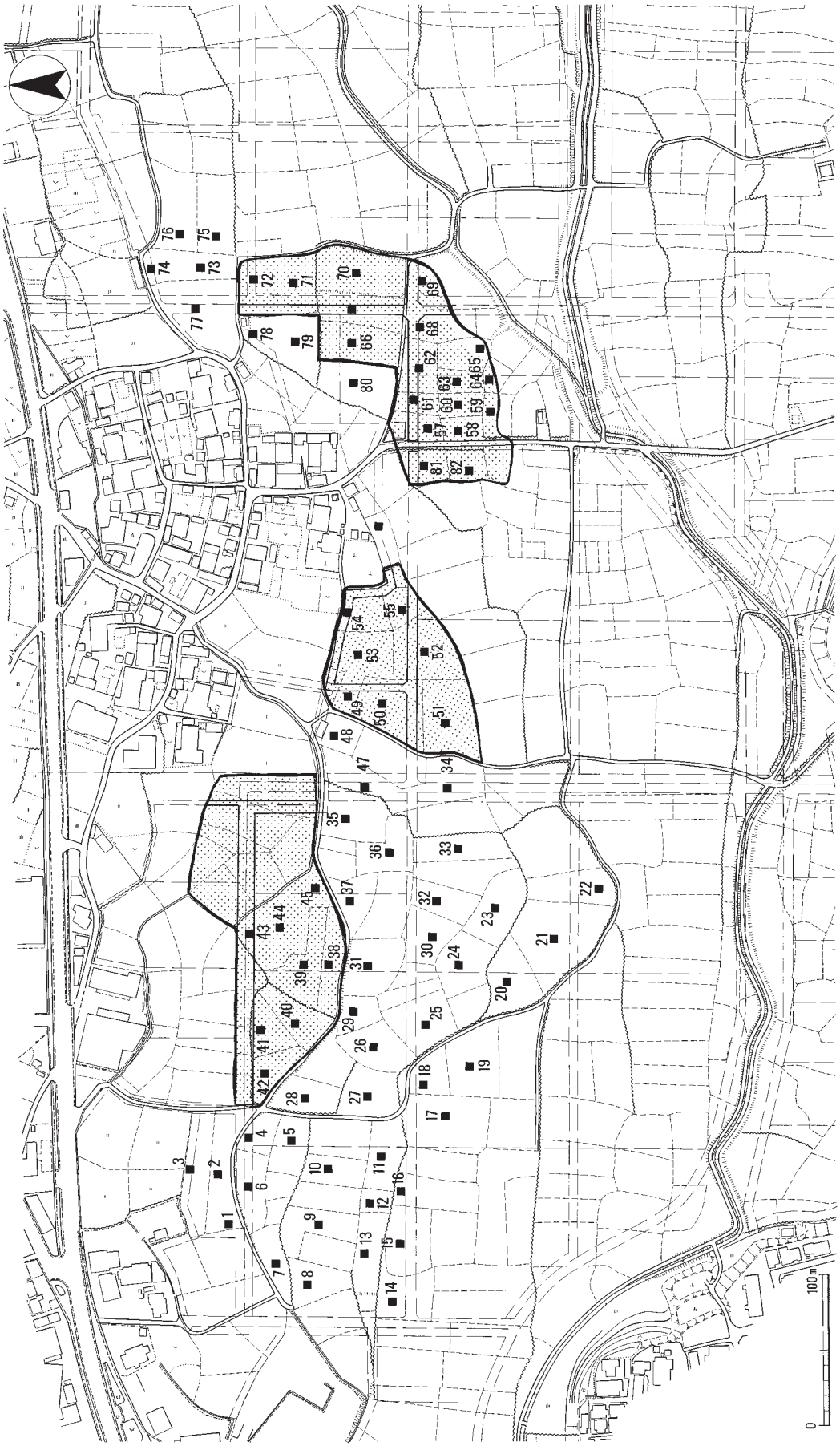
実測　土層や、詳細な図化が必要と認められた遺構は、実測を行った。遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10、調査区全体の遺構実測は1/20（遺構の疎ら部分は1/40）での作図を基本としたが、調査区土層は水平堆積部分の多い長い調査区だったため、縦方向を1/20、横方向を1/100とする変則的な作図を採用した。

遺構写真撮影　基本的に４×５インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助・メモ的に35㎜判の白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用した。

遺物類の整理

発掘調査現地から当センターへ出土遺物を搬送した後に、洗浄・注記・接合作業を実施した。

発掘調査を実施した各年度中に、発掘調査担当者が報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分した。報告書



第75図　西明寺周辺調査区・範囲確認坑位置図（１：4,000）

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝	中世前期	西(C)	F0	幅0.6mで南北方向にはしる。土師器・瓦器片。
SK2	土坑	平安末	西(C)	F12	埋土に炭層多く含み
SK3	土坑	平安末	西(C)	E13	方形の土坑
SK4	土坑	平安末	西(C)	G17	黒色土器片出土
SK5	土坑	平安末	西(C)	F17・18	土師器片出土
SD6	溝	中世前期	西(C)	F・G19	幅約1m、深さ0.12m、土師器片出土
SD7	溝	古代	西(C)	F20・21	長さ6m、幅0.4mの小溝。土師器片出土
SK8	土坑	古代	東(B)	R10	土師器甕片
SK9	土坑	古代	東(B)	R11	長径1.3m、短径1.0mの方形の土坑。土師器片出土
SD10	溝	古代	東(B)	Q9～11	土師器甕片・須恵器片
SR11	河道	奈良～平安	東(B)	R7～9	土師器片・須恵器片
SK12	土坑	古代	東(B)	R6～7	土師器片
SK13	土坑	古代	東(B)	R9	土師器片・石組あり
SR14	河道	古代？	東(B)	D～J11 R・S　2～5	調査区中央部から調査区西端で確認
SK15	土坑	古代	東(B)	K11	土師器片出土
SK16	土坑	—	東(B)	H27	瓦片出土
SK17	土坑	近世	東(B)	H27	信楽産の陶器出土
SK18	土坑	古代	東(B)	J27	土師器片出土
SK19	土坑	古代	東(B)	J27	SK18に切られる。土師器片・黒色土器片・須恵器片出土
SD20	溝	平安末	西(C)	F41	耕作溝
SK21	土坑	平安末	西(C)	F47・48	長径3.2m×短径2.6mの方形土坑。土師器・黒色土器出土
SD22	溝	平安末	西(C)	F45	幅0.2m。土師器・黒色土器片出土
SD23	溝	中世前期	西(C)	I49	幅3.4m、深さ0.3m。土師器・瓦器片出土
SD24	溝	中世前期	西(C)	K49	幅2.3～4.4m、深さ0.06m。土師器・瓦器片出土
SK25	土坑	中世前期	西(C)	O49	土器集中して出土
SK26	土坑	中世前期	西(C)	M・L49	石組の土坑。瓦器・土師器皿出土
SK27	土坑	中世前期	西(C)	O49	土壙墓？土師器・瓦器片多い。
SK28	土坑	中世前期	西(C)	M49	土壙墓？土師器・瓦器片多い。
SK29	土坑	中世前期	西(C)	P49	土師器・瓦器片。
SB30	掘立柱建物	中世前期	西(C)	E・F　15・16	東西3間(7.2m)×南北3間(7.0m)N10°E
SB31	掘立柱建物	中世前期	西(C)	K～N49	東西2間(4.2m)以上×南北6間(11.7m)N13°E
SB32	掘立柱建物	中世前期	西(C)	K～N49	東西2間(3.6m)以上×南北5間(5.8m)N15°E
SB33	掘立柱建物	中世前期	西(C)	N・O49	桁行3間以上×梁行2間　N13°E
SB34	掘立柱建物	奈良	東(B)	R・S　9・10	桁行3間以上×梁行2間(4.4m以上)N5°E
SB35	掘立柱建物	奈良	東(B)	R・S　14～16	桁行2間以上×梁行3間(9.8m以上)　N17°E
SB36	掘立柱建物	奈良	東(B)	M・N28	3間以上×1間以上

第28表　範囲確認坑一覧表

掲載遺物については、実測作業を行い、未掲載遺物については、袋詰にし、整理箱に収納したあとに、専用収蔵庫へ収納した。報告書掲載遺物については、それぞれ１枚ずつ専用のラベルを付加し、収蔵後の混乱を避けている。出土遺物量は、有井遺跡29箱、西明寺三反田遺跡23箱、服部氏館跡１箱である。

遺物写真撮影　報告書掲載遺物から任意に選択し、基本的にブローニ判白黒ネガで撮影した。集合写真などは４×５インチ判白黒ネガもしくはカラーリバーサルも使用している。

記録類

発掘調査にかかる記録類には、調査関連図面（平面図・土層断面図など）、遺構カード（1/40縮尺）、調査日誌、写真類がある。これらは、所定の番号を与え、当センター専用収蔵スペースで所蔵している。

３　遺構

西地区の遺構（第79～82図）

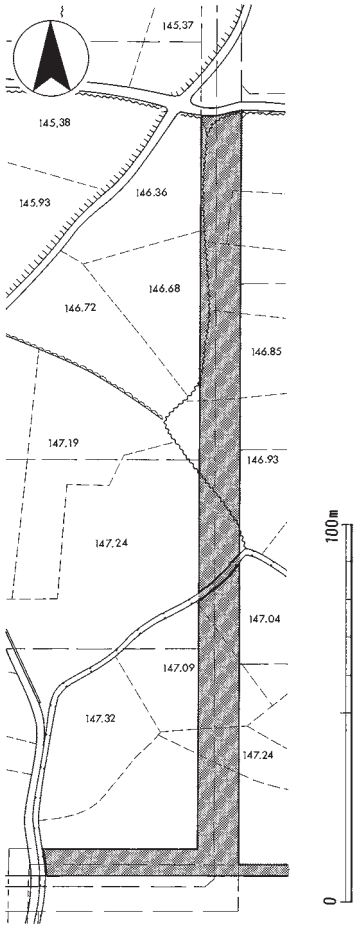
西地区は、用水路の存在によって東西に分割して調査を行った。なお、本地区は、調査時点において有井遺跡「Ｃ地区」としていた部分で、遺物註記などはそれに従って行っている。また、有井遺跡の調査面積は3,082㎡である。

基本層序（第78図）

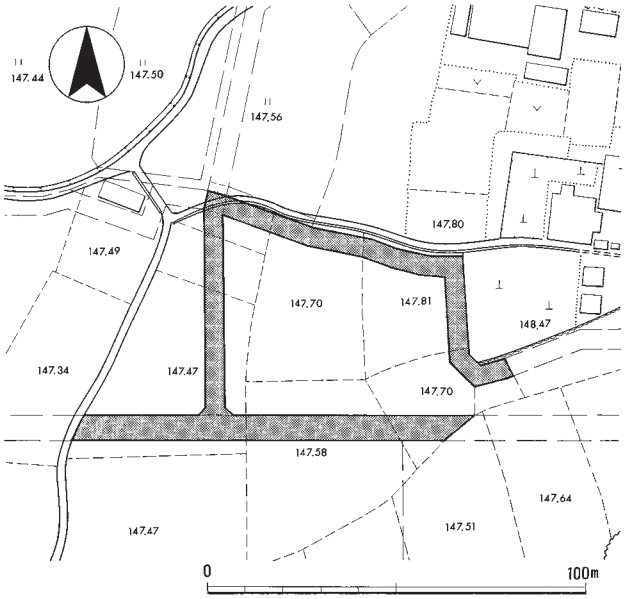
耕作土・旧表土の下に黄褐色シルト質粗砂、暗灰黄色粗砂と堆積する。地山は礫混じりの褐色・浅黄色の砂である。地形的には現集落に近い西ほど高くなっている。水路を挟んだ東西では東側に若干、砂層の堆積が厚い部分があるが、基本的は同様の堆積状況である。

〈用水路より西側〉

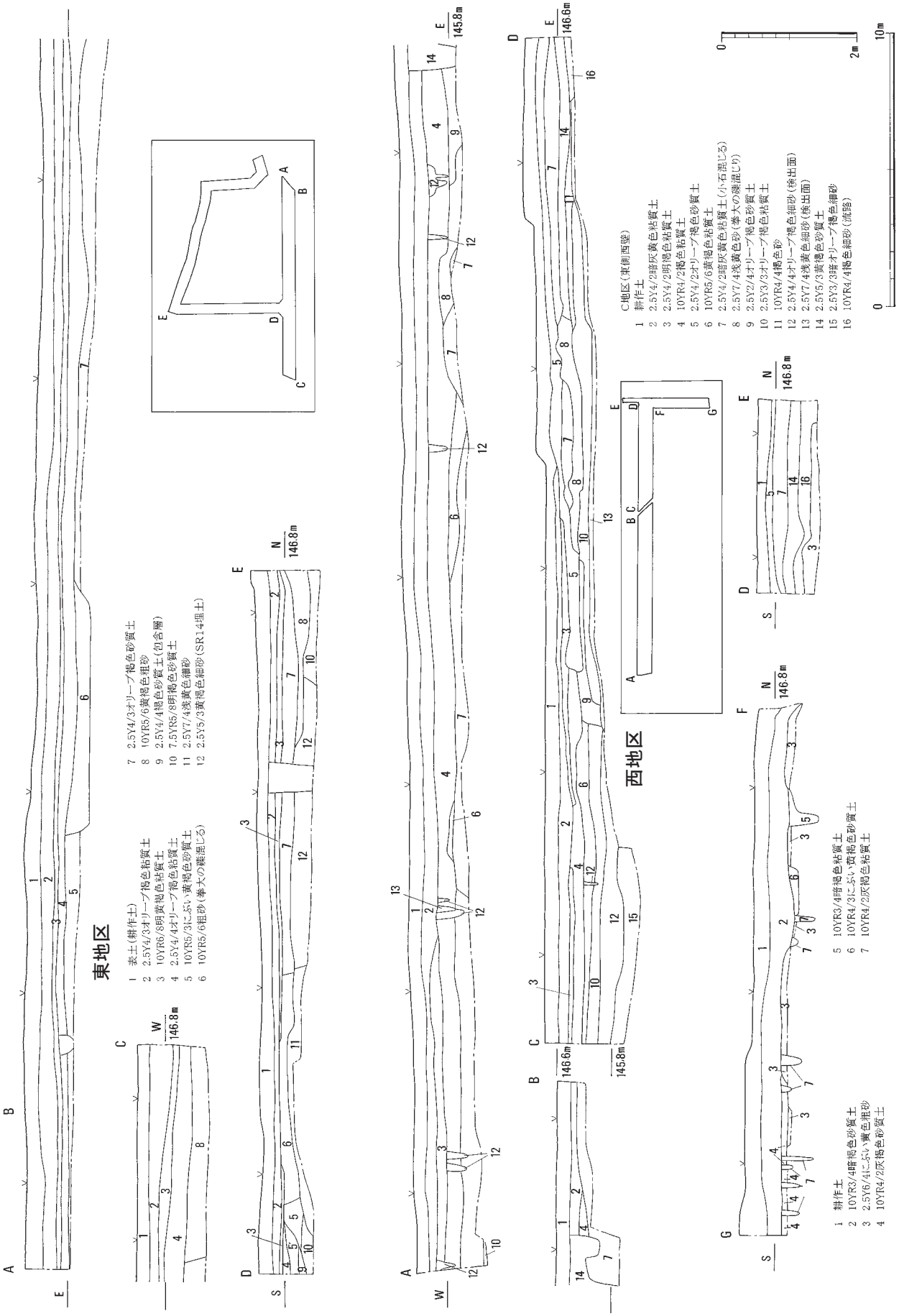
掘立柱建物ＳＢ30（第83図）　調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西３間（7.2m）×南北３間（7.0m）以上の総柱建物と思われ、棟方向はＮ10°Ｅを測る。北側がどこまで広がるかは不明であるが、柱間間隔は南北が北から1.8m＋2.1m＋2.1m、東西が2.4m等間である。



第76図　有井遺跡事業地内調査区位置図（西地区）
（１：2,000）



第77図　有井遺跡事業地内調査区位置図（東地区）
（１：2,000）



第78図　有井遺跡土層断面図（縦１：20　横１：200）

溝ＳＤ１　調査区の西端を走る南北方向の小溝である。幅0.6m、検出面からの深さ９㎝で、長さ8.5m分確認できた。

溝ＳＤ６　調査区を南北方向に走る小溝で、幅約１m、深さ12㎝ほどの規模をもち、８m分（調査区幅分）が確認される。前述のＳＤ１と方向や規模が大略一致し、両溝は溝中央の心々距離で約75mを測る。

溝ＳＤ７　長さ６m×幅40㎝、深さ６㎝を測る小溝である。

土坑ＳＫ２　長径３m×短径2.4m、深さ13㎝の長方形プランの土坑である。埋土より土師器・緑釉陶器・黒色土器などが出土している。

土坑ＳＫ３　長径2.0m×短径1.8mの方形を呈し、検出面から20㎝の深さをもつ。埋土から土師器・黒色土器が出土している。

土坑ＳＫ５　長径1.3m×短径1.2mの方形を呈し、検出面から20㎝の深さをもつ。

〈用水路より東側〉

基本層序（土層Ｅ－Ｄ・Ｆ－Ｇ）（第78図）

表土・旧耕作土を除き、礫混じりのにぶい黄褐色の粗砂が地山に相当し、この面で調査を行っているが、北側に向かっていくに従い下がるため、南側が微高地に相当することが判明した。

掘立柱建物ＳＢ31（第85図）　調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（4.2m）以上×南北６間（11.7m）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ13°Ｅを測る。ただし、西側から2列目の入側柱の中央柱穴が未検出のため、やや複雑な内部空間をもった建物であった可能性もある。東側がどこまで広がるかは不明であるが、柱間間隔は南北が北から1.8m＋1.8m＋2.4m＋2.1m＋2.1m＋1.5m、東西が2.1m等間である。

掘立柱建物ＳＢ32（第85図）　前述のＳＢ31と重複する掘立柱建物で、切り合い関係からＳＢ31に後出する。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西１間（2.4m）以上×南北５間（10m）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ15°Ｅを測る。ただし、西側から2列目の入側柱の中央柱穴が未検出のため、やや複雑な内部空間をもった建物であった可能性もある。東側がどこまで広がるかは不明であるが、柱間間隔は南北が北から1.8m＋2.1m＋2.0m＋2.0m＋2.1m、東西が2.1m等間である。

掘立柱建物ＳＢ33（第85図）　前述のＳＢ31・32の掘立柱建物の南側にて確認された。調査区の制約のため全体像は示しえないが、東西２間（3.6m）以上×南北５間（5.8m）の総柱建物と思われ、棟方向はＮ13°Ｅを測る。西側がどこまで広がるかは不明であるが、柱間間隔は南北が1.8m等間、東西が2.4mである。

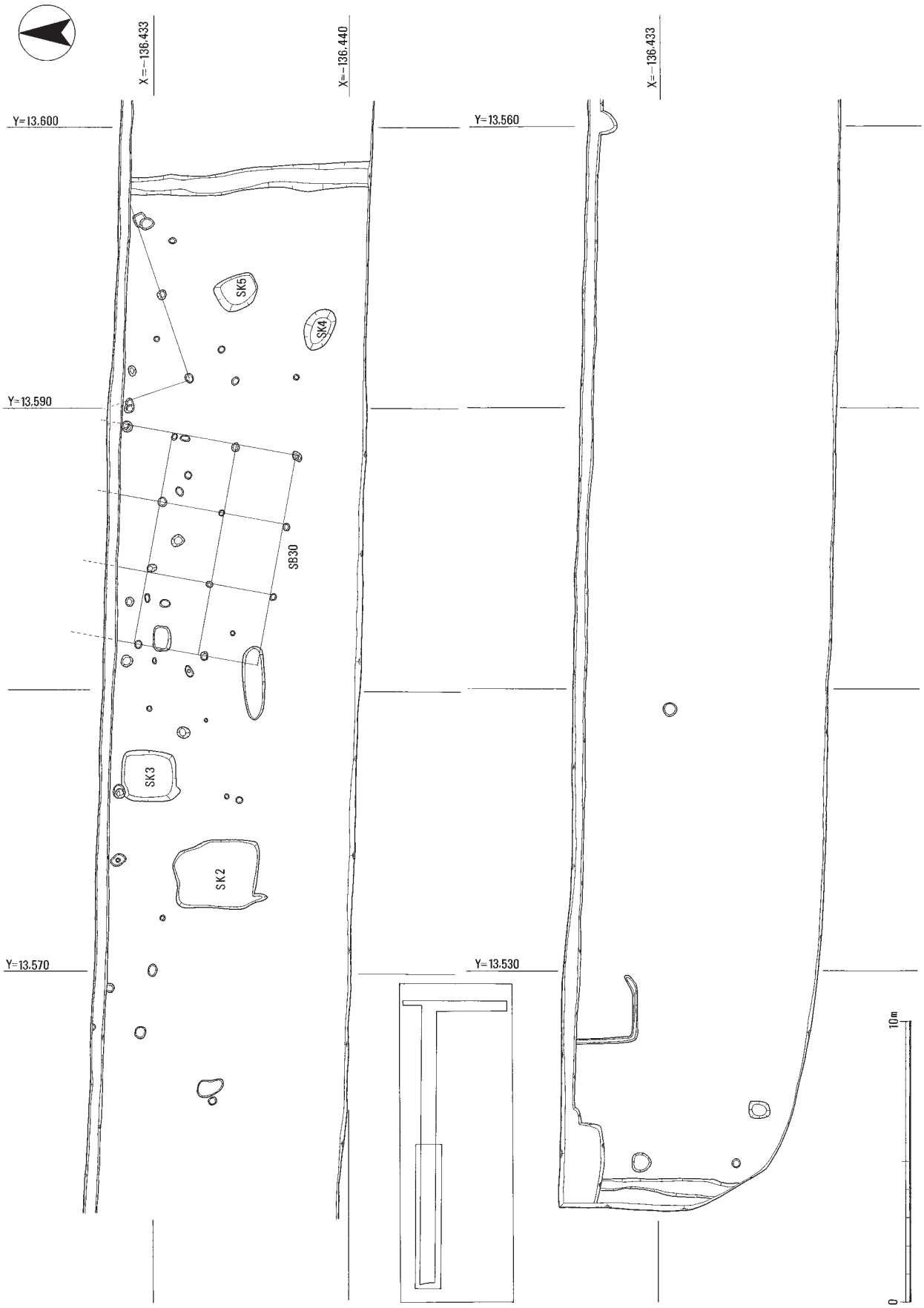
溝ＳＤ22　遺物が出土したことから番号を付与したが、幅20㎝、深さ４㎝程のいわゆる耕作痕的な小溝である。残りが悪く、長さ1.3m分しか残存していないが、溝の南側には平行して同様の細い５条の小溝があり、一連の耕作痕の可能性がある。

溝ＳＤ23（第84図）　幅3.4m、深さ30㎝を測る。この溝の北側には顕著な遺構が乏しく、逆に南側に所在する掘立柱建物群と溝の主軸をほぼ一致させていることから、掘立柱建物群の北側を画する性格があったと思われる。ただし、北西延長部分に相当するトレンチ西側では検出されておらず、その間で終息するか南側へ屈折すると推定される。土師器・瓦器が出土している。

溝ＳＤ24（第84図）　前述のＳＤ23の南側に存在する幅2.3～4.4m、深さ６㎝の溝で、北側法面はほぼＳＤ23と平行する。土師器・瓦器が出土している。

土坑ＳＫ21　長径3.2m×短径2.6mの方形プラン土坑であるが、南側が７㎝ほど一段深く掘り込まれ、都合２段の掘り込みを有する。黒色土器が出土している。

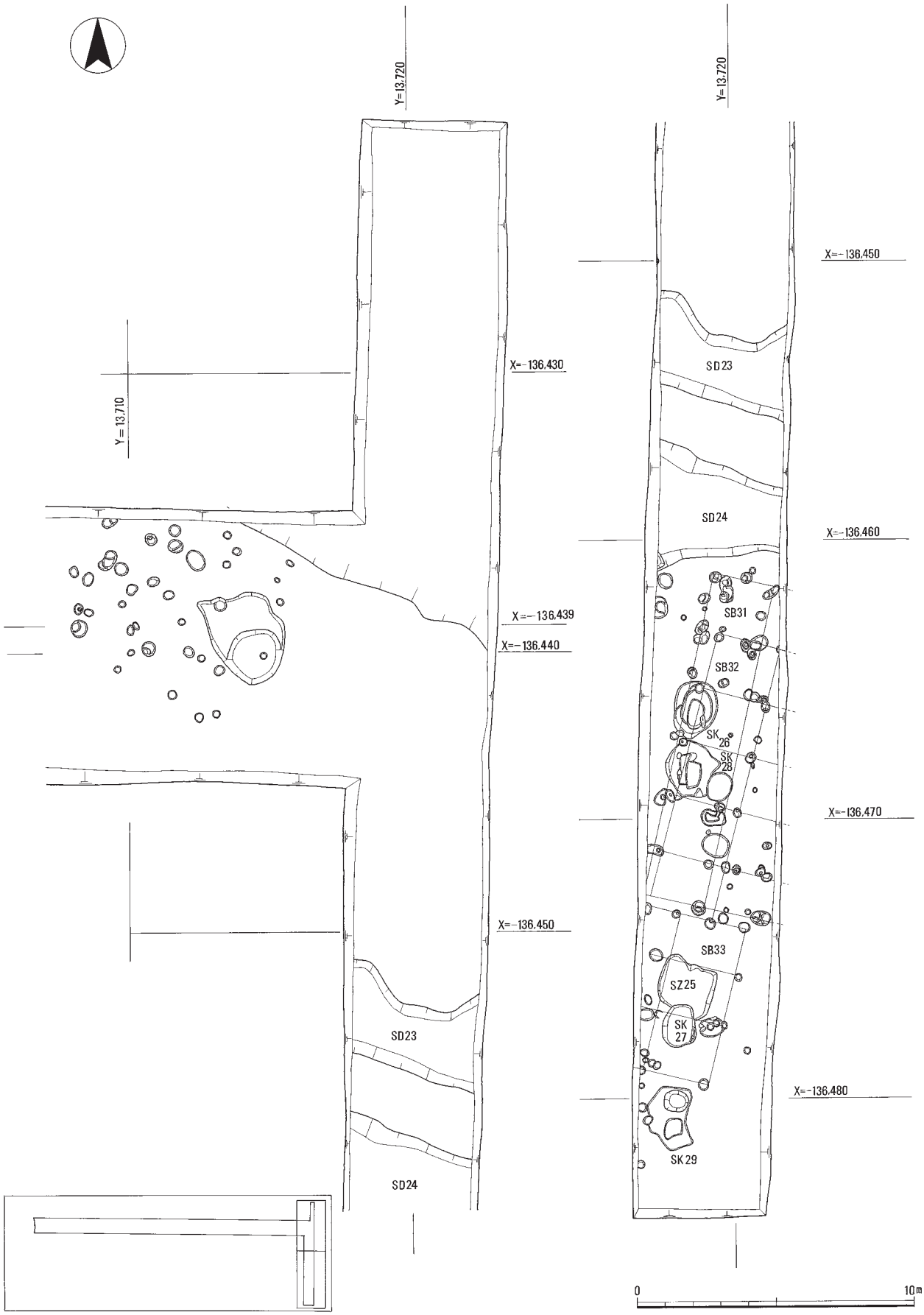
土坑ＳＫ26・28（第84図）　南北に隣接する２基の土坑であるが、土坑の長軸線が一致しており、一括して説明する。北側にあるＳＫ26は、南北2.05m×東西1.4mの土坑で、一見西側を底辺とした台形状の平面プランを有する。西側には1段、長径40㎝程度の礫で構成された石列が残存する。土坑中央部は、長径105㎝×短径50㎝、深さ27㎝の楕円径状に掘り窪められているほか、石列部分も低くなっていることから、浅いながらも都合３段の掘りこみを有することになる。２段目のテラス部分から土師皿



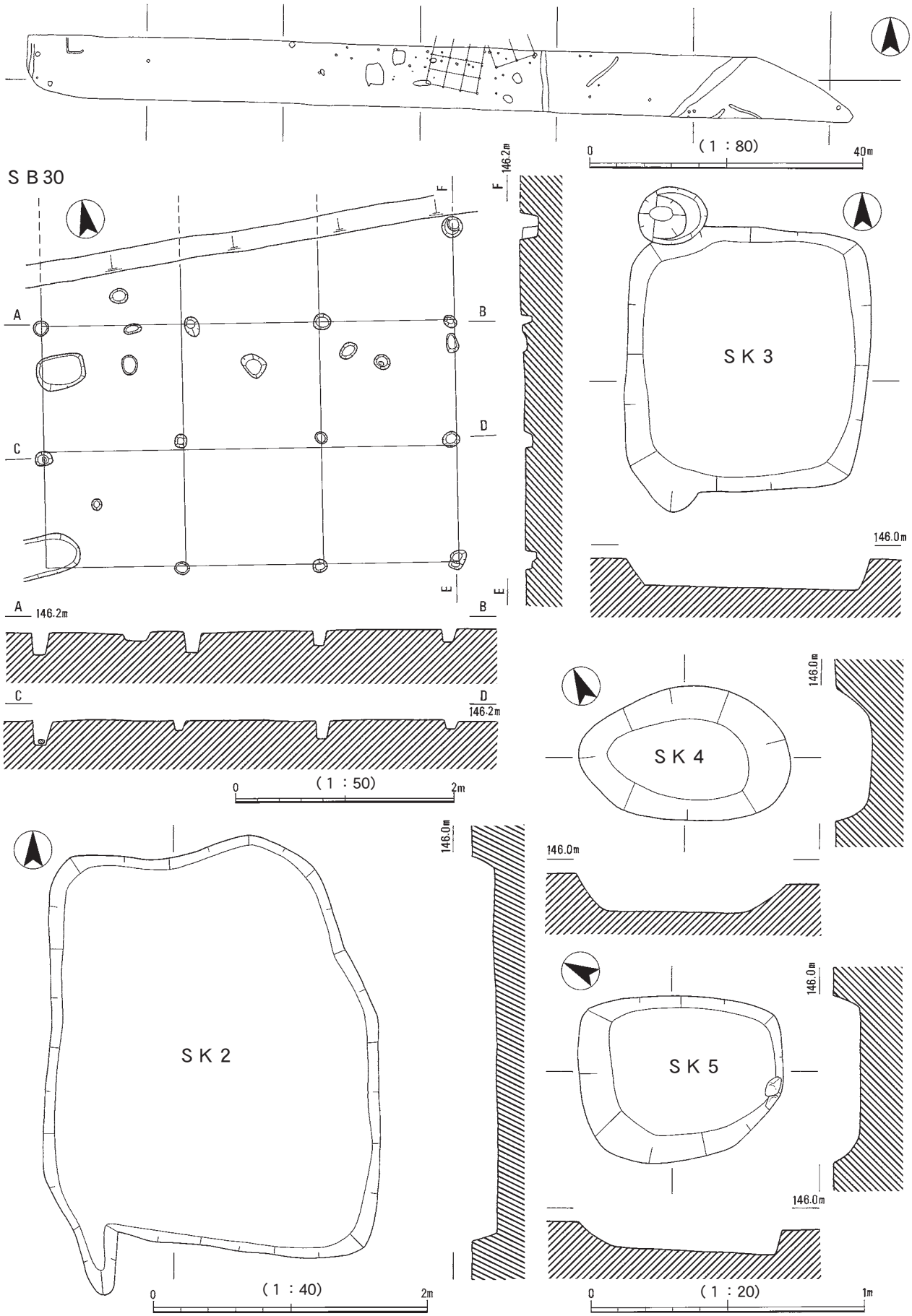
第79図　有井遺跡西地区遺構平面図（1）（1：200）

第80図　有井遺跡西地区遺構平面図（２）（１：200）

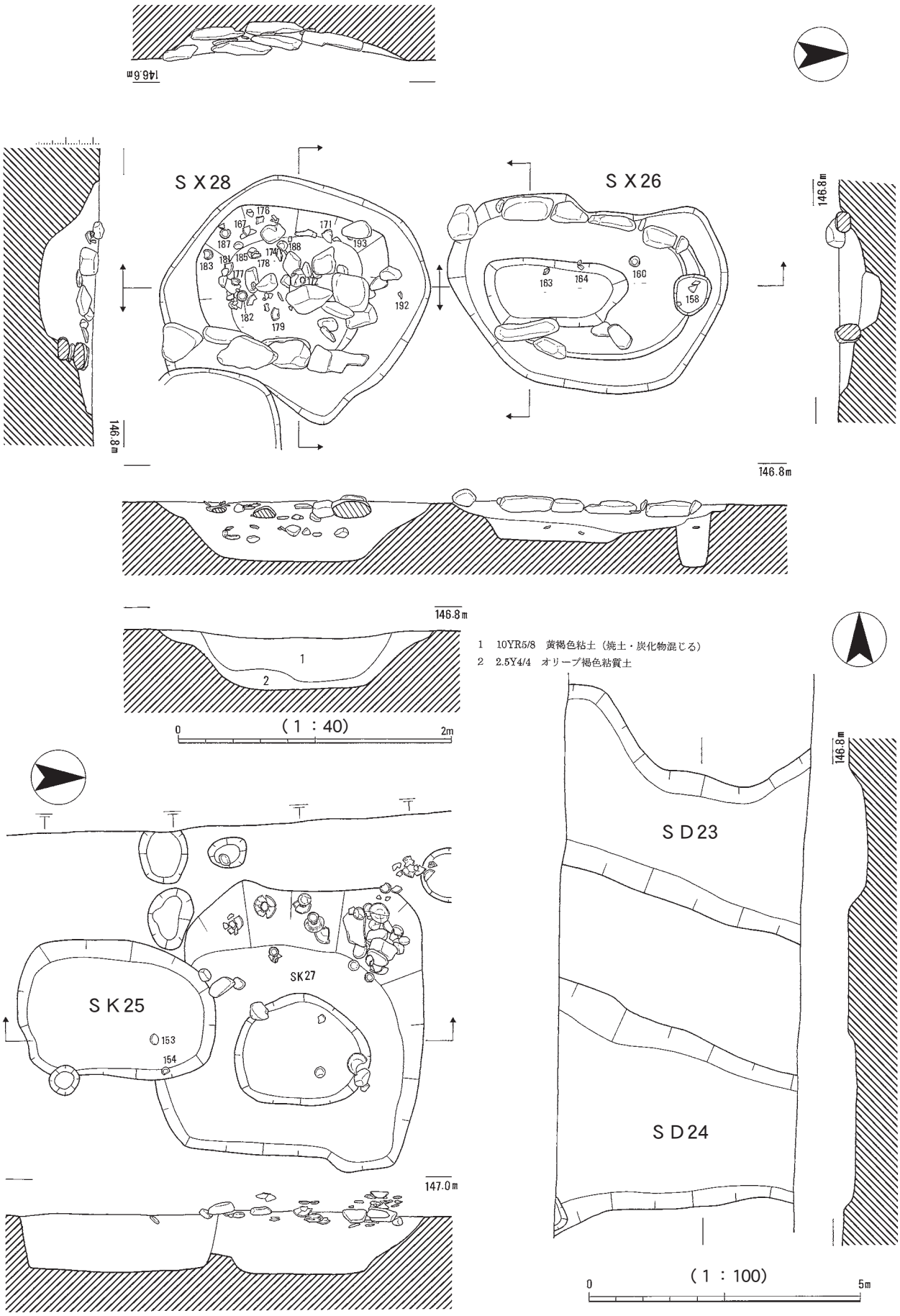
第81図　有井遺跡西地区遺構平面図（３）（１：200）



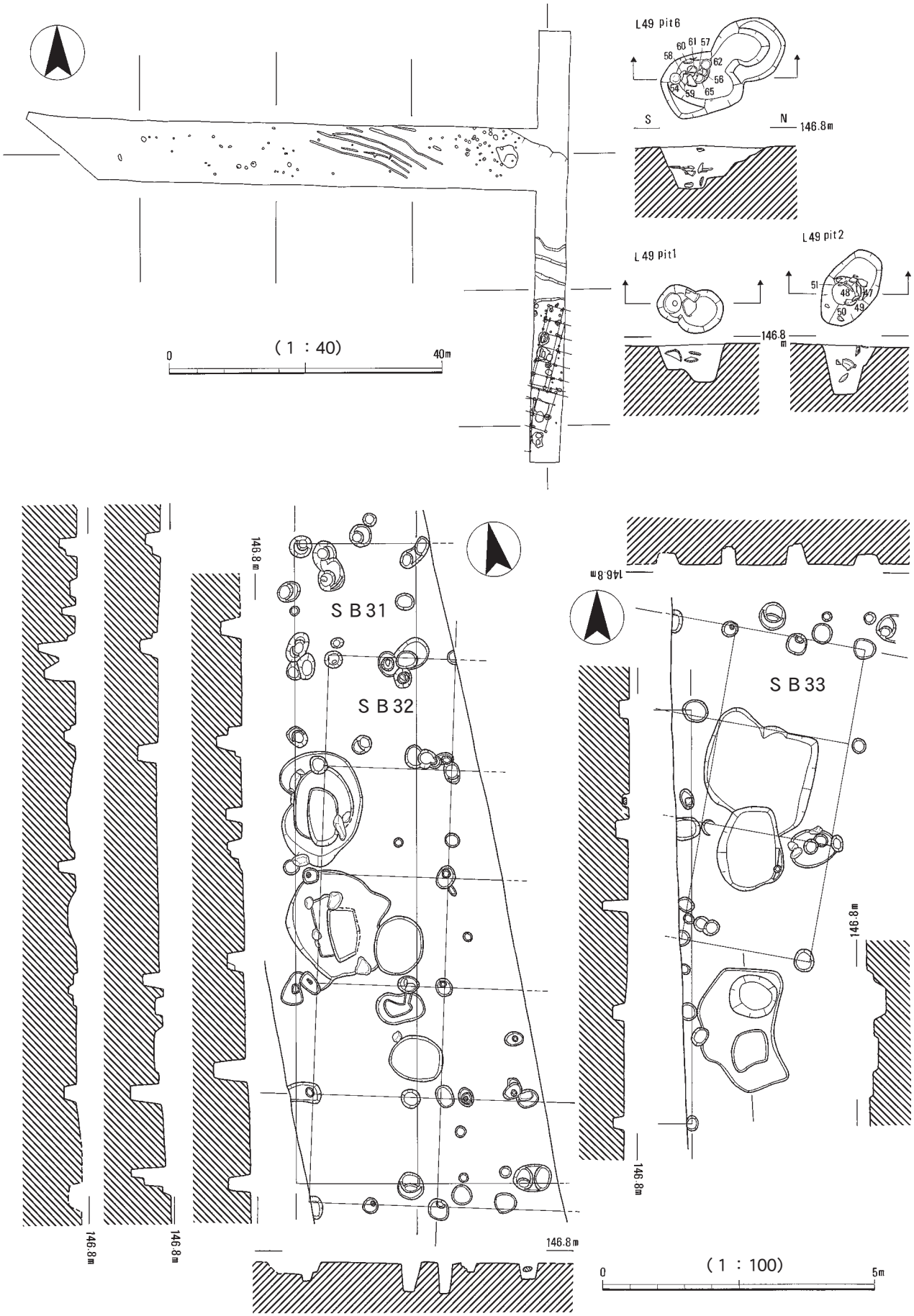
第82図　有井遺跡西地区遺構平面図（４）（１：200）



第83図　有井遺跡ＳＢ30・土坑ＳＫ２～５平面・断面実測図



第84図　有井遺跡ＳＸ26・28，ＳＫ27，ＳＤ23・24平面・断面図



第85図　ピット，ＳＢ31～33平面・断面図

（160）が出土している。埋土には焼土や炭も混じっている。

一方、南側に隣接するＳＫ28は、南北２ｍ×東西1.8mに掘り込まれた後、中央部をさらに長径（南北）1.4m、短径（東西）1.1m、深さ43cmほど掘り込まれた２段掘り込みの土坑である。下部掘り込みの東側側面には３段の石積みが残存しているが、土坑埋土からも礫類の出土があることから、本来は石室状に礫石で囲まれていたと思われる。また、埋土からは土師器や瓦器などの土器とともに、焼土や炭も出土している。

中央部を掘り込んだ形状や礫による石列、焼土や炭も含んだ埋土の特徴などは両者共通し、また主軸も一致することから、両者はセットで営まれたものと推知される。また、埋土に含まれる焼土や炭などの特徴から、本遺構が墓として機能していた可能性も考えられよう。その場合、小石室を有する中世墓ということになる。

土坑ＳＫ25（第84図）　長径2.0m×短径1.8mの長方形プランの土坑で、深さ0.4mを測る。検出面周辺にまとまって土器が出土しているが、土坑床面付近には存在しない。検出面周辺では土師器・瓦器が出土している。

土坑ＳＫ27（第84図）　長径1.5m×短径1.2mの隅丸長方形の土坑で、深さ30cmを測る。切り合い関係からＳＫ25より新しい土坑である。瓦器・陶器・磁器が出土している。

土坑ＳＫ29　長径2.2m×短径1.3mの不定形な土坑で、土坑内にピットが確認され、北側のピットが一番深く18cmを測る。土師器・瓦器椀が出土している。

２　東地区の遺構（第86図～89図）

東地区は、調査時点において有井遺跡「Ｂ地区」としていた部分で、遺物註記などはそれに従って行っている。

基本層序（第78図）

東西方向の土層（Ａ～Ｃ）は、耕作土・旧表土・床土の下に褐色の砂質土と堆積していた。地山は暗灰黄粗砂で、途中から褐灰色砂質土に変わる。遺構が確認しにくいためやや地山上面より下げて検出を行っている。地形的には現集落に近い東の地点から西に向けて下がっていき、西端には流路がある。南北の土層についても、黄褐色の礫混じりの粗砂層を含む意外は基本的に同様の堆積状況である。

掘立柱建物ＳＢ34（第90図）　南側が調査区外へ逃げるため全体形は不明であるが、桁行３間以上×梁行２間（4.4m）の側柱建物で、建物方位はＮ５°Ｅである。

掘立柱建物ＳＢ35（第90図）　南側が調査区外へ逃げるため全体形は不明であるが、桁行２間以上×梁行３間（9.8m）の側柱建物で、建物方位はＮ17°Ｅである

溝ＳＤ10　幅60cm、長さ10mの小流路で、深さ15cmを測る。やや蛇行しており、自然形成によるものであろう。

流路ＳＲ11　ＳＤ10に西接するが、ＳＤ10よりやや幅広の小流路で、幅1.4m×長さ10m、深さ20cmを測る。この溝も蛇行しており、人為的な掘り込みとは認められない。

流路ＳＲ14　幅13mほどの旧河道で、埋土は砂である。調査区の西側に存在し、この流路の西側は人為的な遺構が不明瞭なのに対して東側では多数の遺構が存在することから、区画溝的な役割ももった流路であった可能性がある。

土坑ＳＫ９（第91図）　長径1.1m、短径0.9mの長方形プランを採る土坑である。

土坑ＳＫ12（第91図）　長径2.0m、短径0.7m、深さ10cmを測る隅丸長方形を呈する土坑である。

土坑ＳＫ13（第91図）　径1.2mの円形プランの土坑である。二段に掘り込まれていることから一見掘立柱建物の掘形を思わせるが、対応する柱穴がないため土坑として扱った。

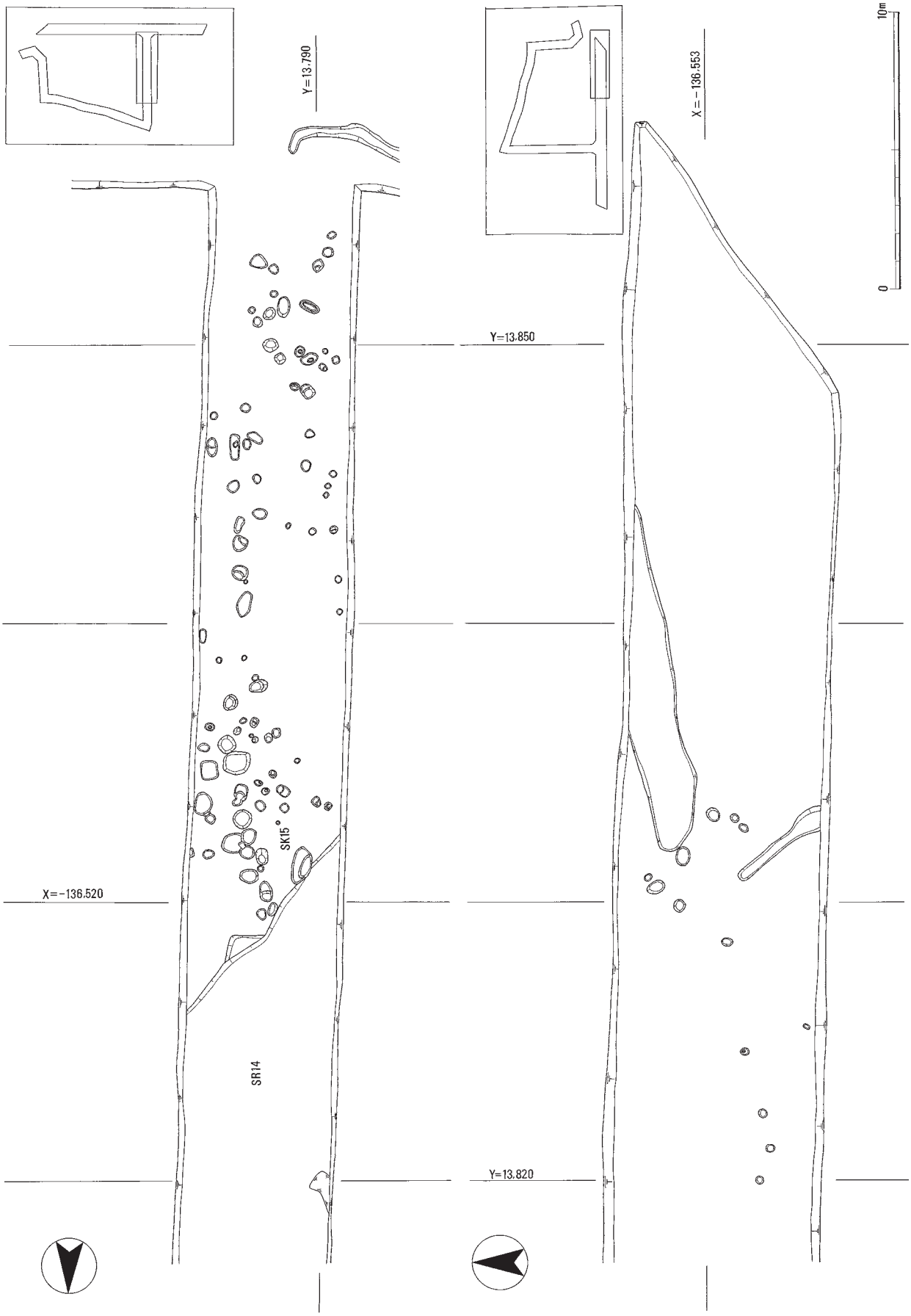
土坑ＳＫ15　長径1.3m×短径0.7mの楕円形プランの土坑で、深さ27cmを測る。

土坑ＳＫ16（第91図）　調査区隅で検出されたため全体形は不明であるが、径1.4m以上の方形形状の土坑で、深さ15cmを測る。

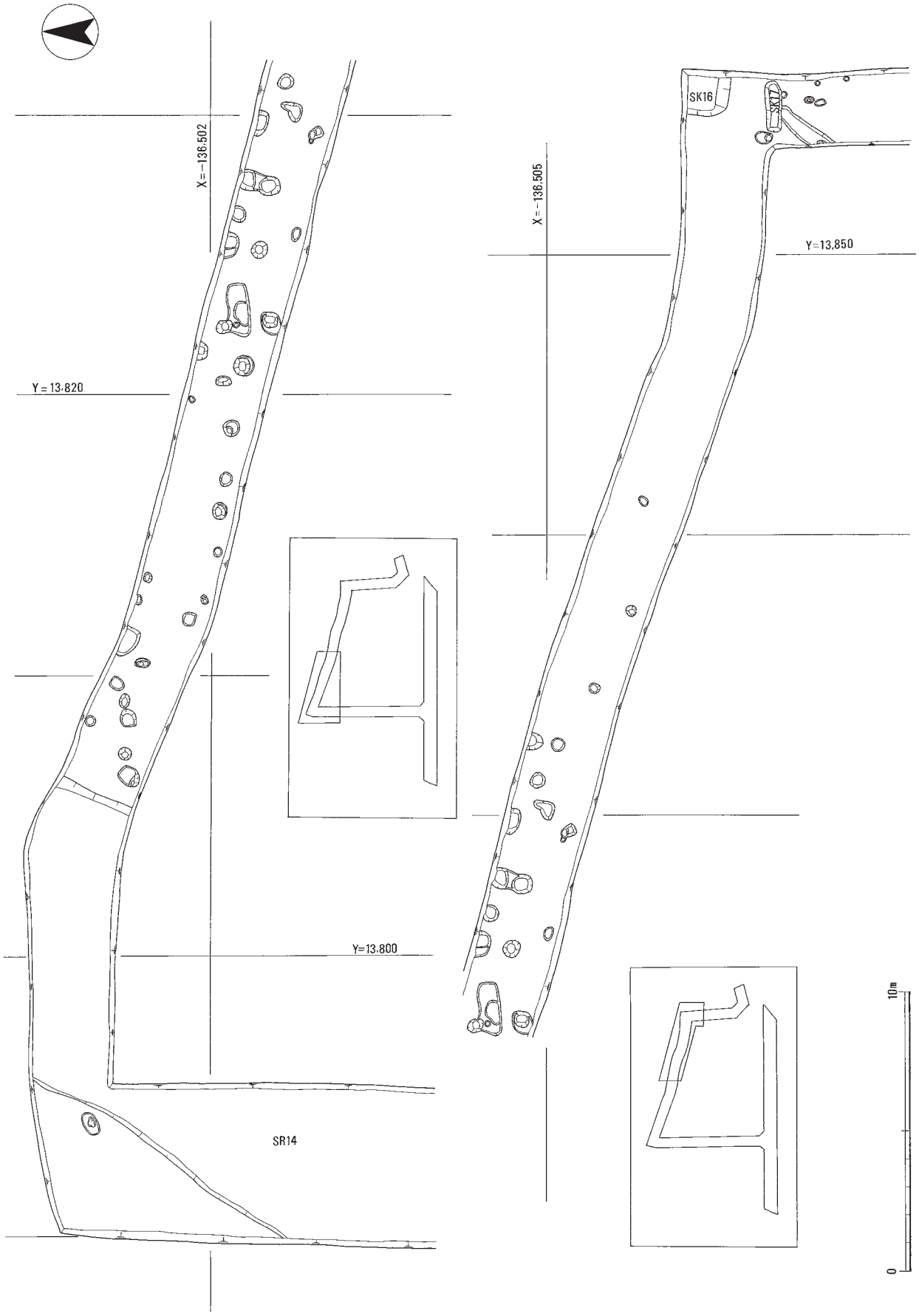
土坑ＳＫ17（第91図）　長径1.8m×短径0.6mの長方形プランの土坑で、深さ13cmを測る。

土坑ＳＫ18（第91図）　西側が調査区外となるが、南北1.6m、東西0.7m以上の隅丸方形の土坑である。

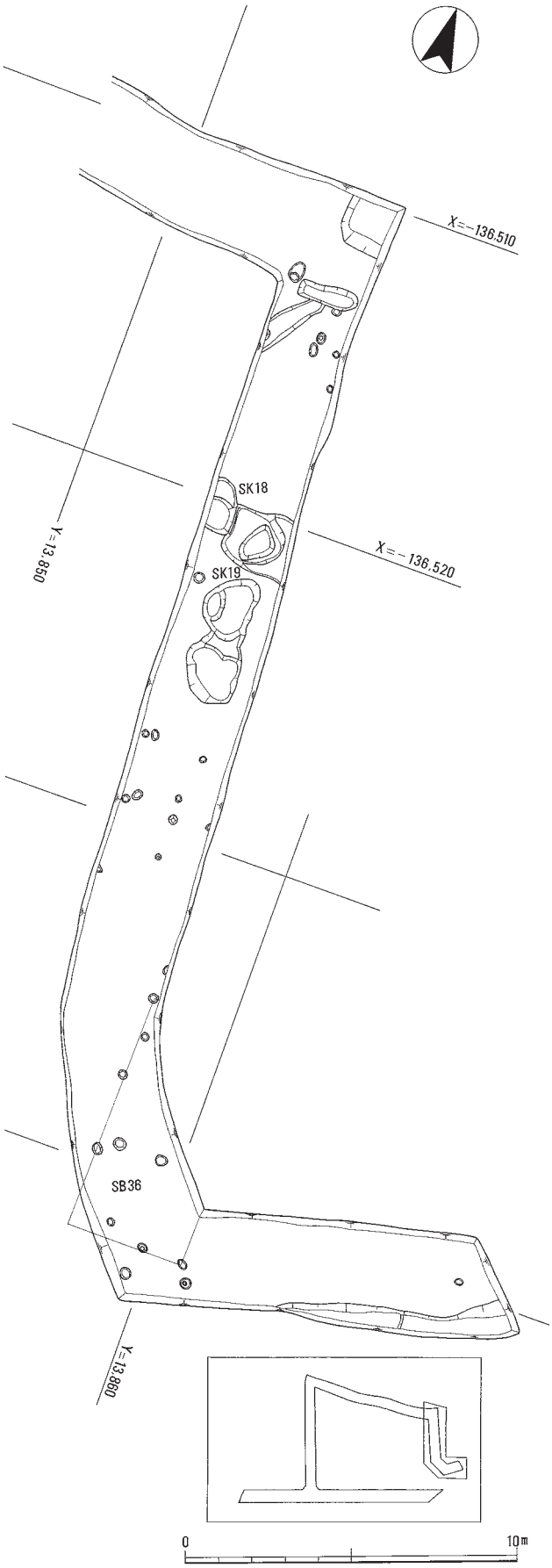
第86図　有井遺跡東地区遺構平面図（1）（1：200）



第87図　有井遺跡東地区遺構平面図（２）（１：200）



第88図　有井遺跡東地区遺構平面図（3）（1：200）



第89図　有井遺跡東地区遺構平面図（４）（１：200）

二段に掘り込まれており、深い部分は検出面から37㎝の円形プランの掘り込みをもつ。

土坑ＳＫ19（第91図）　東側が調査区外となるが、南北２ｍ×東西２ｍ以上の土坑である。ＳＫ18と切り合い関係にあり、ＳＫ18に切られている。中央部が深く掘り込まれた２段の掘り込みを有し、最大で深さ48㎝を測る。

第４節　遺物

１　西地区出土の遺物

〈用水路以西〉

ＳＢ30出土遺物（１～４）　１～３は同一柱穴からの出土であるが、1は瓦器、２は土師器椀、３は黒色土器Ｂ類椀[(1)]である。４は鍋把手である。

ＳＤ６出土遺物（５～７）　土師器甕(5)・黒色土器椀(6)、土師器(7)がある。時期幅があるが、最も新しいのは瓦器椀であろう。

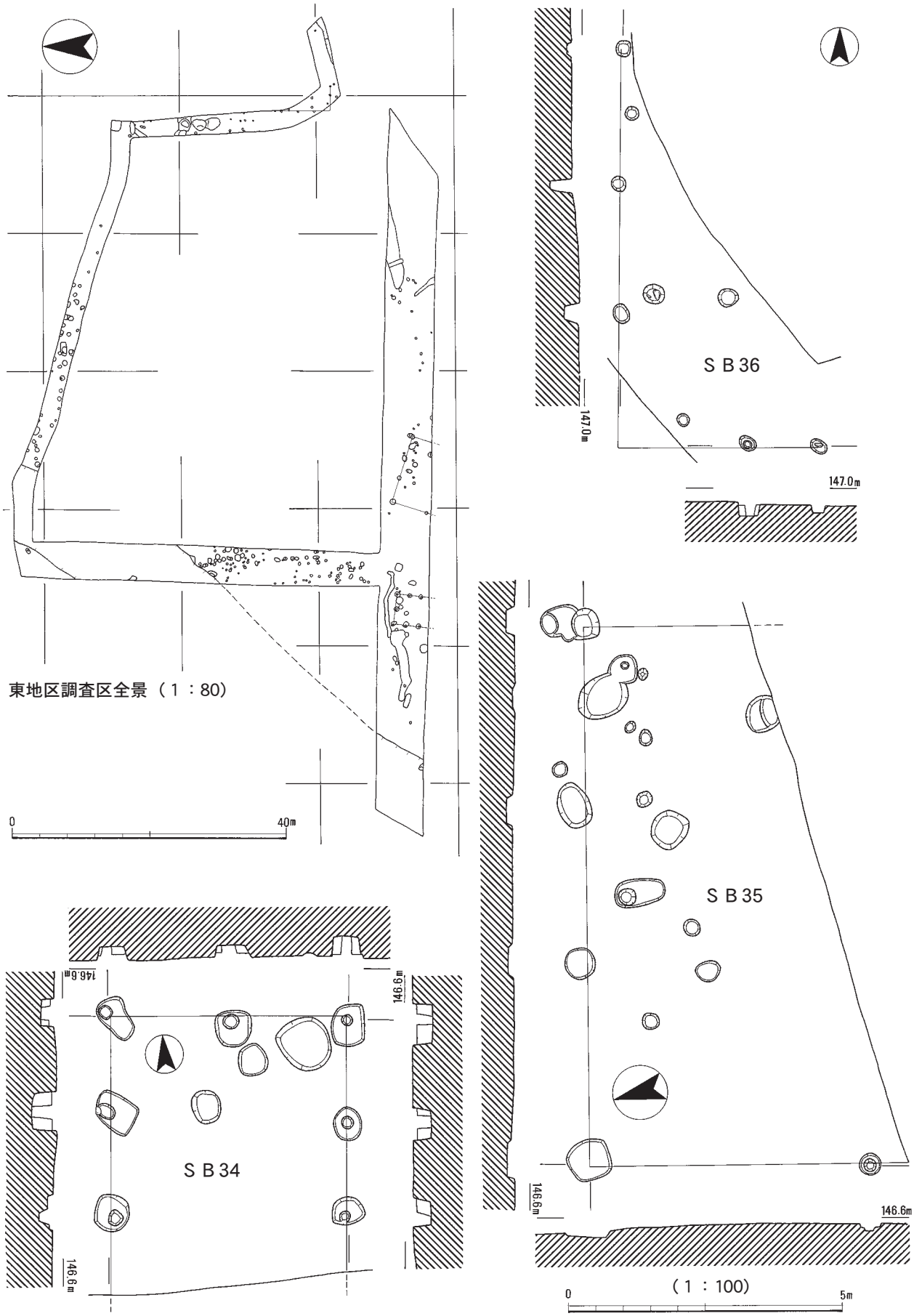
ＳＫ２出土遺物（８～18）　緑釉陶器椀(8)・土師器杯(9～10)・黒色土器Ｂ類椀(11～15)・土師器甕(16～17)・土師器高杯(18)がある。13は口縁部端部に浅い沈線を施す。16の甕は口径22㎝前後で、内面には口縁部成形時の接合痕が明瞭に残る。瓦器は含んでおらず、平安時代後期の所産であろう。ただし、17の甕は口径16㎝ほどで、外面に積み上げ痕が残る。内面にはタテ方向の板ナデが残る。18は古い時期の遺物の混入かもしれない。

土坑ＳＫ３出土遺物（19～24）　土師器杯(19～20)・土師器椀(21)・黒色土器Ａ類椀(22～23)・土師器羽釜(24)がある。土師器の杯と椀はいわゆる轆轤土師器である。19・20は底部を板状工具でナデられている。24の羽釜は鍔部がナデにより波打っている。外面には煤が付着している。

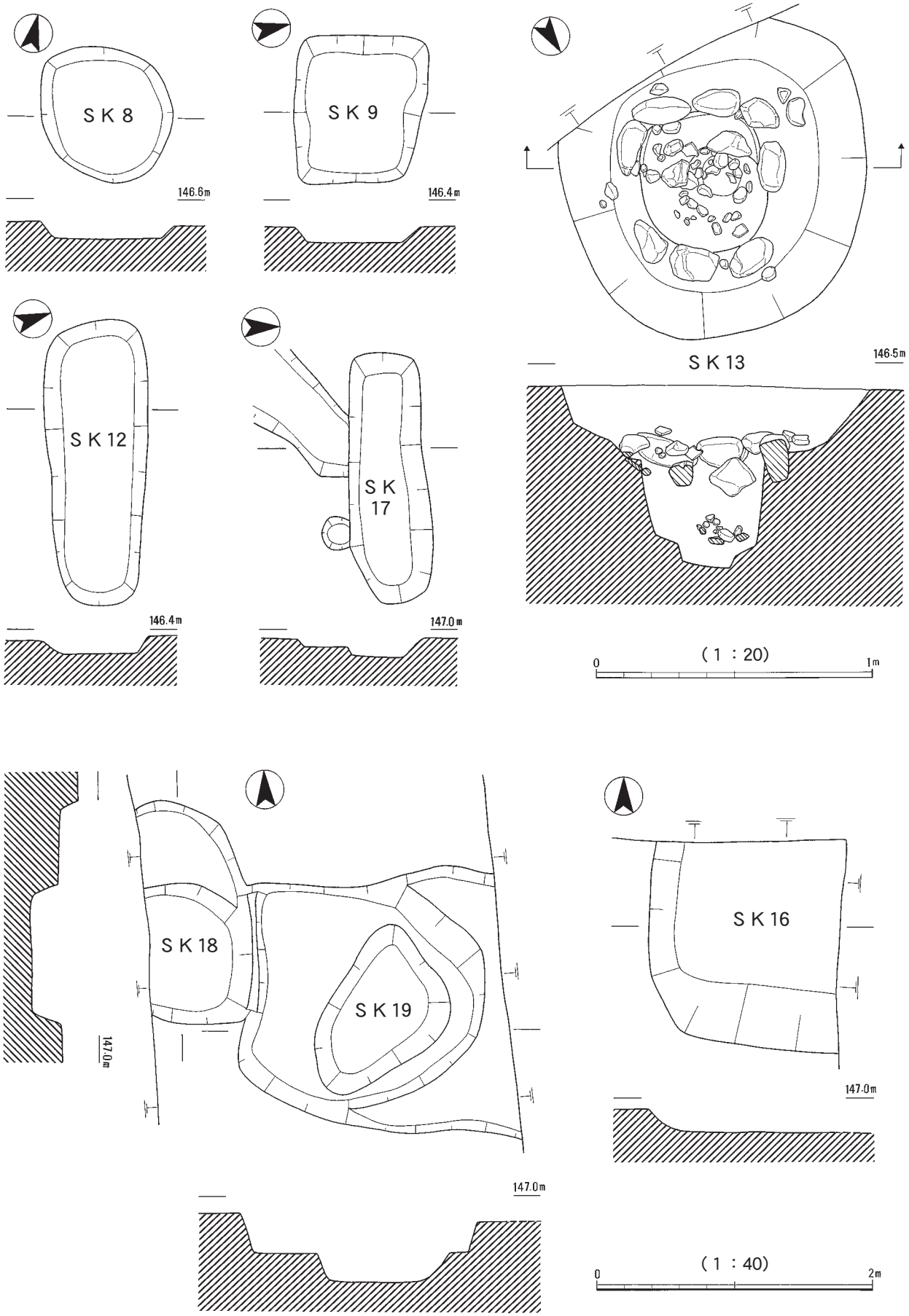
ピット遺物

掘立柱建物としてまとまらなかったピットからの出土遺物である。

Ｃ－Ｆ４pit１出土遺物（25～29）　土師器羽釜(25)・甕(29)・黒色土器Ａ類椀(27)・同Ｂ類椀(26・28)がある。25は羽釜で鍔部はナデにより波打って



第90図　東地区調査区と掘立柱建物ＳＢ34・35・36実測図



第91図　土坑群平面・断面図

いる。口縁部端部は丸くおさめる。26は燻しが消えている。28は口径15.2㎝で内外面ともミガキを施し、両黒である。29は土師器甕で、外面にはナナメハケ、内面には工具によるナデが施される。

Ｃ－Ｆ16pit２出土遺物（30）　轆轤土師器椀である。貼り付け高台で、外面は丁寧にロクロケズリが施されている。11世紀前半頃の所産であろう。

Ｃ－Ｆ0pit１出土遺物（31）　土師器椀？の底部である。内面にはミガキが施されている。

包含層等出土遺物（32～37）　土師器甕(32・36～37)・須恵器杯身(33)・黒色土器椀(34)・瓦器椀(35)を図示した。32は口径11㎝で、須恵器杯や土師器甕は古代に遡る遺物である。34の黒色土器は内黒で、口径約16㎝、外面に粗雑なミガキが施され、内面にもミガキが施される。35は瓦器椀の高台で見こみに連結輪状文がみられる。福田編年[(2)]の２～３段階の範疇のものであろう。

〈用水路以東〉

掘立柱建物ＳＢ31出土遺物（38～81）　掘立柱建物を構成する柱穴毎に出土遺物を述べる。

38～45は、Ｃ－Ｋ50pit１からの出土である。東播系の須恵器擂鉢(38)・瓦器椀(39)・土師器小皿(40～45)がある。土師器小皿は、40・42・44が京都系、41と43が在地系で、45は京都系を在地で模倣したものである。東播系の擂鉢は、12世紀末～13世紀初頭頃に比定でき、瓦器椀についても福田編年の６期頃と考えられ、一致する。

46～52は、Ｃ－Ｌ49pit２からの出土である。瓦器椀(46～49)と瓦器皿(50～51)・土師器小皿(52)がある。瓦器椀は、法量や器高指数にかなり差異があり、かなりの存続幅が見込まれる。土師器小皿52は、京都系である。

53～65は、Ｃ－Ｌ49pit６からの出土である。瓦器皿(53～58)・瓦器椀(59)・土師器小皿(60～65)がある。瓦器椀(59)は、口径14.3㎝、器高4.4㎝で、内面のミガキは粗雑化し、暗文の簡略化していることから福田編年の６期頃か。瓦器皿60は、見込みがなく、燻しがなされた痕跡もないが、調整の特徴は瓦器であり、燻し前の状態を示す個体かもしれない。土師器小皿は、すべて在地系である。

66～73は、Ｃ－Ｌ49pit５からの出土である。瓦器椀(66～67)・土師器小皿(68～72)、それに弥生土器片(73)がある。土師器小皿は、68が京都系、71が京都系の在地模倣と考えられるが、他３点は在地系である。73は混入であろう。

74～75は、Ｃ－Ｎ50pit３からの出土である。土師器小皿(74)・瓦器椀(75)がる。土師器小皿は、在地系である。

76は、Ｃ－Ｎ49pit３からの出土で、青磁椀である。同安窯系のもので、体部にハケ状の装飾がみられる。

77～78は、Ｃ－Ｎ49pit６からの出土である。ともに土師器小皿で、在地系である。

79は、Ｃ－Ｎ50pit２からの出土で、口縁部をヨコナデしており、京都系の土師器小皿である。

80は、Ｃ－Ｎ49pit８からの出土で、瓦器椀である。口縁端部が摘み上げられ、外面に面を形成している。

81は、Ｃ－Ｋ49pit１からの出土で、瓦器椀である。外面のミガキは消失し、器高もかなり低くなっている。

掘立柱建物ＳＢ32出土遺物（82～86）　本掘立柱建物も、ＳＢ31同様、出土した柱穴毎に出土遺物を述べる。

82～83は、Ｃ－Ｌ49pit３からの出土で、山茶椀(82)と瓦器椀(83)がある。山茶椀は知多・猿投系であるが、有井遺跡の所在する伊賀では山茶椀の出土自体が珍しい。

84は、Ｃ－Ｎ49pit５からの出土で、瓦器椀である。器高は高めで、やや古相を示す。

85は、Ｃ－Ｌ50pit７からの出土で、瓦器皿である。

86は、Ｃ－Ｌ50pit４からの出土で、在地形の土師器皿である。

掘立柱建物ＳＢ33出土遺物（87）　柱穴Ｃ－Ｐ49pit４から出土した1点のみを図示した。土師器小皿で、在地系である。

溝ＳＤ20出土遺物（88）　黒色土器Ｂ類の椀である。欠損が大きく、復元法量にはやや不安がある。

溝ＳＤ24出土遺物（89～92）　須恵器平瓶(89)・瓦器椀(90～91)・土師器小皿(92)がある。このうち、土師器皿は京都系である。また、須恵器平

瓶は磨耗が激しく、古い時期の遺物が混入したものと考えられる。

溝ＳＤ23出土遺物（93～98）　土師器小皿(93～95)・瓦器椀(96～97)・土師器鍋(98)がある。このうち、土師器小皿はいずれも在地系である。瓦器椀は96が口径約15cmで、器高が3.9cm、97が、口径約14cmである。96の口径がやや大きいが、皿状に近い形態から福田編年の７期頃と考えられる。98の羽釜は鍔の突出が非常に弱い。鍔にはナデにより波打っている。

土坑ＳＫ21出土遺物（99～100）　須恵器杯蓋(99)・黒色土器椀(100)がある。同一遺構からの出土として扱ったが、100はＳＫ21床面で確認したさらに小さな土坑からの出土であり、あるいは別遺構に収斂できる可能性がある。99は、天井部にヘラ記号がみられる。

土坑ＳＫ25出土遺物（101～133）　土師器小皿(101～120)・瓦器皿(121～122)・瓦器椀(123～132)・土師器羽釜(133)がある。土師器小皿は、完全な京都系はないが、106・113～114・116～117は京都系模倣皿、その他は在地系である。瓦器椀は、いずれも外面のミガキが消失している。口径15cm前後で、器高は4.1～4.5cmとやや浅くなったもので占められるが、多少ばらつきがある。福田編年の６期頃か。羽釜（133）は、いわゆる大和型[(3)]であろう。

土坑ＳＫ25直上出土遺物（134～145）　ＳＫ25の直上から出土したものであるが、遺構ラインの検出以前から認識したため、一応分けて取り扱った。瓦器皿(134～135)・土師器小皿(136～144)・羽釜(145)がある。このうち、土師器小皿は、136・138・141～144が在地系、139～140が京都系模倣である。また、羽釜は大和型である。

土坑ＳＫ27出土遺物（146～156）　瓦器皿(146)・瓦器椀(147～149)・青磁椀(150)・常滑甕(151)・土師器小皿(152～156)がある。青磁は、同安窯系で、大宰府I1b類[(4)]に比定できる。土師器小皿はすべて在地系である。

土坑ＳＫ26出土遺物（157～164）　青磁椀(157)・瓦器椀(158～159)・土師器小皿(160～162・164)がある。青磁は龍泉窯系で、大宰府Ｉ類に相当する。土師器小皿は、すべて在地系である。158の瓦器椀は口径14.2cmで、高台がわずかに残る。福田編年の８期。

土坑ＳＫ28出土遺物（165～200）　青磁椀(165～169)・瓦器椀(170～181)・瓦器皿(182～183)・陶器練鉢(184)・土師器皿(185～195)・瓦質ミニチュア羽釜(196)・鉄釘(197～199)・鉄製刀子(200)がある。青磁椀は、165～166が同安窯系、167～169が龍泉窯系、陶器練鉢は知多・猿投産である。また、土師器皿は、195が京都系、190が京都系の在地模倣タイプである以外はすべて在地系である。瓦器椀は、外面ミガキがなく、皿についても内面ミガキがないことから概ね福田編年５～６期のものが中心である。

土坑ＳＫ29出土遺物（201～204）　瓦器椀(201)・土師器小皿(202・203)・土師器羽釜（204）がある。土師器皿はともに在地系、羽釜は大和型である。

Ｃ－Ｅ49pit１出土遺物（205～206）　土師器甕（205)と黒色土器(206)である。黒色土器は、内部に丁寧な暗文があり、底部には焼成後に施されたヘラ記号がみられる。

Ｃ－Ｅ46pit１出土遺物（207）　須恵器杯である。やや長めの高台が外側へ張り出している。

Ｃ－Ｆ45pit１出土遺物（208）　緑釉陶器椀である。焼成は須恵質である。

Ｃ－Ｌ49pit７出土遺物（209）　法量がやや小さいが、大和型の土師器羽釜である。鍔付近には指押圧痕が残る。

Ｃ－Ｆ47pit３出土遺物（210）　黒色土器Ａ類で、口径は13cmの小椀である。

Ｃ－Ｅ36pit１出土遺物（211）　瓦器椀の小片である。底部は欠損する。外面にはミガキが若干残り、器高指数は高そうである。

Ｃ－Ｐ49pit１出土遺物（212～215）　すべて瓦器椀である。口径は14.7～15.9cmとまちまちで、器高も3.7～4.45cmである。213は燻しがかかっていない。いずれの個体も外面のヘラミガキは施されず器形も低平化・矮小化しており、福田編年７期頃に相当しよう。

Ｃ－Ｎ50pit４出土遺物（216）　瓦器椀である。全体に磨耗しており調整等は不明である。

Ｃ－Ｏ49pit１出土遺物（217）　瓦器椀である。底部は欠損する。

Ｃ－Ｐ49pit３出土遺物（218）　瓦器椀の底部の破片である。

Ｃ－Ｋ49pit３出土遺物（219～222）　いずれも土師器小皿である。219～221が在地系、222が京都系の在地模倣である。

Ｃ－Ｌ49pit８出土遺物（223）　土師器小皿で、在地系である。

Ｃ－Ｎ50pit１出土遺物（224）　土師器小皿で、在地系である。

Ｃ－Ｌ14pit４出土遺物（225）　土師器小皿で、在地系である。

用水路以東包含層出土遺物（226～228）　土師器甕(226)・緑釉陶器椀(227)・埴輪(228)がある。

226の甕は受け口状の内彎する短い口縁部をもち、端部を肥厚させている。体部は肩が張るような形態を呈する。外面には粗いハケメが残る。227の緑釉陶器椀は土師器質で、底部には回転糸切り痕がのこる。高台は貼り付けてある。

２　東地区出土の遺物

掘立柱建物ＳＢ34出土遺物（229～232）　土師器杯(229・232)・皿(230)・杯(232)がある。奈良時代の所産であろう。

溝ＳＤ10（233）　土師器移動式竈で、残存部分のカーブ状況から焚口上部の鍔の部分と思われる。内面には斜め方向のハケを施す。

流路ＳＲ11（234～241）　鞴羽口(234～235)・土師器杯(236～237)・長胴甕(238)・台杯皿(239)・須恵器甕(240)・長頸壺(241)を図示した。土師器杯(236～237)は杯Ａ[(5)]に相当し、238は口縁部が内彎し、端部は肥厚する。概ね、奈良時代～平安時代の遺物を中心に出土している。

流路ＳＲ14出土遺物（242）　土師器の杯蓋である。つまみが付くタイプであろう。

土坑ＳＫ19出土遺物（243）　平瓦である。胎土精良で、側面には指頭圧痕が残る。布目痕はない。

ピット出土遺物

Ｂ－Ｍ11pit１出土遺物（244）　土師器の杯Ａである。内外面ともナデ調整である。

Ｂ－Ｐ11pit３出土遺物（245）　口縁部片で、須恵器の平瓶かと思われる・

包含層（246～264）　円筒埴輪(246)や瓦質火鉢？(264)のほか、土師器では甕(247・250～251)・異形器台(248)・皿(249)・高杯(252)・杯(253～254)・ロクロ土師器椀(259)・皿(261)、須恵器では杯(255～258)、陶器では志野皿(260)・信楽擂鉢(262)・伊賀焼椀(263)を図示した。

246の円筒埴輪は胴部の破片である。突帯は断面方形で、突出度は低いが、酸化焔焼成である。土師器高杯252は、杯部見込みに螺旋暗文を施し、立ち上がり部にタテミガキを施している。256～258は須恵器の杯Ｂである。261はいわゆる京都系の「ての字皿」であるが、在地で模倣されたものであろう。263の椀の高台付近には図示していないが、「いが」と刻まれている。(穂積)

［註］

（１）田中琢「古代・中世における手工業生産の発達（４）畿内」(『日本の考古学』Ⅳ　1967年)

（２）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」(『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年)

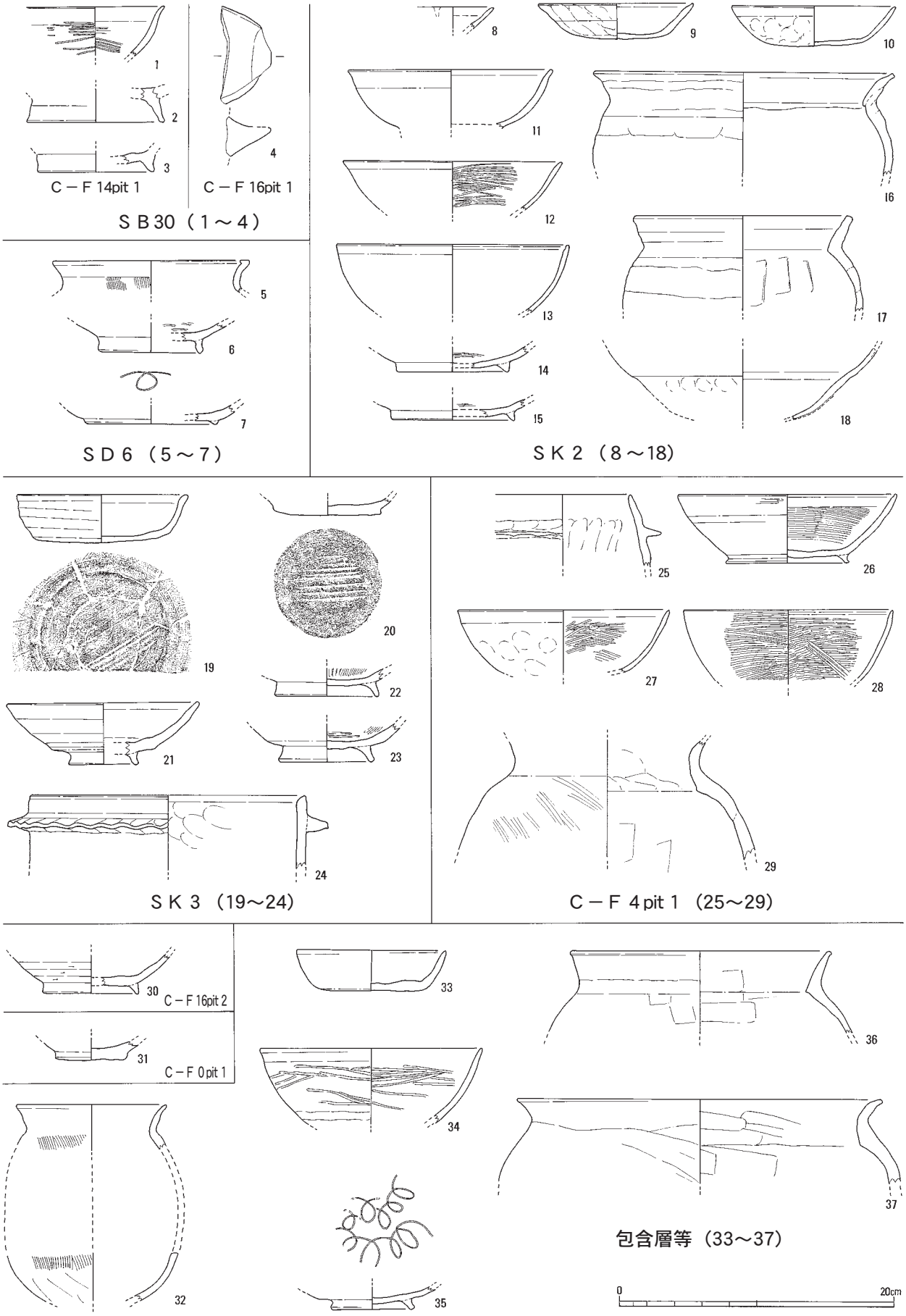
（３）菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」(『文化財論叢』奈良文化財研究所　1983年)

（４）大宰府分類については、横田賢次郎・森田勉の両氏による分類（「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　1978年）をさらにまとめられた山本信夫氏の分類（同氏「土器の分類」『大宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年）を用いる。

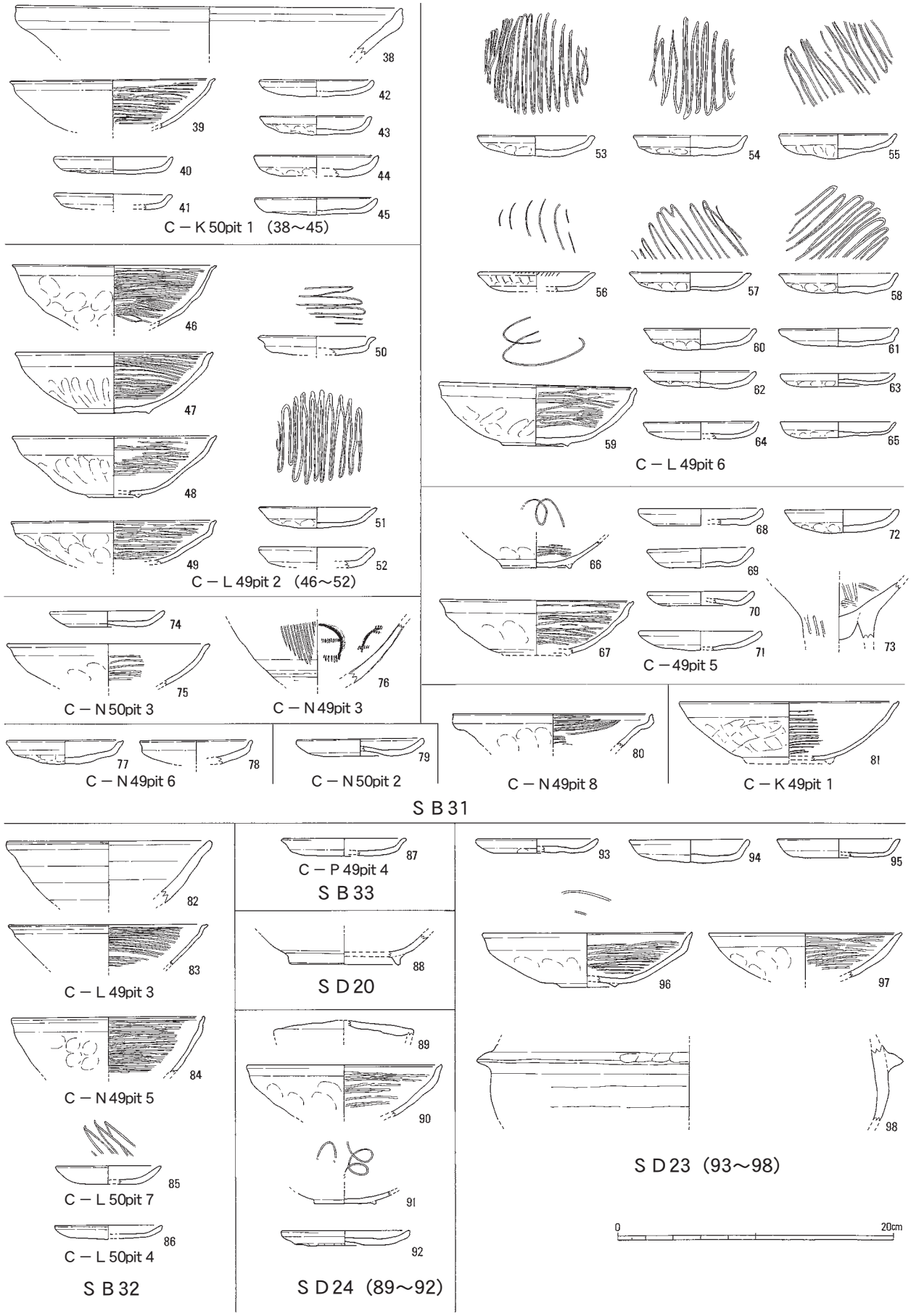
（５）古代の土器研究会編『古代の土器1　都城の土器集成』(1992年)

遺構番号	性　格	時　期	地区	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝	中世前期	西(C)	F0	幅0.6mで南北方向にはしる。土師器・瓦器片。
SK2	土坑	平安末	西(C)	F12	埋土に炭層多く含み
SK3	土坑	平安末	西(C)	E13	方形の土坑
SK4	土坑	平安末	西(C)	G17	黒色土器片出土
SK5	土坑	平安末	西(C)	F17・18	土師器片出土
SD6	溝	中世前期	西(C)	F・G19	幅約1m、深さ0.12m、土師器片出土
SD7	溝	古代	西(C)	F20・21	長さ6m、幅0.4mの小溝。土師器片出土
SK8	土坑	古代	東(B)	R10	土師器甕片
SK9	土坑	古代	東(B)	R11	長径1.3m、短径1.0mの方形の土坑。土師器片出土
SD10	溝	古代	東(B)	Q9～11	土師器甕片・須恵器片
SR11	河道	奈良～平安	東(B)	R7～9	土師器片・須恵器片
SK12	土坑	古代	東(B)	R6～7	土師器片
SK13	土坑	古代	東(B)	R9	土師器片・石組あり
SR14	河道	古代？	東(B)	D～J11 R・S　2～5	調査区中央部から調査区西端で確認
SK15	土坑	古代	東(B)	K11	土師器片出土
SK16	土坑	—	東(B)	H27	瓦片出土
SK17	土坑	近世	東(B)	H27	信楽産の陶器出土
SK18	土坑	古代	東(B)	J27	土師器片出土
SK19	土坑	古代	東(B)	J27	SK18に切られる。土師器片・黒色土器片・須恵器片出土
SD20	溝	平安末	西(C)	F41	耕作溝
SK21	土坑	平安末	西(C)	F47・48	長径3.2m×短径2.6mの方形土坑。土師器・黒色土器出土
SD22	溝	平安末	西(C)	F45	幅0.2m。土師器・黒色土器片出土
SD23	溝	中世前期	西(C)	I49	幅3.4m、深さ0.3m。土師器・瓦器片出土
SD24	溝	中世前期	西(C)	K49	幅2.3～4.4m、深さ0.06m。土師器・瓦器片出土
SK25	土坑	中世前期	西(C)	O49	土器集中して出土
SK26	土坑	中世前期	西(C)	M・L49	石組の土坑。瓦器・土師器皿出土
SK27	土坑	中世前期	西(C)	O49	土壙墓？土師器・瓦器片多い。
SK28	土坑	中世前期	西(C)	M49	土壙墓？土師器・瓦器片多い。
SK29	土坑	中世前期	西(C)	P49	土師器・瓦器片。
SB30	掘立柱建物	中世前期	西(C)	E・F　15・16	東西3間(7.2m)×南北3間(7.0m)N10°E
SB31	掘立柱建物	中世前期	西(C)	K～N49	東西2間(4.2m)以上×南北6間(11.7m)N13°E
SB32	掘立柱建物	中世前期	西(C)	K～N49	東西2間(3.6m)以上×南北5間(5.8m)N15°E
SB33	掘立柱建物	中世前期	西(C)	N・O49	桁行3間以上×梁行2間　N13°E
SB34	掘立柱建物	奈良	東(B)	R・S　9・10	桁行3間以上×梁行2間(4.4m以上)N5°E
SB35	掘立柱建物	奈良	東(B)	R・S　14～16	桁行2間以上×梁行3間(9.8m以上)　N17°E
SB36	掘立柱建物	奈良	東(B)	M・N28	3間以上×1間以上

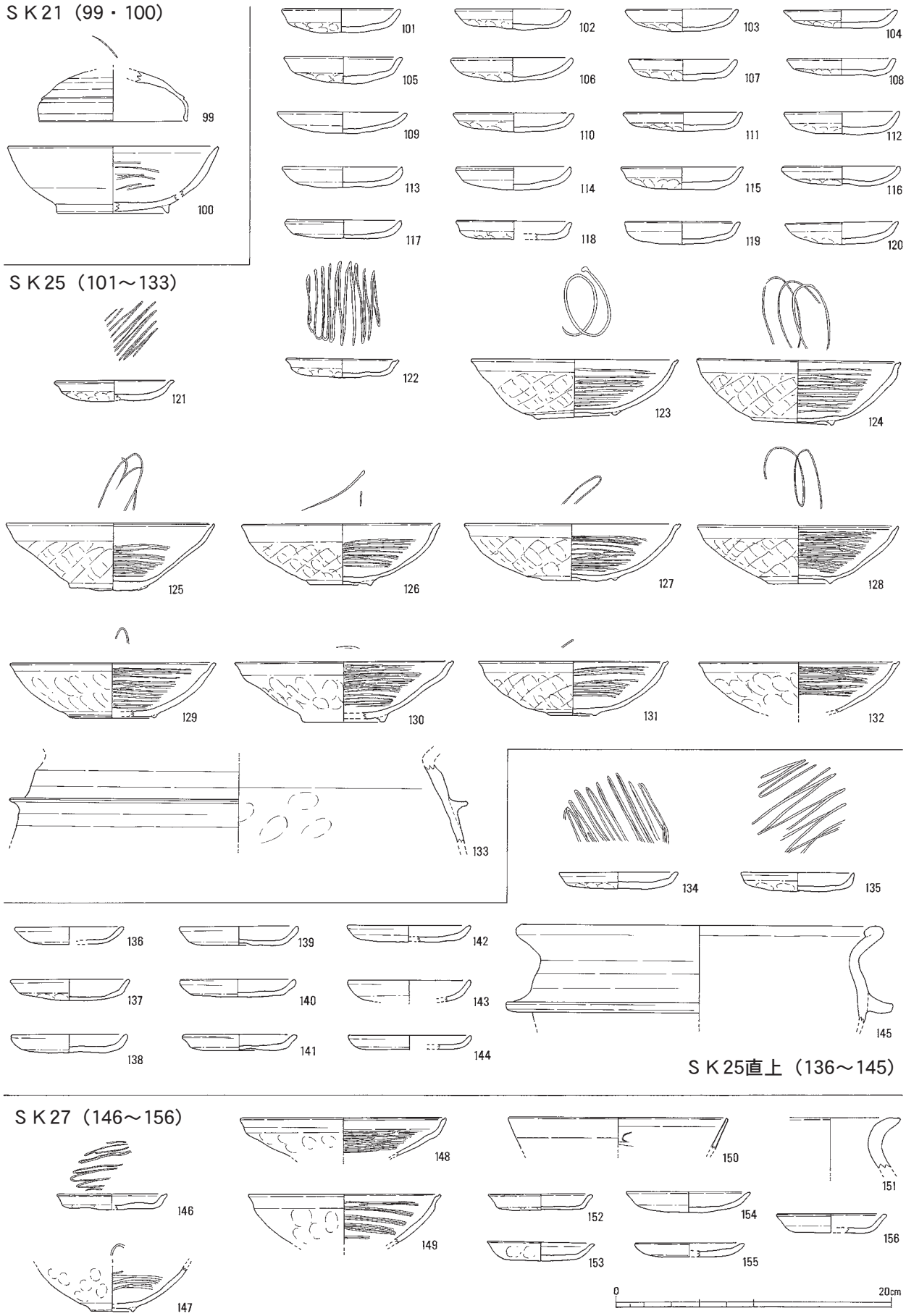
第29表　有井遺跡遺構一覧表



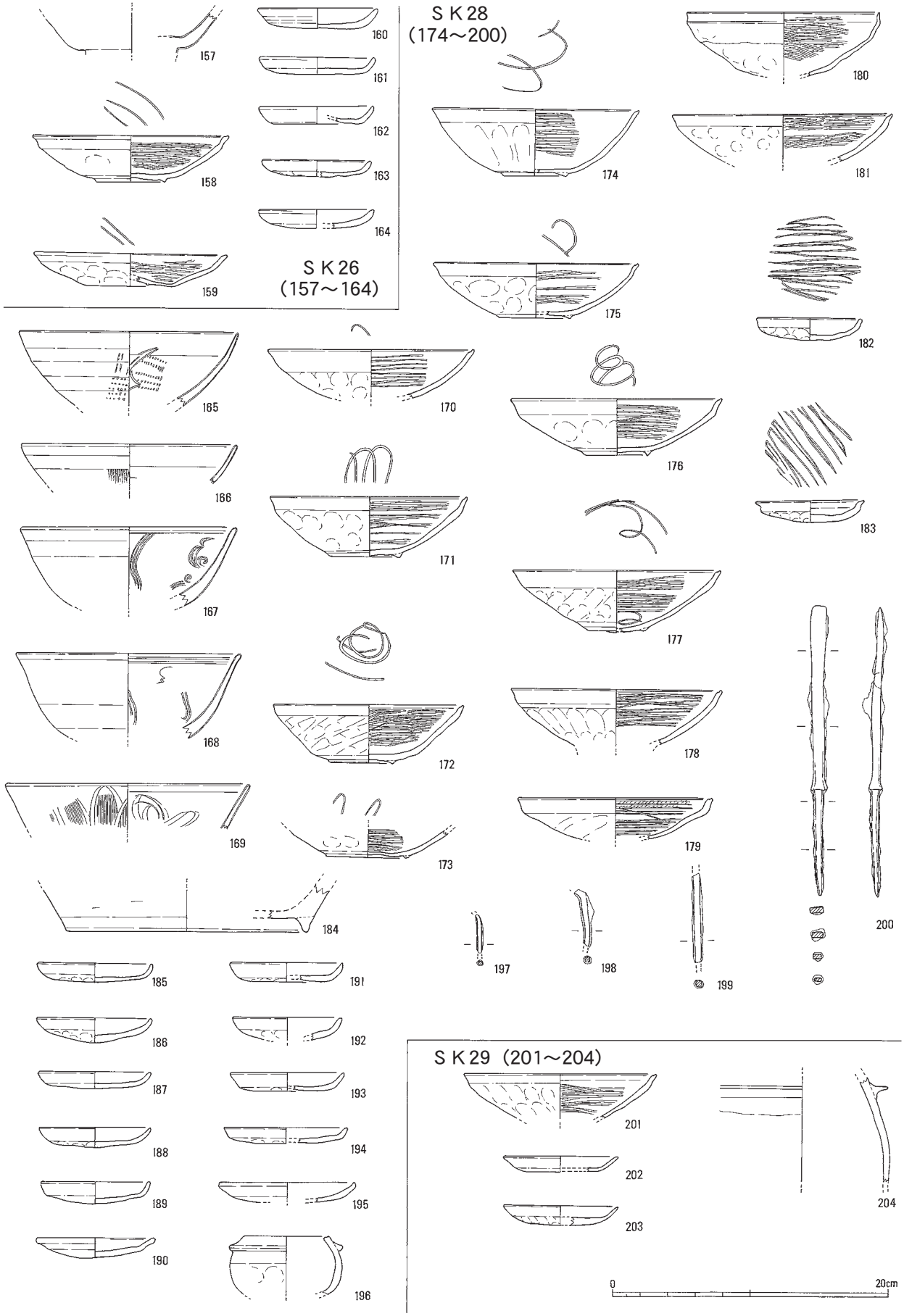
第92図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（１）（１：４）



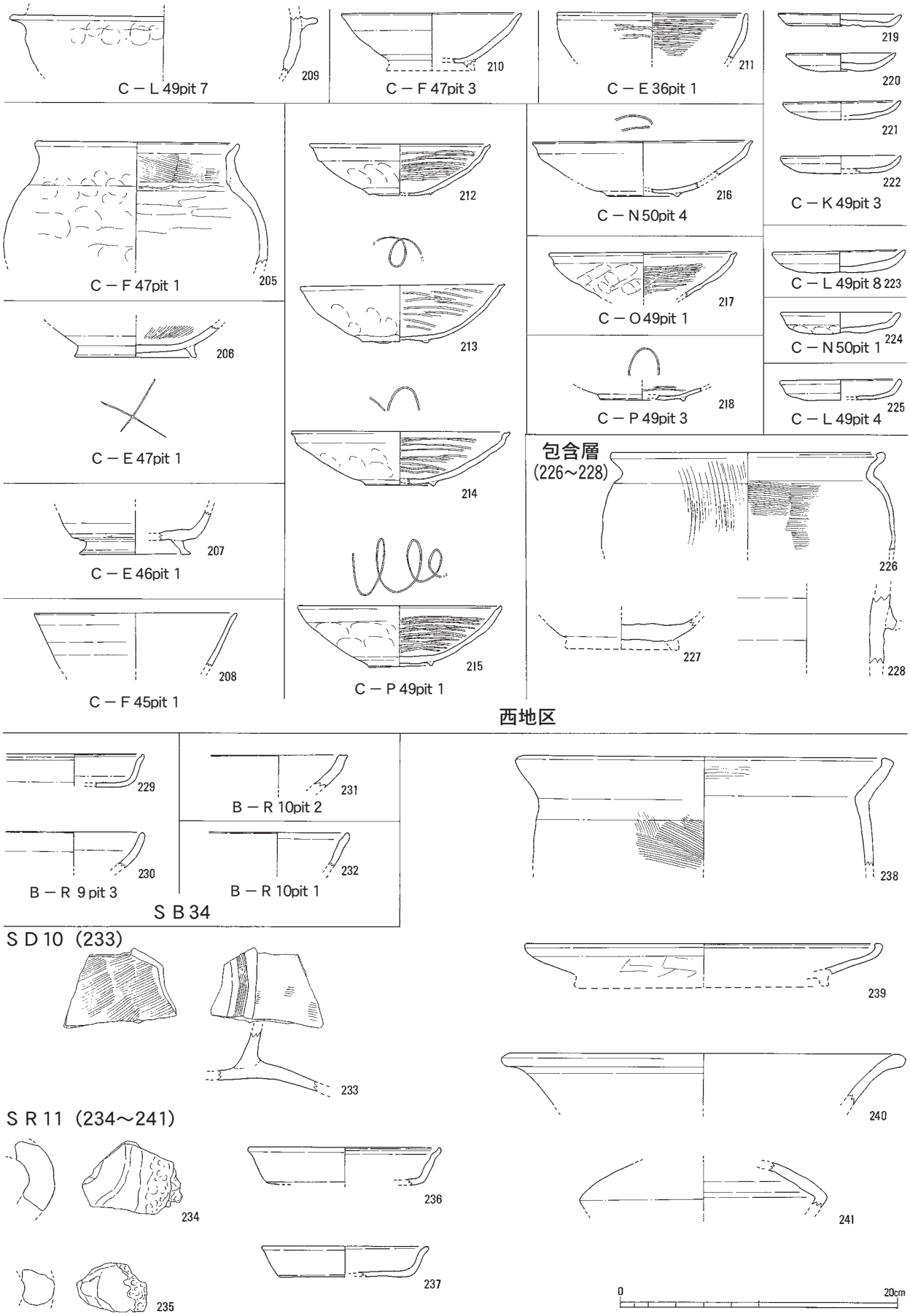
第93図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（2）（1：4）



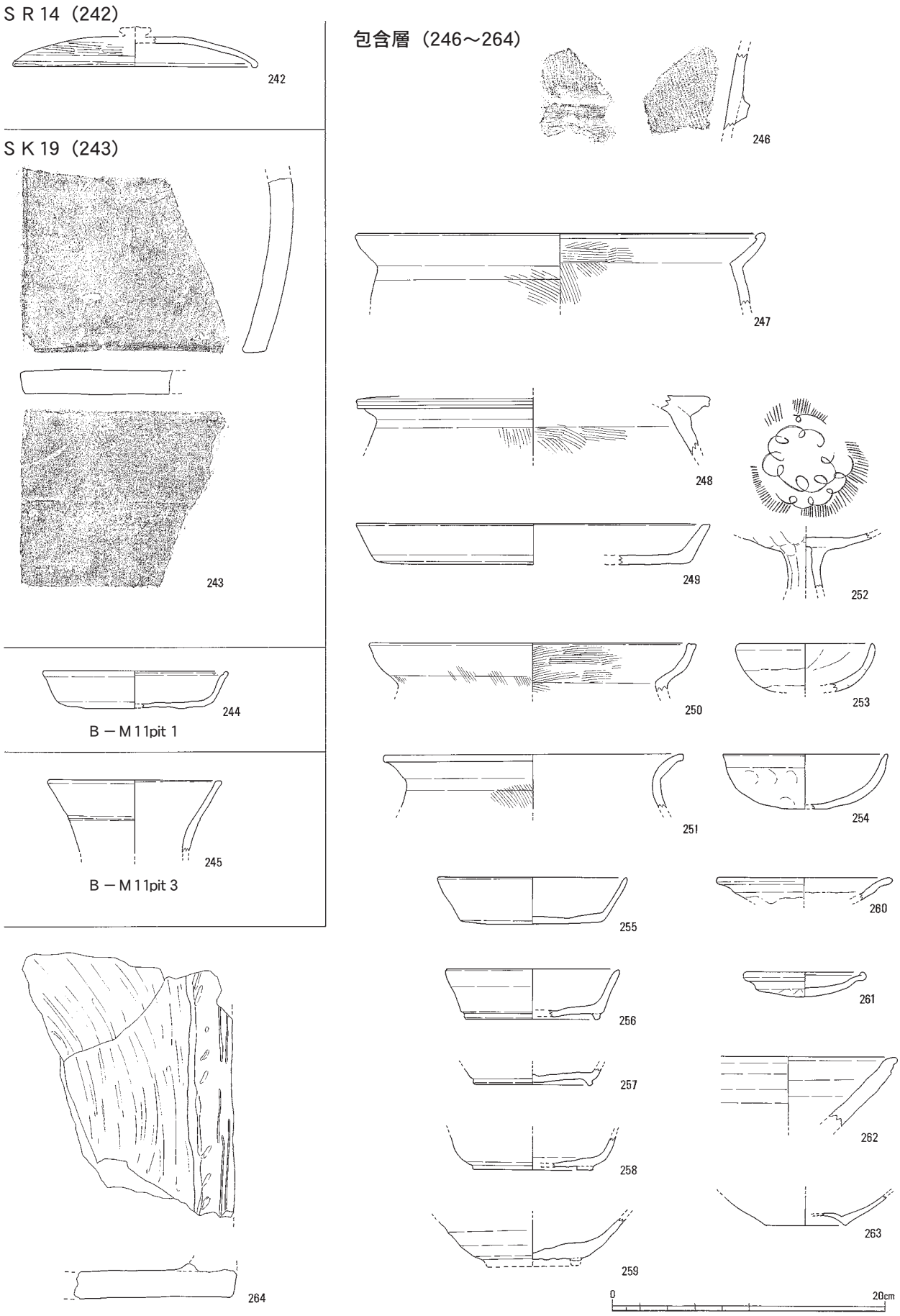
第94図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（３）（１：４）



第95図　有井遺跡西地区出土遺物実測図（４）（１：４）



第96図　有井遺跡東地区出土遺物実測図（1）（1：4）



第97図　有井遺跡東地区出土遺物実測図（2）（1：4）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	19-7	瓦器	椀	C-F14	SB30 pit1柱穴	—	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	
2	28-4	土師器	椀	C-F14	SB30pit1(掘形)	(高台)10	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい黄橙 10YR6/3	1/12	
3	19-4	黒色土器B	椀	C-F14	SB30 pit1柱穴	(高台)8.5	外;貼付高台ナデ 内;ナデ	やや粗	黒褐2.5Y3/1	2/12	
4	21-1	土師器	把手	C-F16	SB30 pit1柱穴	—	外;ナデ 内;ナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	—	外面に煤付着
5	8-1	土師器	甕	C-F18・19	SD6北	14.4	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	2/12	平安後半
6	8-2	黒色土器	椀	C-F18・19	SD6北	(高台)7.7	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ハケメ	密	浅黄橙10YR8/4	1/12	ロクロ土師？
7	8-3	土師器	杯B	C-F19・G19	SD6南	(高台)9.6	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	2/12	内面底部に暗文
8	18-9	緑釉陶器	椀	C-F12	SK2	—	外;施釉 内;施釉	密	(素地)灰白7.5Y7/1 (釉)緑色	1/12	輪花
9	17-4	土師器	杯	C-F12	SK2	11	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙2.5YR6/6	4/12	
10	18-2	土師器	杯	C-F12	SK2北	12	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	10/12	
11	17-6	黒色土器B	椀	C-F12	SK2北	17.4	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	橙5YR6/6	口縁があると思う程度	
12	18-10	黒色土器	椀	C-F12	SK2	16	外;ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい橙7.5YR4/6	1/12	
13	18-1	黒色土器B	椀？	C-F12	SK2	17	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰黄褐10YR5/2	2/12	
14	18-5	黒色土器B	椀	C-F12	SK2	(底)8.2	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	にぶい赤褐5YR5/4	9/12	
15	18-4	黒色土器B	椀	C-F12	SK2	(底)9	外;ナデ→ミガキ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	
16	17-1	土師器	甕	C-F12	SK2北	22	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	外面に煤付着
17	17-2	土師器	甕	C-F12	SK2北	16	外;ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	外面に煤付着
18	17-3	土師器	高杯	C-F12	SK2北	—	外;ナデ・オサエ 内;ナデ	やや粗	にぶい橙2.5YR6/4	1/12	
19	21-2	土師器	杯	C-E13	SK3南	12.45	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	内外面に煤付着
20	21-3	土師器	杯	C-E13	SK3北	(底)7.9	外;ナデ 内;ナデ	やや密	にぶい橙5YR7/4	底部完存	
21	19-3	土師器	椀	C-E13	SK3南	14	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	にぶい黄褐10YR5/3	2/12	ロクロ土師
22	19-1	黒色土器A	椀	C-E13	SK3北	(高台)7.6	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	暗灰N3/	(高)完存	
23	19-2	黒色土器A	椀	C-E13	SK3北	(高台)6.9	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	やや密	黄灰2.5Y4/1	3/12	
24	20-7	土師器	羽釜	C-E13	SK3南	20.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	褐7.5YR4/3	1/12	外面に煤付着
25	31-7	土師器	羽釜	C-F4	pit1	—	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→オサエ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR6/4	1/12	
26	32-3	黒色土器B	椀	C-F4	pit1	16	外;ヨコナデ→ミガキ→貼付高台ナデ 内;ハケメ→工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	
27	31-3	黒色土器A	椀	C-F4	pit1	15.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ミガキ・ハケメ?	やや粗	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	
28	32-2	黒色土器B	椀	C-F4	pit1	15.2	外;ミガキ 内;ミガキ	やや密	暗灰N3/	ごくわずか	
29	31-5	土師器	甕	C-F4	pit1	(頸)13.6	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→工具ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	
30	32-1	土師器	椀	C-F16	pit2	7	外;ナデ→ケズリ→貼付高台ナデ 内;ナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	2/3	ロクロ土師椀珍しい 11C前半頃か？
31	28-6	土師器	椀	C-F0	pit1	(高台)5.3	外;オサエ→ヨコナデ 内;ミガキ	密	褐灰10YR6/1	高台完存	中世の土師椀か？
32	36-4	土師器	甕	G29	包含層	11	外;ハケメ→ケズリ 内;ナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	3/12	
33	38-5	須恵器	杯A	C地区	機械掘削	10.9	外;ロクロナデ→ヘラ切り 内;ロクロナデ	やや粗	灰白N7/0	1/12	
34	37-2	黒色土器	椀	C地区	機械掘削	16.2	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	にぶい橙5YR6/4	1/12	
35	38-4	瓦器	椀	C地区	機械掘削	(高台)6.1	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	やや粗	灰白N7/0	(高)完存	内面底部に暗文
36	36-3	土師器	甕	C-G17	包含層	19	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	灰黄褐10YR6/2	1/12	
37	36-1	土師器	甕	C-F4	包含層	26.6	外;工具痕→ヨコナデ 内;工具痕→ヨコナデ	やや粗	橙5YR7/6	1/12	
38	30-8	須恵器	擂鉢	C-K50	SB31 pit1	28.2	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰N6/0	1/12	東播系Ⅱ－2 12C末～13C初
39	30-1	瓦器	椀	C-K50	SB31 pit1	14.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	
40	30-2	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	8.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	7/12	京都系
41	30-3	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	8.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	在地
42	30-4	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	10/12	京都系
43	30-5	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	8.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	7/12	在地
44	30-6	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	9.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	京都系
45	30-7	土師器	小皿	C-K50	SB31 pit1	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/1	2/12	京都系在地模倣
46	24-5	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit2	14.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	

第30表　有井遺跡遺物観察表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
47	24-4	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit2No.1	14.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	6/12	内面底部に暗文
48	24-1	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit2No.3	14.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	
49	24-2	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit2No.5	14.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	
50	23-2	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit2No.6	8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文
51	25-2	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit2No.4	8.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	完存	内面底部に暗文
52	22-5	土師器	小皿	C-L49	SB31 pit2	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	京都系
53	23-1	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No.10	8.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	ほぼ完形	
54	22-8	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No2	8.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N4/0	ほぼ完形	
55	25-1	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6	8.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	内面底部に暗文
56	23-4	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No.8	8.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	4/12	内面底部に暗文
57	23-5	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No.7	8.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	6/12	内面底部に暗文
58	23-3	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No.6	8.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N4/0	8/12	内面底部に暗文
59	24-3	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit6No.5	14.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	1/12	内面底部に暗文
60	23-6	瓦器	皿	C-L49	SB31 pit6No.9	8.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	淡黄2.5Y8/3	ほぼ完存	燻された色ではない
61	22-6	土師器	皿	C-L49	SB31 pit6No.4	8.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	4/12	
62	22-3	土師器	皿	C-L49	SB31 pit6No.3	8.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;オサエ・ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	ほぼ完形	在地
63	22-1	土師器	皿	C-L49	SB31 pit6	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	9/12	在地
64	22-4	土師器	皿	C-L49	SB31 pit6	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	在地
65	22-2	土師器	皿	C-L49	SB31 pit6No.1	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	6/12	在地
66	27-2	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit5	(高台)5	外;ナデ・オサエ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文？
67	27-1	瓦器	椀	C-L49	SB31 pit5	14.1	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	2/12	
68	26-8	土師器	皿(小)	C-L49	SB31 pit5	9.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/1	2/12	京都系
69	26-6	土師器	皿(小)	C-L49	SB31 pit5	7.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	3/12	在地
70	26-7	土師器	皿(小)	C-L49	SB31 pit5	7.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地
71	26-9	土師器	皿(小)	C-L49	SB31 pit5	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/3	4/12	京都系在地模倣
72	26-5	土師器	皿(小)	C-L49	SB31 pit5	8.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	6/12	在地
73	26-10	土師器	高杯？	C-L49	SB31 pit5	脚柱5.6	外;ミガキ？ 内;ミガキ？	やや密	にぶい橙5YR7/3	—	
74	27-8	土師器	皿(小)	C-N50	SB31 pit3	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	5/12	在地
75	27-9	瓦器	椀	C-N50	SB31 pit3掘形	14.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	浅黄橙7.5YR8/3	1/12	
76	29-6	青磁	椀	C-N49	SB31 pit3		外;クシガキ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロ使用(施釉)	密	(素地)灰白N8/0 (釉)灰オリーブ7.5YR5/2	小片	同安窯系
77	29-1	土師器	小皿	C-N49	SB31 pit6掘形	8.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	3/12	在地
78	29-2	土師器	小皿	C-N49	SB31 pit6掘形	8.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	3/12	在地
79	20-4	土師器	小皿	C-N50	SB31 pit2	9.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	京都系
80	20-2	瓦器	椀	C-N49	SB31 pit8掘形	14.6	外;ナデ・オサエ 内;ナデ→ミガキ	やや粗	暗灰N3/	2/12	
81	31-2	瓦器	椀	C-K49	SB31 pit1	16	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	2/12	
82	20-6	陶器	山茶椀	C-L49	SB32 pit3	15.5	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや密	黄灰2.5Y6/1	2/12	知多・猿投
83	20-1	瓦器	椀	C-L49	SB32 pit3	14.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	暗灰N3/	2/12	
84	28-7	瓦器	椀	C-N49	SB32 pit5	14.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	1/12	
85	20-3	瓦器	皿	C-L50	SB32 pit7	7.7	外;ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	2/12	内面底部に暗文
86	20-5	土師器	皿	C-L50	SB32 pit4	7.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地
87	27-6	土師器	皿(小)	C-P49	SB33 pit4	9.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR6/4	2/12	在地
88	17-7	黒色土器B	椀	C-F41	SD20	(底)8	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	やや密	褐灰10YR4/1	1/12	
89	8-7	須恵器	平瓶	C-K49	SD24	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰白N7/0	小片	マメツ顕著
90	8-4	瓦器	椀	C-K49	SD24	14.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	1/12	
91	8-5	瓦器	椀	C-K49	SD24	(高台)4.4	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/0	6/12	内面底部に暗文
92	8-6	土師器	皿	C-K49	SD24	9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	京都系12C

第31表　有井遺跡遺物観察表（２）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
93	9-4	土師器	皿(小)	C-I43	SD23	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	淡赤橙2.5YR7/4	完存	在地
94	9-2	土師器	皿(小)	C-I43	SD23	8.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	8/12	在地
95	9-3	土師器	皿(小)	C-I43	SD23	8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	1/12	在地
96	9-5	瓦器	椀	C-I43	SD23	15.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	内面底部に暗文
97	9-6	瓦器	椀	C-I43	SD23	14.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙10YR8/3	2/12	土師質
98	9-1	土師器	鍋?	C-I43	SD23	—	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ	やや密	橙5YR7/6	2/12	
99	18-6	須恵器	杯蓋	C-F47	SK21	10.8	外;ロクロナデ→ロクロケズリ 内;ロクロナデ	やや密	灰白N7/	2/12	猿投か? 外面にヘラ描き
100	18-3	黒色土器	椀	C-F48	SK21(内土坑)	15.4	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	ごくわずか	別固体か?
101	3-5	土師器	小皿	C-O49	SK25No.10	8.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	5/12	在地
102	4-7	土師器	小皿	C地区	SK25No.30	8.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	完存	在地
103	4-8	土師器	小皿	C地区	SK25	8.3	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	8/12	在地
104	4-10	土師器	小皿	C地区	SK25	8.3	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	6/12	在地
105	3-2	土師器	小皿	C-O49	SK25No.6	8.5	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	在地
106	4-6	土師器	小皿	C地区	SK25No.29	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	10/12	京都系(模倣?)
107	4-9	土師器	小皿	C地区	SK25	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	在地
108	4-1	土師器	小皿	C-O49	SK25No.20	7.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	完存	在地
109	3-10	土師器	小皿	C-O49	SK25No.18	9.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	3/12	在地
110	4-5	土師器	小皿	C-49	SK25No.27	8.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	完存	在地
111	3-7	土師器	小皿	C-O49	SK25No.12	8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	7/12	在地
112	3-1	土師器	小皿	C-O49	SK25No.5	8.4	外;工具ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	在地
113	4-2	土師器	小皿	C-O49	SK25No.21	8.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	完存	京都系模倣
114	4-4	土師器	小皿	C-O49	SK25No.22	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	11/12	京都系(模倣?)
115	3-3	土師器	小皿	C-O49	SK25No.7	8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/4	6/12	在地
116	3-6	土師器	小皿	C-O49	SK25No.11	8.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	10/12	京都系模倣
117	4-3	土師器	小皿	C-O49	SK25No.21	8.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	10/12	京都系(模倣?)
118	3-9	土師器	小皿	C-O49	SK25No.15	8.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	2/12	在地
119	3-4	土師器	小皿	C-O49	SK25No.8	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	11/12	在地
120	3-8	土師器	小皿	C-O49	SK25No.14	8.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	7/12	在地
121	5-5	瓦器	小皿	C地区	SK25	8.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	3/12	内面底部に暗文
122	5-4	瓦器	小皿	C-O49	SK25No.2	8.3	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	完存	内面底部に暗文
123	6-1	瓦器	椀	C-O49	SK25No.23	15.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/	11/12	内面底部に暗文
124	6-3	瓦器	椀	C-O49	SK25No.4	14.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	黒N2/	ほぼ完存	内面底部に暗文
125	7-1	瓦器	椀	C-O49	SK25No.25	15.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	5/12	内面底部に暗文
126	7-2	瓦器	椀	C-O49	SK25N0.24	14.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	3/12	内面底部に暗文
127	6-2	瓦器	椀	C-O49	SK25No.1	15.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	8/12	内面底部に暗文
128	6-4	瓦器	椀	C-O49	SK25No.9	14.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	暗灰N3/	9/12	内面底部に暗文
129	5-3	瓦器	椀	C-O49	SK25	15	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙10YR8/4	少量	内面底部に暗文
130	7-4	瓦器	椀	C-O49	SK25No.28	16	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	1/12	内面底部に暗文
131	7-3	瓦器	椀	C-O49	SK25No.26	13.8	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/	8/12	内面底部に暗文
132	5-2	瓦器	椀	C-O49	SK25No.13	14.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	
133	5-1	土師器	羽釜	C-O49	SK25	(つば)33.5	外;ヨコナデ→貼付後ヨコナデ 内;オサエ→ヨコナデ	密	灰褐7.5YR6/2・5/2	1/12	大和型
134	38-1	瓦器	皿	C-O49	包含層(SK25直上)	8.7	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	7/12	内面底部に暗文
135	38-2	瓦器	皿	C-O49	包含層(SK25直上)	8.3	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N/40	7/12	内面底部に暗文
136	37-11	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地　歪み大きい
137	37-5	瓦器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y7/1	7/12	
138	37-4	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8.4～8.55	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	ほぼ完存	在地

第32表　有井遺跡遺物観察表（3）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
139	37-3	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8.7	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	京都系模倣
140	37-9	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8.5	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	3/12	京都系模倣
141	37-7	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	在地
142	37-10	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	3/12	在地
143	37-6	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地
144	37-8	土師器	皿(小)	C-O49	包含層(SK25直上)	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	2/12	在地
145	37-1	土師器	土釜	C-O49	包含層(SK25直上)	26.8	外;ナデ→ヨコナデ→貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	にぶい橙5YR7/4	2/12	大和型
146	12-5	瓦器	皿	C-O49	SK27	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	3/12	内面底部に暗文
147	13-6	瓦器	椀	C-O49	Sk27	(底)3.1	外;オサエ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N5/	4/12	内面底部に暗文
148	13-5	瓦器	椀	C-O49	SK27	15.1	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	2/12	
149	12-4	瓦器	椀	C-O49	SK27	14	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/	10/12	
150	13-7	青磁	椀	C-O49	SK27	16	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1 (釉)灰オリーブ5Y6/2	小片	同安窯系大宰府I1b 内面に文様
151	13-8	陶器	甕	C-O49	SK27	—	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ	やや密	(素地)灰白白2.5Y7/1 (釉)にぶい赤褐5YR4/3	2/12	常滑
152	13-1	土師器	皿	C-O49	SK27	7.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	3/12	在地
153	12-7	土師器	皿	C-O49	SK27No.1	7.8～8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	ほぼ完形	在地
154	13-3	土師器	皿	C-O49	SK27No.2	8～9.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	4/12	在地
155	13-4	土師器	皿	C-O49	SK27	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	2/12	在地
156	12-6	土師器	皿	C-P49	SK27	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	在地
157	10-4	青磁	椀	C-L49	SK26	—	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0 (釉)ｵﾘｰﾌﾞ黄7.5Y6/3	1/12	龍泉窯系大宰府Ⅰ類
158	10-1	瓦器	椀	C-L49	SK26No.4	14.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	2/12	内面底部に暗文
159	10-3	瓦器	椀	C-M49	SK26	14	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文
160	10-7	土師器	皿(小)	C-L49	SK26No.1	8.7～8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白10YR8/2	ほぼ完存	在地
161	10-6	土師器	皿(小)	C-M49	SK26	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	5/12	在地
162	10-5	土師器	皿(小)	C-M49	SK26	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/4	2/12	在地
163	13-2	土師器	皿	C-L49	SK26No.3	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR7/1	5/12	在地
164	10-8	土師器	皿(小)	C-L49	SK26No.2	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	4/12	在地
165	12-1	青磁	椀	C地区	SK28	16	外;ロクロナデ→クシガキ・施文(施釉) 内;ロクロナデ→クシガキ・ヘラガキ・施文(施釉)	密	(素地)灰白N7/ (釉)灰オリーブ7.5Y6/2	1/12	同安窯系大宰府I1b
166	11-8	青磁	椀	C地区	SK28	15.8	外;ロクロナデ→ハケメ(施釉) 内;ロクロナデ→ハケメ(施釉)	密	(素地)灰白5Y7/1 (釉)灰オリーブ7．5Y6/2	1/12	同安窯系大宰府I1b
167	11-6	青磁	椀	C-M49	SK28No.5	15.9	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/1 (釉)灰オリーブ5Y6/2	2/12	龍泉窯系　内面に文様
168	22-7	青磁	椀	C地区	SK28	16.4	外;施釉 内;施釉	密	(素地)灰白N7/10 (釉)灰10Y6/1	1/12	龍泉窯系大宰府I4a
169	11-7	青磁	椀	C-M49	SK28	18	外;ロクロナデ→ハケメ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/ (釉)灰オリーブ5Y5/2	少量	龍泉窯系大宰府I6b 内外面に蓮弁文
170	15-2	瓦器	椀	C-M49	SK28	15	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N6/0	1/12	内面底部に暗文
171	14-1	瓦器	椀	C-M49	SK28No.6	14.3	外;オサエ・ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/	5/12	内面底部に暗文
172	12-3	瓦器	椀	C-M49	SK28No.7	13.9	外;オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	4/12	かなり磨耗している 内面に暗文
173	14-3	瓦器	椀	C-M49	SK28No.10	(高台)6	外;ナデ・オサエ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	内面底部に暗文
174	15-1	瓦器	椀	C地区	SK28No.18	15	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	1/12	内面底部に暗文
175	14-5	瓦器	椀	C-M49	SK28No.7	15	外;オサエ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N5/0	2/12	内面底部に暗文
176	14-6	瓦器	椀	C-M49	SK28No.11	15.4	外;ナデ→オサエ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N5/0	2/12	内面底部に暗文
177	15-3	瓦器	椀	C地区	SK28No.20	15.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	3/12	内面底部に暗文
178	14-2	瓦器	椀	C-M49	SK28No.10	15.4	外;オサエ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	
179	14-4	瓦器	椀	C-M49	SK28No.8	14.2	外;オサエ後ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	黒N2/0	3/12	
180	11-3	瓦器	椀	C-M49	SK28	14	外;オサエ→ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	
181	12-2	瓦器	椀	C地区	SK28No.19	16	外;オサエ→ナデ 内;ナデ→ミガキ	密	灰N4/	3/12	
182	15-4	瓦器	皿	C-M49	SK28No.3	7.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N5/0	12/12	内面底部に暗文
183	15-5	瓦器	皿	C-M49	SK28No.1	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N5/0	11/12	内面底部に暗文
184	11-5	陶器	練鉢	C-M49	SK28	(底)17.7	外;ロクロケズリ→貼付高台ナデ 内;剥離	やや粗	灰白5Y7/1	1/12	知多・猿投

第33表　有井遺跡遺物観察表（４）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
185	16-1	土師器	皿	C地区	SK28No.16	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	11/12	在地
186	16-6	土師器	皿	C-M49	SK28No.4	8.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地
187	16-2	土師器	皿	C-M49	SK28No.2	8.3	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	9/12	在地
188	16-3	土師器	皿	C-M49	SK28No.4	8.2	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	10/12	在地
189	11-1	土師器	皿	C-M49	SK28	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR6/6	3/12	在地　油煙痕あり
190	11-2	土師器	皿	C-M49	SK28	8.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ・オサエ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	6/12	京都系模倣
191	16-5	土師器	皿	C地区	SK28	8.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	在地
192	16-8	土師器	皿	C地区	SK28No.13	8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	3/12	在地
193	16-9	土師器	皿	C-M49	SK28No.12	8.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白2.5Y8/2	3/12	在地
194	16-7	土師器	皿	C-M49	SK28	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	2/12	在地
195	16-4	土師器	皿	C-M49	SK28	10	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	京都系
196	15-6	瓦質ミニチュア土器	羽釜	C-M49	SK28	6.2	外;オサエ？→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	黄灰2.5Y4/1	2/12	外面に煤付着
197	41-3	鉄製品	釘	C地区	SK28	—	—	—	—	小片	
198	41-2	鉄製品	釘？	C-M49	SK28	—	—	—	—	小片	さなぎ、ななふし？
199	41-1	鉄製品	釘？	C-M49	SK28	—	—	—	—	小片	
200	43-1	鉄製品	刀子	C地区	SK28No.17	—	—	—	—	小片	
201	17-5	瓦器	椀	C-P49	SK29	14	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	3/12	
202	18-8	瓦器	小皿	C-P49	SK29	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	3/12	在地
203	17-8	土師器	小皿	C-P49	SK29	8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	6/12	在地
204	18-7	土師器	羽釜	C-P49	SK29	—	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ	やや密	灰褐7.5YR5/2	1/12	大和型　外面に煤付着
205	28-1	土師器	甕	C-F47	pit1	14.9	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい褐7.5YR6/3	3/12	外面に煤付着
206	28-2	黒色土器	椀	C-E47	pit1	(高台)8.8	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	にぶい赤褐5YR5/4	5/12	外面底部にヘラ描き(焼成後)、内面に暗文
207	27-11	須恵器	杯B	C-E46	pit1	(高台)8	外;ロクロナデ→ケズリ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰白N7/0	3/12	
208	27-10	緑釉陶器	椀	C-F45	pit1(柱痕)	14.7	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白N8/0	1/12	
209	29-5	土師器	羽釜	C-L49	pit7	(つば)22.4	外;ナデ→オサエ→貼付ナデ 内;ナデ	密	にぶい橙7.5YR7/3	少量	大和型
210	28-3	黒色土器A	椀	C-F47	pit3	13	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ	密	灰黄褐10YR5/2	2/12	A類
211	28-5	瓦器	椀	C-E36	pit1	13.9	外;ナデ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	1/12	
212	26-2	瓦器	椀	C-P49	pit1	13.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	内面底部に暗文
213	26-3	瓦器	椀	C-P49	pit1No.3	14.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙10YR8/3	5/12	燻されていない マメツ激しく調整不明瞭
214	26-4	瓦器	椀	C-P49	pit1No.2	15.9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	1/12	内面底部に暗文
215	26-1	瓦器	椀	C-P49	pit1No.1	14.7～15.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	11/12	内面底部に暗文
216	27-4・5	瓦器	椀	C-N50	pit4	15.9	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N4/0	1/12	内面底部に暗文？ 全体に調整不明瞭
217	31-1	瓦器	椀	C-O49	pit1	13.6	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/	4/12	
218	27-3	瓦器	椀	C-P49	pit3	(高台)6	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文？
219	32-4	土師器	小皿	C-K49	pit3	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	2/12	在地
220	32-7	土師器	小皿	C-K49	pit3	8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	3/12	内外面黒い(黒斑？)
221	32-5	土師器	小皿	C-K49	pit3	8.6	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	在地
222	32-6	土師器	小皿	C-K49	pit3	8.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	京都系在地
223	29-4	土師器	小皿	C-L49	pit8	9.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	5/12	在地
224	27-7	土師器	皿(小)	C-N50	pit1(柱穴)	8.7	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	7/12	在地
225	29-3	土師器	小皿	C-L49	pit4	8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	2/12	在地
226	36-2	土師器	甕	C-F41	包含層	19.9	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	1/12	
227	38-6	緑釉陶器	椀	C-D49	包含層	—	外;ロクロナデ→糸切り痕→貼付高台(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	浅黄橙7.5YR8/3	底残存	高台欠損
228	38-3	埴輪？	円筒埴輪？	C-O49	包含層	—	外;ナデ→貼付ナデ 内;ナデ	やや粗	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	埴輪としたが断定できない
229	19-8	土師器	杯A	B-R9	SB34　pit3(掘形)	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	小片	
230	19-6	土師器	皿	B-R9	SB34　pit3(掘形)	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	小片	

第34表　有井遺跡遺物観察表（５）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
231	19-9	土師器	甕	B-R10	SB34 pit2(掘形)	—	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	小片	
232	19-5	土師器	杯A	B-R10	SB34 pit1(掘形)	—	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	橙7.5YR7/6	小片	
233	2-2	土製品	カマド	B-Q11	SD10	—	外;ナデ→ハケメ 内;ナデ→ハケメ	密	橙7.5YR7/6	小片	
234	2-6	土製品	フイゴの羽口	B-R8	SR11	破片	—	密	灰白N7/0	破片	
235	2-5	土製品	フイゴの羽口	B-R8	SR11	破片	—	密	灰白5Y7/1	破片	
236	1-3	土師器	杯A	B-R9	SR11	14	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙2.5YR6/8	1/12	
237	1-2	土師器	杯A	B-R8	SR11	12	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙2.5Y6/8	2/12	
238	1-1	土師器	長胴甕	B-R8	SR11	27.4	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	5/12	
239	2-4	土師器	台付皿	B-R8	SR11	26	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙5YR7/6	1/12	
240	2-1	須恵器	甕	B-R8	SR11	29.4	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰5Y6/1	1/12	
241	2-7	須恵器	壺K	B-R9	SR11	—	外;ロクロナデ→ロクロケズリ 内;ロクロナデ	密	灰N6/0	—	
242	2-3	土師器	杯蓋	B-J11	SR14	18	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ナデ→ヨコナデ	密	橙7.5YR7/6	2/12	
243	1-4	瓦	平瓦	B-J27	SK19	—	外;ナデ 内;ナデ	密	灰N5/0	4/12	
244	31-4	土師器	杯A	B-M11	pit1(柱穴)	13.4	外;工具ナデ?→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	橙5YR7/6	4/12	
245	31-6	須恵器	平瓶?	B-P11	pit3	12.8	外;ロクロナデ? 内;ロクロナデ?	やや粗	灰N6/	2/12	
246	34-6	埴輪	円筒埴輪	B地区	包含層	—	外;ハケメ→貼付ナデ 内;ハケメ	密	にぶい黄橙10YR7/3	1/12	
247	33-1	土師器	甕	B-M11	包含層	30.1	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケ後ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	1/12	
248	33-3	土師器	異形器台	B地区	包含層	25.8	外;ハケメ→貼付ナデ 内;ハケメ→ナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	器種不明
249	35-6	土師器	皿A	B-Q6	包含層	26	外;ケズリ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白5Y7/1	1/12	堀田6次に例あり
250	33-4	土師器	甕	B-R16	包含層	24	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ハケメ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	2/12	
251	33-2	土師器	甕	B-S20	包含層	22	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR6/4	1/12	
252	34-1	土師器	高杯	B地区	包含層	脚柱3.0	外;ナデ→オサエ 内;ナデ→ミガキ	密	橙5YR6/6	—	内面に暗文
253	33-6	土師器	椀	B-R8	包含層	10.2	外;ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	2/12	
254	34-4	土師器	椀	B-R17	包含層	12.1	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	1/12	
255	35-2	須恵器	杯	B-S18	包含層	14	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	灰白N7/0	1/12	
256	35-5	土師器	杯B	B-R8	包含層	12.8	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	1/12	
257	35-4	土師器	杯B	B-R9	包含層	(高台)8.8	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	灰白N7/0	2/12	
258	35-3	土師器	杯B	B-R19	包含層	(高台)8.8	外;ロクロナデ→糸切り後ナデ→貼付高台 内;ロクロナデ	密	灰白N7/0	3/12	
259	34-2	土師器	椀	B地区	包含層	—	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	6/12	ロクロ土師 11C中頃
260	34-7	陶器	皿	B地区	包含層	13	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/2 (釉)灰白5Y8/1	1/12	志野?
261	33-5	土師器	皿	B-K27	包含層	9.1	外;工具ナデ?→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	9/12	京都系在地模倣 11C末～12C初
262	34-3	陶器	擂鉢	B-J27	包含層	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	淡赤橙2.5YR7/4	1/12	信楽
263	34-5	陶器	椀	B地区	包含層	(底)6	外;ロクロナデ 内;ロクロ使用((施釉)	密	灰白2..5Y8/2	4/12	外面にスタンプ『いが』
264					包含層						

第35表　有井遺跡遺物観察表（６）

X　西明寺三反田遺跡

水路部分、1,764㎡について調査を行った。（第98図）南北方向のトレンチについては、次年度の平成17年度に、県が調査した調査区に隣接する箇所を、市道敷設に伴い、伊賀市教育委員会により調査が行なわれており[(1)]、その成果も加味して報告を行う。

基本層序（第99・100図）

現状は水田である。調査区東端は耕作土・床土を除去すると旧耕作土と床土層がありその直下は礫層が表れる。西側になると、暗褐色のシルト層があり、中世の遺物を含み遺構もみられるが、検出が困難なため、その下の細砂層まで下げて検出を行った。

地形的には南北・東西トレンチともに、調査区を大流路（破線部分）が縦断している。

遺構（第101～104図）

溝ＳＤ１　AB33グリット付近で確認した遺構である。不整形な溝で、埋土からは、南伊勢系の鍋・瓦質土器が出土している。

土坑ＳＫ２　AA・AB33グリットで確認した遺構である。最大径2.1mの円形の土坑で、検出段階から、水が染み出し絶えずぬかるんでいる地点であった。掘削したところ、埋土には灰色の粘質土に礫を多く含んでいた。検出面から0.6m程の地点から湧水が激しくなったため、やむなく掘削を停止した。素掘りの井戸の可能性も考えられるが、作業の安全上断ち割りを行うことが出来なかったことを付記しておく。湧水は鉄分を多く含んでいるため浸水する箇所は褐色に変色していた。AA26グリットで確認したＳＥ20もこれと同様の特徴をもち、素掘りの井戸の可能性を考えたい。

溝ＳＤ３　AA28～32グリット付近で検出された遺構である。幅約2.2m前後、深さ最大25㎝で、溝の東側は浅い。北方へ直線的に伸びるが、AA28グリット地点で西に直角に折れ曲がる。AA30付近でも西に折れ曲がる可能性もあるが、明確には確認できなった。区画の内部にはピット群が広がるため集落を区画する性格の溝であろう。

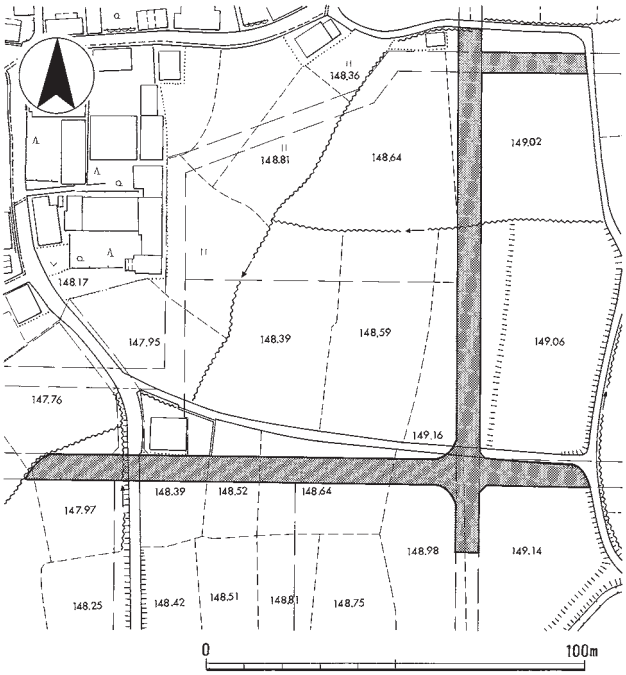
埋土は灰色の粘質土で、拳大の礫を多く含み、信楽産の擂鉢・青磁・土師器皿などが出土している。

土坑ＳＫ７　ＡＨ30グリット付近で確認した遺構である。約３ｍ四方の方形の土坑である。深さは20㎝と浅く、川原石が数個確認され、人為的に並べられているようであるが、土坑の性格は不明。

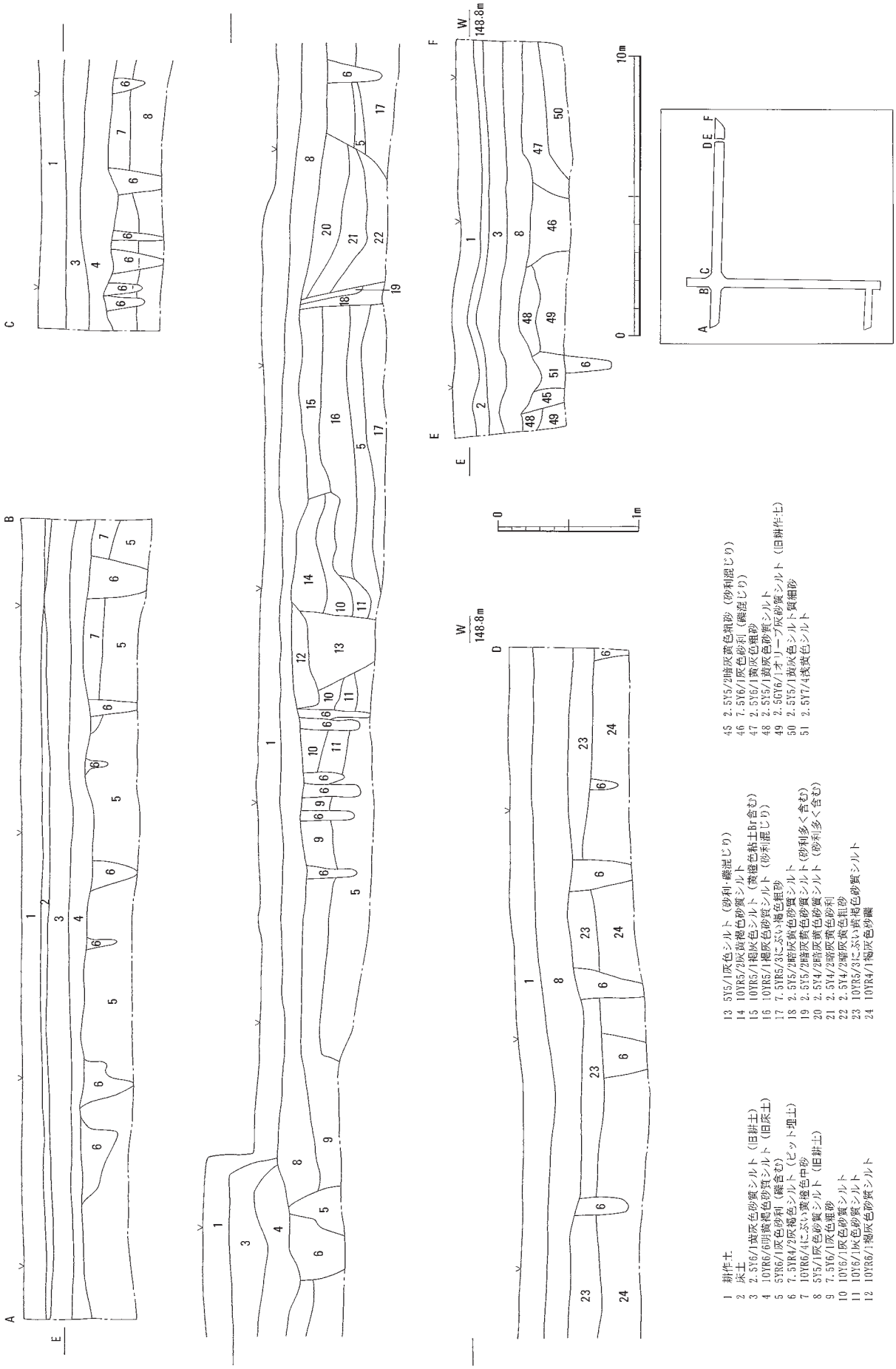
溝ＳＤ８　ＡＦ29～ＡＩ29グリットで確認された遺構である。幅最大2.4m、深さは最大40㎝である。溝は北へ伸びるが、ＡＦ29グリットで直角に折れ曲がり東へ伸びる溝へも分流する。

土坑ＳＫ９（第105図）　ＡＩ29グリットで確認された遺構である。ＳＤ８に平行し、溝に沿うかたちで方形の石組み遺構が出土した。石組みは２段に組まれており、南・西側にみられる。東側には石組みはないが、その石組みの土坑の脇に径1.2mほどの土坑がみられ、湧水してくるため、この土坑からオーバーフローした水を石組み土坑に流れるようにしているものとみられる。

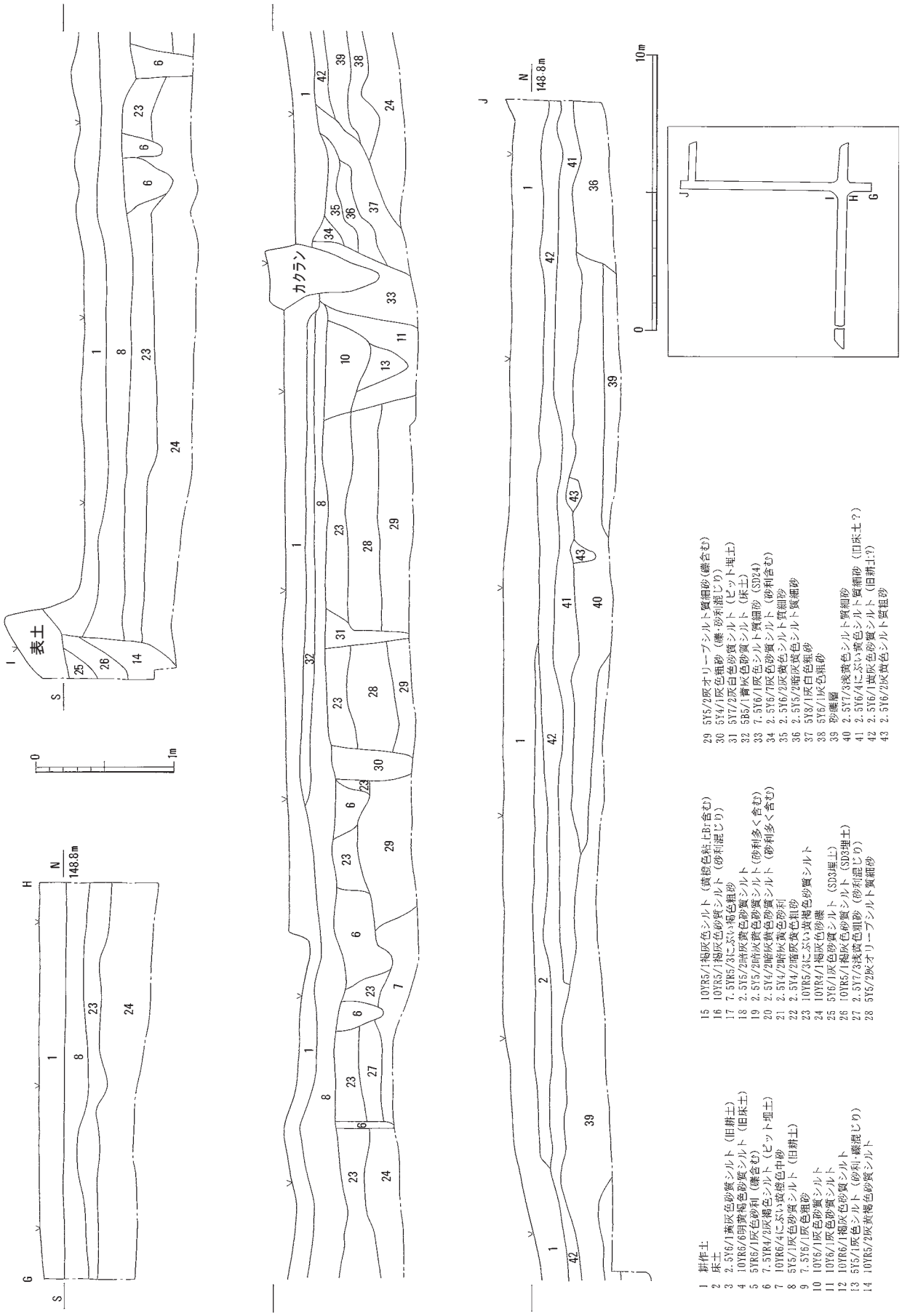
溝ＳＤ10　ＡＨ・ＡＩ10で確認した遺構である。ＳＤ８に切られているため一部しか確認できなかったが、幅約５ｍで深さは５㎝ほど浅いが、北に向けて曲がっている。中世後期の遺構であろう。



第98図　西明寺三反田遺跡調査区位置図（1：2,000）



第99図　西明寺三反田遺跡東西調査区南壁土層断面図（縦１：40　横１：200）



第100図　西明寺三反田遺跡南北調査区西壁土層断面図（縦１：40　横１：200）

溝ＳＤ11　Ｘ29・30グリットで確認した遺構である。幅2.7m、深さ0.4mの断面舟底形の溝で、埋土からは信楽産の擂鉢や天目茶椀、瓦片などが出土しいている。ＳＤ３に接続する可能性もあるが、調査区外のため、明確ではない。

溝ＳＤ12　Ｖ29・30グリットで確認された遺構である。幅２m、深さ約60㎝の溝である。陶器の擂鉢などが出土している。

溝ＳＤ13　Ｎ・O28～30グリットで確認した遺構である。幅1.7m、深さ0.5mほどの溝である。断面は浅い部分と舟底形を呈する部分に分かれる。埋土には礫が混じり、陶器が出土している。

井戸ＳＥ14（第105図）　N29グリットで検出した遺構である。最大径2.3mの石組みの井戸である。深さは検出面から1.1ｍほど下がったところ、146.6mで湧水点に達する。石組は川原石で積まれており、最下段には中央にせり出した大きめの石がある。出土遺物は微量であるが、近世の井戸であろう。

溝ＳＤ18　ＡＡ27・28グリットで確認した遺構である。幅2.3m、深さ30㎝の溝で、ＳＤ３に切られている。西側へ緩やかに屈曲する。

井戸ＳE20　ＡＢ26グリットで確認した遺構である。長径2.5mの土坑である。湧水が多く、全掘できなかったが、湧水は鉄分を非常に多く含有しており、ＳＫ２と同様の井戸の可能性がある。

溝ＳＤ21　ＡＡ・ＡＢ20グリットで確認した溝である。溝の幅は1.2m、深さ20㎝である。

井戸ＳＥ22　ＡＢ20グリットで検出した遺構である。掘りかたは円形で、当初は石で組んであったものとみられるが、廃絶の際に壊されたのか、石は多く含まれたが、石組は判然としなかった。おそらく径1.5ｍ前後の石組みの井戸であろう。掘形は径2.4mである。こちらも湧水が多く、全掘できなかった。

溝ＳＤ23　ＡＡ・ＡＢ14・15グリットで確認された遺構である。幅2.9m、深さ0.53mの溝で東西方向に流れ、ＳＤ24を切る。遺物は近世のものが出土しているが、掘立柱建物ＳＢ32に伴う区画溝と考えられる。

溝ＳＤ24　ＡＡ・ＡＢ14グリットで確認された溝である。溝は、ＳＤ24に切られているため幅は不明であるが、幅４m以上、深さ0.45㎝である。

掘立柱建物ＳＢ32（第106図）　ＡＡ15グリットで確認された遺構である。東西３間（6.3m）以上×南北２間（5.3m）の総柱建物である。柱間間隔は南北が2.5m＋2.9m東西が2.2m等間である。棟方向はＮ０°をはかる

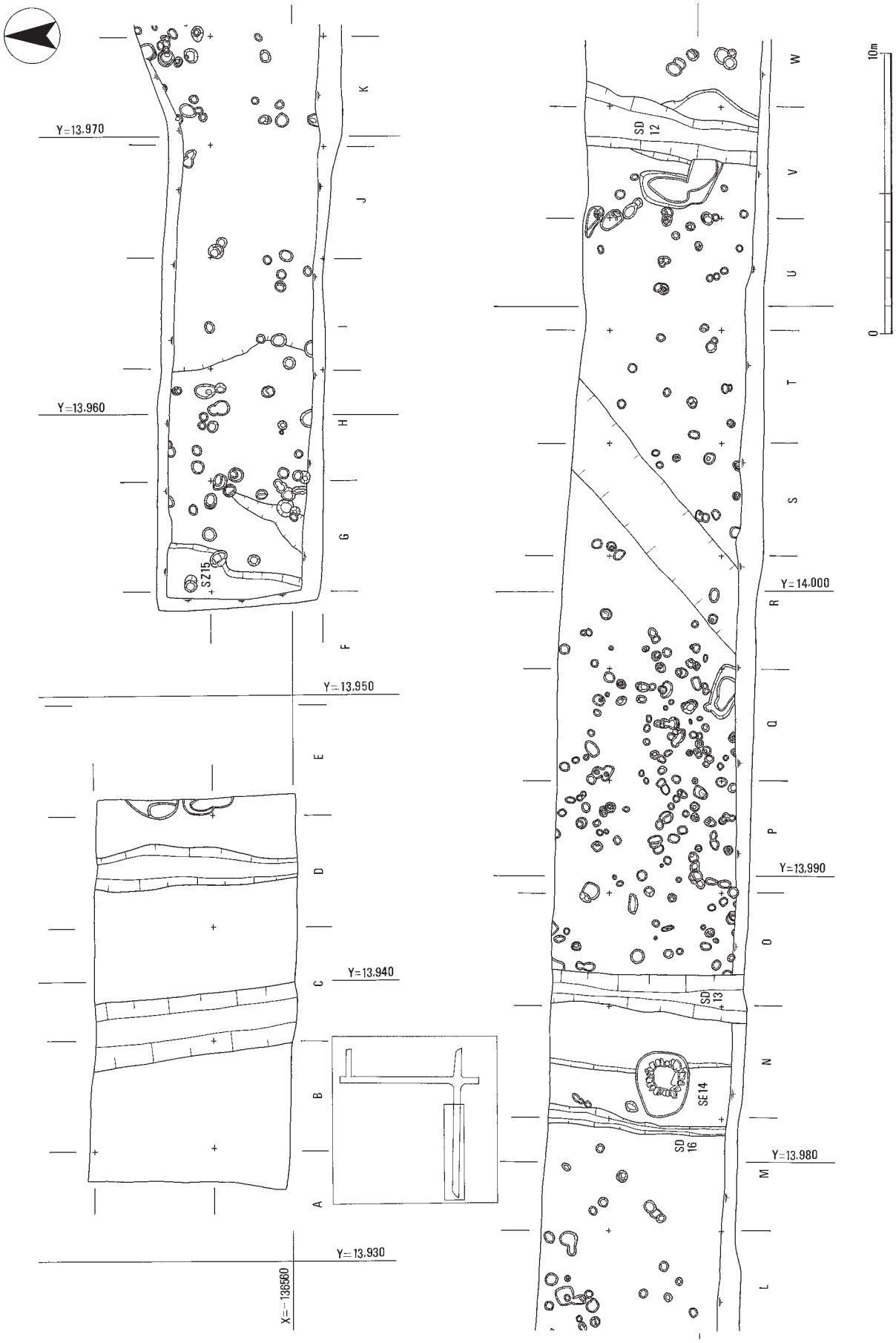
掘立柱建物ＳＢ33（第106図）　ＡＢ・ＡＣ15・16グリットで確認された遺構である。隣接する伊賀市の調査区と合わせると、東西３間（7.7m）×南北２間（4.8m）の総柱建物であると考えられる。棟方向はＮ３°Ｅを測る。柱間間隔は南北が北から2.4m＋2.6m、東西が2.2m等間である。

掘立柱建物ＳＢ34（第106図）　ＡＢ・ＡＣ16グリットで確認された遺構である。伊賀市の調査区と合わせると東西２間（4.9m）×南北２間（4.2m）の総柱建物になると考えられる。棟方向はＮ７°Ｅである。

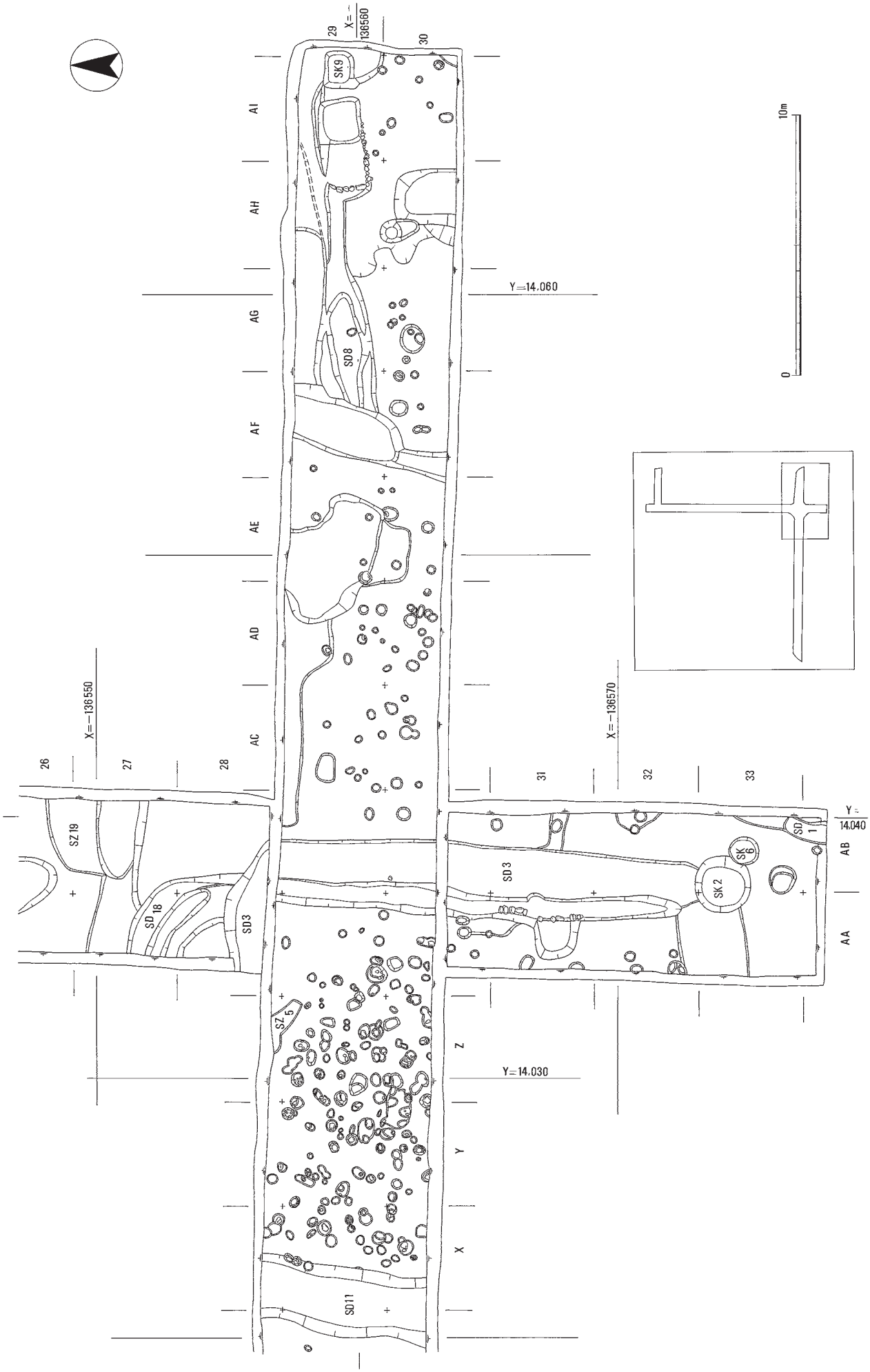
掘立柱建物ＳＢ35（第106図）　ＡＡ・ＡＣ18・19グリットで確認された遺構である。伊賀市の調査区と合わせると、東西２間（5.0m）×南北２間（5.3m）の総柱建物になると考えられる。棟方向はＮ6°Ｅである。

土坑ＳＫ26　ＡＨ３で確認できた遺構である。長2.1mの楕円形の土坑であるが、土坑の南半分は調査区外である。埋土からは、瓦器椀が多く出土しているが、土坑の性格などは不明である。

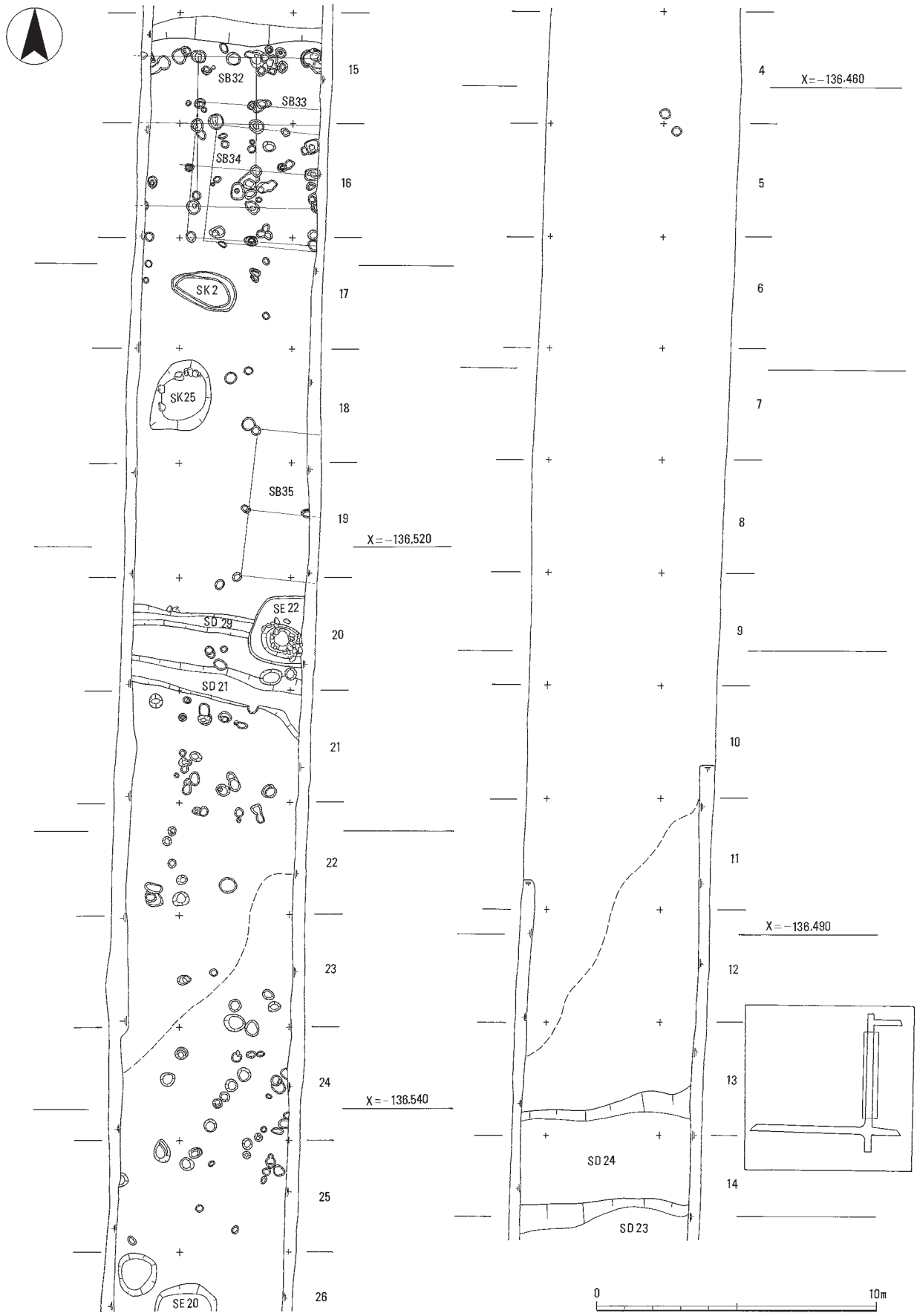
土坑墓ＳＸ28（第108図）　ＡＦ３グリットで確認できた遺構である。掘り方は長軸2.05m、幅1.25mの楕円形を呈する。埋土には焼土はあまり含まれなかったが、炭層を含み、微量ながら骨片も含まれていた。また、完形の瓦器椀や土師皿が出土したため土坑墓と判断した。



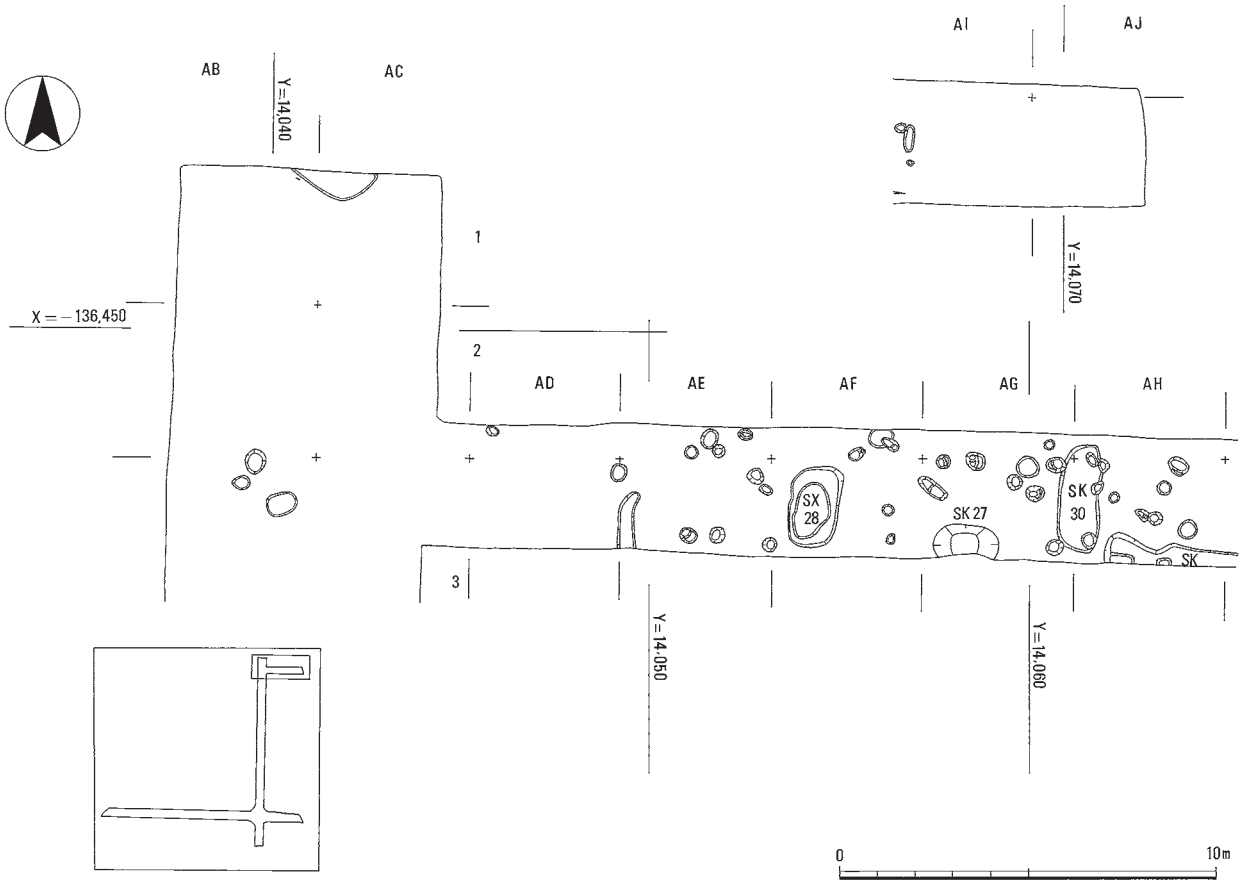
第101図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（1）（1：200）



第102図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（２）（１：200）



第103図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（３）（１：200）



第104図　西明寺三反田遺跡遺構平面図（４）（１：200）

出土遺物（第109～111図）

包含層（１～２）　土師器が出土している。１は土師器の皿A[2]である。内面にはヘラミガキが施される。２は甕である。

土坑ＳＫ25（３～４）　３は灰釉陶器、４は土師器甕である。口径は13.0cm、体部外面はケズリののち、縦方向のハケ、内面はナナメハケである。

土坑墓ＳＸ28（５～27）　土師器・瓦器・磁器などが出土した。５は台付皿で3.0cm程の高台をもつ。

６～18は土師皿で、６～11が京都系で14・15は在地産、12・13は京都系の影響をうけたものである。19～21は瓦器皿で、内底面に暗文を施す。

22～24が瓦器椀である。低平化が進んでおり、福田編年[3]の５～６期頃に相当する。25・26は青磁、27は白磁である。25は口径13.0cm前後で大宰府Ⅱ類[4]か、26は口径16.0cmとみられ、大宰府Ⅷ類、27は口径11.6cmで、大宰府Ⅶ類か。

土坑ＳＫ26（28～33）瓦器が出土している。28は瓦器皿で、内底面に暗文がみえる。29～31は瓦器椀である。外面には粗いミガキが残り、口径は14.8～16cmで29は丸みを帯びた形態である。福田編年４期に相当しよう。

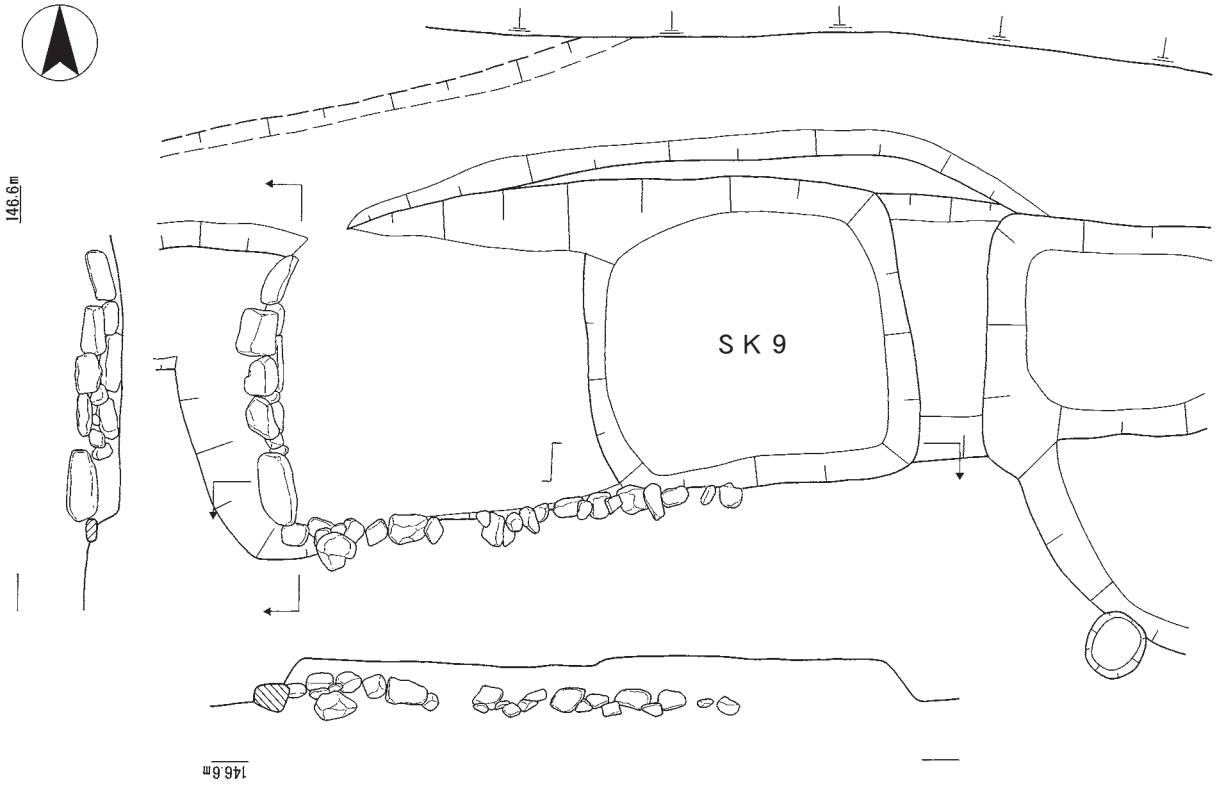
Ｐｉｔ遺物（34～47）　土師器・瓦器・磁器が出土している。34～41は土師器皿である。34～37は京都系の土師器皿である。37は京都系、38～41は在地産のものである。

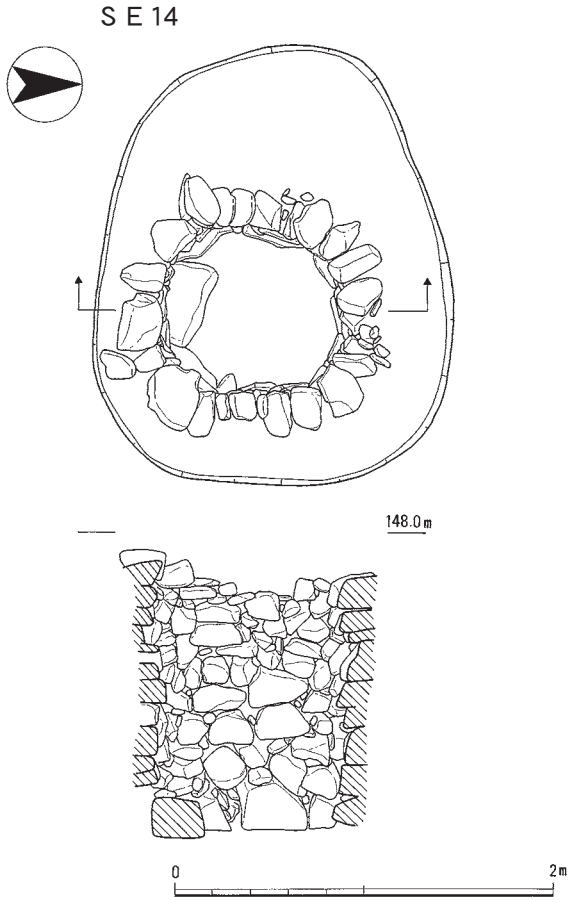
43は瓦器皿、44～45は瓦器椀で、外面は殆どミガキが施されず、44の口径は15.5cmで、45は14.6cmである。46は白磁で、口縁部は玉縁状を呈する。太宰府Ⅳ類に相当する。47は龍泉窯系の青磁で、15世紀末～16世紀初頭頃のものと考えられる。

溝ＳＤ１（48・49）　土師器・瓦質土器・土製品が出土している。48は南伊勢系の土師器鍋で伊藤編年[5]の４－ｄ段階に相当する。49は瓦質土器である。

土坑ＳＫ２（50～52）　50は南伊勢系の鍋で伊藤編年の４－ｅ段階である。51は信楽産の甕、52は土符である。

溝ＳＤ18（53）　土師器の小皿が出土している。





第105図　土坑ＳＫ９・井戸ＳＥ14平面・断面図（１：40）

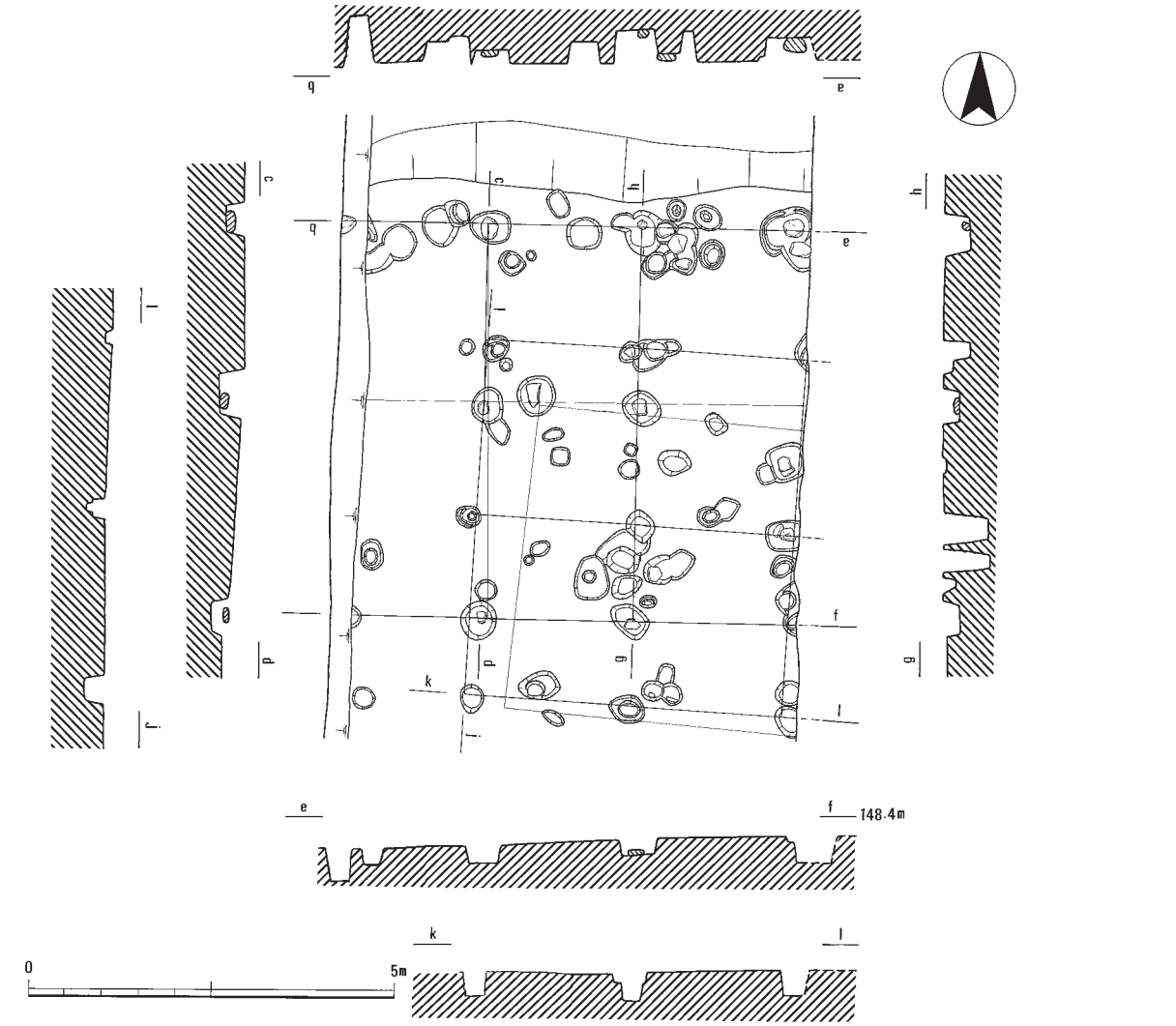
溝ＳＤ24（54・55）　土師器小皿（54）、灰釉陶器の鉢（55）が出土している。

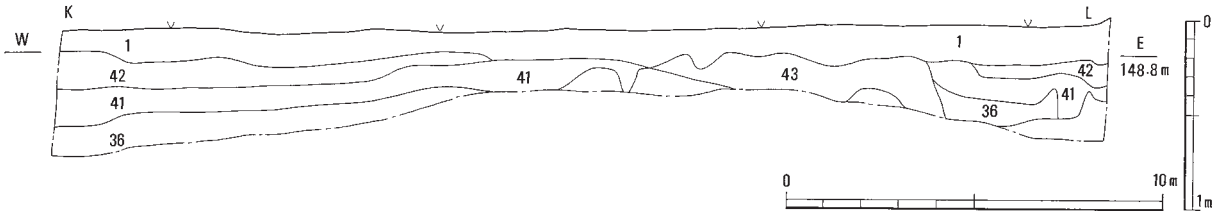
溝ＳＤ３（56～74）　土師器・陶器・磁器が出している。56～63は土師器皿ですべて在地産である。口径が7.6～8.2㎝、10㎝強のものとに大別される。64は志野焼の皿、65は青磁の盤、67は天目茶椀、66は信楽産の壺である。68・69は信楽産の甕である。70～73は陶器の擂鉢である。70・71は信楽産の擂鉢で、70は口縁部を強くヨコナデされ内面が内傾する。72・73は黒色で、粗い擂目をもつ小片であるが大和の擂鉢である。74は鉄鏃である。これらは一部15世紀代のものも含むが大半は16世紀代のものである。

溝ＳＤ８（75・76）　信楽産の擂鉢（75）が出土している。76は瓦質土器の風炉である。土坑ＳＫ９（77）　瓦質土器の羽釜（77）が出土している。

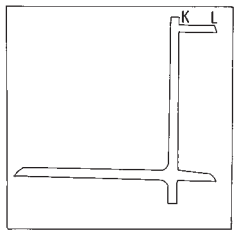
溝ＳＤ11（78～81）　陶器・瓦質土器・瓦など出土している。78は瓦質土器の鍋、79・80は信楽産の擂鉢である。

溝ＳＤ12（82・83）　82は瓦質土器の鍋、83は信楽産の擂鉢が出土している。15世紀後半～16世紀



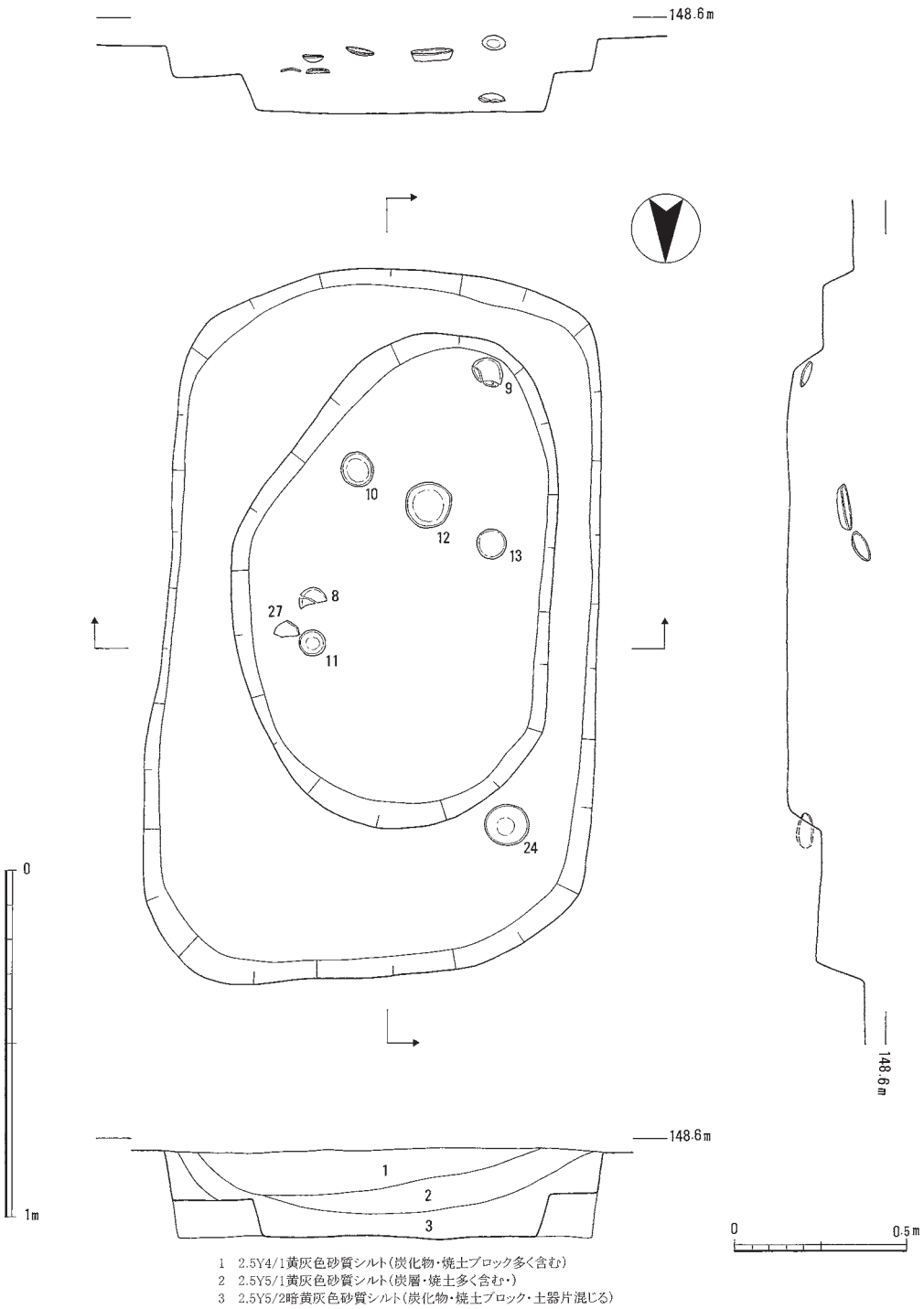


1　耕作土
36　2.5Y5/2暗灰黄色シルト質細砂
41　2.5Y6/4にぶい黄色シルト質細砂（旧床土？）
42　2.5Y6/1黄灰色砂質シルト（旧耕土?）
43　2.5Y6/2灰黄色シルト質粗砂



第106図　掘立柱建物ＳＢ32～34平面・断面図（１：100）　調査区北部東西トレンチ北壁土層断面図（縦１：40　横１：200）

第107図　西明寺三反田遺跡の伊賀市調査区との合成図（１：200）



第108図　土坑墓ＳＸ28平面・断面図（１：20）

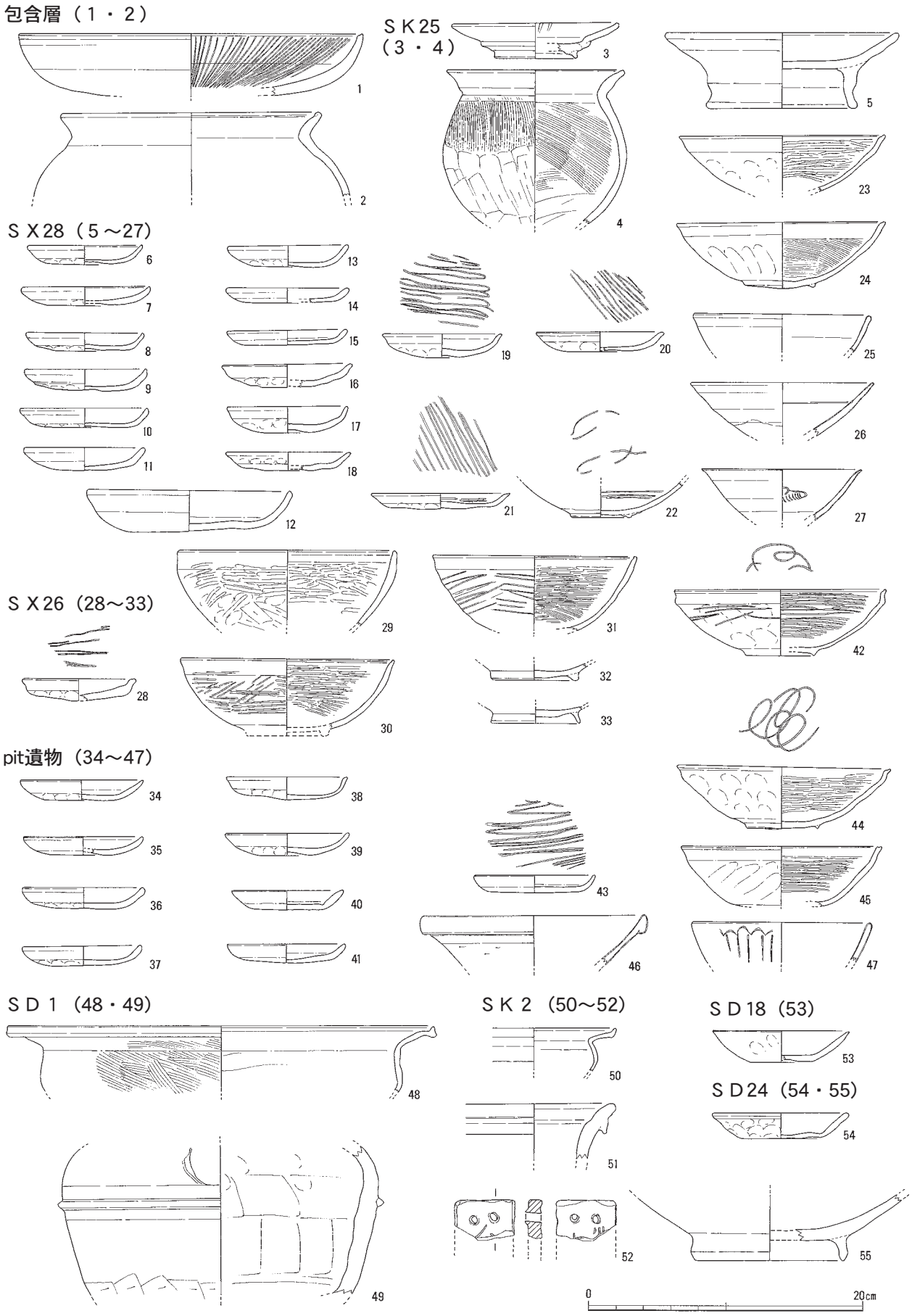
前半頃のものである。

溝ＳＤ21（84）　信楽産の甕の口縁部（84）が出土している。

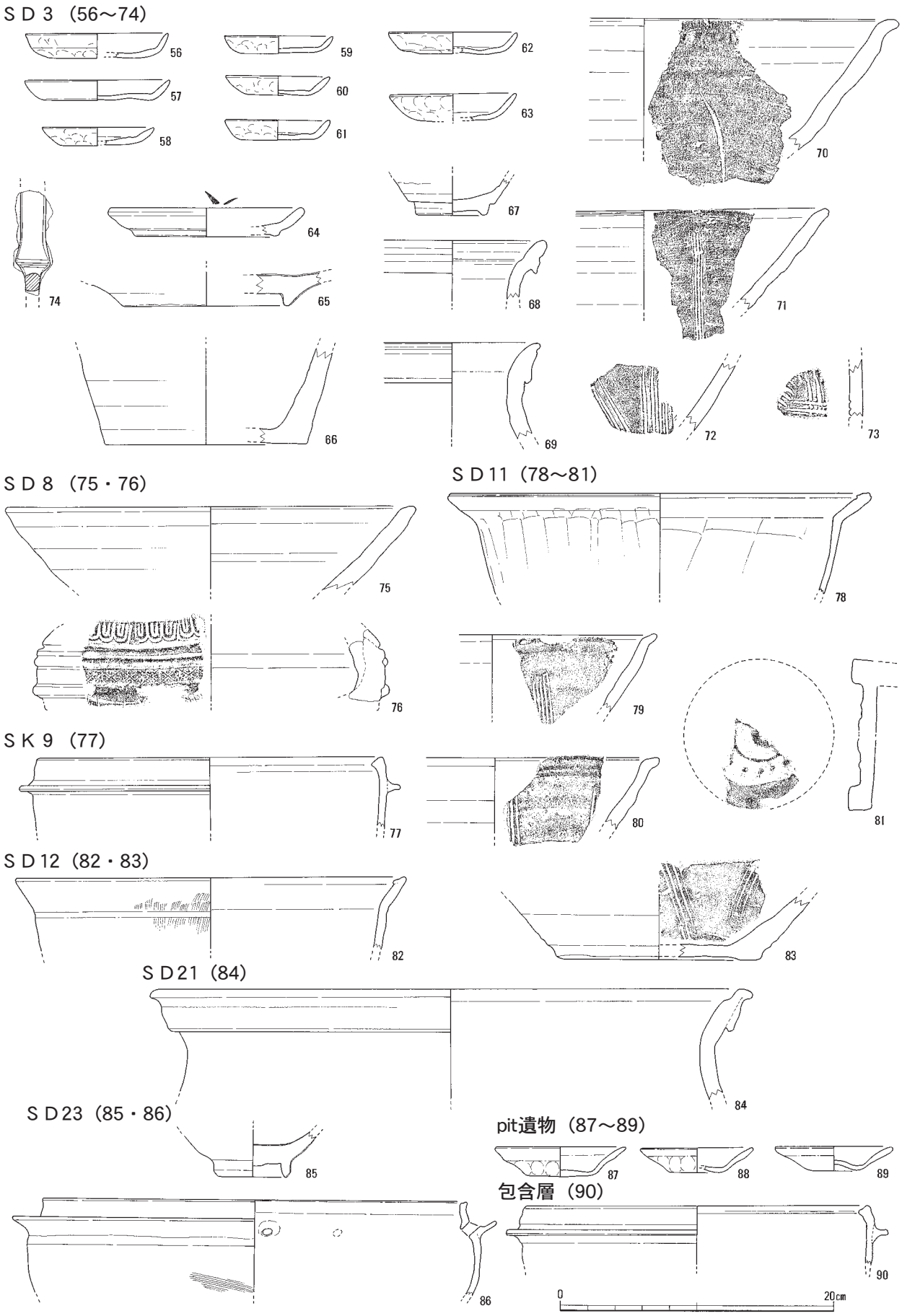
溝ＳＤ23（85・86）　85は青磁椀の高台の破片である。龍泉系で大宰府Ｉ類に相当する。86は中北勢系の羽釜である。鍔部には穿孔がなされ、16世紀初頭頃のもので、伊賀地域では初の確認例である。

Ｐｉｔ遺物（87～89）　土師器皿が出土している。いずれも上げ底の皿である。

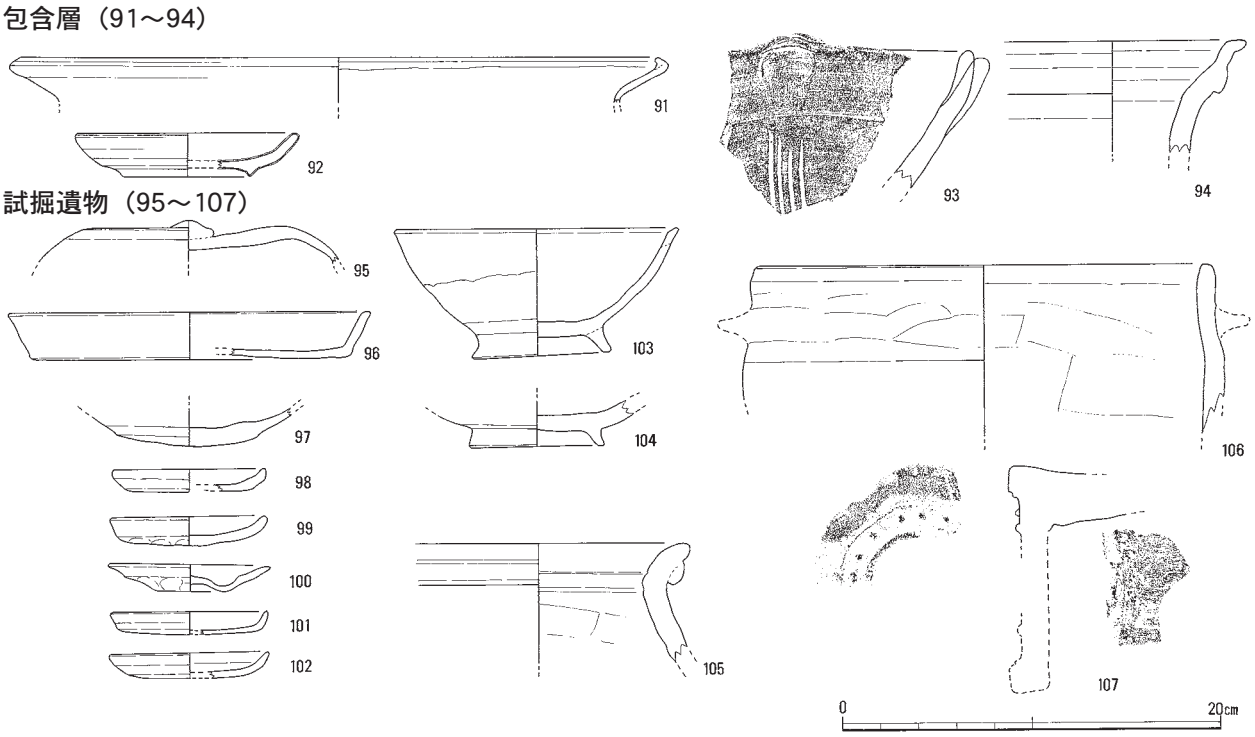
包含層（90～94）　土師器・瓦質土器・陶器が出土している。90は瓦質の羽釜、91は南伊勢系の鍋片である。93は信楽産の擂鉢で、１単位の擂目は４本である。口縁部内面にはロクロナデを施す。94は信楽産の甕である。



第109図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（１）（１：４）



第110図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（２）（１：４）



第111図　西明寺三反田遺跡出土遺物実測図（３）（１：４）

試掘坑出土遺物（95～107）　須恵器・土師器・陶器が出土している。95は須恵器の蓋で宝珠つまみをもつ。96は須恵器の皿、97は須恵器杯身である。

98～102は土師器皿で、98は京都系の土師器皿で、在地で模倣されて製作されたものの可能性がある。100は口径8.5㎝、口縁部をヨコナデした京都系のへそ皿で15世紀代のものか。102も京都系土師器で搬入品の可能性がある。103は黒色土器である。口径14.9㎝、器高6.7㎝で、内黒のA類である。外面には粘土の接合痕が残る。104も高台のみであるが、黒色土器のA類である。105は信楽産の甕で内面に段はない。106は瓦質土器の羽釜、107は軒丸瓦の破片である。巴文で、表面には離れ砂が付着しており、内面には布目痕が確認できる。中世瓦であろう。

（豊田）

［註］

（１）福田典明『西明寺三反田遺跡（２次）発掘調査報告－三重県伊賀市西明寺所在』伊賀市教育委員会　2006年

（２）古代の土器研究会編『古代の土器1　都城の土器集成』（1992年）

（３）福田典明「伊賀地域における瓦器椀編年の再検討」（『第24回　中世土器研究会－瓦器椀生産の展開－』日本中世土器研究会　2005年）

（４）横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４　1978年）
山本信夫氏「土器の分類」（『大宰府条坊跡』Ⅱ　太宰府市教育委員会　1983年）

（５）伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history Vol.1』三重歴史文化研究会　1990年）

遺構番号	性　格	時　期	トレンチ	グリット	特徴・形状・計測数値など
SD1	溝（水路）	中世後期	南北	AB33	不整形な溝。鍋・瓦質土器出土
SK2	土坑	中世後期	南北	AA・AB33	最大径2.1mの円形の土坑
SD3	溝	近世	南北	AA28～32	幅約2.2mの浅い溝、AA・AB28グリットで方角に曲がる。
SK4	土坑	中世前期	東西	Y・Z30	土師器・瓦器片出土
SZ5	落ち込み	不明	東西	B4・5	特になし
SK6	土坑	中世	南北	AB33	瓦器・擂鉢片出土
SK7	土坑	中世	東西	AH30	約3m四方の方形の土坑。瓦器・擂鉢片出土
SD8	溝	近世	東西	AF・AI29	幅最大2.4m、深さ最大0.4m。直角に折れる溝
SK9	土坑	近世	東西	AI29	SD8に平行する溝。
SD10	溝	中世後期？	東西	AH・AI11	幅約5m、深さ0.05m。
SD11	溝	近世	東西	X29・30	幅2.7m、深さ0.4mの断面船底形の溝
SD12	溝	近世	東西	V29・30	幅2m、深さ約0.6m
SD13	溝	近世	東西	N・O28～30	幅1.7m、深さ0.5mの溝。瓦片・擂鉢片出土
SE14	井戸	近世	東西	N29	最大径2.3mの石組井戸。擂鉢片出土
SZ15	落ち込み	中世前期～近世	東西	G28・29	特になし
SD16	溝	不明	東西	M28・29	特になし
SK17	土坑	中世？	東西	V29	古代の遺物混じる
SD18	溝	中世	南北	AA27・28	幅2.3m。SD3に切られている。瓦器・信楽産の陶器片出土
SZ19	落ち込み	中世後期か	南北	AB27	特になし
SE20	井戸	近世？	南北	AA・AB26	素掘りの井戸か。瓦片出土
SD21	溝	中世後期～近世	南北	AA・AB20	伊賀市報告SK4に接続か。　擂鉢片出土
SE22	井戸	近世	南北	AB20	擂鉢・瓦片出土
SD23	溝	近世	南北	AA・AB15	幅2.9m、深さ0.53m。伊賀市報告SD5と同一
SD24	溝	近世	南北	AA・AB14	幅4m以上、深さ0.45m。擂鉢・瓦片出土
SK25	土坑	近世？	南北	AA・AB18	擂鉢・瓦片出土
SK26	土坑	中世前期	北東	AH3	長径2.1mの楕円形の土坑。土師器・瓦器片出土
SK27	土坑	中世前期	北東	AG・AH3	土師器・瓦器片出土
SX28	土坑墓	中世前期	北東	AF3	埋土に炭層あり、瓦器椀・土師皿・白磁片出土
SD29	溝	中世後期	南北	AB20	擂鉢片出土
SK30	土坑	不明	南北	AI29	特になし
SB31	掘立柱建物	中世前期	東西	YZ30	東西2間以上
SB32	掘立柱建物	中世前期	南北	AA15	東西3間以上×南北2間　真北
SB33	掘立柱建物	中世前期	南北	AB・AC15	東西3間×南北2間　N3°Ｅ　伊賀市報告SB2と同一
SB34	掘立柱建物	中世前期	南北	AB・AC16	東西2間×南北2間　N7°Ｅ　伊賀市報告SB3と同一
SB35	掘立柱建物	中世前期	南北	AA・AC　18・19	東西2間×南北2間　N6°Ｅ　伊賀市報告SB1と同一

第36表　西明寺三反田遺跡遺構一覧表

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	15-1	土師器	皿A	H29	包含層	25.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	橙5YR6/6	3/12	
2	4-10	土師器	甕	AH3	包含層	19	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/3	1/12	外面に煤付着
3	4-8	灰釉陶器	台付皿	AB18	SK25	12.2	外;ロクロナデ(施釉)→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y8/1 (釉)灰白7.5Y8/1	3/12	
4	5-5	土師器	甕	AB18	SK25	12.9	外;ハケメ→ケズリ→ヨコナデ 内;ハケメ→工具ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	8/12	
5	4-9	土師器	台付皿	A3	SX28	17	外;ロクロナデ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	3/12	
6	4-1	土師器	皿	AF3	SX28	8.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	京都系
7	4-2	土師器	皿	AF3	SX28	9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR7/4	3/12	京都系
8	4-4	土師器	皿	AF3	SX28No.7	8.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	淡橙5YR8/4	9/12	京都系　内面に 炭化物付着
9	7-4	土師器	皿(小)	AF3	SX28No.1	9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	ほぼ 完存	京都系
10	7-5	土師器	皿(小)	AF3	SX28No.2	9.4 ～9.6	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	完存	京都系
11	7-7	土師器	皿(小)	AF3	SX28No.6	8.8 ～8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/3	完存	京都系
12	8-2	土師器	皿	AF3	SX28No.3	15	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	完存	京都系もどき
13	7-6	土師器	皿(小)	AF3	SX28No.4	8.7 ～8.8	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/2	完存	京都系もどき
14	8-4	土師器	皿(小)	AF3	SX28	9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	5/12	在地
15	8-5	土師器	皿(小)	AF3	SX28	8.8	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/2	5/12	在地
16	4-3	土師器	皿	AF3	SX28	9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR6/4	4/12	内面に炭化物付着
17	4-5	土師器	皿	AF3	SX28	8.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/4	4/12	外面に炭化物付着
18	4-6	土師器	皿	AF3	SX28	9.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	4/12	口縁に歪みあり　油煙
19	6-3	瓦器	皿	AF3	SX28	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	内面に暗文
20	6-1	瓦器	皿	AF3	SX28	9.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	浅黄橙10YR8/4	4/12	内面に暗文
21	6-2	瓦器	皿	AF3	SX28	10.1	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N5/0	3/12	内面に暗文
22	6-4	瓦器	椀	AF3	SX28	(高台) 4.4	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ミガキ	密	淡黄2.5Y8/3	高台 完存	内面に暗文
23	8-1	瓦器	椀	AF3	SX28	15	外;オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	4/12	
24	8-3	瓦器？	椀	AG3	SX28	15.2 ～15.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ハケメ？→ヨコナデ	密	灰N4/0	11/12	
25	8-7	青磁	椀	AF3	SX28	13	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N7/0(釉)灰白7.5Y7/2	1/12	大宰府Ⅱ類の一種か？
26	8-6	青磁	椀	AF3	SX28	16	外;ロクロナデ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白N8/0	1/12	大宰府Ⅷ類
27	8-8	白磁	椀	AF3	SX28No.5	11.6	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0(釉)灰白2.5GY8/1	1/12	大宰府Ⅶ類か？
28	5-4	瓦器	皿	AF3	SK26	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰N4/0	3/12	内面底部に暗文
29	5-6	瓦器	椀	AH3	SK26	16	外;オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	2/12	
30	5-3	瓦器	椀	AH3	SK26	15.6	外;ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰黄褐10YR6/2	3/12	外内面に煤付着
31	6-5	瓦器	椀	AH3	SK26	14.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ 内;ヨコナデ→ミガキ	密	灰白N4/0	6/12	
32	5-7	瓦器(高台)	椀	AH3	SK26	(高台) 6.4	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	密	灰N4/0	9/12	
33	6-6	瓦器(高台)	椀	AH3	SK26	(高台) 6.4	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ	密	灰白N4/0	高台 完存	
34	13-1	土師器	皿	AE2	pit1	9	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ	密	灰白10YR8/2	8/12	京都系
35	13-5	土師器	皿	AE2	pit1	8.7	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙2.5YR6/4	5/12	京都系12C代 内面に煤付着
36	7-2	土師器	皿(小)	AE2	pit1	8.9	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	京都系

第37表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
37	7-3	土師器	皿(小)	AE2	pit1	8.7 ～8.9	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	完存	京都系
38	7-8	土師器	皿(小)	AG3	pit1	8.7 ～8.9	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙2.5YR6/4	完存	在地
39	13-2	土師器	皿	AE2	pit1	9.05	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR7/3	3/12	
40	13-3	土師器	皿	AB21	pit3	8.15	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/4	完存	
41	13-7	土師器	皿	AG3	pit1	8.6	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白2.5Y8/2	9/12	
42	14-2	瓦器	椀	AG3	pit1	15.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ→ミガキ→貼付高台 内:ヨコナデ→ミガキ	やや粗	暗灰N31	11/12	内面底部に暗文
43	14-1	瓦器	皿	AG3	pit1	8.8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N5/	5/12	内面底部に暗文
44	7-1	瓦器	椀	AE3	pit2	15.5	外;オサエ→ケズリ→ヨコナデ→貼付高台 内;ヨコナデ→ミガキ	密	暗灰N3/0	3/12	
45	14-3	瓦器	椀	AG3	pit1	14.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ→ミガキ	やや密	灰N4/	11/12	
46	14-5	白磁	椀	AG3	pit1	16.6	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白7.5Y8/1 (釉)灰白7.5Y8/2	1/12	大宰府Ⅳ類
47	14-6	青磁	椀	AB16	pit3	13.2	外;ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	灰白7.5Y7/1 (釉)灰オリーブ7.5Y6/2	1/12	上田分類B-Ⅳ 龍泉窯系　15末～16初
48	3-1	土師器	鍋	AB33	SD1	31.4	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	1/12	南伊勢4ーd型式
49	3-2	瓦質陶器	茶釜？	AB33	SD1	—	外;ナデ→ケズリ→貼付突帯ナデ 内;工具ナデ→オサエ	密	黒N2/0	4/12	
50	12-5	土師器	鍋	AA・ AB33	SK2	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR7/4	1/12	南伊勢4ーe　外面に煤付着
51	12-6	陶器	甕	AA・ AB33	SK2	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ	粗	赤橙10R6/6	1/12	信楽
52	10-4	土製品	土符	AA・ AB33	SK2	幅4.4	外;ナデ 内;ナデ	やや粗	にぶい橙5YR7/4	—	
53	12-4	土師器	小皿	N29	SD18	10	外;ナデ・オサエ 内;ナデ	やや密	淡橙5YR8/4	4/12	
54	12-3	土師器	小皿	AB14	SD24	10	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白7.5YR8/2	5/12	
55	9-3	灰釉陶器	鉢	AB14	SD24	—	外;ナデ→ロクロケズリ→貼付高台ナデ 内;ロクロナデ	やや密	灰白5Y7/1	底部 完存	
56	1-1	土師器	小皿	AA31	SD3	10.4	外;オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	4/12	在地産
57	1-2	土師器	小皿	AA31	SD3	10.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい黄橙10YR7/3	4/12	在地産
58	1-6	土師器	小皿	AA31	SD3	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	8/12	在地産
59	1-7	土師器	灯明皿	AA31	SD3	8	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙5YR7/4	11/12	在地産
60	1-8	土師器	小皿	AA31	SD3	7.6	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/3	5/12	在地産
61	1-5	土師器	小皿	AA32	SD3	7.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白7.5YR8/2	4/12	在地産
62	1-4	土師器	小皿	AA31	SD3	9.4	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	3/12	在地産
63	1-3	土師器	小皿	AA31	SD3	9.3	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	5/12	在地産
64	1-10	陶器	皿	AA31	SD3	14.4	外;ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	灰白5Y7/1	1/12	志野
65	3-5	青磁	盤	AA32	SD3	(高台) 12	外;ロクロケズリ→ロクロナデ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白N8/0 (釉)明オリーブ灰 5GY7/1	1/12	盤
66	2-5	陶器	壺	AA32	SD3	(底) 14.8	外;回転ナデ→板ナデ 内;ナデ	密	赤褐10R5/3・4/3	3/12	信楽
67	1-9	陶器	天目茶碗	AA31	SD3	(高台) 5.3	外;ロクロナデ(施釉)→ロクロケズリ 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白2.5Y8/1 (釉)黒褐7.5YR3/1	11/12	
68	2-3	陶器	甕	AA32	SD3	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ	密	赤橙10R6/6	小片	信楽
69	2-4	陶器	甕	AA32	SD3	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ	密	灰白2.5Y8/2	小片	信楽
70	2-1	陶器	擂鉢	AA31	SD3	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ→ヘラ描	密	灰白10YR8/1・7/1	小片	信楽
71	2-2	陶器	擂鉢	AA32	SD3	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ→くし描	密	にぶい橙5YR6/4	小片	信楽
72	3-3	瓦質土器	擂鉢	AA30	SD3	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ→クシ描	密	灰N4/0	小片	大和

第38表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（2）

番号	実測番号	様・質	器種など	グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
73	3-4	瓦質土器	擂鉢	AA30	SD3	—	外;ナデ 内;ナデ→クシ描	密	灰N4/0	小片	大和
74	16-1	鉄製品	鉄鏃	AA31	SD3	—	—	—	—	小片	
75	11-1	陶器	擂鉢	AF29	SD8	30	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙10YR8/3	1/12	信楽
76	9-2	瓦質土器	風炉	AF	SD8	—	外;ナデ・ 内;ナデ	やや密	淡橙5YR8/4	1/12	外面にスタンプ文
77	5-1	瓦質土器	羽釜	AI29	SK9	25	外;ナデ→ヨコナデ→把手貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N5/	1/12	
78	11-2	瓦質土器	鍋	X29	SD11	31	外;工具ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	灰N6/	4/12	
79	10-3	陶器	擂鉢	X29	SD11	—	外;回転ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ	粗	浅黄橙10YR8/3	—	信楽
80	10-2	陶器	擂鉢	X29	SD11	—	外;回転ナデ 内;回転ナデ→クシガキ	粗	にぶい橙2.5YR6/4	—	信楽
81	10-5	瓦	軒丸瓦	X29	SD11	11	外;ナデ 内;ナデ	やや密	灰N4/	—	
82	12-1	瓦質	鍋	V・W29	SD12	28.6	外;ハケメ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	褐灰10YR4/1	1/12	
83	10-1	陶器	擂鉢	V・W29	SD12	(底) 15	外;回転ナデ? 内;ナデ→クシガキ	粗	浅黄橙7.5YR8/3	2/12	信楽　外面に煤付着
84	11-3	陶器	甕	AB20	SD21	44	外;回転ナデ→ヨコナデ 内;回転ナデ→ヨコナデ	粗	橙2.5YR6/6	わずか	信楽
85	12-2	青磁	椀	AB15	SD23	5	外;ロクロナデ(施釉)→削り出し高台 内;ロクロナデ(施釉)	密	(素地)灰白5Y8/1 (釉)にぶい黄2.5Y8/1	3/12	龍泉系　大宰府Ⅰ類
86	9-1	土師器	羽釜	AB15	SD23	31	外;ナデ→ハケメ→ヨコナデ→貼付けナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	灰白10YR8/2	1/12	伊賀で初の中北勢系羽釜 16C初
87	13-4	土師器	皿	Z29	pit4	9.5	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	完存	
88	13-6	土師器	皿	H29	pit1	8.2	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	浅黄橙7.5YR8/4	6/12	
89	13-8	土師器	皿	H29	pit1	8.7	外;ナデ・オサエ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	にぶい橙7.5YR6/4	5/12	
90	5-2	瓦質土器	羽釜	AH29	包含層	25	外;ナデ→ヨコナデ→把手貼付ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰N7/	1/12	
91	15-2	土師器	鍋	AE29	包含層	34.7	外;ヨコナデ 内;ヨコナデ	やや密	にぶい黄橙10YR6/4	2/12	南伊勢4ーb　外面に煤付着
92	14-4	陶器	椀	AB21	包含層	11.9	外;ロクロナデ→ロクロケズリ(施釉) 内;ロクロナデ(施釉)	やや密	(素地)灰白7.5Y7/1 (釉)灰白7.5Y7/2	3/12	志野
93	15-3	陶器	擂鉢	H29	包含層	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	やや密	明褐灰5YR7/2	2/12	信楽
94	14-7	陶器	甕	AE29	包含層	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや粗	灰白2.5Y8/2	小片	信楽
95	39-1	須恵器	杯蓋	試 No.45	—	—	外;ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付ナデ 内;ロクロナデ	密	灰白5Y7/1	口縁部 欠損	
96	39-2	須恵器	皿	試 No.53	溝	19.1	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白5Y7/1	2/12	
97	39-4	須恵器	杯身	試 No.60	包含層	—	外;ロクロナデ 内;ロクロナデ	密	橙5YR7/6	口縁部 欠損	
98	39-7	土師器	小皿	試 No.61	包含層	8.2	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰白10YR8/2	4/12	京都系模倣
99	39-6	土師器	小皿	試 No.61	包含層	7.6 ～8.4	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	灰黄2.5Y7/2	完存	在地
100	39-3	土師器	皿	試 No.58	包含層	8.5	外;オサエ・ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	やや密	橙5YR6/6	3/12	京都系15C代か?へそ皿
101	40-5	土師器	小皿	試 No.72	土坑1	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙10YR8/3	8/12	在地
102	39-8	土師器	小皿	試 No.61	包含層	8.4	外;ナデ→ヨコナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	にぶい橙7.5YR6/4	4/12	京都系搬入か?
103	40-1	黒色土器A	椀	試 No.71	土坑1	14.9	外;ナデ→ヨコナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ヨコナデ	密	浅黄橙7.5YR8/4	7/12	A類　内面黒色
104	40-2	黒色土器A	椀	試 No.71	包含層	(高台) 7.1	外;ナデ→貼付高台ナデ 内;ナデ→ミガキ?	密	にぶい黄橙10YR7/3	8/12	A類
105	40-3	陶器	甕	試 No.70	包含層	—	外;ナデ→ヨコナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙10YR8/3	1/12	信楽　径不明
106	39-5	瓦質土器	羽釜	試 No.60	包含層	24.2	外;ヨコナデ→貼付ナデ 内;工具ナデ→ヨコナデ	やや密	浅黄橙7.5YR8/4	1/12	
107	40-4	瓦	軒丸瓦	試 No.64	包含層	—	外;ナデ 内;布目痕	密	にぶい橙5YR6/4	破片	珠文6ヶ確認

第39表　西明寺三反田遺跡遺物観察表（3）

Ⅺ　まとめ

１　荒木地区の検討

ａ　時期別の遺跡動向

古墳時代　荒木の北地区では流路が確認され、古墳時代の土器が出土している。出土した土器は、古墳時代後期初頭頃であると考えられる。しかし、周辺では、集落跡等は確認されておらず、周辺に荒木車塚古墳や、横穴式石室をもつ古墳群が多数展開しているにも関わらず、これらに葬られた勢力の拠点ともいうべき、集落域は不明である。これらの土器の出土は、周辺に未発見の集落の存在を想起させるものといえる。

古代　奈良時代のものとしては、宮ノ前遺跡の３地区の竪穴住居跡がある。また、服部氏館跡の２地区では、明確な遺構こそ確認されていないものの、当該期の土師器が出土していて、中に「大衆」と書かれた墨書土器が2片確認している。「大衆」とは、多くの僧侶という意であり、遺跡の南、西明寺の地には伊賀国分寺・尼寺が建立されていることから、国分寺関連の施設が付近に存在していた可能性も考えられる。

また、寺前遺跡では、竪穴住居跡が１棟確認されており、９～10世紀頃の土坑も確認されていることを付記しておく。

中世前期　今回の調査では宮ノ前遺跡と荒木氏館中地区の南部、南地区で掘立柱建物を確認している。13世紀頃を中心とした時期の集落跡である。荒木周辺には条里型の土地割が残存しており、方向はＮ４°Ｅである。今回確認された掘立柱建物の方向は、Ｎ２～４°Ｅ前後であり、条里方向と概ね一致し、荒木氏の堀などとも一致する。

中世後期　宮ノ前遺跡では中世後期の遺構が確認されている。また、荒木氏館の築造、水路SD１が掘削されるのもこの段階である。なお、中世の荒木地区については後に各項目に分けて検討する。

近世　近世の遺構は宮ノ前遺跡のＳＤ321から、18世紀前半頃の陶器・土師器類が出土しているが、住居跡は確認されていない。また、荒木氏館の堀の埋土からは18世紀代の陶器類が出土しており、この段階で堀は埋没したものとみられる。

ｂ　荒木周辺の中世前期集落の動向

宮ノ前遺跡１地区・荒木氏館の中・南地区では中世の集落跡を確認している。宮ノ前遺跡１地区では、東側を中心に区画溝で仕切られた居住域と考えられる空間が確認されている。区画溝で仕切られた空間は、規模こそまちまちであるが、仕切られた空間内にそれぞれ井戸が確認されている。井戸はいずれも石組の井戸である。建物跡は調査区中央部で確認されたが、東側では遺構密度は薄く、溝・井戸が中心で空白の部分が多い。方格地割は認められない。

居住域と耕作地の関係については、調査区の大きさが限定されているため不明である。しかし、宮ノ前遺跡１地区、荒木氏館南地区ではＳＢ23周辺で非常に浅い小溝を確認しており、耕作溝と考えられる。これが、耕作溝であれば、屋敷地内で耕作を行っていたとも考えられる。

Ｃ　方形区画の溝（ＳＤ１）について

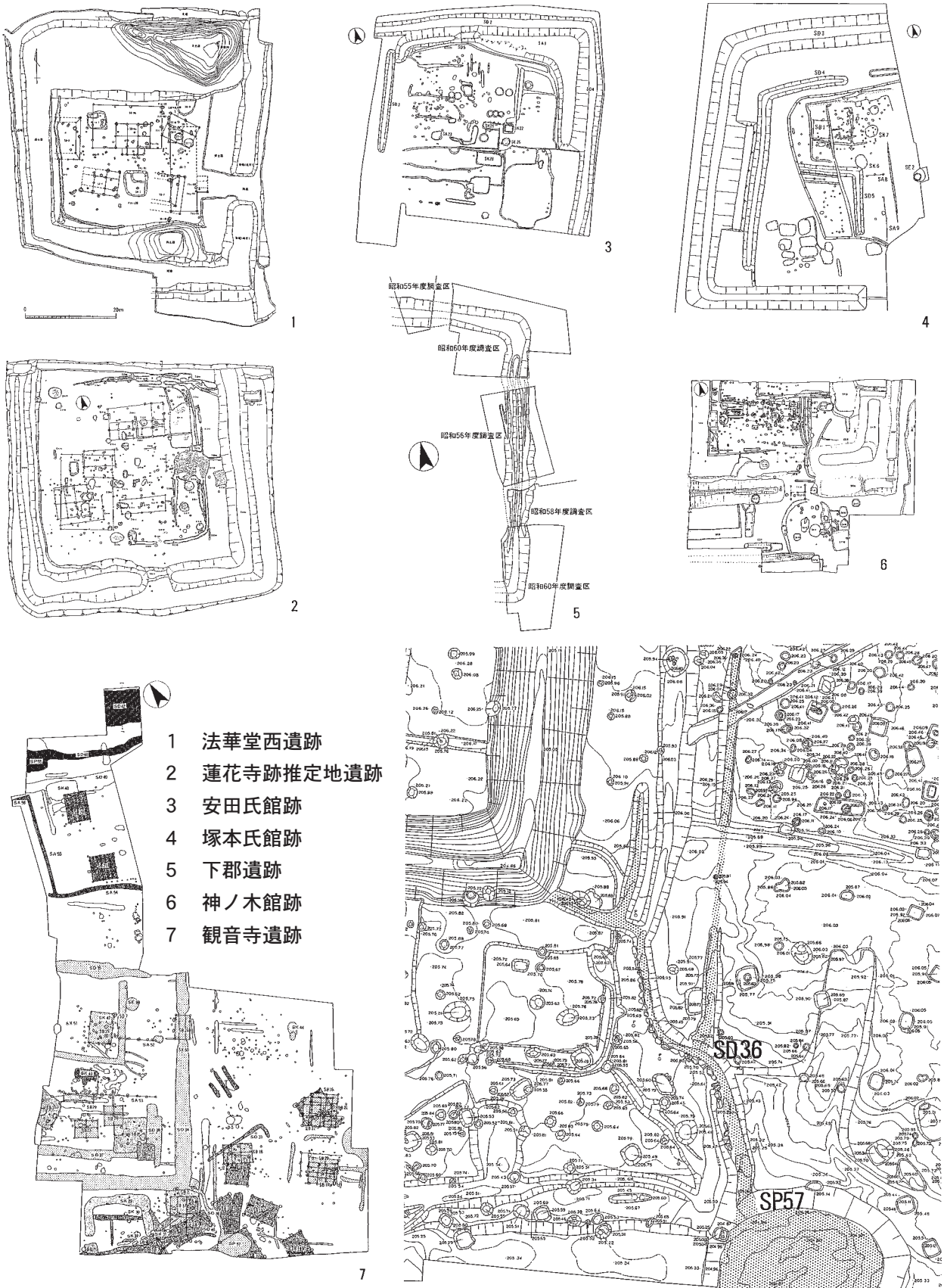
荒木氏館跡の北地区からは方形の区画をもった溝を検出し、流水状況をしめす砂や礫の堆積がみられることなどから堀ではなく「水路」と想定した。

このような人工水路が確認された例としては、大阪の日置荘遺跡[(1)]のほか、地籍図の検討から想定されている高田土居などがある[(2)]が、あまり類例としては多くない。このような溝による区画は決して城下集落特有のものではなく、中世後期の集落内は溝によっていくつもの方形区画がより集まって構成され、寺も村落も溝で区画していたと指摘されている。

また、注意すべき点として、この水路と灌漑用水の問題がある。荒木の地は古代の段階からいち早く水田が開かれたとされ、水利権についても、服部川の荒木井堰（一ノ井）がこの周辺で優先的な権利を有していたとされる[(3)]。この堰は上荒木の集落の北に所在しているが、北地区で確認された水路に関してもこの荒木井堰から引いた用水を取水している痕跡は認められなかった。従って、城館と用水との直接的な関係は現状では確認出来ていない。

ｄ　中世城館の堀と用水支配

中地区では荒木氏館の東側の堀を確認した。堀の底には粘土層が堆積しており、常時滞水し、水堀の



観音寺遺跡の貯水土坑（ＳＰ57）と
堀から流れこむ溝（ＳＤ36）

第112図　伊賀の中世城館と観音寺遺跡の溝ＳＤ36と貯水土坑ＳＰ57

機能を果たしていたとみられる。居館の堀については、従来、灌漑用水として機能したと考えられて[4]おり、地域の用水支配と連動して領主支配の拠点たりえた要因と考えられている。

しかし、今回調査を行った荒木氏館の東堀についてみれば、灌漑用水として利用したことを示すような遺構は確認できず、堀と連結する溝などは一切確認できなかった。

図112は伊賀地域で調査された、平地に立地する中世城館である。名張市観音寺遺跡[5]では、堀から伸びる溝が貯水土坑（SP57）に接続していることが確認され、堀の水の利用は認められる。しかし、灌漑用水として利用していた可能性を示すような遺構が確認されているものは皆無に等しい。過去の報告で、用水と関連が指摘されているものとして、蓮花寺跡推定地[6]などが挙げられるが、それを明確に示す遺構は実のところ確認されておらず、あくまで現在みられる用水から想定がなされているに過ぎない場合が多い。以上のことから、土豪層が用水支配を行っていた可能性そのものは高いが、自らの城館の堀を用いて用水管理を行ったとはいい難く、考古学的な手法からはそれを裏付ける根拠は難しい。今後、ＳＤ１のような人工的な水路がどのように掘削されていったのかを探ることで、その実体に迫ることも可能になろう。

ｅ　荒木氏館について

今回の調査では、荒木氏館の東堀のみの調査であるため、城館内部の遺構については不明である。しかし、東堀の調査の結果、館の範囲は、現在よりも広く、最大時で南北80m程の規模であることが判明し、堀の南東隅部分に関しては、土層断面の観察より、再三にわたりの改修が行われていることが判明した。また、土層断面の観察より、堀は一度、人為的に埋められたが、後に再掘削されており、近世段階頃には堀の規模が縮小したことも判明した。

これらの改修の詳細な時期は、城館の東堀部分しか調査を行っていない現状では不明といわざるを得ないが、最下層の出土遺物から、堀の掘削時期は14世紀代にさかのぼる可能性もある。

ｆ　荒木近隣の景観復元～交通路との関連～

荒木地区の北側、宮ノ前遺跡と荒木氏館との間には、近世の伊賀街道[7]が通る（第113図）。現在、上荒木には須智荒木神社や宮ノ前館跡があり、伊賀街道に沿って存在する。しかし、「伊賀国阿拝郡各村絵図部分」によれば、上荒木の集落から南に分かれる道が標されており、菩提寺の西側を通り、集落沿いを通るが、この集落は現在の下荒木の集落を示していると考えられる。荒木氏館跡の北には細い道が通り、館の南側にも残る。このいずれかを通って西に向かう道が中世の伊賀街道と考えられ、西明寺へと続くと推定される。

また、第113図に示したように、旧小字や地割から、河道跡が幾重にも確認でき、川が南から北へ移動していったと考えられる。

ｇ　寺社や村のシンボル的なものの存在

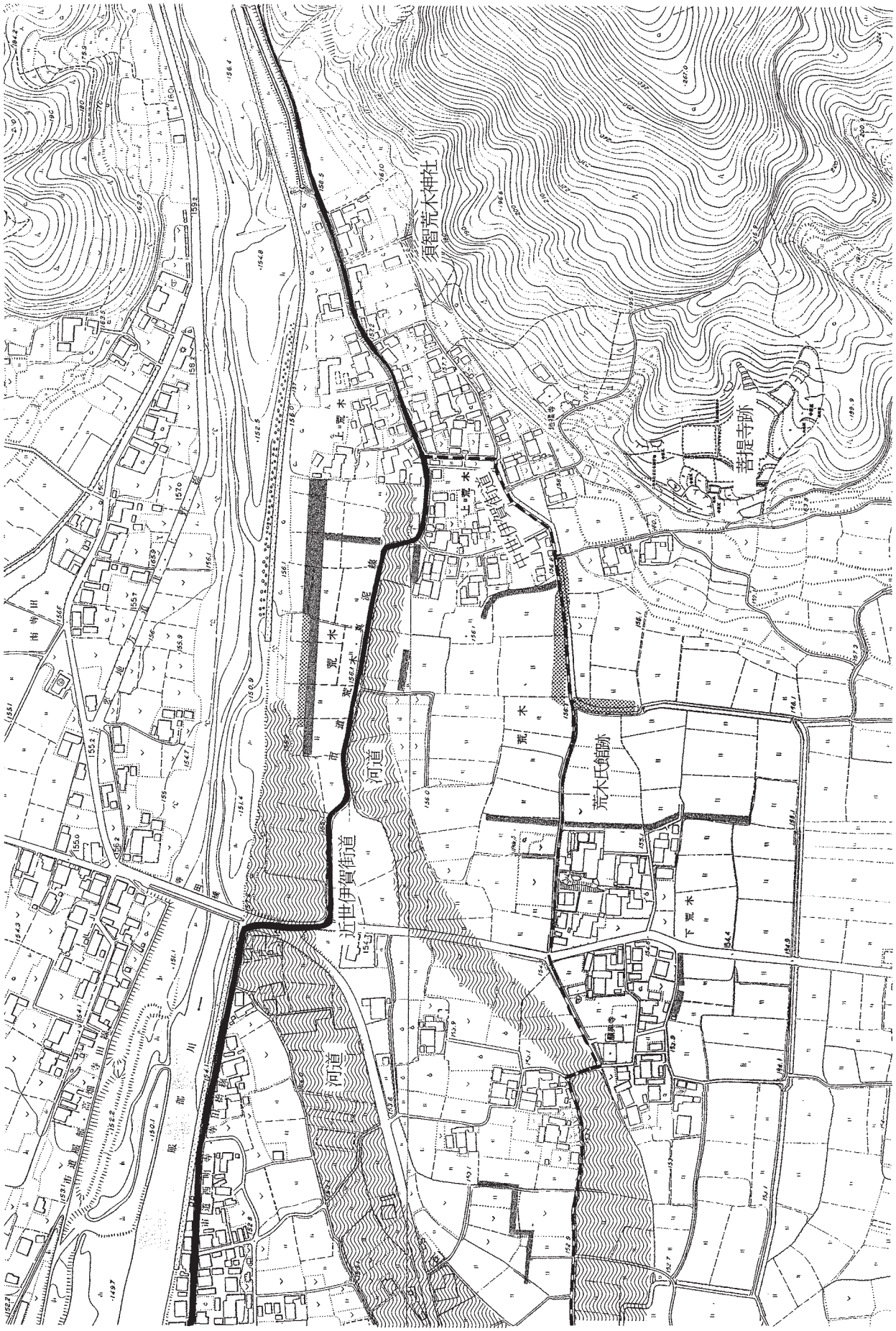
中世におけるこの地域を考えるうえで重要な事項としては菩提寺の存在がある。菩提寺については竹田憲治氏による検討[8]があるが、都から貴人が逗留し、地元の領主による「儲」が行われているような大寺院であったことが指摘されている。また、天正伊賀の乱の際にも、伊賀の残党勢力が荒木の地に集結したとあり、攻撃の拠点となったと考えられる。領主達が結集した背景にはやはり、菩提寺・須智荒木神社の存在があったのではなかろうか。そして、竹田氏も指摘するように、これらの勢力が征討される際には、シンボリックな存在であった菩提寺が焼かれたと考えられる。（豊田）

２　西明寺地区

有井遺跡は、西地区西側（用水路以西）で古代末、西地区東端（用水路以東）で中世前期、東地区で古代（奈良時代）に属する遺構が確認できた。また、西明寺三反田遺跡では、中世前期から近世にかけての遺構が確認された。ここでは、遺構・遺物に関するまとめと、調査に関する若干の問題点を記して終わりとしたい。

ａ　有井遺跡の古代集落について

有井遺跡の古代遺構は、東地区の東北側から南西側へ向かって存在する旧河道ＳＲ14の東側で確認されたが、これ以外のエリアでは断片的な古代遺物の出土はあったものの、遺構としては確認できなかった。



第113図　荒木周辺の景観復元図（１：5,000）

確認された遺構は、やや疑問の残るものも含めて掘立柱建物３棟と土坑がある。さらに、調査区が狭いためまとまらなかったが柱穴と思われるピットは他にもあり、掘立柱建物は本来もう少し存在したと思われる。しかし、確認できた掘立柱建物はいずれも建物規模・柱掘形ともに小さく、他のピットも大型建物を推測させる掘形をもつものは皆無であった。こうしたことから、有井遺跡における古代集落は限定された範囲に営まれた小規模な集落であったと想定される。

有井遺跡からは、円面硯や墨書土器など上位集落・屋敷を明確に示すような遺物は出土していない。しかし、遺跡の性格に関連する遺物として、包含層出土ではあるが暗文をもつ高杯(252)がある。この土器は、極めて精選した胎土を用い、脚部を面取りするなど伊賀国府などから出土する精製土師器類と共通する製作技術をもって作られたものである。このことから、有井遺跡周辺に律令的支配機構の末端に位置する人物が存在した可能性が示唆される。

これに関連して、伊賀の一般集落においては、住居形式が竪穴住居から掘立柱建物に移行する時期は９世紀頃を境にすると指摘されている。このことからみれば、規模は小さいとはいえ、倉庫ではない住居形式の側柱建物の掘立柱建物化を実現している有井遺跡は伊賀の古代集落を考えるうえで重要な問題を内包している。

有井遺跡の位置は、伊賀国府の置かれた伊賀市坂ノ下と、伊賀国分寺が置かれた伊賀市西明寺を結ぶ線上に位置しており、いわば古代伊賀の中枢部を担う穀倉地帯に存在することになる。伊賀国分僧寺の寺域西面に沿って（Ｎ４°30′Ｅ）そのまま北上すれば、伊賀国府政庁に至るという指摘[(9)]もあり、この場合、現在の中瀬小学校西側から府中小学校東側を結ぶ県道がまさにこの線上に位置する。有井遺跡はこの線上のすぐ西側に位置し、直接この線上に相当するわけではないが（東側に位置する西明寺三反田遺跡東方の一段高い部分がまさに線上に位置し、いずれかに古代道路の存在が想定される）、集落形成において何らかの影響が存在したと推定される。

今後、推定される古代道路の復元ラインにも注視し、当該地域の古代遺構の評価を図っていく必要があると認識している。

ｂ　古代末集落について

有井遺跡における古代末の集落は、黒色土器Ｂ類や暗文土師器類の出土が目立つ西地区の用水路以西に認められた。ここでは、掘立柱建物１棟のほか、土坑や溝が確認された。これらは、先にみた奈良期の集落と同様、遺構密度が非常に散在的で、建物規模も小規模なものであった。

しかしながら、ここでは、この地区で確認された掘立柱建物（ＳＢ34）の建物方位や、調査区最西部で確認された溝、ＳＤ１の主軸がＮ４°30′であったこに注目したい。この方位は、前述の伊賀国分僧寺と伊賀国府を結ぶ方位（伊賀国分寺や推定古代道路の主軸とも一致）とほぼ同方位である。このことは、本地域においては、伊賀国分寺・伊賀国府・両者を結ぶ南北道路にあわせて土地利用の基本方位が存在した可能性を示すものとして注目したい。

Ｃ　中世集落について

有井遺跡では、量的な多寡を問わなければ瓦器を中心とした中世遺物がほぼ全域から出土するが、遺構として確認できるのは西地区の東端部である。以下、いくつかの項目に分けて、有井遺跡集成集落のまとめを行う。

遺構範囲

西地区用水路以東における中世遺構は、当該地区東半に集中し、最も集中する部分は調査区東南部である。このなかでも、特に掘立柱建物や土坑が集中する部分は平行する東西溝、ＳＤ23・24の南側にあり、この東側及び南側はさらに調査区外へと続く。つまり、当該期の遺構は、区画機能をもつＳＤ23・24によって北側を画され、東および南側に広がっていたと思われる。なお、ＳＤ23・24は、未調査区部分を挟んだ推定延長部分では未確認のため、途中で終わるか、南側へ屈折ないしは屈曲している可能性が考えられる。

建物の構造や検出状態

集落の全体構造は不明ながら、溝によって区画ないし囲繞された集落である。掘立柱建物は、調査区上の制約によって全体像を示しえないが、調査範囲で重複して存在する４棟の可能性を提示した。このうちのＳＢ35は、柱間間隔が広い建物で、かなり大

規模なものであったと考えられる。

本地区では、相当量の遺物が掘立柱建物の掘形から出土している。特に、ＳＢ31からは、第93図に示したように、実測遺物だけでも44点にのぼる遺物が存在する。こうした「柱穴」からの出土遺物の多さをもって、「ＳＢ31」の掘立柱建物遺構としては成り立たないとする考えもできる。しかし、ＳＢ31は、柱痕跡を確認できる柱穴も多く、しかも炭化した柱痕跡から火災を受けた可能性すら存在することから、柱穴としての安定性は問題ないと思われる。従って、柱穴に含まれている遺物は多いものの、それをもって掘立柱建物を否定するほどの根拠にはならないものと考えてよかろう。

同様の視点で他遺跡の資料をみた場合、例えば伊賀市高賀遺跡の掘立柱建物でも柱穴から完形の瓦器碗を含む相当量の遺物が出土している例がある。柱穴へのこれら遺物の包含が、地鎮など何らかの意図的な目的によってなされた遺物も含まれると考えるのか、あるいは掘立柱建物建設時の地表面に存在した遺物がたまたま混入したとみるのかは評価の分かれる部分であるが、ここでは掘立柱建物柱穴には多くの遺物が含まれる例があることを確認するにとどめておこう。（穂積）

建物の方位

中世前期の掘立柱建物は、４棟確認されている。これらの建物はいずれも、Ｎ10～13°Ｅの方向であり、遺跡の周辺に展開する条里方向とは異なっており、荒木地区や、西明寺三反田遺跡で確認された掘立柱建物とも異なる方向である。この地区については、中世段階に、土地区画の変更が行われたとみられる。

居住域と耕作地の関係

西地区では、区画溝にしきられた居住域とみられる空間がある。その一方で、鋤溝と考えられる小溝が確認されるものの、遺構密度の薄い空白地帯が存在する。この地帯を耕作地と考えることもできよう。西明寺三反田遺跡については、区画溝で仕切られた居住域とみられる空間がある。耕作溝は確認されず、明確に耕作地といえるような箇所は確認されていない。

出土遺物の組成と特徴

中世前期の土器については、当該時期の土器のみが集中的に出土した有井遺跡西地区の南端部（ＳＢ31～33周辺）・西明寺三反田遺跡の東端部（ＳＸ28周辺部）の２つのゾーンを対象として、土器のカウントを行い[10]、表にした。（第40・41表）

有井遺跡では、瓦器が63％、土師器小皿32％と多くを占めるが、なかには少量の磁器や陶器、土師器類が含まれる。土師器類のうち、羽釜は大和型で、土師器皿は在地系を中心とするものの、京都系を模倣した皿や、ごく少量ではあるが京都系の皿も認められる。また、ＳＫ28からは瓦質のミニチュア羽釜の出土がある。陶器類では、知多・猿投系の練鉢(184)の他、東播系擂鉢(38)が認められる。量は少ないとはいえ、東西の有力産地の製品が流入している状態は、当地域における信楽焼出現前の陶器流通のあり方を知る上で興味深い。

西明寺三反田遺跡についても、土師器小皿と瓦器で多くを占め、ごく少量の陶器・磁器類が確認できる。土師器類のうち、羽釜は大和型で、土師器皿は在地系を中心とするものの、京都系を模倣した皿もある。擂鉢は大和型のものが若干含まれ、山茶椀もわずかに含まれている。（穂積・豊田）

ｄ　中世後期から近世の集落について

西明寺三反田遺跡では、中世～近世にかけての集落跡が確認された。以下、各事項について触れる。

建物と検出状態

掘立柱建物については、南北トレンチのＳＢ32～34で確認されたのみであるが、東西トレンチ全般では多数のピットを確認しており、数棟区画施設につ

質類	器種	採用部位	カウント点数	個体換算数	比率（%） 個別	比率（%） 質類別
土師器	鍋	口縁	3.5	0.3	0.16%	35.60%
	羽釜	口縁	3	0.3	0.14%	
	皿	口縁	52	4.3	2.40%	
	小皿	口縁	696	58.0	32.14%	
	その他	口縁	2	0.2	0.09%	
	その他	底部	14.5	1.2	0.67%	
瓦器	椀	口縁	713	59.4	32.93%	63.93%
	椀	底部	447	37.3	20.64%	
	皿	口縁	224.5	18.7	10.37%	
陶器	山茶椀	口縁	2	0.2	0.09%	0.09%
磁器	青磁・椀	口縁	8	0.7	0.37%	0.37%
	白磁・椀	口縁	0	0.0	0.00%	
計			2165.5	180.5	1.000	100.0%

第40表　有井遺跡土器組成表

質類	器種	採用部位	カウント点数	固体換算数	比率（%）	
					個別	質類別
土師器	鍋	口縁	6	0.5	0.8%	55.5%
	羽釜	口縁	1	0.1	0.1%	
	皿	口縁	38.5	3.2	5.4%	
	小皿	口縁	346.5	28.9	49.0%	
瓦器	椀	口縁	138.5	11.5	19.6%	43.7%
	椀	底部	110.5	9.2	15.6%	
	皿	口縁	59.5	5.0	8.4%	
陶器	椀	口縁	1	0.1	0.1%	0.3%
	練鉢	口縁	1	0.1	0.1%	
磁器	青磁・椀	口縁	2	0.2	0.3%	0.6%
	白磁・椀	口縁	2	0.2	0.3%	
計			706.5	58.9	100.0%	100.0%

第41表　西明寺三反田遺跡土器組成表

いては、溝ＳＤ３・11・12・13・23・29などがそれにあたるとみられるが、トレンチ調査のため方形に巡るか否かは不明である。しかし、これらの溝とピット群が交互に確認されており、方形の溝で区画された中世後期の集落跡と捉えることができる。

井戸については石組井戸が２基確認されている。

他にも井戸と考えられる土坑は確認されており、湧水が著しいため、全掘できず明確ではないが、素掘りである場合が多い。

遺跡の性格について

西明寺三反田遺跡については南北トレンチの東隣を伊賀市が調査(11)しており、その成果を含めて検討する。伊賀市の調査区では、場所により出土遺物の時期が偏ることが指摘されているが、今回の調査でも、中世前期のみ、中世から近世まで混在する空間が存在することが確認(12)でき、伊賀市の調査成果とも一致する。

遺構は掘立柱建物と、それを区画するとみられる溝が確認されており、調査区の幅が限定されており、集落の全貌は窺い知ることはできないが、この周囲に方形のブロック状に集落が展開している可能性がある。

また、伊賀市の調査区からは、12世紀代の遺物が確認されており、集落の展開がこの段階にまで遡る可能性が指摘されているが、今回の調査ではこのような遺構・遺物は確認できておらず、今後の課題である。

遺物については、一般的な土器・陶器の擂鉢といった日用品が殆どで、青磁や白磁といったものは非常に少ない。従って、一般的階層の集落跡と考えられ、伊賀街道沿いに展開する中世集落の事例として貴重な事例といえよう。（豊田）

［註］

（1）（財）大阪文化財センター『日置荘遺跡』（1995年）

（2）小林俊之氏からご教示を得た。記して感謝致します。

（3）福永正三『秘蔵の国　伊賀路の歴史地理』（地人書房1972年）

（4）村井毅史「中世城跡と堀の発生と展開」（『花園史学』第11号　花園大学史学会1990年）

（5）仁保晋作「観音寺遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会1985年）

（6）福田典明『蓮花寺跡推定地遺跡発掘調査報告』（上野市文化財調査報告50　上野市教育委員会　1997年）

（7）三重県教育委員会『大和街道・伊勢別街道・伊賀街道－歴史の道調査報告書－』（1983年）

（8）竹田憲治「上野市荒木菩提寺跡の調査」（『伊勢の中世』第102号伊勢中世史研究会　2004年）

（9）山田猛「伊賀」（『新修国分寺の研究　第二巻　畿内と東海道』吉川弘文館1991年）

(10) 遺物器種カウントは、表の器種についてカウント部分を決め、その部位を12分割するかたちで、その残りが分母12に対して分子がいくつ残るのかを、分子の点数で表して調べることとした。

カウント部位　土師器鍋・皿・小皿・その他…口縁
土師器釜…口縁
瓦器椀…口縁と底部

なお、カウントを２つの部位で行った器種は数値の多い方を採用した。個体換算数については「カウント点数÷12」で計算し、その数値は少数第３位を四捨五入し、小数点第1位まで求めた。個別の比率は「対象となる個体換算数÷個体換算数合計」で求めて、小数第２位までを求めた。なお、表下欄の合計は、全て縦列の合計である。

(11) 福田典明『西明寺三反田遺跡（２次）発掘調査報告－三重県伊賀市西明寺所在』(伊賀市教育委員会　2006年)

(12) 今回の調査では、ＡＤ～ＡＪ２・３グリット周辺で、中世前期の遺構のみが確認され、南北トレンチでは、中世前期は微量で、中世後期から近世にかけての遺構が主体となり、濃密なピット群が確認された東西トレンチでは中世前期と後期、近世の遺物が混在しており、場所により遺構の時期に偏りがみられる。

写　真　図　版

調査前風景（東から）

調査前風景（西から）

図版 2

宮ノ前遺跡（第1次）

東側ピット群

東側ピット群

ＳＫ12

ＳＫ16

調査区全景

西部全景

1 地区西部全景

1 地区東部全景

宮ノ前遺跡

1地区井戸・石組土坑

１地区ＳＥ326

１地区ＳＥ326断面

図版８

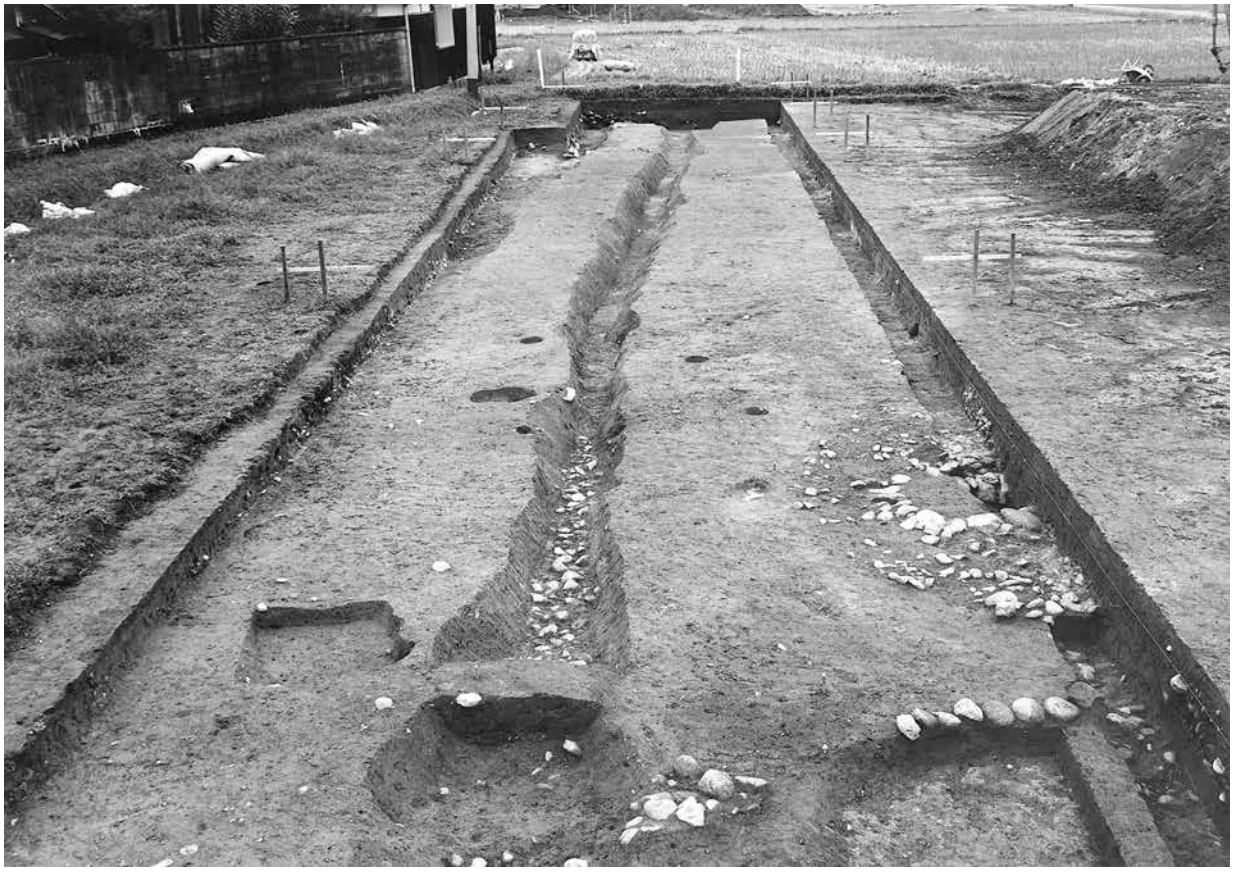
宮ノ前遺跡（第２次）

ＳＫ350

ＳＤ321

ＳＫ331

南北トレンチ



2地区全景（東から）

2地区ＳＥ502

3地区全景（東から）

3地区全景（西から）

図版12

寺前遺跡

調査前風景（西から）

調査前風景（南から）

1地区東端部（東から）

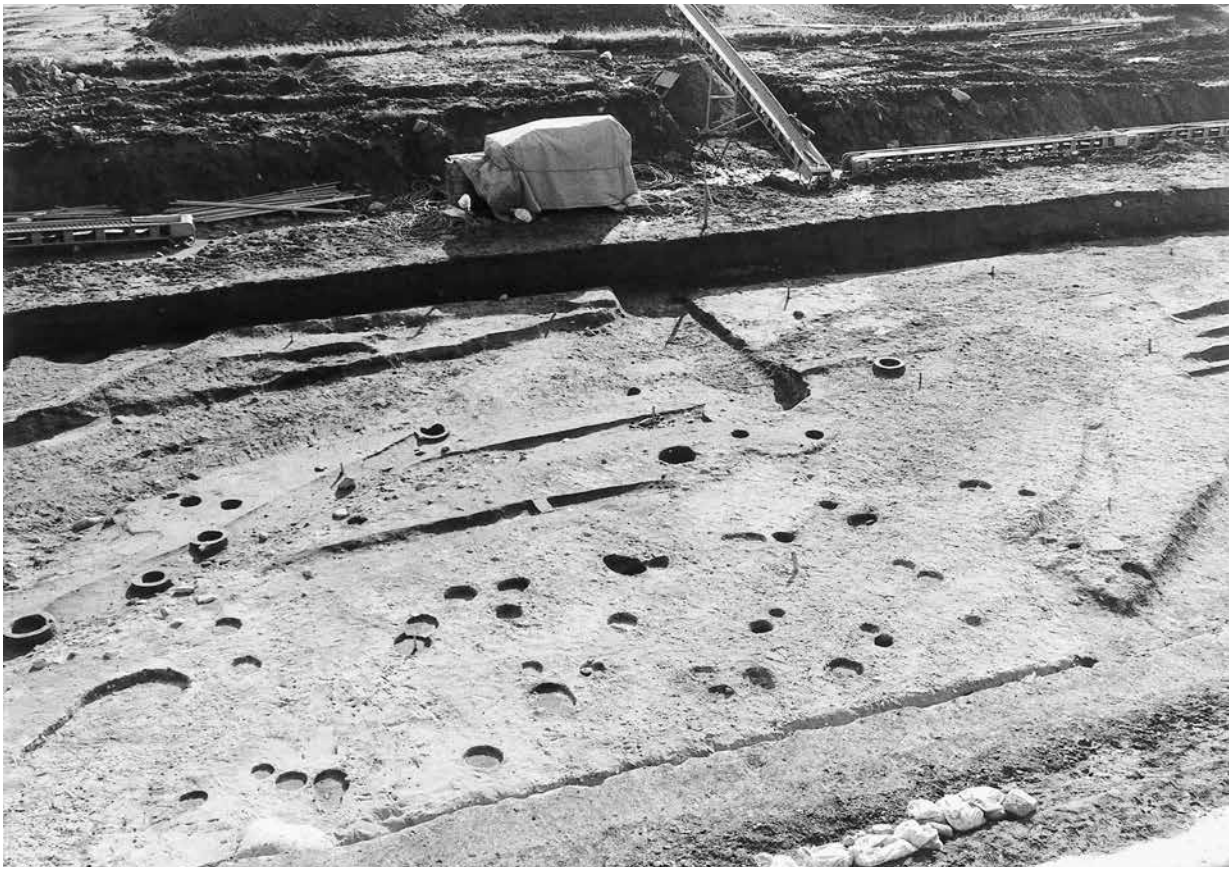
1地区全景（西から）

図版14

寺前遺跡

２地区全景（南から）

２地区南部分（北から）



1地区ピット群（西から）

2地区南部分（東から）

1地区足跡検出状況

2地区ＳＨ17

調査前風景

調査区全景

調査区全景（北から）

ＳＫ218土器出土状況

調査前風景（北から）

北地区全景（北から）

北地区溝ＳＤ１全景

北地区溝ＳＤ１断面

北地区ＳＤ１断面（東から）

北地区全景（南から）

図版22

荒木氏館跡

航空写真（上から）

中地区全景（北から）

荒木氏館跡と中地区溝ＳＤ６全景（南から）

中地区溝ＳＤ６北端断面（東から）

図版24

荒木氏館跡

ＳＤ６断面（北から）

南地区全景（南から）

1地区調査前風景（南から）

1地区西側全景

図版26

服部氏館跡

2地区西端部と中央部（東から）

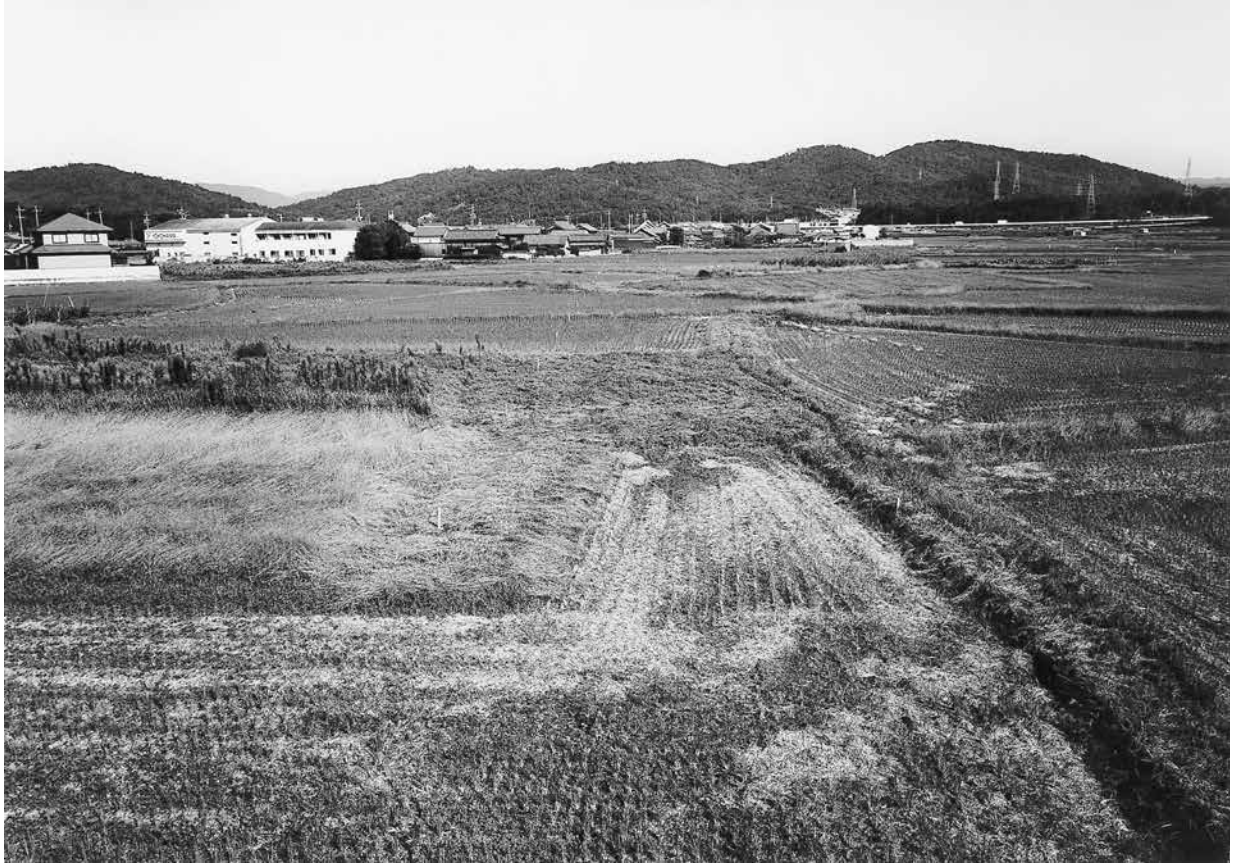
2地区西端部分（西から）

2地区中間部分（東から）

2地区北端トレンチ（東から）

2地区補足調査区全景（東から）

2地区補足調査区全景（西から）



西地区調査前風景（西から）

西地区全景（西から）

西地区水路上り東側（西から）

西地区全景

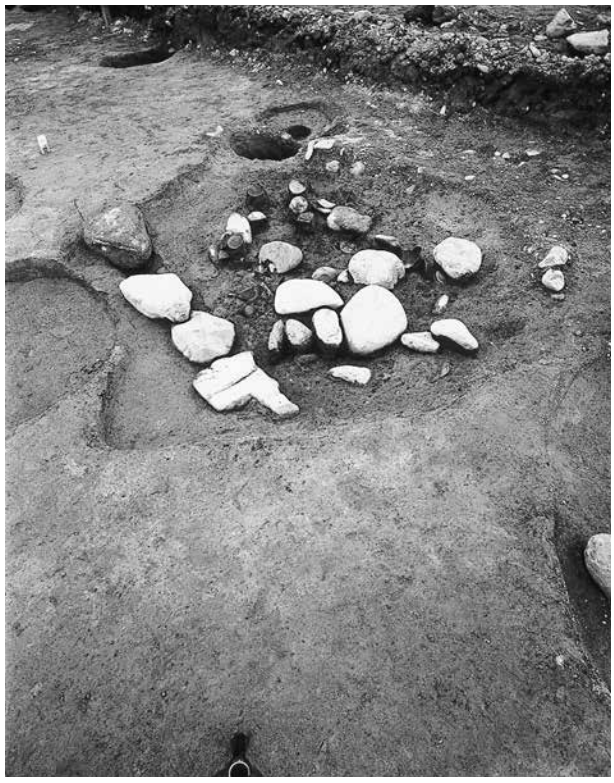
西地区全景

ＳＢ30全景（西から）

西地区東側南端部（北から）

ＳＸ26・28（北西から）

ＳＸ26（北から）



ＳＸ28（北から）

東地区調査前風景（西から）

東地区東西トレンチ（西から）

東地区南北トレンチ（北から）

図版32

有井遺跡

ＳＢ34（西から）

東地区南北トレンチ（南から）

東地区北側トレンチ（西から）

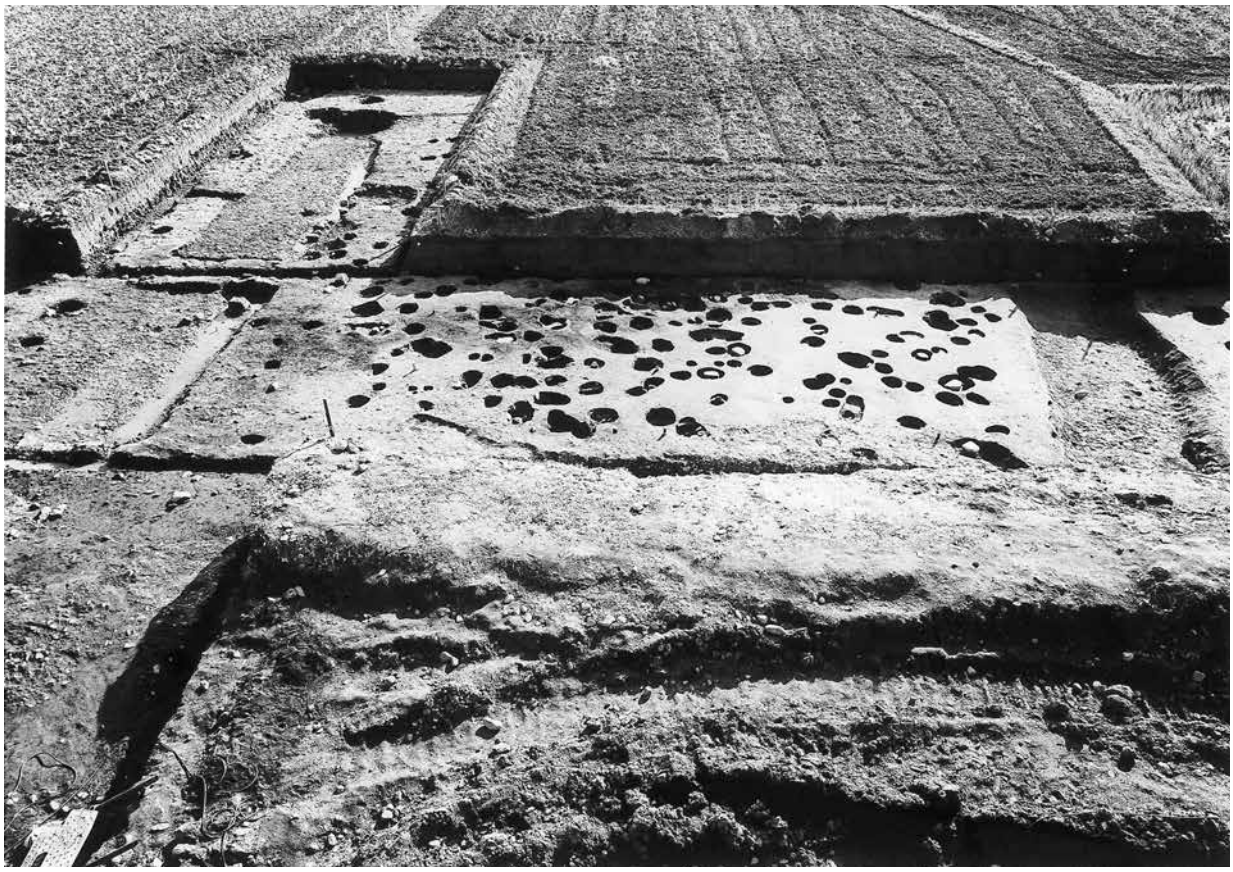
東地区東側トレンチ屈曲部（北から）

調査前風景（西から）

東西トレンチ（西端から）

東西トレンチ（西から）

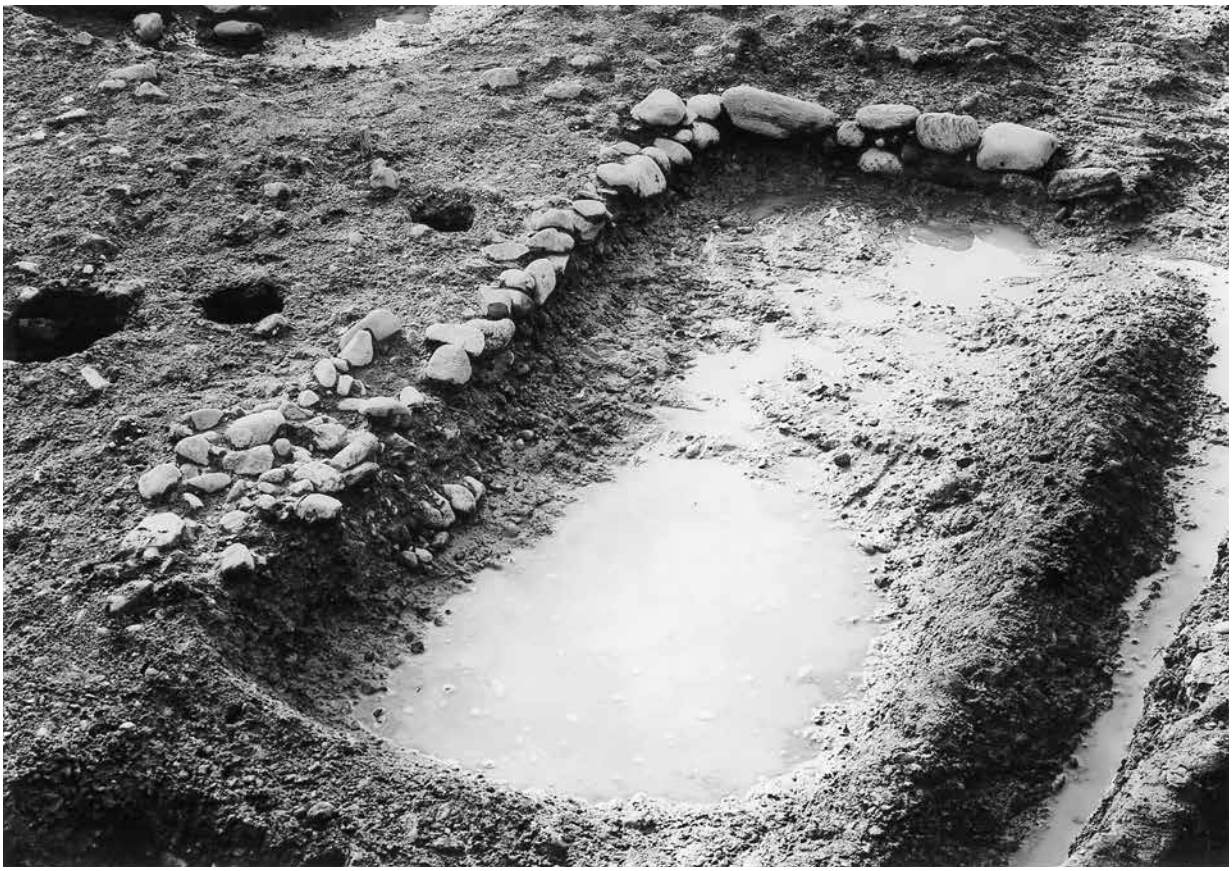
東西トレンチ中央部分（北から）



東西トレンチ交差付近ピット群（北から）

東西トレンチ（東端から）

南北トレンチ（交差部分・南から）



ＳＫ９

図版36

西明寺三反田遺跡

東西トレンチ中央部分（北から）

北端部南北トレンチ

ＳＸ28（北から）

寺前遺跡２地区工事後風景（北から）

荒木氏館跡中地区工事後風景（北から）

図版38

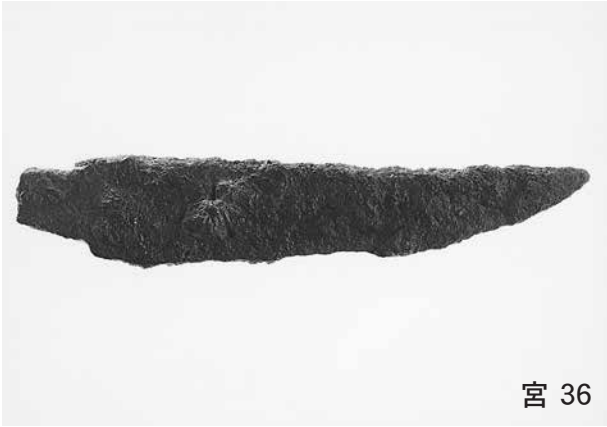
西明寺地区工事後風景

有井遺跡東地区工事後風景（東から）

西明寺三反田遺跡工事後風景（西から）

宮 24

宮 28


宮 36

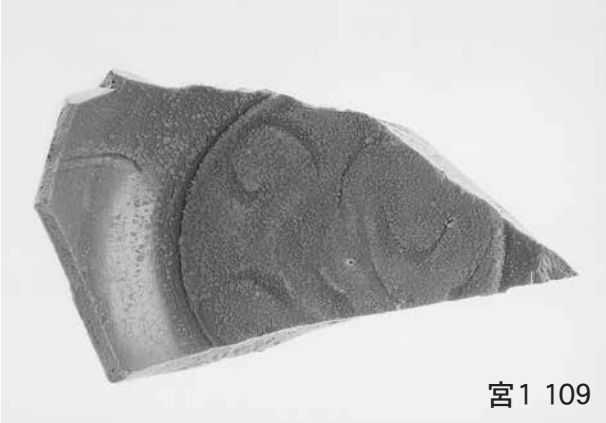
宮 52

宮 80

宮 84

宮 100

宮 101


宮1 109

宮1 7

宮1 11

宮1 16

宮1 18

宮1 34

宮1 40

宮1 49

宮1 51

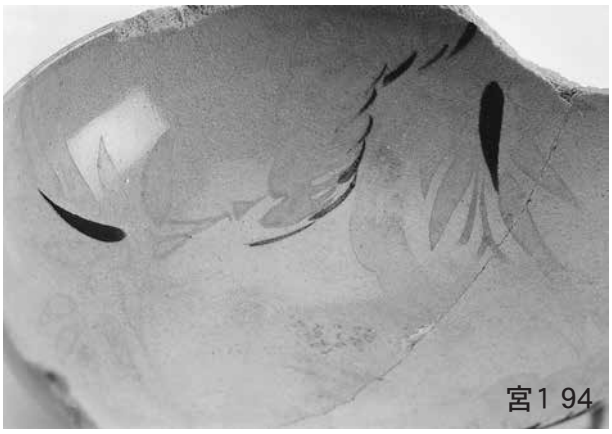
宮1 63

宮1 74

宮1 75

宮1 80

宮1 4


宮1 94

宮1 97

図版42

宮ノ前遺跡（第2次）1地区出土遺物

宮1 99

宮1 105

宮1 116

宮1 120

宮1 122

宮1 125

宮2 17

宮3 4

宮3 7

宮3 30

宮3 32

宮3 34

宮3 38

宮3 39

寺 4

寺 5

寺 6

寺 7

寺 18

寺 21

26

荒 4

荒 8

荒 12

荒 14

荒 16

荒 19

荒 24

荒 40

荒 45

荒 50

荒 52

図版46

荒木氏館跡出土遺物

荒 64

荒 70

荒 76

フイゴ羽口

荒 106

荒 108

荒 111

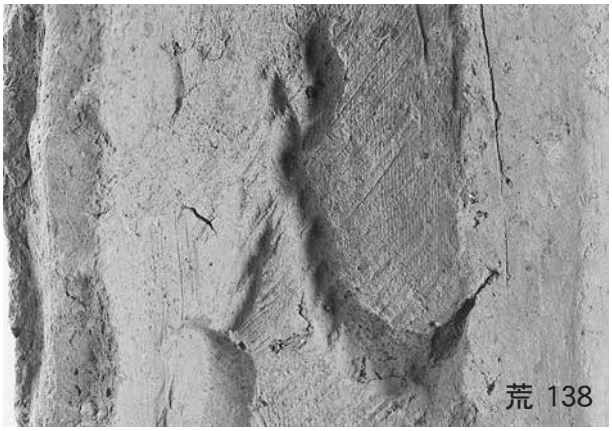
荒 112

荒 121

荒 122

荒 125

荒 126


荒 138

荒 133

荒 145

荒 137

荒 135

服 17

服 25

服 21

有 19

有 24

有 40

有 51

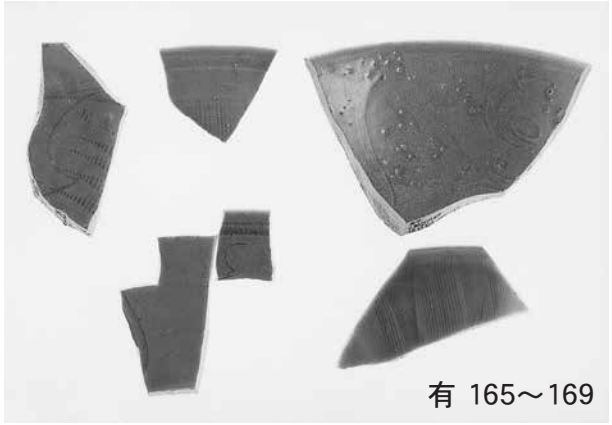
有 112

有 105

有 123

有 124

有 144


有 165～169

有 196

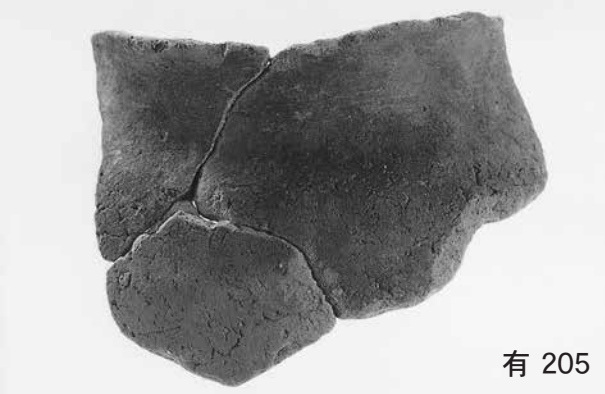
有 227

西 1

西 3

西 12

西 27


有 205

有 213

有 261

西 5

西 10

西 18

西 24

図版50

西明寺三反田遺跡・菩提寺跡出土遺物

西 42

西 47

西 52

西 56

西 73

西 74

西 76

西 96

西 103

菩提寺

附編１　菩提寺採集の瓦

報告でも再三触れているとおり、荒木地区を考えるうえで「菩提寺」の存在は重要である。荒木村の東山麓には、菩提寺跡があり、中世の文献にもたびたび登場する。文明五年（1473年）、関白一条兼良は「ふちの河記」に「又服部川をわたりて菩提寺にいたる。是も招提門徒の律院なり」と記し[1]、数日逗留している。また、『応仁記』には、足利義視が、京都から近江・伊賀を経て伊勢に向かうおりに立ち寄ったという[2]。永録11年（1568年）には、吉田兼右が菩提寺と、服部の蓮花寺に宿所としている[3]。明治時代に廃寺となり、現在は休耕田となっているが、大きな規模の寺院であったことが窺える。また、菩提寺の東には、荒木の中世墓が存在している。

天正伊賀の乱の際に炎上したとされ、江戸に再興されたが、明治時代に廃寺となった。現在、寺跡は休耕田となっている。

瓦は、伊勢中世史研究会がおこなった測量調査に筆者が同行し、その際に研究会メンバーにより採集されたもの[4]である。

１～５は、寺院跡に向かう小道に散布していた瓦で、軒平瓦である。瓦当が一部残っており、中心飾りが半裁旭日文と３条の水波文からなり、水波文は４単位認められる。これらは、15世紀頃にみられる文様である。（豊田）

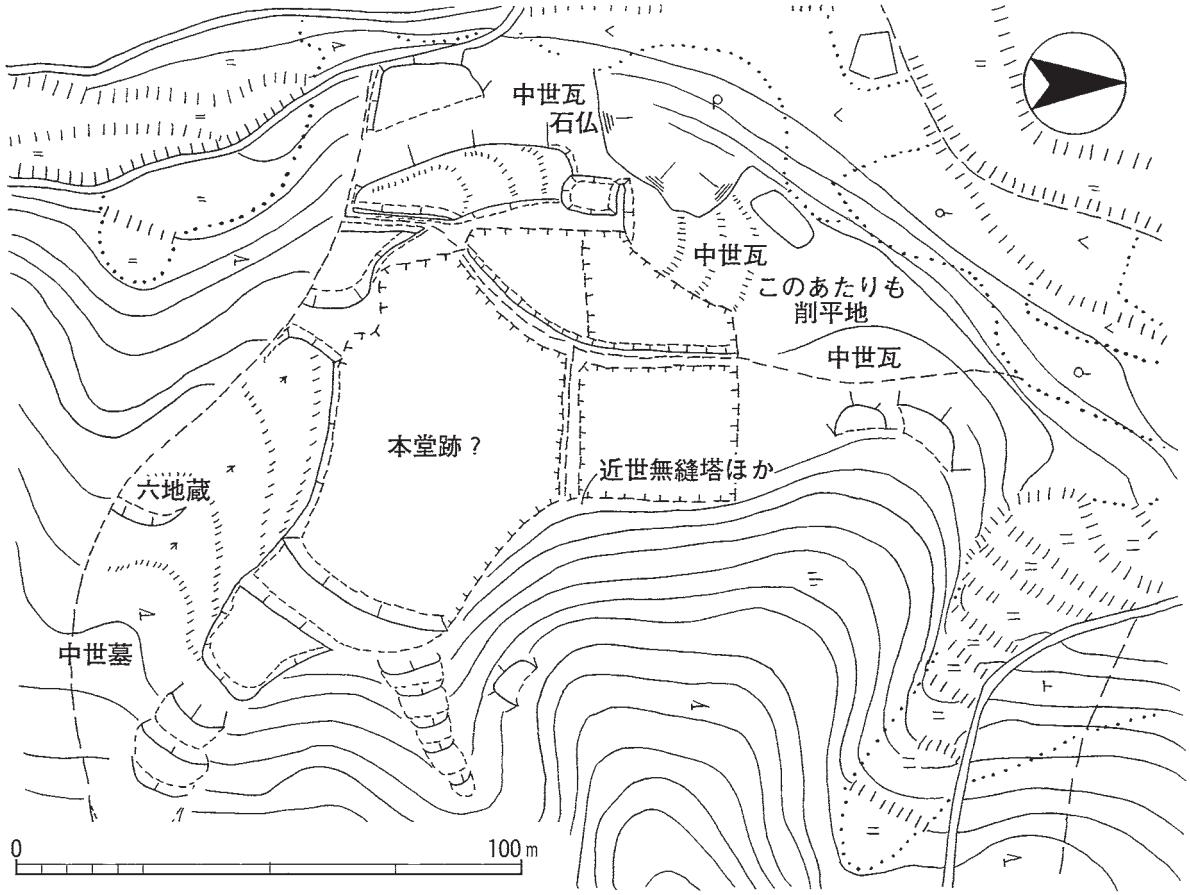
［註］

（１）『ふちの河の紀』『群書類従』第20　群書類従完成会

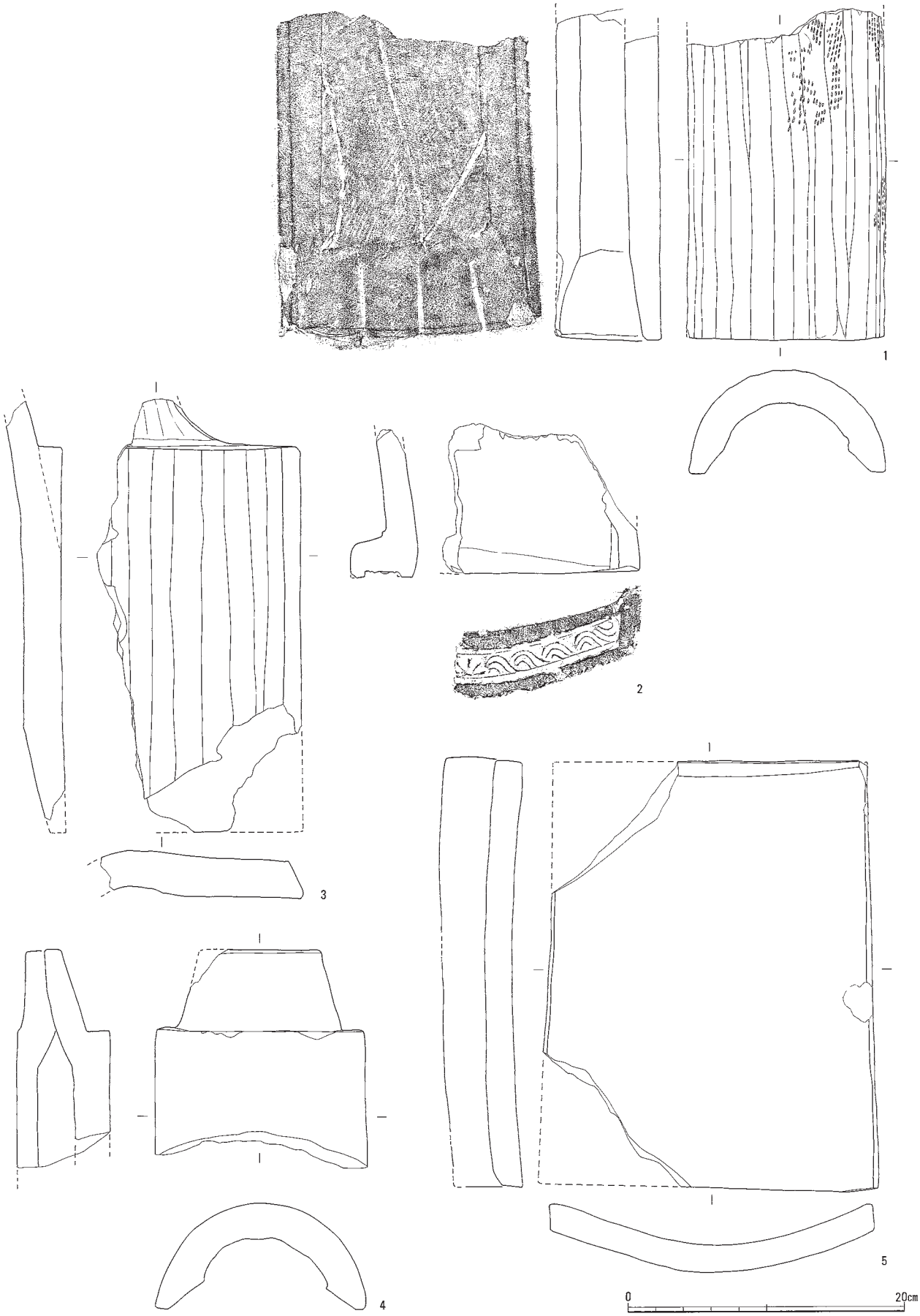
（２）『応仁記』『応仁別記』（いずれも）『群書類従』第20　群書類従完成会

（３）萩原龍夫「兼右卿記に顕れたる伊賀」（『伊賀郷土史研究』３　伊賀市郷土史研究会　1954年）の同書抜文による。

（４）竹田憲治「上野市荒木菩提寺跡の調査」（『伊勢の中世』第102号伊勢中世史研究会　2004年）



第114図　菩提寺跡概要図（１：1,500）〔『伊勢の中世』102号より〕



第115図　菩提寺跡採集瓦実測図（１：４）

附編２　伊賀市依那具　小泉氏館跡

１　調査の経過

小泉氏館跡は、伊賀市依那具字柳田に所在する遺跡である。発掘調査は昭和63年度の県営ほ場整備事業に伴い発掘調査がなされた。調査は1988年５月９日から開始し、同年６月23日に終了した。最終的な調査面積は1,000㎡であった。

発掘調査区は幅４～５ｍ、長さ約180ｍの溝状である。また、城館に伴う堀の位置を確認するために、事業地内に３箇所の調査坑を別途設けた（第118図）。

遺構図は、1/20の手書き実測図である。国土座標軸との対応はなされていない。

２　位置と環境

小泉氏館跡は、上野盆地南部の木津川北岸部で、標高は約143ｍの水田地に位置している。遺跡の中央部には依那具神社がある。館跡の位置する依那具地区は、南西部を木津川、北東部を丘陵によって囲まれた地域であり、小泉氏館跡はその中央やや山寄りにあたる。館跡周辺には、真北方位を主軸とする条里型地割が展開している。当地はかつての伊賀国伊賀郡にあたり、当地の条里型地割はその一部と考えられる。

地形図や航空写真からは、現在の南部依那具集落付近の耕地畦畔に旧木津川流路痕が明瞭に確認できる。畦畔に残る旧流路痕は、概ね中世後期頃から近世にかけての流路であることが多い。これを踏まえると、小泉氏館跡と木津川とはわずか200ｍほどの距離しかない。小泉氏館と木津川とは密接な関係があると考えられる。北方丘陵上には狭間城跡・北之城跡・城山城跡の３城館があり、小泉氏館跡はこれらとも有機的な関連を持つと想定できる。

３　調査区の基本層位

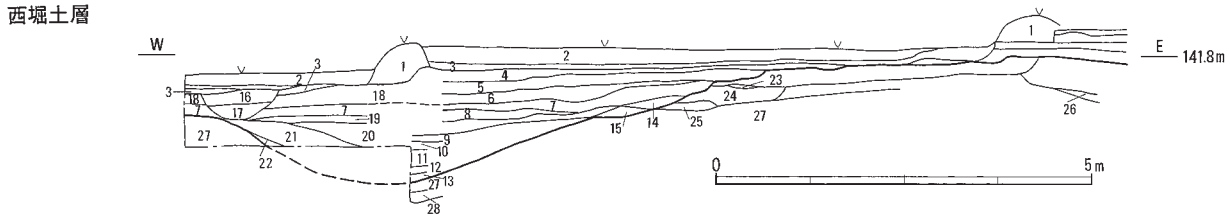
調査区の基本層位を、第116図に示した調査区西端部の土層断面図で見る。調査区は、現状での標高が約143ｍである。耕作土・床土の下が基本的には遺構面となっており、中世～近世にかけての遺構は概ねこの層で確認できる。調査区内で確認された２本の堀は、遺構検出面からおよそ140㎝の深さである。この深度は湧水層にあたるようで、堀埋土内からは木製品も少量出土している。

なお、館跡以前と考えられる古墳時代頃の遺物が中世遺構面の精査段階で確認されている。古墳時代遺構面が中世遺構面と同じと見てよいかどうかは明確にできなかったが、おそらくは10数㎝下が古墳時代遺構面に相当するものと考えられる。

４　検出した遺構

発掘調査の結果確認された遺構は、鎌倉時代から江戸時代にかけてのものである。ただし、先に触れたように、出土遺物には古墳時代のものが若干含まれる。当館跡近隣に、古墳時代遺跡が広がっている可能性が考えられる。

以下、各地区ごとに主立った遺構の状況を見る。



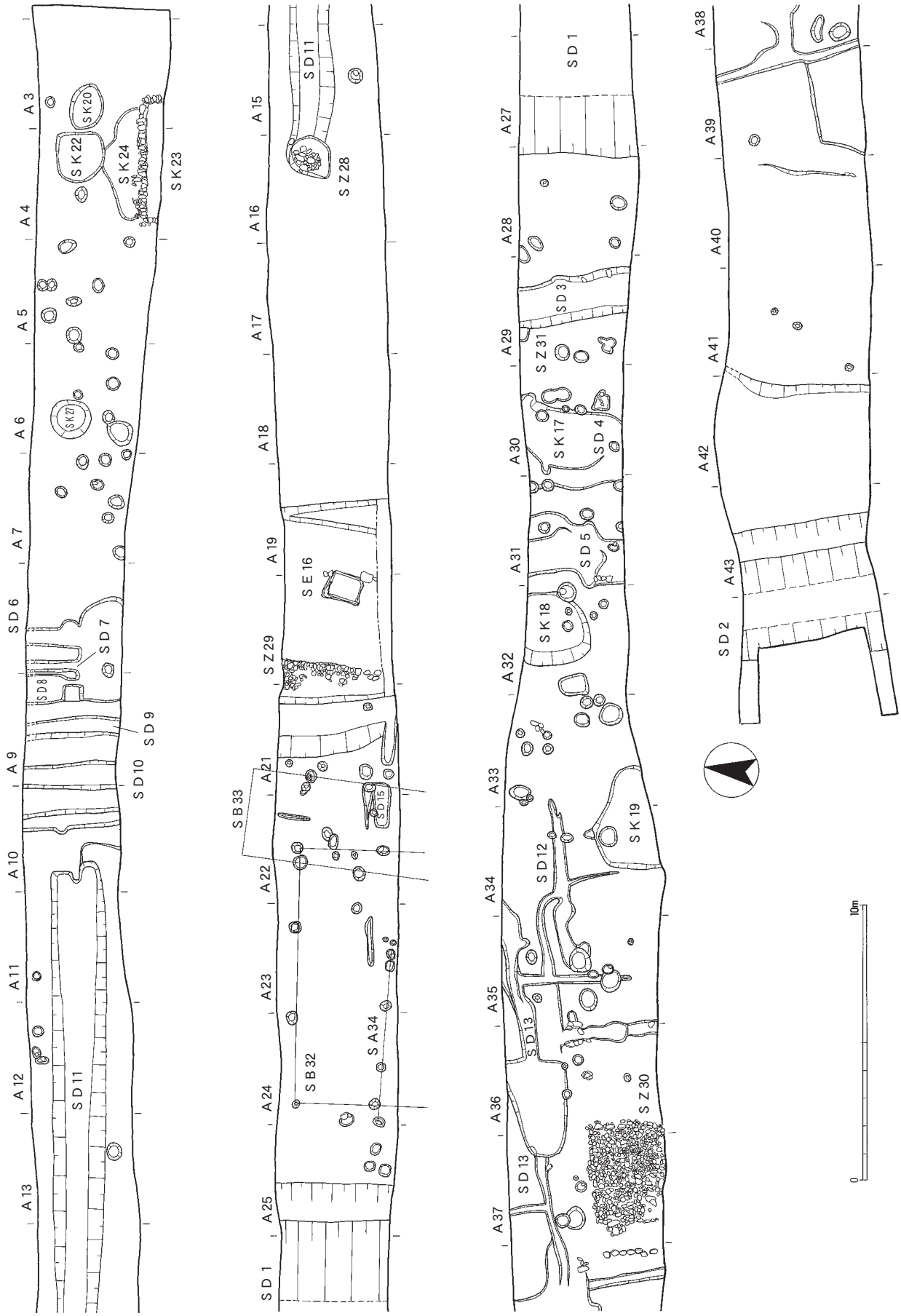
1 畦畔
2 暗灰色土（耕作土）
3 灰褐色土（床土）
4 暗灰褐色砂質土
5 淡灰褐色砂
6 灰褐色砂質土
7 淡灰褐色砂
8 暗灰色シルト
9 淡褐色粘質土（植物遺体含）
10 暗灰色粘質土
11 黒褐色粘質土
12 暗灰色粘質土
13 黒灰色粘質土
14 灰褐色砂質土
15 暗灰色シルト
16 暗灰色砂質土
17 灰青色砂質土
18 灰褐色砂質土
19 褐色砂質土
20 青灰色砂質土
21 暗褐色粘質土（植物遺体含）
22 黒褐色砂質土
23 灰褐色シルト
24 淡灰褐粘質土
25 暗灰褐粘質土
26 暗褐色土
27 灰白～暗灰色砂質土
28 暗褐色土

第116図　調査区西端部ＳＤ２付近土層図（１：100）

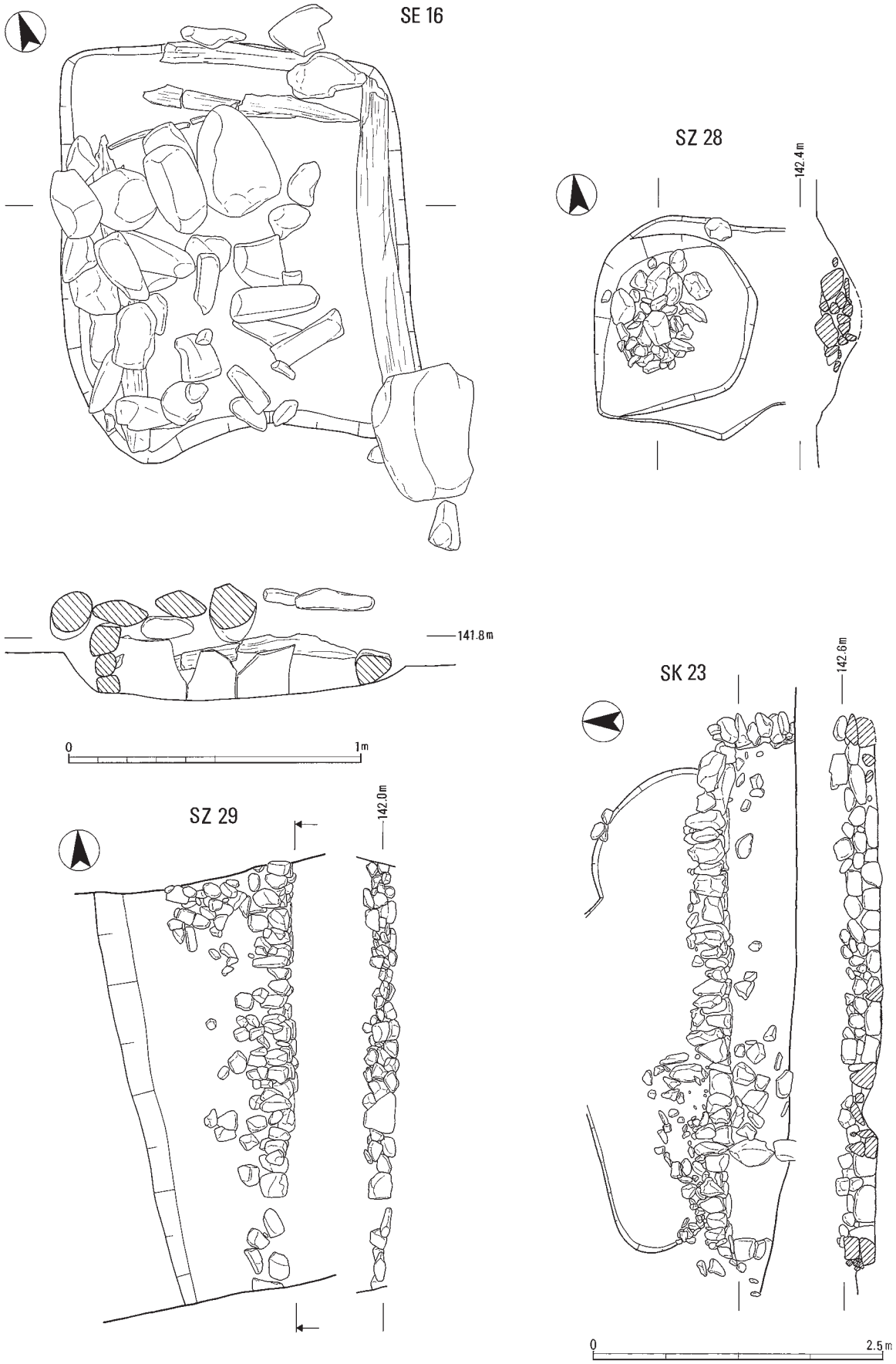
第117図　小泉氏館跡周辺地形図（１：5,000）〔『上野市都市計画図』43、52　1971年測量、1979年修正〕をベースに合成、加筆

第118図　調査区位置図（1：2,000）

第119図　地籍図（大正14年作成）（約1：2,000）



第120図　調査区平面図（1：200）



第121図　ＳＥ16・ＳＺ29・ＳＫ23実測図（ＳＥ16は１：20、他は１：50）

なお、後掲の遺構一覧表も参照されたい。

a　堀と土塁

小泉氏館跡の東西を区切る堀がそれぞれ１条づつ確認された。

堀ＳＤ１と土塁　館跡の東を画する堀ＳＤ１は、幅約９m、深さ約２mで、断面形は緩やかなＶ字形である。埋土内からは、13世紀代から近世にかけての土器類が出土しており、その中心となるのは16世紀後半頃のものである。

ＳＤ１の西側に、土塁の痕跡が若干認められた。大きく削平を受けているが、基底部はＡ28ライン付近にまで及んでいるため、土塁の幅は約３mほどと考えられる。堀の幅に比べ、土塁の幅は狭い。

堀ＳＤ２と土塁　館跡の西を画する堀ＳＤ２は、幅約５m、深さ約1.4mの規模で、断面形は緩やかなＶ字形を呈する。常時滞水していたものと考えられ、埋土内には厚い有機物層が見られた。埋土内からは漆器椀などの木製品のほか、13世紀代から近世にかけての土器類が出土している。

ＳＤ２に伴う土塁の痕跡は、明確ではなかった。Ａ39ライン以西に無遺構地帯があり、この範囲に土塁が存在していたものと考えられる。

b　館跡主郭内の遺構

堀ＳＤ１西肩部から堀ＳＤ２東肩部にかけての約62mの範囲は、小泉氏館跡の主郭内と考えられる範囲である。堀ＳＤ１以東の部分とは区別し、主郭内の遺構の状況を見ていく。

集石遺構ＳＺ30とその周辺　ＳＺ30は、東西約４m、南北2.8m以上の範囲に集石をしたものである。集石部の東約3.5mと西約２mには、それぞれ集石遺構に平行する溝があり、この範囲が一定の区画と考えられる。集石東端部のやや離れた位置には直線的な石列があり、これも同一施設を画したものであろう。集石部は全体として土壇状を呈するもので、拳大以上の円礫や土器類を含むものである。

ＳＺ30の北側にも、集石部と平行する溝ＳＤ13がある。Ａ36ライン付近ではやや広い土坑状を呈しており、集水機能があったと考えられる。Ａ34・35グリッド付近では、ＳＤ12に平行する溝ＳＤ12もみられ、ＳＤ12よりも南側に曲がる溝も見られる。これらの状況から、ＳＺ30を中心に、ＳＤ12・13を外郭線とする区画があったと考えられよう。

ＳＺ30やＳＤ13からは、15世紀中葉から後葉を中心とする土器類が出土している。とくにＳＤ13から土師器皿類が比較的まとまって出土しており、中世後期段階の館の中心時期を示すと考えられる。

土坑ＳＫ17とその周辺　主郭内東部のＳＫ17付近では、土坑や溝が集中している。土坑ＳＫ17の上部には溝ＳＤ４があり、これはＳＤ３と軸方向が揃っていたようである。ＳＫ17からは15世紀後半頃の土器類が出土しており、先述の集石遺構ＳＺ30付近の施設とほぼ同じ頃のと考えられる。したがって、ＳＤ３・４はこれらよりもやや新しいと考えられる。

なお、この付近ではピットが数基確認されている。しかし、建物としてまとめることはできなかった。

c　主郭外東側の遺構

堀ＳＤ１東肩部から調査区東端にかけては、小泉氏館跡の主郭外と考えられる。このエリアでは、主郭内とはまた異なった遺構の状況が観察できた。

掘立柱建物ＳＢ32・33・34　堀ＳＤ１の東側で確認した遺構である。３棟分の掘立柱建物が確認できた。ＳＢ32は堀ＳＤ１に平行し、他の２棟は後述の石積列ＳＺ29に平行している。ピット出土遺物からの時期判断は困難だが、上記した平行関係にある他遺構の時期に相当すると考えられよう。

石積列ＳＺ29（第121図）　東側に面を揃えた石積みで、南と北はそれぞれ調査区外に延びる。石積みは最大30㎝程度の川原石を２～３段積んだ簡易なもので、明確な裏込石は伴っていない。後述の井戸ＳＥ16と軸線を揃えており、一連のものと考えられる。石積みを埋めた土の中からは、16世紀後葉から17世紀代の頃の土器片が出土しているため、それ以前に機能していた遺構と考えられる。

井戸ＳＥ16（第121図）　ＳＥ16は、南北約1.1m、東西約0.95mの規模で横木と縦板とを組み合わせており、遺構外縁部と上部には最大50㎝ほどの川原石が雑然と見られた。方形の木枠という要素から、井戸の一種か、あるいは集水施設と考えられる。両者を兼ねたものとして一応井戸としておく。遺構廃絶時の埋土内から16世紀後葉頃の土器が出土しているため、それ以前に機能していた遺構と考えられる。

石組土坑ＳＫ23（第121図）　ＳＫ23は石組を伴

遺構番号	性 格	時 期	グリッド	調査時遺構名	特徴・形状・計測数値など
SD 1	堀	15～16世紀	A25～27	堀東側、SD1	埋土に砂層含む。
SD 2	堀	15～16世紀	A43～44	西堀	埋土内に瓦器多い。
SD 3	溝	15世紀以降	A29	SD1	SZ31より新。瓦質土器火鉢。
SD 4	溝	16世紀後半	A30	SD2	SZ31より新。
SD 5	溝	16世紀	A31		
SD 6	溝	16世紀	A8	SD1	瀬戸大窯期。
SD 7	溝	不 明	A8	SD2	
SD 8	溝	16世紀	A9	SD1	平瓦。
SD 9	溝	16世紀	A9	SD2	
SD 10	溝	15世紀～近世	A9・10	A9－SD3、A10―SD1	瓦質土器、瓦。
SD 11	溝	16世紀	A10～16	A10―SK1・SD2、A11・13－SD2、A12・14－SD1、A15－ミゾ	東西溝
SD 12	溝	16世紀以降	A34・35	A34－SD2、A35－SK	
SD 13	溝	16世紀以降	A35	SD1、A37東西SD	埋土中に壁土片含む。平瓦、近世の土器含む。
SD 14	溝	不 明	A22	SK5	瓦器椀片。SD15と類似。
SD 15	溝	16世紀代	A22	SK3	瓦器椀片、南伊勢系鍋第4段階片含む。
SE 16	井戸	16世紀代	A20	SX	方形の木枠が遺存。瀬戸大窯4期後半。
SK 17	土坑	16世紀代	A30	SK、SK1内SK	SD4の下部で検出。土師器皿多い。古瀬戸後Ⅳ新～大窯1期。
SK 18	土坑	15世紀以降	A32	SK1	
SK 19	土坑	16世紀後半	A34	SK1	南伊勢系鍋第4段階e
SK 20	土坑	近 世	A3	SK1	近世信楽焼。
SK 21		抹消	A3	SK2	
SK 22	土坑	17世紀前半	A4	SK1	南伊勢系鍋第4段階e、瀬戸連房4～6期。
SK 23	石組土坑	17世紀前葉以降	A4	SX4	SK24より新。
SK 24	土坑	17世紀前葉以降	A4	SK5、SK6	SK23より古。南伊勢系焙烙（近世）、瀬戸志野皿。
SK 25	土坑	13世紀？	A5	SK1	瓦器椀片。
SK 26		抹消	A5	SK2	
SK 27	土坑	13世紀？	A6	SK5	瓦器椀（第Ⅲ段階）。
SZ 28	集石遺構	16世紀代	A16	SX、SK1	SD11の西端部。土師器・信楽・瓦質土器ほか。
SZ 29	石積列	16世紀以降	A20・21		瓦器片多い。埋土に壁土片・近世陶器含む。
SZ 30	集石遺構	16世紀代	A36～38	集石・SX	土壇含む。土師器・信楽・瓦質土器ほか。
SZ 31	落ち込み	15世紀代？	A29	SD2	SD3・4より古。

第42表　小泉氏館跡遺構一覧表

う遺構である。石組は内側に面を揃えた東西約3.1m、南北0.5m以上の規模である。石積みは最大約40㎝の川原石を２～３段積み上げた簡易なものである。石組に裏込石は用いられていない。石組内からの出土遺物は無いが、重複関係からＳＫ23よりも古い遺構であるＳＫ24が17世紀前半頃の遺構であるため、ＳＫ23はそれよりも新しい遺構と考えられる。

集石ＳＺ28と溝ＳＤ11（第121図）　溝ＳＤ11は、調査区内を東西方向に延びる溝であり、全長約23mである。集石ＳＺ28はＳＤ11の西端部に形成されたものである。ＳＺ28は最大30㎝の川原石を用い、不規則ながら円形にまとめている。内部には特別な施設は存在していなかった。いずれの遺構も、埋土内からの出土遺物は少ないが、後述のＳＤ10と同じく、17世紀中葉以降のものと考えられる。

溝ＳＤ10　ＳＤ10は最大幅約3.5mで、南北方向に延びる溝である。溝ＳＤ11と直交関係にある。埋土内から16世紀後半から17世紀後半にかけての遺物が多量に出土している。遺物には瓦があり、付近に瓦葺建物があったと考えられる。注目できる遺物として、犬形土製品がある。

Ａ11グリッドpit１　直径20㎝程度の小ピットである。遺構内に、口縁部を意図的に打ち欠いた信楽産小形壺が据えられており、中には各種の鉄片が入っていた。鉄片には、鍋・釘・針などがあり、再利用を目して蓄えられていたものと推察される。時期的には17世紀前半頃に相当するものと考えられる。

ｄ　範囲確認調査区

小泉氏館跡の規模を把握するため、圃場整備事業地内で堀跡と推定される場所に３ヶ所の調査坑を設定して確認調査がされた（第118図）。その結果、いずれの調査坑からも、堀跡と想定される堆積土が確認された。堀の上面幅は、北部の調査坑１で約５m、南部の調査坑２で約４mである。

５　出土した遺物

出土遺物には、弥生時代から江戸時代にかけてのものがある。少量の鉄製品・石製品・木製品を含むが、その多くは土器類である。

ａ　弥生・古墳時代の土器

弥生土器（１～３）　１は甕の底部で、中期頃のもの。２は高杯の脚部で後期末頃か、あるいは古墳時代前期初頭頃のものである。３は鉢で、後期のもの。

土師器（４）　４は小形鉢。６世紀前半頃のものであろう。

須恵器（５）　５は須恵器の杯蓋。６世紀後半頃のものである。須恵器は、これ以外にも５世紀末～６世紀初頭頃に比定できる有蓋高杯の脚部がある。

ｂ　中世・近世の土器類

堀ＳＤ１出土土器（６～15）　６は貿易陶磁器で、明代の染付椀。内面には茶筅痕が明瞭に観察できる。７は大和産瓦質土器の方形火鉢。口縁部外面に飛雲文が押印されている。８～13は陶器。８は壺で信楽産。９は常滑産の練鉢で、伊賀では珍しい。10～13は信楽産擂鉢。13がやや軟質である以外は、いずれも無釉硬質である。13は山田猛氏による編年[(1)]（以下、山田擂鉢編年）のⅡｂ型式、12はⅣａ型式に相当する。14・15は南伊勢系の土師器鍋で、南伊勢系鍋編年[(2)]の第４段階ｅに相当する。

堀ＳＤ１出土の土器は15世紀代のものを少し含み、16世紀後半頃までのものが認められる。

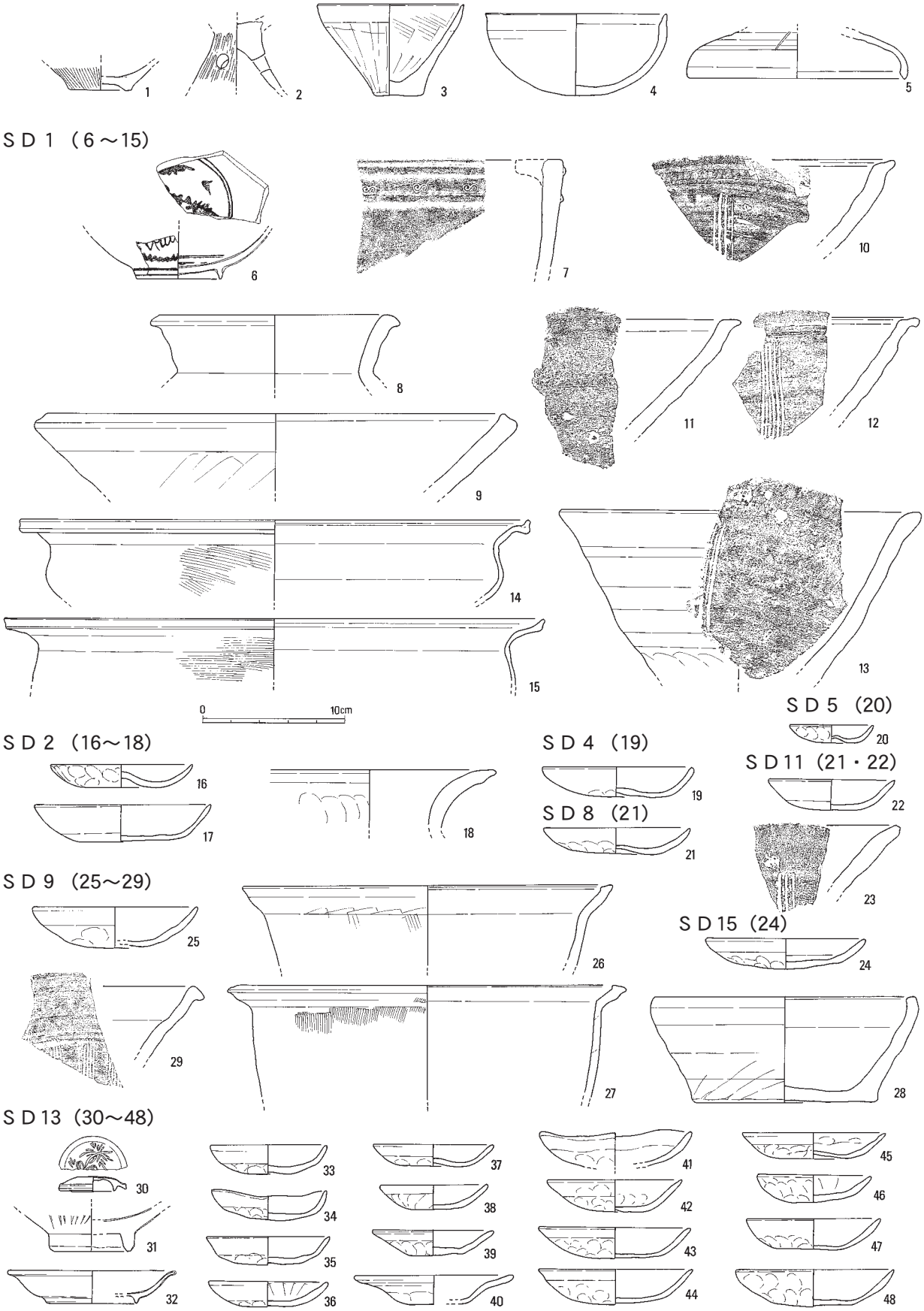
堀ＳＤ２出土土器（16～18）　16・17は土師器皿。16は内面中央が隆起する、いわゆる「ヘソ皿」に類似した雰囲気となるが、形態は伊賀独自のものと考えられる。15世紀後半から16世紀にかけてのものと考えられる。18は知多産の甕で、12世紀代のもの。

溝ＳＤ４・５・８・11・15出土土器（19～24）　19～22・24は土師器皿で、16世紀代のものと考えられる。20は内面中央が隆起するもので、京都方面の影響を受けた伊賀産と考えられる。23は無釉軟質の信楽産擂鉢で、山田擂鉢編年のⅡｂ型式に相当する。

溝ＳＤ９出土土器（25～29）　25は土師器皿。26・27は鍋で、京都方面の形態に類似する。26は土師器、27は瓦質土器。両者は類似した形態で調整手法も同種であり、土師器か瓦質土器かの区分はあまり意味をなさないものと考えられる。28は信楽産の鉢。29は信楽産擂鉢で、錆釉を施した硬質もの。16世紀後半から17世紀前半頃のものと考えられる。

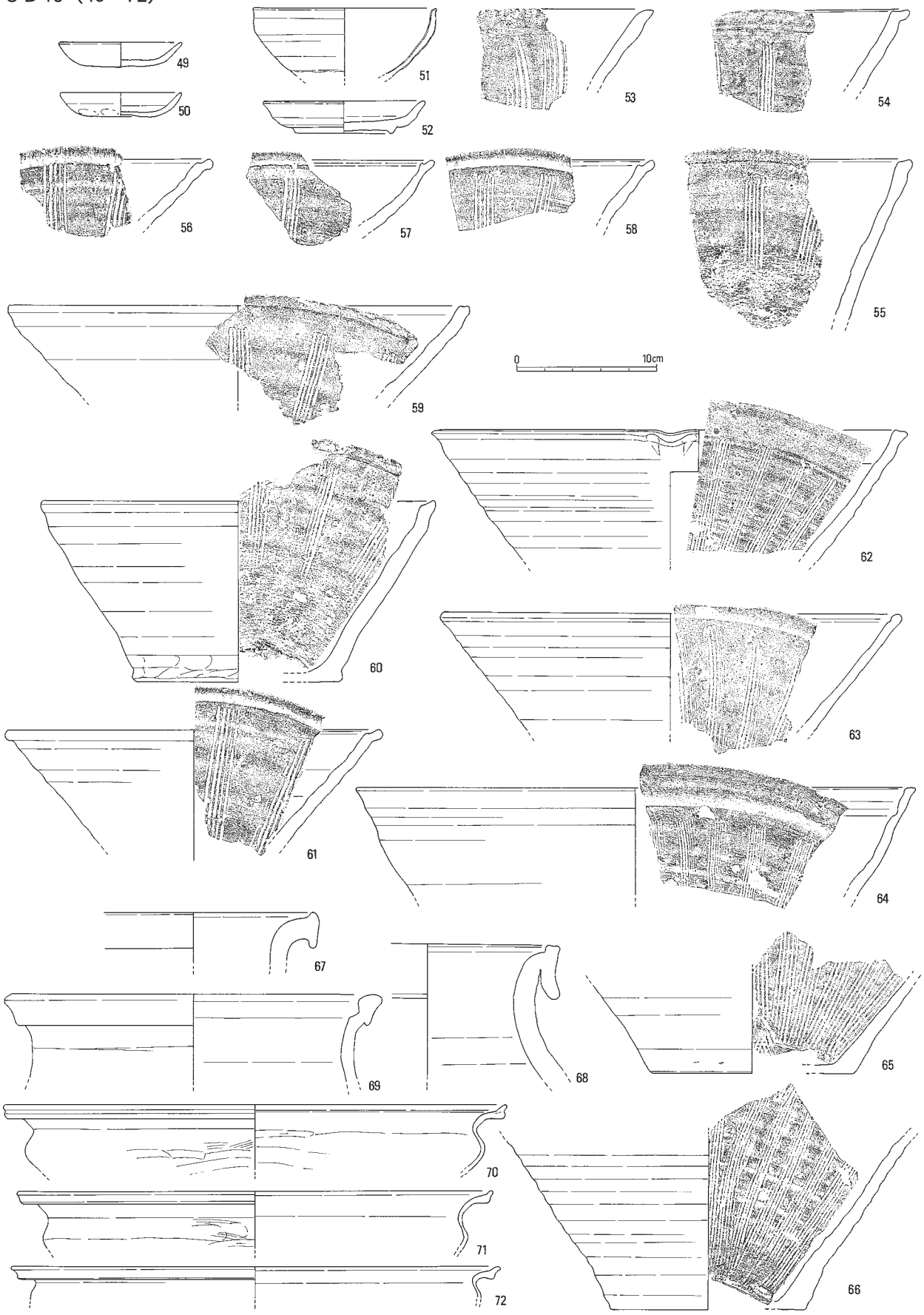
溝ＳＤ13出土土器（30～48）　30は青白磁の合子蓋。外面には花文が陽刻されている。31は青磁椀で、龍泉窯系。32は白磁皿。33～48は土師器皿類。口縁部に明確なヨコナデを施す小皿(33～38)、京都

弥生・古墳時代（１～５）



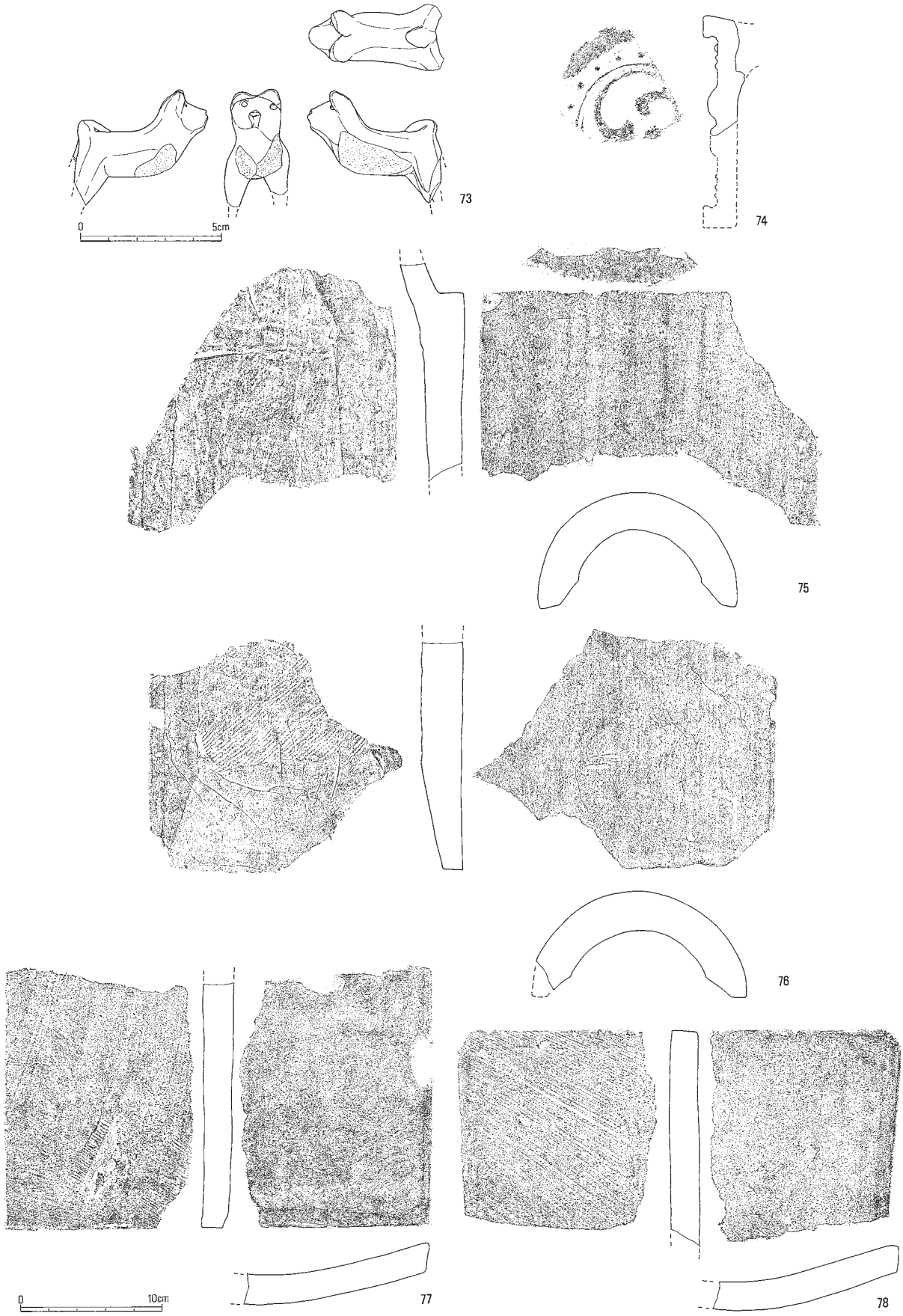
第122図　小泉氏館跡出土遺物（１）（１：４）

ＳＤ10（49～72）

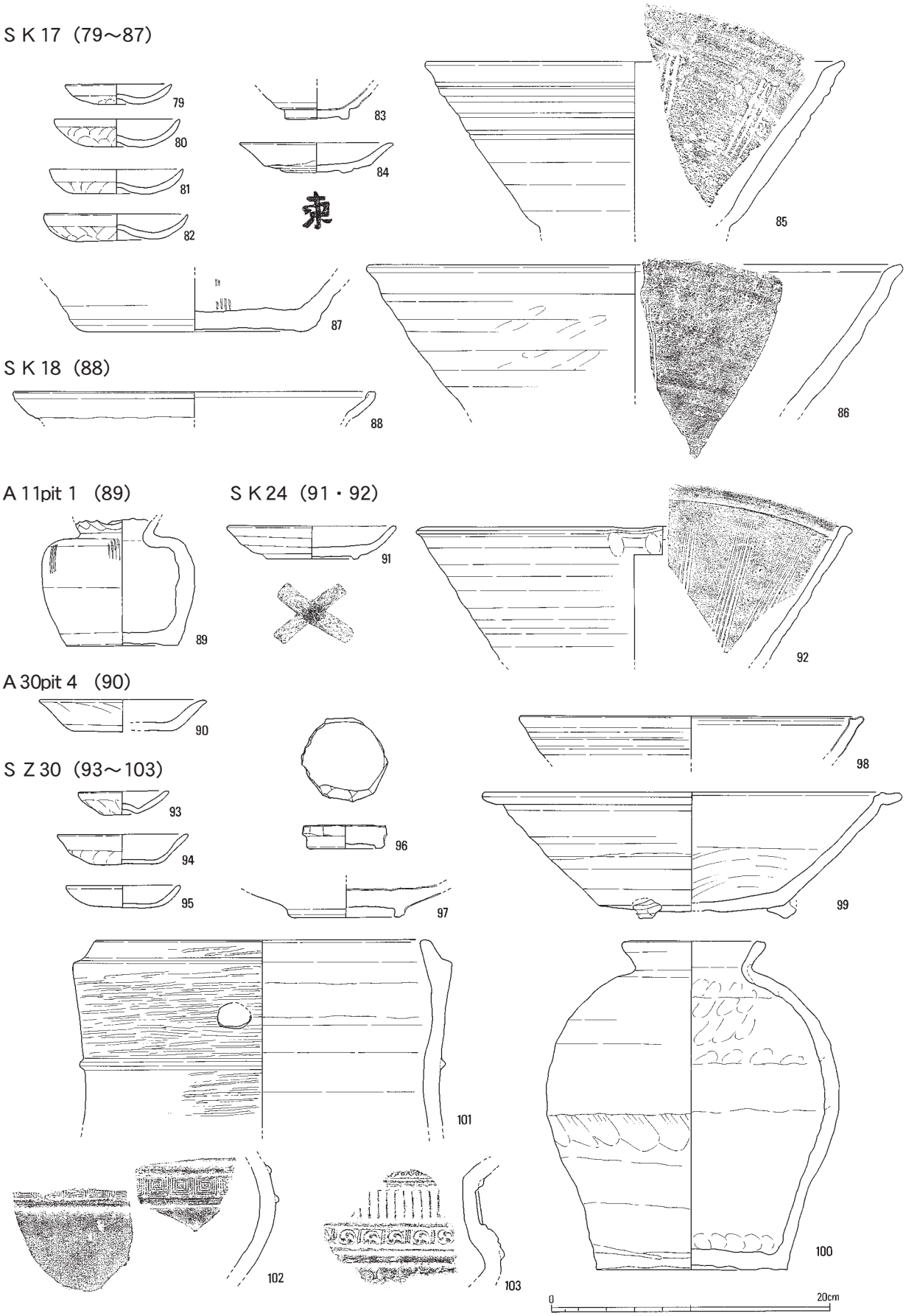


第123図　小泉氏館跡出土遺物（２）（１：４）

ＳＤ10（73～78）

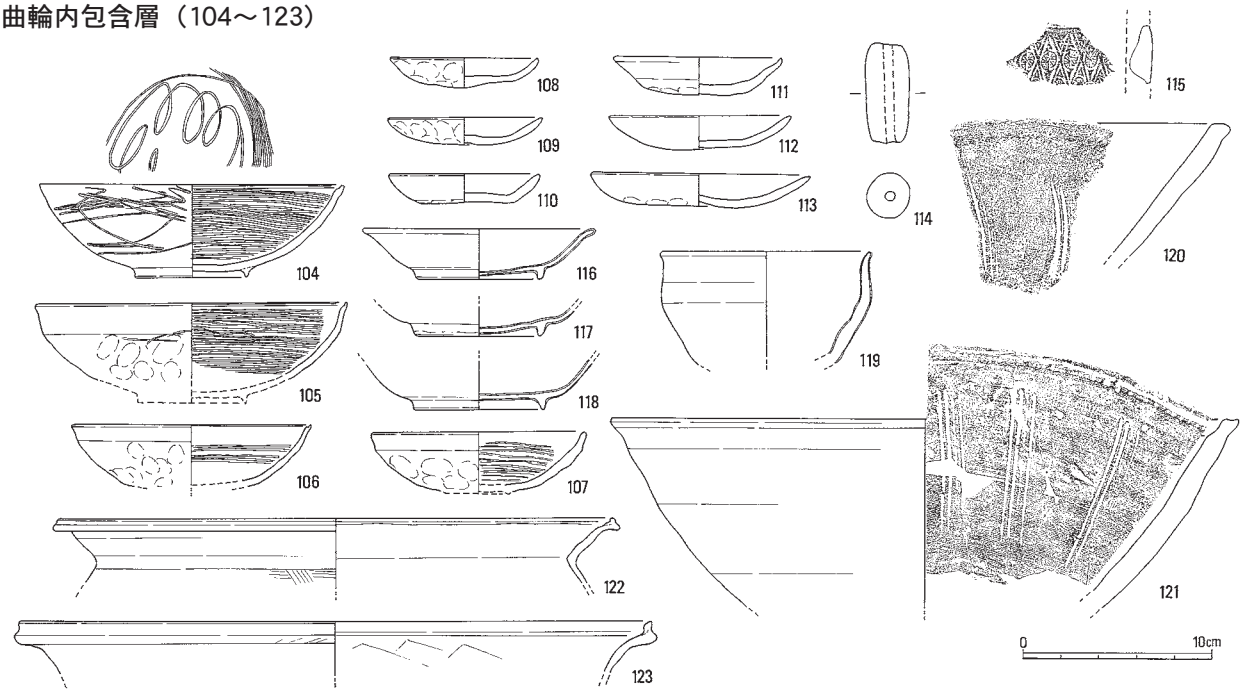


第124図　小泉氏館跡出土遺物（３）（73は１：２、他は１：４）

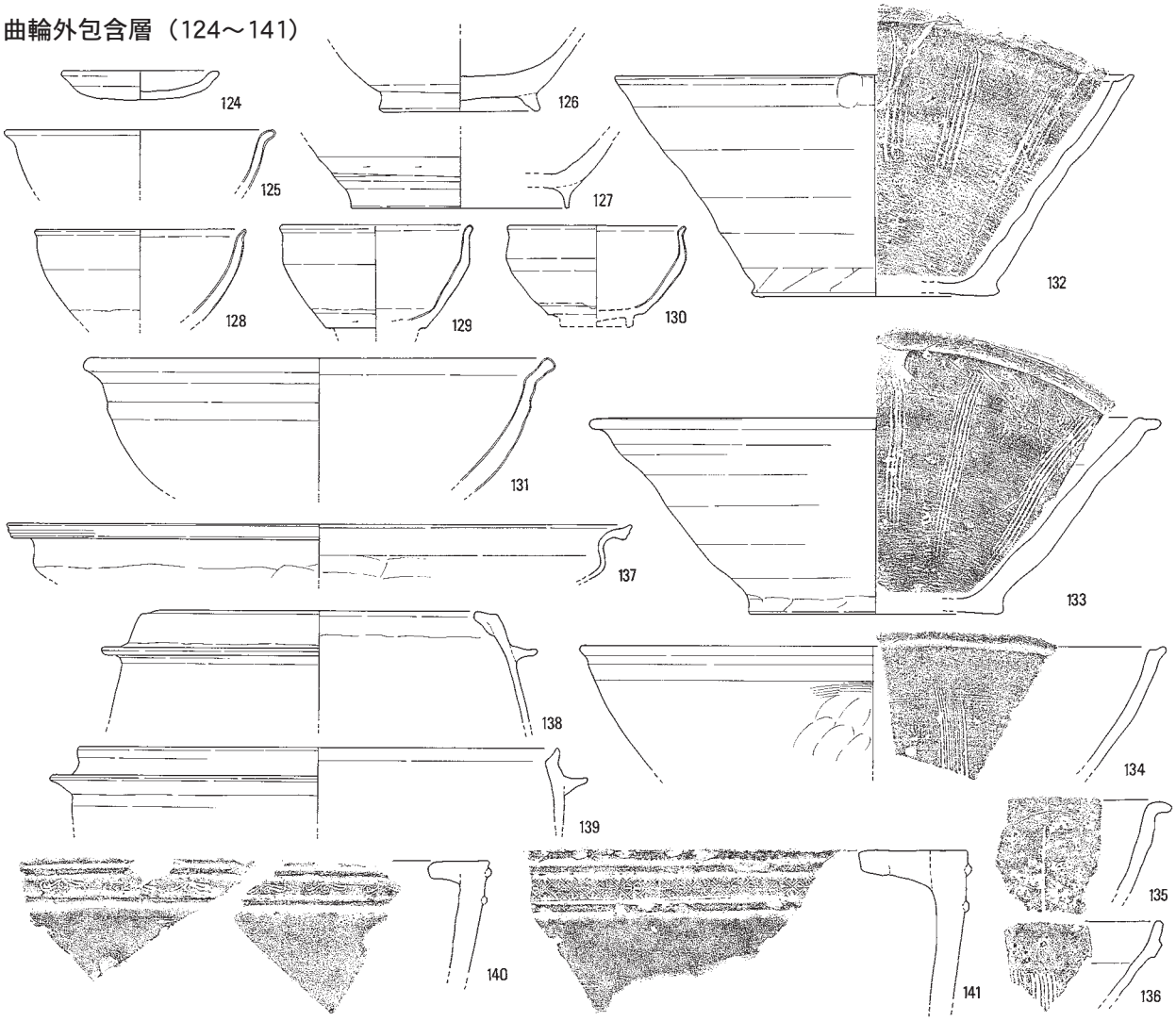


第125図　小泉氏館跡出土遺物（４）（１：４）

曲輪内包含層（104～123）



曲輪外包含層（124～141）



第126図　小泉氏館跡出土遺物（５）（73は１：２、他は１：４）

系の模倣と考えられる一群(39・40)、口縁部に明確なヨコナデを施す皿(41～45)、口縁部にヨコナデを施さない一群(46～48)とがある。いずれも伊賀で製作されたと考えられ、16世紀初頭前後のものと考えられる。

溝ＳＤ10出土土器（49～78）　49・50は土師器小皿。50の内面は隆起している。51・52は美濃瀬戸産陶器。51は天目茶椀で、連房式登窯第５小期(17世紀後葉)、52は志野丸皿で、連房式登窯第２小期（17世紀中葉）にあたる[3]。

53は土師質の擂鉢で、擂目は左斜め方向に掻き上げられている。54～66は信楽産擂鉢。55・59は無釉軟質系、64は錆釉硬質系、それ以外は無釉硬質系である。擂目は、５本を基本としたものが多く、原体幅は1.2～1.5㎝ほどである。口縁部の形態（方頭形か三角頭形か）や擂目の間隔、あるいは焼成の具合によって、いくつかの類型に区分できそうである。山田擂鉢編年のⅢａ～Ⅳｂ型式にあたり、最も新しい64は17世紀前半頃のものと考えられる。

67・68は常滑産の甕で、67は常滑編年の６ａ期、68は７ａ期に相当すると考えられる。69は信楽産壺。70～72は南伊勢系土師器鍋および焙烙で、第４段階ｅに相当。

73は犬形土製品。４本の足はそれぞれ意図的に欠損されている。74～78は瓦類。74の巴文は、形状から見て16世紀後葉から17世紀初頭頃のものと考えられる。76の内面にはコビキ痕が見える。

土坑ＳＫ17出土土器（79～87）　79～82は土師器皿類。いずれも中央部が内面に隆起するものである。83は瀬戸産天目茶椀で、藤澤良祐氏編年の古瀬戸後Ⅳ新から大窯１頃のもの[4]。84は古瀬戸腰折皿で、後Ⅳ新に相当する。85～87は信楽産擂鉢で、85は無釉中質、86は無釉硬質である。

土坑ＳＫ18出土土器（88）　88は大和型土師器羽釜である。

Ａ11グリッドpit１出土土器（89）　89は信楽産の小形壺。外面肩部には櫛目による施文がある。16世紀代のものか。この中に143～156の鉄製品があった。

Ａ30グリッドpit４出土土器（90）　土師器皿である。

土坑ＳＫ24出土土器（91・92）　91は瀬戸産陶器の志野丸皿で、藤澤編年の連房第２小期（17世紀第Ⅱ四半期）のもの。92は錆釉硬質の信楽産擂鉢で、山田擂鉢編年のⅣａ型式にあたる。

集石遺構ＳＺ30出土土器（93～103）　93～95は土師器皿類。いずれも系統が異なる形態を呈する。96・97は青磁。97は大形の盤で被熱により変色している。98・99は古瀬戸折縁深皿で、98は古瀬戸後Ⅳ古、99は後Ⅲ期のもの[5]。100は信楽産の壺。101～103は瓦質土器で、いずれも火鉢にあたる。103は２連の巴文をスタンプ施文している。

曲輪内包含層出土土器（104～123）　堀ＳＤ１とＳＤ２との間から出土した、遺構に伴わない遺物をまとめた。104～107は瓦器椀で、12世紀後半頃から13世紀末頃までのものが見られる。108～113は土師器皿類。115は瓦質土器。116～118は白磁皿で、森田勉氏による分類のＥ２類。119は瀬戸産の天目茶椀で、連房第２小期のもの。120は無釉土師質の擂鉢。121は信楽産擂鉢で無釉硬質。122・123は南伊勢系土師器鍋で、第４段階ｃ・ｄにあたる。

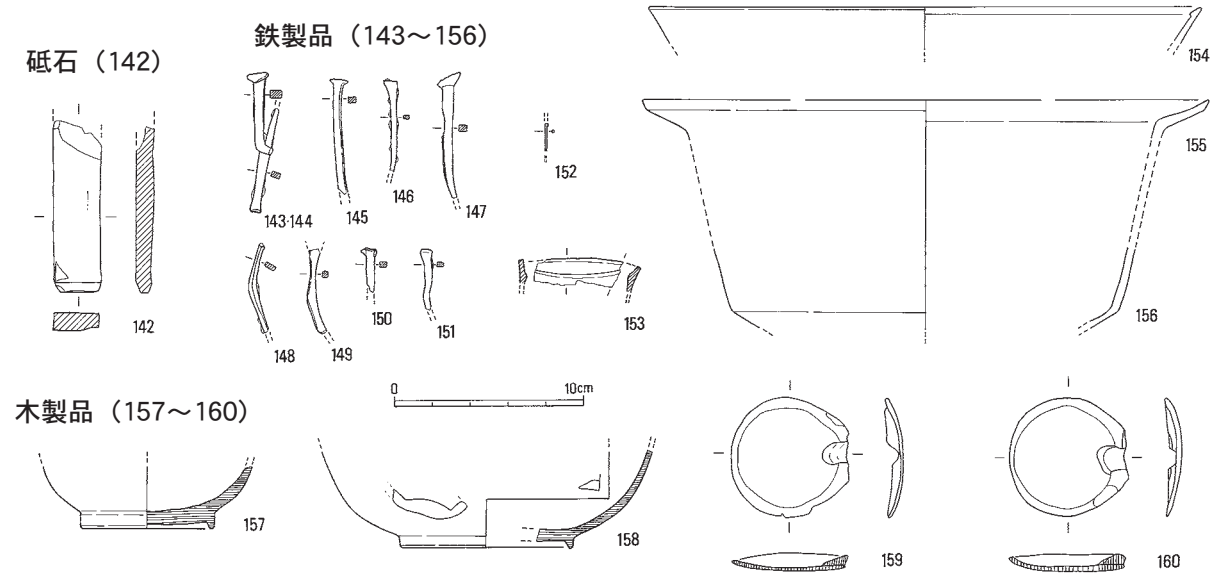
曲輪外包含層出土土器（124～141）　124は土師器皿で、12世紀後半頃のもの。125は龍泉窯系の青磁椀で、14世紀代頃か。126・127は東海産無釉陶器（山茶椀）で、126は渥美産の椀、127は知多産の練鉢。128～130は瀬戸産の天目茶椀。128は大窯１期、129は連房第４小期（17世紀第Ⅲ四半期）、130は連房第５小期（17世紀後葉）に相当。131は古瀬戸中Ⅲ期の深皿。

132～136は信楽産ないしはそれに類した生産地の擂鉢。132・133は無釉軟質で、132の外面には煤が付着しており、煮炊きに使用されたと考えられる。134・135は無釉土師質で、134は大和型瓦質擂鉢の形態に類似する。135の擂目は１単位１本で構成される。136は錆釉硬質で17世紀以降のもの。

137は南伊勢系の焙烙で、17世紀中頃のもの。138は土師器羽釜で、大和型模倣である。139は中北勢系羽釜かあるいはそれを模したもの。140・141は方形の瓦質土器擂鉢。

石製品（142）　142は砥石で、仕上砥に相当する。

鉄製品類（143～156）　いずれも89の信楽産小形壺内に入っていたもの。143～151は釘、152は



第127図　小泉氏館跡出土遺物（６）（１：４）

針、153～156は鉄鍋である。156の外面には煤が付着しており、使用後の破片と考えられる。

木製品類(157～160)　157・158は漆器椀。157はＳＤ10から、158はＳＤ２から出土した。158の外面には赤漆による施文がある。159・160は杓子状のもので、組合式。いずれもＳＤ２から出土した。

６　まとめと検討

ａ　小泉氏館跡の規模と形態

小泉氏館跡の発掘区は圃場整備による新設用排水路設置部分のみであったため、線状を呈している。そのため、遺構全体の配置状況を明確に知ることはできないが、考察可能な範囲でまとめておく。

主郭部分の形態と規模　主郭部分は、調査前に想定されていたとおり方形を呈すると考えられるが、圃場整備前の地割や地籍図の状況から再検証する。

東西規模は、今回の発掘調査によって、堀の外側で約77m、内側で約60mと確認できる。南北規模は、範囲確認調査坑の状況から、堀の外側で88m、内側で70mとなる。これが、今回発掘調査した主郭部分の最大値と考えてよい。ただし、これらの状況を地図類に照合すると、とくに西辺付近の地割線が歪んでおり、単純な矩形とは考えにくい。地割線と地籍図とを総合すれば、平面形は西辺部の歪みで南辺部が少し窄まった方形と考られる。

主郭虎口　主郭虎口は発掘調査では検出されていないが、調査区に南接する依那具神社参道がそれにあたると考えられる。そうすると、虎口は南辺の中央からやや東にずれた位置となる。

主郭外施設　堀ＳＤ１の東側に中世後期以降の遺構があり、主郭外に居住域の広がっていたことは明らかである。これが館跡と一体のものとすれば、調査区のさらに東側に別の堀が存在する可能性もある。

なお、地籍図を見ると、館跡の北側にも堀跡を彷彿とさせる細い地割が巡っている。主郭東側の状況を踏まえれば、主郭北側にも関連施設の広がっている可能性がある。

ｂ　小泉氏館跡の機能時期

出土遺物から、館跡は15世紀後半から16世紀後半頃が最大の盛期と考えられる。しかし、その終末期はともかく、初現期は今ひとつ不鮮明である。

館跡の初現期　古墳時代以前を除き、当地が集落地として利用されはじめるのは、出土遺物から見て12世紀後半頃と考えられる。しかし、その後13世紀後葉頃までの遺物が見られるものの、出土遺物は少ない。このため、中世前期から継続的に集落が形成されて館跡が成立したとは考えられない。

館跡の盛期である15世紀後半代に近く、なおかつ中世前期集落とは異なる遺物と認識できるのは、後述する14世紀後葉から15世紀初頭頃と考えられる擂鉢である。この時期の出土遺物も多くはないので、館の初期は小規模な屋敷なのかも知れない。

番号	実測番号	様・質	器種など	地区グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
1	003-05	弥生土器	甕	A-28	包含層	(底) 4.3	(外)ハケメ→ナデ (内)ナデ	密	2.5YR6/4 にぶい黄橙	底部 10/12	
2	003-06	弥生土器	高杯	A-12	包含層	(基部) 3.3	(外)ミガキ→三方透かし (内)ナデ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	基部完存	弥生後期
3	024-03	弥生土器	鉢		包含層	(口) 10.3 (高) 6.4 (底) 3.5	(外)ヨコナデ→工具ナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ハケメ→工具ナデ	密	10YR6/2 灰黄褐	口縁部6/12 底部完存	弥生後期
4	017-02	陶器	小形鉢	A-39	Pit1	(口) 12.8 (高) 5.7	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	外)2.5YR6/8橙 内)10YR8/2灰白	口縁部 6/12	古墳後期
5	004-02	須恵器	杯蓋	A-28	包含層	(口) 15.6	(外)ロクロナデ→ロクロケズリ (内)ロクロナデ	密	N6/0 灰	口縁部 2/12	外面にヘラ記号、赤色顔料か？
6	020-08	染付け	椀	A-25	SD1	(高台) 6.0	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10GY8/1明緑灰 (素)N8/0灰白	底部 4/12	内面に茶筅の擦痕明瞭
7	035-03	瓦質	火鉢		SD1	残長 9.0	(外)ヨコナデ→貼付突帯後押印文→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	N6/0 灰	口縁部片	
8	027-03	陶器	壺		SD1	(口) 17.5	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	密	外)5YR6/6橙 内)2.5YR6/6橙	口縁部 1/12	信楽
9	027-01	陶器	ねり鉢		SD1	(口) 34.0	(外)回転ナデ 自然釉 (内)回転ナデ 使用痕有り	密	2.5Y4/2 灰赤	口縁部 2/12	常滑
10	007-03	陶器	擂鉢		SD1	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ	やや粗	2.5Y8/2 灰白	口縁部 1/12	
11	015-04	陶器	擂鉢	A 26～27	SD1	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ	密	2.5YR6/6 橙	口縁部 1/12	擂目の部分は残っていない
12	016-01	陶器	擂鉢	A 26～27	SD1	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.3cm	密	外)2.5R5/6明赤褐 内)2.5YR6/6橙	口縁部 1/12	無釉硬質 山田Ⅲb
13	009-02	陶器	擂鉢	A-26	SD1	(口) 25.5	(外)回転ナデ (内)回転ナデ クシメ3本/1.2cm	やや密	2.5Y8/2 灰白	口縁部 1/12	信楽 無釉中質 山田Ⅱb
14	021-04	土師器	鍋	A 26～27	SD1	(口) 36.0	(外)ヨコナデ→ハケメ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/12	南伊勢4d
15	021-02	土師器	鍋	A 26～27	SD1	(口) 38.0	(外)ヨコナデ→ハケメ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR5/1 褐灰	口縁部 2/12	南伊勢4e
16	019-07	土師器	皿	A-44	SD2	(口) 10.0 (高) 1.6	(外)ヨコナデ→オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 3/12	
17	003-01	土師器	皿	A-44	SD2	(口) 12.4 (高) 2.5	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	2.5Y7/1 灰白	口縁部 11/12	
18	028-01	陶器	甕	A-43	SD2	—	(外)回転ナデ 施釉 (内)回転ナデ 自然釉	密	5YR4/3 にぶい赤褐	口縁部 1/12	常滑
19	003-02	土師器	皿	A-30	SD4	(口) 10.7 (高) 2.0	(外)ナデ→ナデ・オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 7/12	
20	002-07	土師器	皿	A-31	SD5	(口) 5.9 (高) 1.3	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 11/12	
21	001-05	土師器	皿	A-9	SD8	(口) 10.3 (高) 1.8	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 11/12	
22	001-03	土師器	皿	A-12	SD11	(口) 8.9 (高) 2.1	(外)ヨコナデ→オサエ 板ナデ痕残 (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 11/12	
23	016-06	陶器	擂鉢	A-11	SD11	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ4本/1.5cm	密	2.5Y8/1 灰白	口縁部 1/12	信楽 無釉中質 山田Ⅱb
24	018-01	土師器	皿	A-22	SD15	(口) 11.3 (高) 2.1	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 3/12	
25	018-04	土師器	皿	A-9	SD9	(口) 11.6 (高) 2.8	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	10YR8/2 灰白	口縁部 3/12	
26	023-02	土師器	鍋	A-9	SD9	(口) 26.0	(外)ヨコナデ→ハケメ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR4/2 灰黄褐	口縁部 2/12	京都模倣
27	023-01	瓦質	鍋	A-9	SD9	(口) 28.0	(外)ヨコナデ→ハケメ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	N6/0 5/0 灰	口縁部 3/12	京都模倣
28	013-01	陶器	鉢	A-9	SD9	(口) 18.6 (高) 7.3 (底) 13.1	(外)回転ナデ→ヨコナデ→ナデ (内)回転ナデ→ナデ 使用痕有り	やや密	10R4/6 赤	口縁部5/12 底部8/12	信楽 無釉硬質 擂鉢としても使っている(内面に研磨痕有り)
29	028-04	陶器	鉢	A-9	SD9	—	(外)ロクロナデ (施釉) (内)ロクロナデ (施釉) クシメ5本/1.0cm	密	(釉)5YR5/3にぶい赤褐 (素)7.5Y6/1灰	口縁部 1/12	信楽 錆釉硬質灰色系
30	020-01	青白磁	蓋	A-35	SD13	(口) 4.8 (高) 1.0	(外)ロクロナデ (施釉) (内)ロクロナデ→工具ナデ (施釉)	密	(釉)10GY8/1明緑灰 (素)N8/0灰白	口縁部 5/12	
31	004-03	青磁	椀	A-37	SD13	(高台) 6.0	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10Y6/2ｵﾘｰﾌﾞ灰 (素)5Y7/1灰白	高台部 1/12	
32	020-02	白磁	皿	A-37	SD13	(口) 11.8 (高) 2.3	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10Y8/1灰白 (素)N8/0灰白	口縁部 1/12	
33	018-06	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 8.2 (高) 2.0	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 3/12	
34	001-04	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 7.7 (高) 2.1	(外)ヨコナデ→オサエ (内)ヨコナデ→オサエ	密	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部完存	
35	003-04	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 8.6 (高) 1.9	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 5/12	
36	019-01	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 8.4 (高) 1.8	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ 工具痕有り	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 5/12	
37	019-03	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 8.5 (高) 1.5	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 4/12	
38	018-07	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 7.6 (高) 1.8	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 4/12	
39	001-02	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 8.5 (高) 1.8	(外)ヨコナデ→オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部完存	
40	018-08	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 11.2 (高) 2.0	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 2/12	
41	018-05	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 10.7	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 5/12	

第43表　小泉氏館跡遺物一覧表（１）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
42	001-01	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 9.5 (高) 2.2	(外)ヨコナデ→オサエ (内)ヨコナデ→オサエ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 11/12	
43	002-06	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 10.8 (高) 2.1	(外)ヨコナデ→オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 5/12	
44	002-03	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 10.8 (高) 2.4	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	密	7.5YR7/3 にぶい橙	口縁部 6/12	
45	019-02	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 10.1 (高) 1.8	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 3/12	
46	002-04	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 7.6 (高) 1.9	(外)ナデ→ナデ・オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部完存	
47	002-05	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 9.4 (高) 2.1	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 6/12	
48	002-02	土師器	皿	A-35	SD13	(口) 11.1 (高) 2.6	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁部完存	
49	002-08	土師器	皿	A-9	SD10	(口) 8.8 (高) 1.8	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	2.5Y5/2 暗灰黄	口縁部 9/12	
50	018-03	土師器	皿	A-9	SD10	(口) 8.7 (高) 1.7	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 5/12	
51	025-05	陶器	天目茶碗	A-9	SD10	(口) 13.1	(外)ロクロナデ (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)7.5YR3/1黒褐 (素)2.5Y8/2灰白	口縁部 1/12	
52	026-02	陶器	皿	A-10	SD10	(口) 11.6 (高) 2.3 (底) 7.2	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)5Y8/1灰白 (素)5Y8/1灰白	口縁部5/12 高台部5/12	瀬戸志野
53	028-03	陶器	鉢	A-10	SD10	—	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ クシメ5本/1.8cm	やや粗	7.5YR7/3 にぶい橙	口縁部 1/12	信楽 無釉中質褐色系
54	029-02	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	—	(外)回転ナデ (内)回転ナデ クシメ5本/1.3cm	やや密	外)2.5YR4/4にぶい赤褐 内)5YR4/1褐灰	口縁部 1/12	信楽 無釉硬質
55	007-02	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.4cm	やや粗	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1/12	信楽 無釉中質 山田Ⅲb
56	016-05	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.6cm	やや密	外)10YR8/4浅黄橙 内)2.5Y8/2灰白	口縁部 1/12	無釉硬質 山田Ⅲb
57	016-04	陶器	擂鉢	A-10	SD10	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.6cm	密	外)2.5YR6/6橙 内)2.5YR5/4にぶい赤褐	口縁部 1/12	無釉硬質 山田Ⅲb
58	016-02	陶器	擂鉢	A-9	SD10	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.3cm	密	外)5YR6/6橙 内)7.5YR7/6橙	口縁部 1/12	無釉硬質 山田Ⅳa
59	015-02	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	(口) 33.0	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.3cm	やや粗	外)10YR8/3浅黄橙 内)10YR8/4浅黄橙	口縁部 2/12	信楽 無釉中質 山田Ⅲb
60	010-01	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	(口) 28.2 (高) 12.9 (底) 15.0	(外)回転ナデ→ヨコナデ (内)回転ナデ クシメ5本/1.3cm 使用痕有り	やや密	5YR6/6 橙	口縁部1/12 底部5/12	信楽 無釉中質 山田Ⅲa
61	014-02	陶器	擂鉢	A 9～10	SD10	(口) 27.0	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.6cm	やや粗	外)2.5YR6/6橙 内)10YR8/3浅黄橙	口縁部 1/12	信楽 無釉中質 山田Ⅳa
62	008-01	陶器	擂鉢	A-9	SD10	(口) 33.9	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ6本/1.3cm	やや粗	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 3/12	信楽 無釉硬質 山田Ⅳa
63	015-01	陶器	擂鉢	A-10	SD10	(口) 33.0	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.3cm	やや密	外)2.5R5/4にぶい赤褐 内)2.5YR5/6明赤褐	口縁部 2/12	信楽 無釉硬質 山田Ⅳb
64	015-03	陶器	擂鉢	A-10	SD10	(口) 40.0	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ7本/1.3cm	やや密	外)2.5YR5/4にぶい赤褐 内)2.5YR5/2灰赤	口縁部 2/12	信楽 錆釉硬質 山田Ⅳbより新
65	029-01	陶器	擂鉢	A-10	SD10	(底) 14.8	(外)回転ナデ→ケズリ→回転ナデ (内)回転ナデ クシメ5本/1.5cm	やや粗	2.5YR5/6 明赤褐	底部 2/12	信楽 無釉硬質
66	014-01	陶器	擂鉢	A-9	SD10	(底) 14.0	(外)回転ナデ→ナデ (内)回転ナデ クシメ6本/1.2cm 底部に擂目有り	密	外)5YR6/4にぶい橙 内)5YR5/3にぶい赤褐	口縁部 4/12	信楽 無釉硬質 山田Ⅳb
67	027-04	陶器	甕	A 9～10	SD10	—	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	やや密	外)5YR5/4にぶい赤褐 内)2.5Y4/1黄灰	口縁部 1/12	常滑
68	014-03	陶器	甕	A-9	SD10	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ	密	外)5Y6/2灰オリーブ 内)7.5YR5/2灰褐	口縁部 1/12	常滑
69	027-02	陶器	甕	A 9～10	SD10	(口) 27.0	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	やや粗	外)2.5YR7/6橙 内)2.5R6/4にぶい橙	口縁部 1/12	信楽
70	021-01	土師器	鍋	A-10	SD10	(口) 36.0	(外)ヨコナデ後沈線→ハケメ→ケズリ (内)ヨコナデ→ナデ→工具ナデ	密	10YR6/2 5/2 灰黄褐	口縁部 6/12	南伊勢4f
71	022-02	土師器	鍋	A-10	SD10	(口) 34.0	(外)ヨコナデ→ハケメ,オサエ→ケズリ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR6/2 灰黄褐	口縁部 1/12	南伊勢4e
72	022-03	土師器	鍋	A-9	SD10	(口) 35.0	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→工具ナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/12	南伊勢4e
73	024-06	土製品	犬型	A-10	SD10	残長 5.0		密	10YR8/2 灰白	脚部欠損	
74	033-02	瓦	軒丸瓦	A-10	SD10		凸面:珠文、巴文 凹面:ナデ	密	N6/0 灰 N7/0 灰白		
75	031-01	瓦	丸瓦	A-10	SD10	残長 15.5 残幅 14.2 厚み 3.0	凸面:ヘラナデ 凹面:布目 側縁部:ケズリ	密	N7/0 灰白 N6/0 灰 N4/0 灰		
76	030-01	瓦	丸瓦	A-9	SD10	残長 16.0 残幅 15.0 厚み 2.9	凸面:縄タタキ後ナデケシ 凹面:糸切り痕、コビキ痕残 側縁部:ケズリ	密	N6/0 灰 N5/0 灰		
77	032-01	瓦	平瓦	A 9～10	SD10	残長 17.3 残幅 13.0 厚み 2.1	凸面:ナデ 凹面:糸切り後ケズリ 側縁部:ケズリ	密	N6/0 灰 N4/0 灰		
78	033-01	瓦	平瓦	A 9～10	SD10	残長 15.2 残幅 13.2 厚み 2.0	凸面:ケズリナデ? 凹面:糸切り痕残 側縁部:ケズリ	密	N6/0 灰 N3/0 暗灰		
79	013-05	土師器	皿	A-30	SK17	(口) 7.6 (高) 1.5	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	5YR7/4 にぶい橙	完存	
80	018-02	土師器	皿	A-30	SK17	(口) 9.0 (高) 2.0	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	外)10YR7/3にぶい黄橙 内)7.5YR7/4にぶい橙	口縁部 4/12	
81	013-04	土師器	皿	A-30	SK17	(口) 9.6 (高) 1.7	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	外)10YR7/4にぶい黄橙 内)10YR7/2にぶい黄橙	口縁部 4/12	
82	013-02	土師器	皿	A-30	SK17	(口) 10.3 (高) 1.9	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR7/3 にぶい黄橙	ほぼ完存	

第44表　小泉氏館跡遺物一覧表（2）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	特記事項
83	025-06	陶器	天目茶碗	A-30	SK17	(高台) 4.6	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)5YR2/1黒褐 (素)2.5Y8/2灰白	高台部完存	
84	025-02	陶器	皿	A-30	SK17	(口) 11.0 (高) 2.1 (底) 5.2	(外)ロクロナデ・ケズリ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉) 重ね焼き痕有り	やや密	(釉)7.5Y7/3浅黄 (素)7.5Y8/1灰白	口縁部3/12 高台部7/12	瀬戸 底部外面墨書
85	009-01	陶器	擂鉢	A-30	SK17	(口) 30.1	(外)回転ナデ→沈線 (内)回転ナデ クシメ3本/1.2cm	やや密	2.5Y8/2 灰白	口縁部 4/12	信楽 無釉中質
86	012-01	陶器	擂鉢	A-30	SK17	(口) 38.2	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ	やや密	5YR7/6 橙	口縁部 1/12	信楽 無釉中質 山田Ⅱa
87	008-02	陶器	鉢	A-30	SK17	(底) 16.0	(外)回転ナデ→ケズリ→ナデ (内)ナデ クシメ4本/1.3cm	粗	5YR7/4 にぶい橙	底部 5/12	
88	026-04	土師器	甕	A-32	SK18	(口) 26.0	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	外)2.5Y7/1灰白 内)10YR7/2にぶい黄橙	口縁部 1/12	
89	017-03	陶器	小壷	A-11	Pit1	(底) 8.0 (頸) 5.2	(外)ヨコナデ→ナデ 櫛目の施文 (内)ヨコナデ→ナデ	密	5YR4/3にぶい赤褐	底頸部 完存	信楽 内面に鉄屑有り 口縁部意図的に打ち欠く
90	003-03	土師器	皿	A-30	Pit4	(口) 12.0	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部 3/12	
91	028-02	陶器	皿	A-4	SK24	(口) 12.1 (高) 2.3 (底) 6.9	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	やや密	(釉)5Y8/2灰白 (素)2.5Y8/1灰白	口縁部6/12 高台部完存	瀬戸志野 外面底部墨書
92	007-01	陶器	擂鉢	A-4	SK24	(口) 31.2	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ5本/1.2cm	やや粗	10YR7/2 にぶい黄橙	口縁部 2/12	信楽 錆釉硬質 山田Ⅳa
93	013-06	土師器	皿	A-35	SZ30 土壇	(口) 6.5 (高) 1.7	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	外)10YR7/4にぶい黄橙 内)5YR7/6橙	口縁部 8/12	
94	013-03	土師器	皿	A-35	SZ30 土壇	(口) 9.3 (高) 2.1	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや密	10YR8/4 浅黄橙	口縁部 9/12	
95	019-06	土師器	皿	A-39	SZ30 土壇	(口) 8.2 (高) 1.6	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	5YR7/6 橙	口縁部 5/12	
96	004-04	磁器転用	加工円盤	A-35	SZ30 土壇	(高台) 5.5	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10GY6/1緑灰 (素)5Y6/2灰オリーブ	高台部 10/12	
97	020-07	青磁	鉢	A-38	SZ30 土壇	(高台) 8.4	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)2.5GY7/1明オリーブ灰 (素)N8/0灰白	底部 2/12	被熱している
98	025-03	陶器	大皿	A-36	SZ30 土壇	(口) 25.0	(外)ロクロナデ (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)5Y7/4浅黄 (素)2.5Y8/2灰白	口縁部 1/12	古瀬戸
99	004-01	陶器	鉢	A-36	SZ30 焼土	(口) 30.0 (高) 9.0	(外)ロクロナデ→ロクロケズリ (施釉)→糸切り→三方足 (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)7.5Y6/2灰オリーブ (素)5Y6/1灰	口縁部 1/12	古瀬戸後Ⅱ
100	017-01	陶器	壷	A-37	SZ30 集石	(口) 10.3 (底) 13.7	(外)ヨコナデ→回転ナデ→ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ→オサエ	密	外)7.5YR6/4にぶい橙 内)2.5YR5/3にぶい赤褐	口縁部6/12 底部完存	信楽
101	034-01	瓦質	火鉢	A-36	SZ30	(口) 24.0	(外)ヨコナデ→ミガキ→貼付ナデ 孔1個有り (内)ヨコナデ→ナデ	密	5Y4/1 灰 7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 3/12	
102	035-02	瓦質	火鉢	A-38	SZ30 土壇	—	(外)貼付突帯後押印文→ミガキ (内)工具ナデ	密	N7/0 灰白 N5/0 灰	体部片	
103	035-04	瓦質	風炉	A-36	SZ30	—	(外)貼付突帯後押印文(巴文) (内)工具ナデ	密	7.5YR8/3 浅黄橙 N5/0 灰	体部片	
104	038-01	瓦器	椀		包含層(曲輪)	(口) 16.2 (高) 4.9 (底) 6.0	(外)ヨコナデ→ヘラミガキ→貼り付け高台→不調整 (内)ヨコナデ→ヘラミガキ 沈線有り	密	黒(断面淡灰色)	口縁部2/12 高台部7/12	
105	038-02	瓦器	椀	A-42	包含層(曲輪)	(口) 推定 16.2	(外)ヨコナデ→ユビオサエ (内)ヨコナデ→ヘラミガキ	密	黒灰色(断面淡灰色)	口縁部 3/12	
106	038-03	瓦器	椀	A-42	包含層(曲輪)	(口) 推定 12.6	(外)ヨコナデ→ユビオサエ (内)ヨコナデ→ヘラミガキ	密	灰	口縁部 2/12	
107	038-04	瓦器	椀	A-38	包含層(曲輪)	(口) 11.2 (高) 3.1	(外)ヨコナデ→ユビオサエ 高台の痕跡有り (内)ヨコナデ→ヘラミガキ 沈線なし	密	淡灰	口縁部 2/12	
108	001-06	土師器	皿	A-34	包含層(曲輪)	(口) 7.9 (高) 1.6	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 11/12	
109	001-08	土師器	皿	A-36	包含層(曲輪)	(口) 8.1 (高) 1.4	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部 9/12	
110	002-09	土師器	皿	A-30	包含層(曲輪)	(口) 8.0 (高) 1.5	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 6/12	
111	019-04	土師器	皿	A-38	包含層(曲輪)	(口) 8.9 (高) 2.0	(外)ヨコナデ→ナデ・オサエ (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 7/12	
112	002-01	土師器	皿	A-36	包含層(曲輪)	(口) 9.6 (高) 1.8	(外)ナデ (内)ナデ	密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 8/12	
113	001-07	土師器	皿	A-37	包含層(曲輪)	(口) 11.6 (高) 1.7	(外)ナデ→オサエ (内)ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 9/12	
114	024-05	土製品	土錘	A-31	包含層(曲輪)	長さ 5.3 幅 2.3 重量g 34.0		密	7.5YR6/4 にぶい橙	完存	
115	034-03	瓦質	花瓶？	A-31	包含層(曲輪)	—		密	N6/0 灰	体部片	
116	020-03	白磁	皿	A-37	包含層(曲輪)	(口) 12.3 (高) 2.7	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10Y8/1灰白 (素)N8/0灰白	口縁部 2/12	破断面に漆による接合痕
117	020-04	白磁	皿	A-37	包含層(曲輪)	(高台) 7.0	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10Y8/1灰白 (素)N8/0灰白	底部 2/12	
118	020-05	白磁	皿	A-37	包含層(曲輪)	(高台) 7.0	(外)ロクロナデ→削り出し高台 (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)10Y8/1灰白 (素)N8/0灰白	底部 3/12	
119	026-01	陶器	天目茶碗	A-31	包含層(曲輪)	(口) 11.2	(外)ロクロナデ (施釉) (内)ロクロナデ (施釉)	密	(釉)7.5YR5/3にぶい褐 (素)2.5Y8/1灰白	口縁部 1/12	
120	005-03	陶器	擂鉢	A-36	包含層(曲輪)	—	(外)ヨコナデ→回転ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ クシメ	やや粗	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1/12	信楽 無釉土師質 山田Ⅱa？
121	011-01	陶器	擂鉢	A-38	包含層(曲輪)	(口) 33.1	(外)回転ナデ (内)回転ナデ クシメ4本/1.2cm 使用痕有り	やや密	5YR6/6 橙	口縁部 3/12	信楽 無釉硬質 山田Ⅲa
122	022-04	土師器	鍋	A-38	包含層(曲輪)	(口) 30.0	(外)ヨコナデ→ハケメ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部 1/12	南伊勢4c
123	022-01	土師器	鍋	A-30	包含層(曲輪)	(口) 34.0	(外)ヨコナデ→ハケメ (内)ヨコナデ→ケズリ	密	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部 1/12	南伊勢4d

第45表　小泉氏館跡遺物一覧表（3）

番号	実測番号	様・質	器種など	地区 グリット	遺構・層名等	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色 調	残存度	特 記 事 項
124	019-05	土師器	皿	A-24	包含層	(口) 8.8 (高) 1.6	(外)ヨコナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ　板ナデ	やや密	7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部 10/12	
125	020-06	青磁	椀		包含層	(口) 15.2	(外)ロクロナデ　(施釉) (内)ロクロナデ　(施釉)	密	(釉)5GY6/1オリーブ灰 (素)N7/0灰白	口縁部 1/12	
126	024-01	陶器	山茶碗	A-10	包含層	(高台) 9.5	(外)ロクロナデ→貼付高台→ナデ (内)ロクロナデ(研磨)	密	N7/0 灰白	高台部 9/12	渥美
127	024-02	陶器	ねり鉢	A-9	包含層	(高台) 12.2	(外)ロクロナデ→ロクロケズリ→貼付高台 (内)ロクロナデ	密	N7/0 灰白	高台部 2/12	
128	025-04	陶器	天目茶碗	A 8～9	包含層	(口) 11.8	(外)ロクロナデ　(施釉) (内)ロクロナデ　(施釉)	密	(釉)5YR4/3にぶい赤褐 (素)2.5Y8/2灰白	口縁部 3/12	
129	025-01	陶器	天目茶碗	A-10	包含層	(口) 10.8	(外)ロクロナデ　(施釉) (内)ロクロナデ　(施釉)	密	(釉)7.5YR4/3褐 (素)2.5Y8/2灰白	口縁部 5/12	瀬戸
130	004-05	陶器	天目茶碗	A-9	包含層	(口) 10.1	(外)ロクロナデ→ロクロケズリ　(施釉) (内)ロクロナデ　(施釉)	密	(釉)10YR5/6黄褐 (素)2.5Y8/2灰白	口縁部 3/12	瀬戸大窯4
131	026-03	陶器	鉢		包含層	(口) 26.4	(外)ロクロナデ　(施釉) (内)ロクロナデ　(施釉)　使用時の擦痕有り	やや密	(釉)5Y7/3浅黄 (素)5Y8/1灰白	口縁部 1/12	
132	006-01	陶器	擂鉢	A-25	包含層	(口) 29.0 (高) 12.3 (底) 13.8	(外)ヨコナデ→回転ナデ→ナデ (内)ヨコナデ→回転ナデ　クシメ5本/1cm	やや粗	7.5YR8/4 浅黄橙	口縁部2/12 底部4/12	信楽 無釉中質
133	005-01	陶器	擂鉢	A-6	包含層	(口) 32.0 (高) 10.9	(外)ヨコナデ→回転ナデ　クシメ4本/1.2cm (内)ヨコナデ→回転ナデ	やや粗	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 3/12	信楽 無釉中質　山田Ⅲb
134	006-02	陶器	擂鉢	A-25	包含層	(口) 32.8	(外)ヨコナデ→ハケメ・ナデ (内)ヨコナデ→ナデ　クシメ6本/1.4cm	やや粗	10YR8/3 浅黄橙	口縁部 1/12	信楽模倣？ 無釉土師質
135	038-05	陶器	鉢？	A-24	包含層	—	(外)ヨコナデ→ケズリ　工具あたり痕有り (内)ヨコナデ→ナデ	やや粗	5YR7/4 にぶい橙	口縁部 1/12	無釉土師質
136	005-02	陶器	擂鉢	A-25	包含層	—	(外)ヨコナデ→ロクロナデ (内)ヨコナデ→ロクロナデ　クシメ6本/1.4cm	やや粗	2.5YR5/3 にぶい赤褐	口縁部 1/12	信楽 鉄釉硬質　山田Ⅳb
137	021-03	土師器	焙烙	A16	包含層	(口) 35.0	(外)ヨコナデ→ケズリ (内)ヨコナデ→工具ナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/12	南伊勢近世
138	023-03	土師器	羽釜	A-9	包含層	(口) 20.0 (鍔) 24.3	(外)ヨコナデ→貼付ナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	7.5YR6/3 にぶい褐	口縁部3/12 鍔部2/12	大和型模倣
139	023-04	土師器	羽釜	A-9	包含層	(口) 27.0 (鍔) 30.0	(外)ヨコナデ→貼付ナデ→ナデ (内)ヨコナデ→ナデ	密	10YR6/3 にぶい黄橙	口縁部 1/12	中北勢orその模倣
140	035-01	瓦質	火鉢		包含層	—	(外)ヨコナデ→貼付突帯後押印文→ナデ (内)ヨコナデ→ケズリ	密	10YR8/2　灰白　N5/0灰 2.5YR7/4　淡赤橙	口縁部片	
141	034-02	瓦質	火鉢		包含層	—	(外)ヨコナデ→貼付突帯後押印文(剣菱文) (内)ヨコナデ→ナデ	密	N5/0 灰	口縁部片	
142	024-04	石製品	砥石	A-35	包含層	最大幅 2.5 最大厚 1.0					泥岩
143	037-12	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
144	037-12	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
145	037-05	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
146	037-06	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
147	037-07	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
148	037-08	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
149	037-09	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
150	037-10	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
151	037-11	鉄製品	釘	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
152	037-13	鉄製品	針	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
153	037-04	鉄製品	不明品	A-11	Pit1						信楽小壷内に入っていた鉄
154	037-01	鉄製品	鍋	A-11	Pit1	(口) 29.1				口縁部 1/12	信楽小壷内に入っていた鉄
155	037-02	鉄製品	鍋	A-11	Pit1	(口) 推定 30.0				口縁部 1/12	信楽小壷内に入っていた鉄
156	037-03	鉄製品	鍋	A-11	Pit1					体部片	信楽小壷内に入っていた鉄
157	036-02	木製品	椀	A 9～10	SD10	(高台) 7.1				高台部 4/12	底部に工具痕？
158	036-01	木製品	椀	A-44	SD2	(高台) 9.0				高台部 3/12	漆椀　内面に朱色
159	036-04	木製品	木杓子？	A-42	SD2	(幅) 6.4 (厚) 1.0					
160	036-03	木製品	木杓子？	A-42	SD2	(幅) 6.3 (厚) 0.9					

第46表　小泉氏館跡遺物一覧表（４）

館跡の終末期　発掘調査では、17世紀後葉頃の瀬戸産陶器類が出土しているので、館の終焉時期は17世紀後葉から18世紀初頭頃と考えられる。伊賀地域には現在なお住居として利用され続けている方形館が多くあり、当館跡が特殊というわけではない。ただし、当館跡も含め、中世の屋敷が近世に継続する意味を改めて考え直す必要があろう。

なお、出土遺物には瓦類がある。織豊期から江戸期にかけて、館内に瓦葺建物が建てられたことを物語っている。本瓦葺きにあたるものが多いため、仏堂か、あるいは蔵のような建物に伴うと考えられる。

c　信楽系統の擂鉢に関して

今回の発掘調査では、信楽焼およびその前段階と考えられる擂鉢（以下、これらを「信楽系統」とする）が多く出土しているので、少し検討しておく。

信楽系統擂鉢は、焼成の質と釉の状況によって、Ⅰ群；無釉土師質系、Ⅱ群；無釉軟質系、Ⅲ群；無釉硬質系、Ⅳ群；錆釉硬質系、の４群に大別できる。いわゆる陶器にあたるのはⅡ～Ⅳ群である。これらは、それぞれつぎのような特徴がある。

Ⅰ群　擂目の施し方から、単線の擂目（Ⅰａ）と、複線で跳ね上げる擂目（Ⅰｂ）に区分できる。

Ⅱ群　擂目が３本／1.2cmで口縁部が三角頭・無段のもの（Ⅱａ）、擂目が５本／1.4cmで口縁部が方頭形のもの（Ⅱｂ）、擂目が５本／1.0cmで口縁部が凹線状に窪むもの（Ⅱｃ）に区分できる。

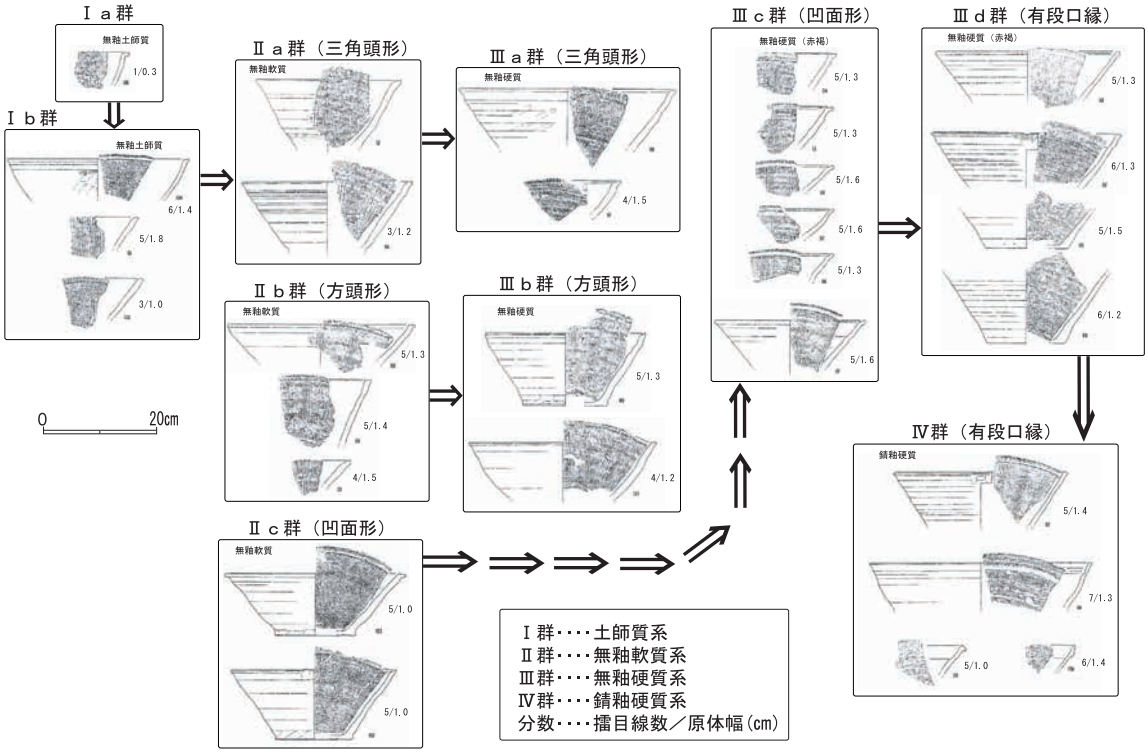
Ⅲ群　擂目が４本／1.5cmで口縁部が三角頭・無段のもの（Ⅲａ）、擂目が４～５本／1.3cmで口縁部が方頭形のもの（Ⅲｂ）、擂目が５本／1.3～1.6cmで口縁部が凹線状に窪むもの（Ⅲｃ）、擂目が５・６本／1.3～1.5cmで口縁部内面が有段のもの（Ⅲｄ）に区分できる。

Ⅳ群　擂目が５～７本／1.3～1.4cmで口縁部内面が有段のもの（Ⅳａ）と、外面が肥厚するもの（Ⅳｂ）とがある。

変遷　これらは口縁部形態や焼成の状況から、つぎのような変遷が考えられる。

Ⅰａ→Ⅰｂ→Ⅱａ→Ⅲａ
　　Ⅱｂ→Ⅲｂ
　　Ⅱｃ→Ⅲｃ→Ⅲｄ→Ⅳａ→Ⅳｂ

これを既存の編年案と対比させると、Ⅰａ群は山田擂鉢編年のⅠ型式、Ⅰｂ群は同Ⅱａ型式、Ⅱａ・Ⅱｂ群は同Ⅱｂ型式、Ⅱｃ群は同Ⅲｂ型式、Ⅲｂ群は同Ⅲａ型式、Ⅲｃ群は同Ⅲｂ～Ⅳａ型式、Ⅲｄ群は同Ⅳｂ型式、Ⅳａ群は同Ⅳａ型式、Ⅳｂ群は同Ⅳｂ型式以降、となる。



第128図　素地粘土と擂目から見た信楽産擂鉢の変遷

山田擂鉢編年に対比させると、大きな変遷としてはⅠａ→Ⅰｂ→Ⅱａ→Ⅲａ→Ⅲｃ→Ⅲｄ→Ⅳａ→Ⅳｂという変遷になる。このように見ると、とくにⅡｂ・Ⅱｃ・Ⅲｂ群の位置づけが問題となる。

これには、擂鉢製作工人の系統や生産地の違いを考える必要がある。近世の伊賀焼が信楽焼の系譜下にあることはよく知られているが、それが中世のどの段階まで遡るのかは今のところ不明である。しかし、近年行われた西光寺窯跡（伊賀市、旧阿山町）の発掘調査で、遅くとも16世紀後半には伊賀地域で信楽系擂鉢生産のはじまることが確認された[6]。中世後期段階では、伊賀・信楽ともに地域生産を行っていた可能性もある。Ⅰ・Ⅱ群の実態を探ることは、信楽系統擂鉢の成立期と伊賀の位置づけを知る上で、極めて重要であると考えられる。

ｄ　中近世の煮沸用具

煮沸用具の実態　当館跡の中世煮沸用具は、12・13世紀頃の土師器羽釜と滑石製石鍋が初現である。その後も数量的に少なく、増加が見られるのは16世紀後半から17世紀代にかけてである。15世紀から16世紀前半代の信楽産擂鉢は安定して出土しているので、この時期の煮沸用土器がそもそも少ないということになる。伊賀地域の煮沸用土器は畿内地域との共通性が指摘されることから、一遺跡あたりの出土量は多く思いがちであるが、数量的には決して多くないことを改めて認識しておく必要があろう。

煮沸用土器に代わるものとしては、信楽産小形壺内から出土した鉄鍋片が物語るように、鉄鍋がかなり普及していたと考えられるが、推測の域を出ない。

他では信楽系擂鉢類がある。この擂鉢には、外面に煤の付着したものがいくつか見られるため、擂鉢を煮沸用具として用いたことも考えられる。

伊賀地域産土器と他地域土器　中世後期に相当する煮沸用土器には、瓦質土器と土師器があるが、いずれも少量である。形態的には大和ないしは京都方面との類似があるもの(88)もあるが、量は少ない。これらが模倣による伊賀地域産と考えられるが、明確ではない。

出土遺物では、16世紀後半以降は南伊勢系が中心である。ただし、それでも煮沸用土器の量は少ない。近世に入る頃に南伊勢系が増加する要因に関しては、今後改めて検討していく必要がある。

ｅ　犬形土製品

犬形土製品は中世後期以降の遺跡を調査するとしばしば出土する遺物であるが、その利用方法は明確でない。伊賀地域では、火山遺跡[7]に類例がある。伊勢での事例を加えれば、三重県下で20遺跡程度に及び、最も集中しているのが北畠氏館跡である[8]。

小泉氏館跡の事例は、16世紀後半頃に相当する。これは、当該遺物は織豊期に限定できるとする江浦洋氏の指摘[9]にも合致する。ただし、伊勢での初現は15世紀後葉頃と考えられる[10]ため、その出現時期はなお検討を要する。

ｆ　信楽産小形壺内の「鉄屑」

89の信楽産小形壺内には、143～156の鉄製品が納められていた。鉄製品は針・釘や鍋片である。これらはいわば「鉄屑」であり、再利用するために蓄えられていたものと考えられる。つまり、当時の「リサイクル」を示す事例と考えられる。同様なものは、六地蔵Ｂ遺跡[11]でも見られる。

なお、これに類似したものに、陶製小形容器の内面に鉄分が厚く付着したものがある。これは、管見の限りでは楠ノ木遺跡[12]や岩出遺跡群[13]で見られる。両者が同じ意味を持つものかどうかは今後検討を要するが、意識的に見ておく必要はあろう。

（伊藤）

［註］

（１）山田猛「下郡遺跡群出土の擂鉢」（『Miehistory』vol.1、三重歴史文化研究会、1991年）

（２）伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」（『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム、1996年）

（３）藤澤良祐「近世瀬戸焼の生産と流通」（『瀬戸市史』陶磁史篇６、瀬戸市、1998年）

（４）藤澤良祐「古瀬戸編年表」（『研究紀要』５、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、1997年）

（５）藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（『研究紀要』10、（財）瀬戸市埋蔵文化財センター、2002年）

（６）阿山町教育委員会『西光寺窯跡発掘調査報告書』（2004年）

（７）三重県埋蔵文化財センター『火山遺跡・山神遺跡・良

福寺跡・高寺南遺跡』(1996年)
(8) 美杉村教育委員会『北畠氏館跡９』(2005年)
(9) 江浦洋「大坂城跡出土の犬形土製品小考」(『大阪文化財研究』18、(財) 大阪府文化財調査研究センター、2000年)
(10) 三重県埋蔵文化財センター『安濃津』(1997年)
(11) 三重県埋蔵文化財センター『井戸地遺跡・高寺遺跡・六地蔵Ｂ遺跡』(1995年)
(12) 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊（1991年）
(13) 三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(1996年)

写　真　図　版

調査前風景（東から）

調査区全景（東から）

図版52

小泉氏館跡

ＳＺ30周辺

ＳＢ32

ＳＤ１

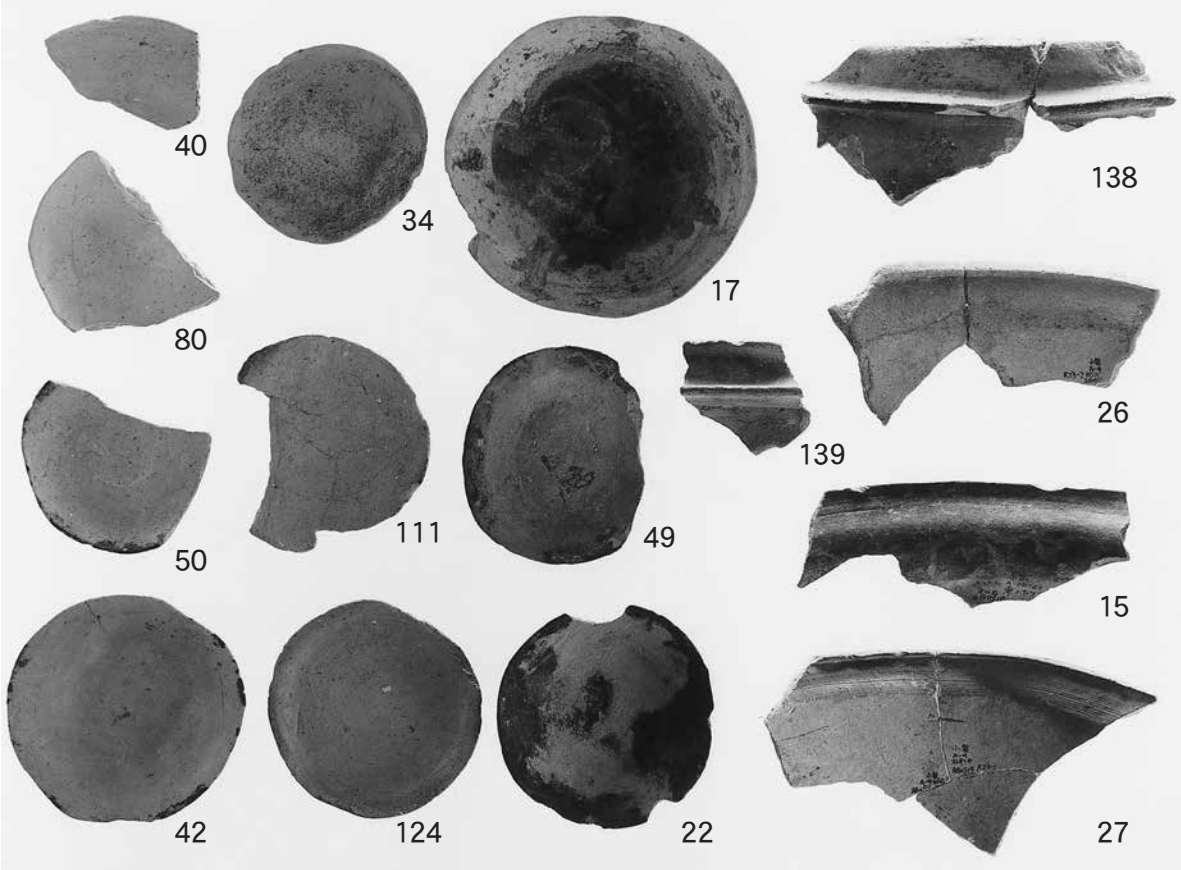
ＳＤ１断面

図版54

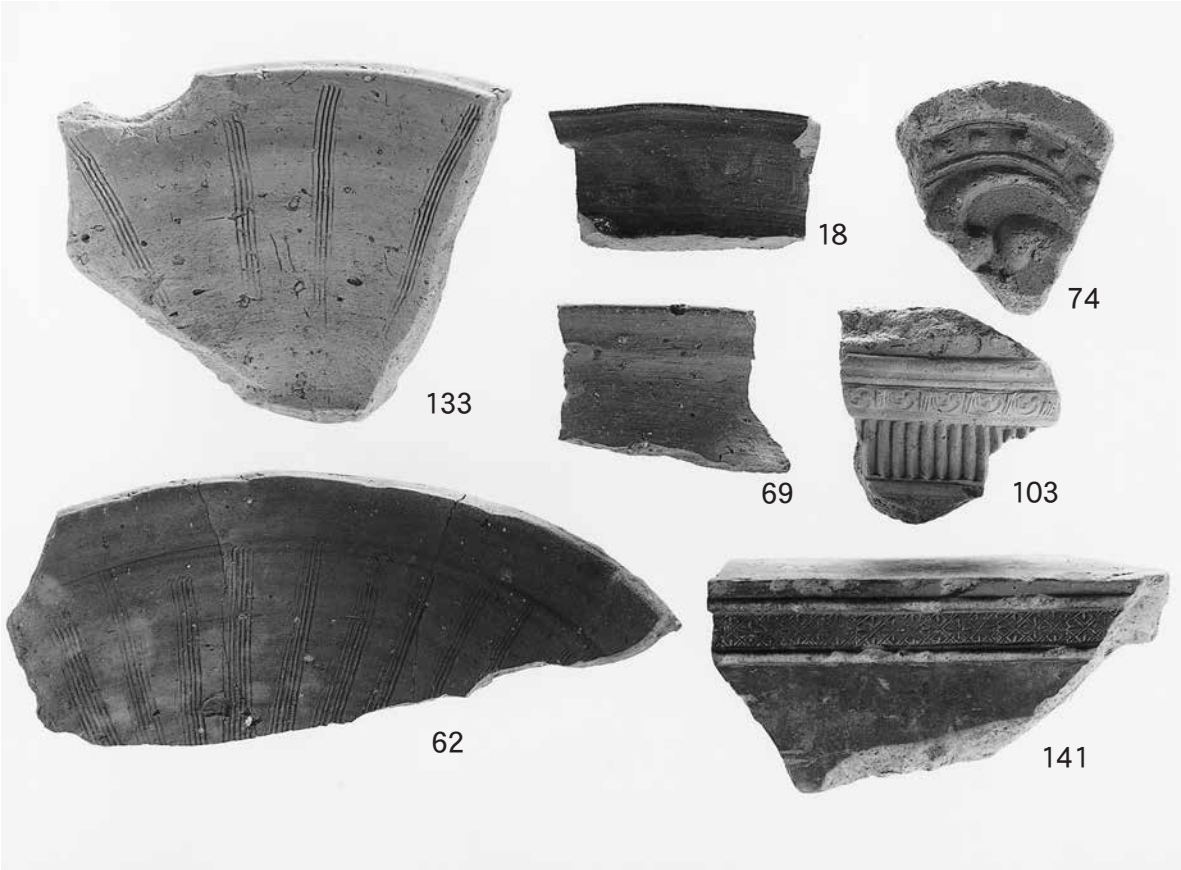
小泉氏館跡

ＳＺ29・ＳＥ16

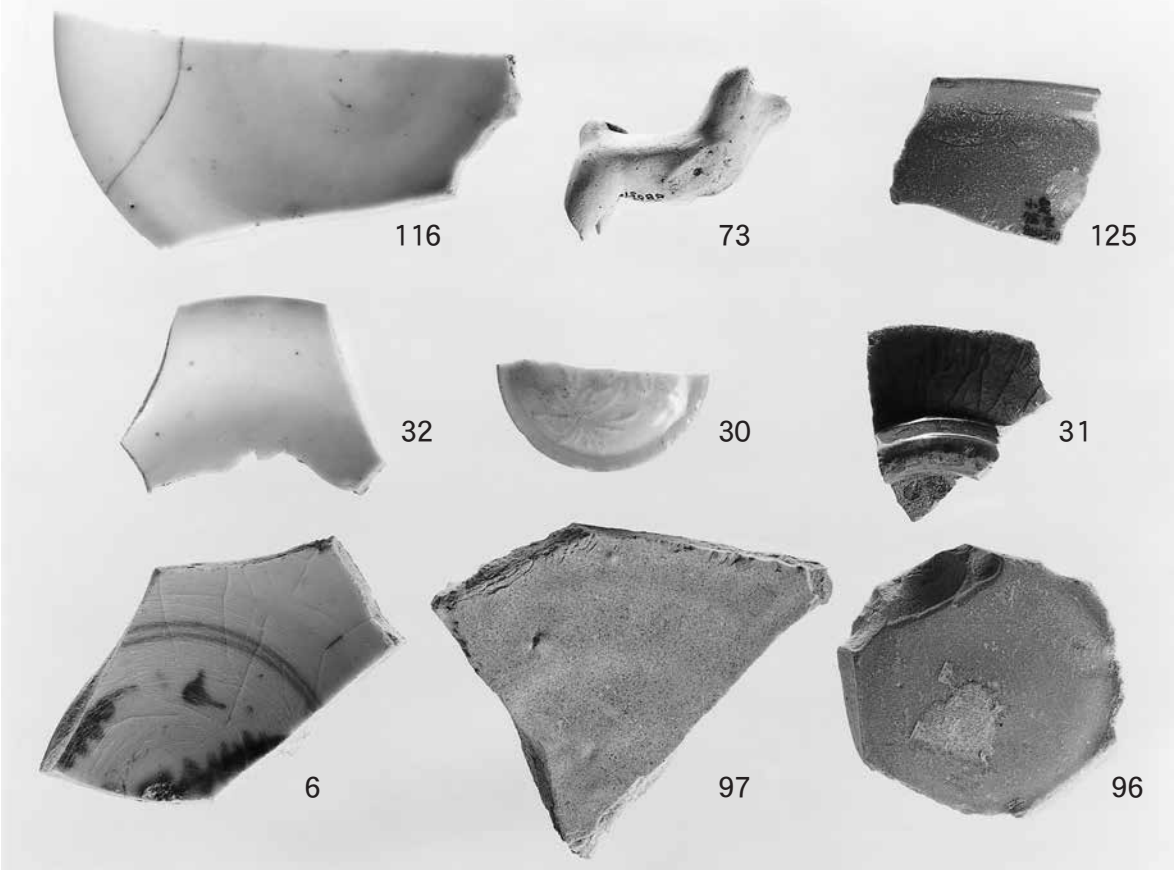
ＳＤ２


40
34
17
138
80
26
139
50
111
49
15
42
124
22
27

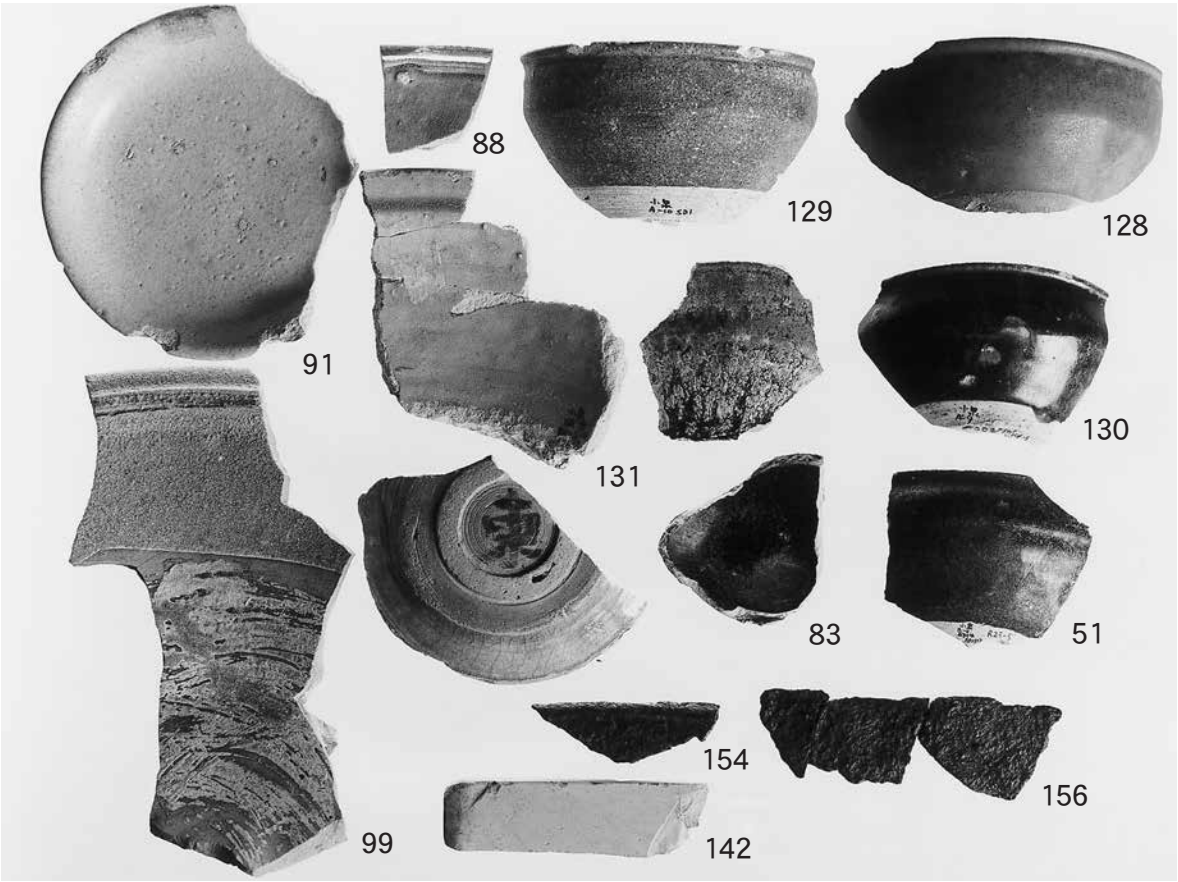
土師器


18
74
133
69
103
62
141

擂鉢・瓦質土器


116
73
125
32
30
31
6
97
96

陶磁器・土製品


88
129
128
91
131
130
83
51
154
156
99
142

陶器類

報　告　書　抄　録

ふりがな	あらき・さいみょうじちないいせきぐんはっくつちょうさほうこく
書名	荒木・西明寺地内遺跡群発掘調査報告－附編　小泉氏館跡発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２８２
編著者名	豊田祥三・穂積裕昌・伊藤裕偉・松田珠美・小倉整
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川 503　Tel　0596　(52)　1732
発行年月日	2006 年　3 月　31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮ノ前遺跡 寺前遺跡 荒木氏館跡 服部氏館跡 有井遺跡 西明寺三反田遺跡 小泉氏館跡	伊賀市荒木 伊賀市西明寺 伊賀市依那具字柳田	２１６ ２１６ ２１６ ２１６ ２１６ ２１６ ２１６	９７１ ５３８ ５３７ １２４１ ５５０	34 度 46 分 04 秒 34 度 46 分 10 秒 34 度 44 分 4 秒	136 度 29 分 41 秒 136 度 9 分 12 秒 136 度 8 分 24 秒	20021113～20030226 20030916～20040120 20040909～20050131 19880509～19880623	2689 ㎡ 2427 ㎡ 1,680 ㎡ 574 ㎡ 3,082 ㎡ 1764 ㎡ 1,000 ㎡	一級河川服部川県単河川局部改良事業 経営体育成基盤整備事業（中瀬川南地区） 県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮ノ前遺跡 寺前遺跡 荒木氏館跡 服部氏館跡	集落遺跡 中世城館	古墳時代 奈良時代 平安～鎌倉時代	流路 竪穴住居 掘立柱建物 土坑・溝	土師器 須恵器 土師器	
有井遺跡 西明寺三反田遺跡	集落遺跡	近世	土坑墓など	山皿 山茶椀	
小泉氏館跡	中世城館	中世後期～近世	堀・溝・掘立柱建物	青磁椀・土師器 犬形土製品	

要約

服部川の河川改修と中瀬川地区の圃場整備事業にともない 3 ヵ年にわたって行われた発掘調査の報告。調査区は大きく分けて、荒木地区と西明寺地区に分かれる。荒木地区では、宮ノ前遺跡・寺前遺跡・荒木氏館跡・服部氏館跡、西明寺地区では、有井遺跡・西明寺三反田遺跡において調査を行った。いずれも中世を中心とした集落遺跡であることが確認されており、荒木氏館跡では、城館の堀・人工的な水路が確認されている。西明寺地区では、古代～近世初頭までの遺構が確認されており，中世後期から近世初頭にかけての溝によって区画された集落の存在が興味深い。

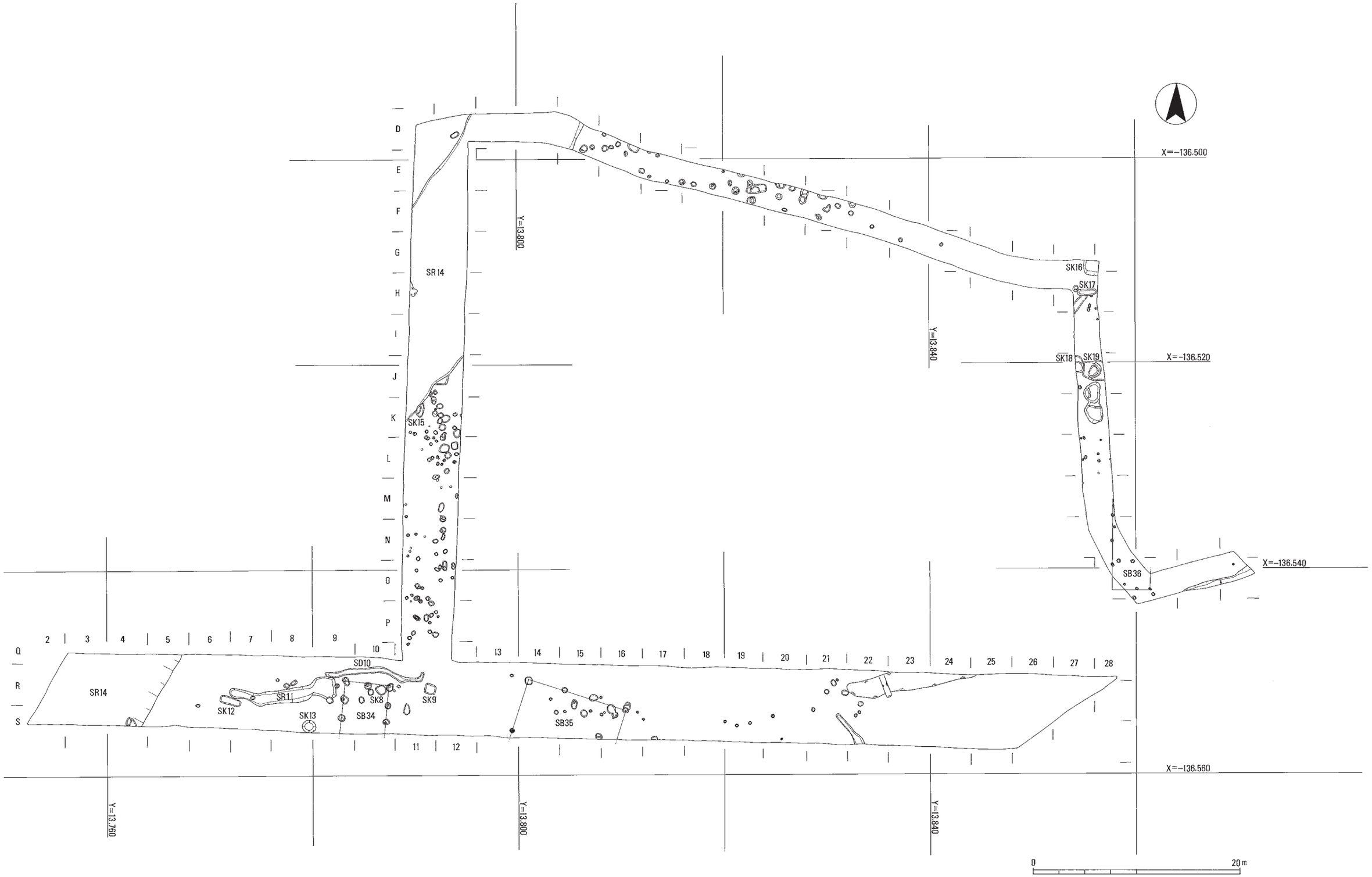
小泉氏館跡は 15 世紀から近世前期にかけての城館跡。堀・掘立柱建物などを検出。出土遺物では信楽系擂鉢のほか、犬形土製品などがある。

三重県埋蔵文化財調査報告282

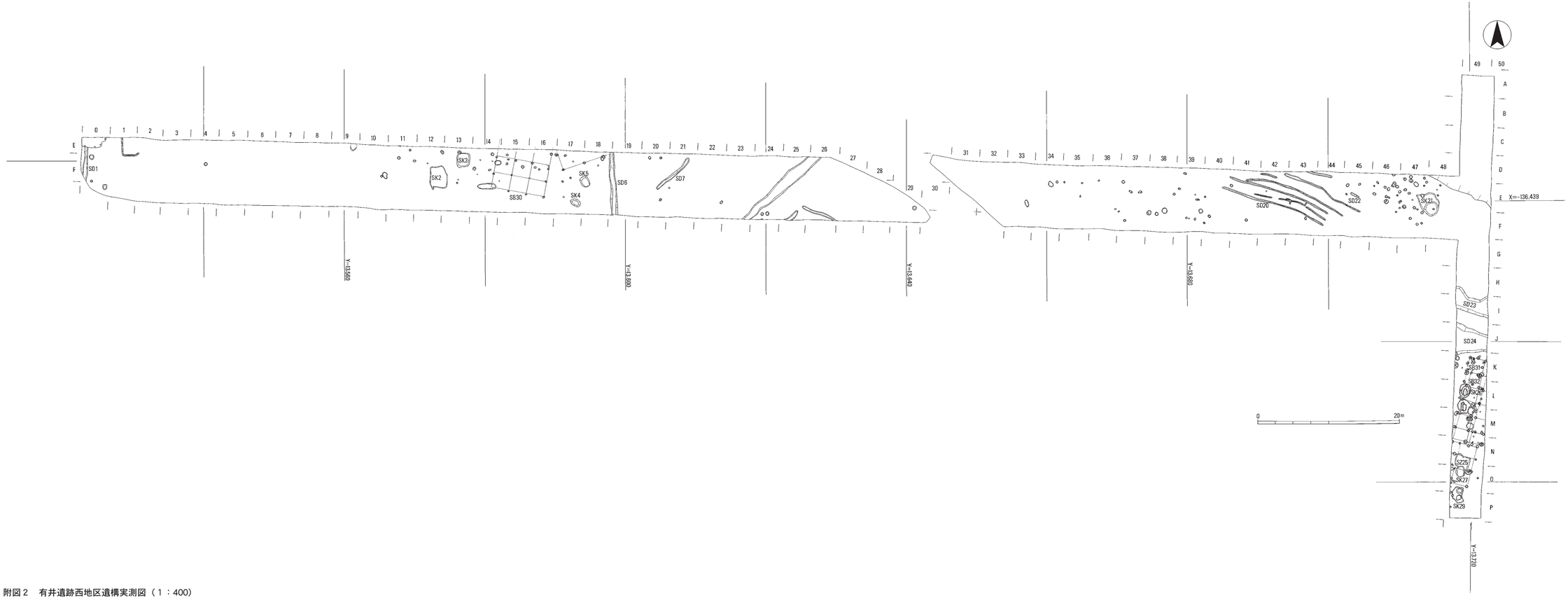
荒木・西明寺地内遺跡群発掘調査報告

2007年３月発行

編集・発行　　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　　有限会社　山　文　印　刷



附図１　有井遺跡東地区遺構実測図（１：400）



附図２　有井遺跡西地区遺構実測図（１：400）